A plot of Livly - LISD Livtan
LISD

「LISD（エルアイエスディー）りぶたん

リヴリーたちの陰謀（いんぼう）」

siamneko（シャムねこ）

表紙・挿画　buffy（バフィ）

裏表紙・挿画　ゆうはな

東北地方太平洋沖地震の被害に遭われた方々に、謹んでお見舞い申し上げます。

この作品には、モンスターの襲撃を津波に例えた「モンスター津波」との表現があります。また、「霊力を生成する霊子炉はメルトダウン寸前に追い込まれた」との表現もあります。

どちらも、２００８年に公開したときから存在する表現であり、このたびの災害に着想を得たわけではありません。あらかじめご了承ください。

２０１１年３月17日

目次

第一章　聖母叛逆　5
第二章　もにょもにょ団　16
第三章　地ノ塔　89
第四章　アウターゾーン　167
第五章　ペットモンスター　224
第六章　モンスター津波　283
第七章　后土の城　369
第八章　アンダー・ザ・ローズ　529
第九章　リヴリーたちの陰謀　709
あとがき　786

第一章　聖母叛逆（はんぎゃく）

犯人はルビーローズだった。
五億六千万ddが強奪された。

午前四時。訪問者の姿もぱったりと途絶えた地ノ塔通用門に、ひとりのリヴリーが姿を見せた。制帽に腕章。額には星形のタトゥー。アカゲパキケのルビーローズだった。

夜勤の守衛はノーチェックでルビーローズを通した。なにしろパキケフーズの管理リヴとして、聖母と慕われるルビーローズだ。管理リヴ委員会に所属する幹部でもある。幹部には通用門を罷（まか）り通る特権が認められているから、顔パスも当然だった。

ルビーローズを追いかけるようにして、マハラとチャパティも姿を見せた。どちらも管理リヴで、どちらも委員会幹部。地ノ塔に出入りするのも仕事のうちだ。守衛はこれもまた顔パスで通した。いつもつるんでいるなかよし三人組で、打ち合わせでもするのだろうと

思った。
三人の挙動に怪しいところはなく、そろって堂々と守衛の前を通り過ぎていった。
そして二時間後の午前六時。三人は地の底から浮上してきた。
地ノ塔はＧＬＬ城の地下にあった。地中塔として塔全体が地面に埋まっており、地上にあるのは通用門だけだった。
城内に広がる庭園に八角堂が建てられている。八角錐の屋根はちょうど傘が開いたような形をしている。傘は一本の軸で支えるが、屋根は八本の柱で支えられていた。壁はなく、柱と柱の間に欄干があった。欄干がそのまま背もたれとなるような形で、内側にはベンチが設けられていた。腰掛ければ、庭園がぐるりと見渡せる作りだ。雨露をしのげるようにと建てられた、休憩用のコテージに見える。
しかし屋根の下には、地底へと下りてゆく螺旋階段があった。コテージに見えてもそうではない。通用門なのだ。地ノ塔への唯一の出入り口で、通用門はあっても正門はない。

物見櫓（ものみやぐら）の監視塔とはちがって、地ノ塔には管理機関が入っている。リヴリーアイランドを管理運営する、ほとんどの機関が集中している。機密を取り扱う部門も多い。そのため、重要拠点として地ノ塔は地下に隠すように建築されたのだった。

地の底から戻ってきた管理リヴの三人は、来たときと同じように堂々と守衛の前を通り過ぎていった。手ぶらでやってきて、手ぶらで帰っていった。守衛が気に留めるような点はなにもなかった。

さらに一時間後の午前七時。早出（はやで）の職員たちがちらほらと出勤してきた。守衛はもう顔パスは許さなかった。幹部とただの職員とでは扱いもちがう。全員が見知った顔でもバイオレコードを出させて、目視で素顔と比較してから通した。

早朝出勤の職員たちと入れ替わりに、夜勤組が出てくるのを守衛は待った。もうじき自分の就業時間も終わる。誰が夜間勤務をこなして、誰が退勤したか。帰らずに居残っているのは誰なのか。日勤の守衛にきちんと引き継ぐ必要がある。

ところが、今日に限って誰も出てこない。夜勤組は

ひとりも帰ろうとしない。守衛はいやな予感を覚えた。背中がなんだかこう、もにょもにょするような、不思議な感覚だった。やがて、数人の職員が血相を変えて螺旋階段を駆け上がってきたのを見て、守衛はなにかよくないことが起こったのだと悟った。

地ノ塔の地下三階にはドゥードゥー金庫があった。パキケフーズなどの売り上げが集められ、保管されていた。警備員も常駐しており、不測の事態に備えていた。

しかし、管理リヴであるルビーローズたち三人が警戒されることはなかった。三人ともショップの運営を任されている。

ルビーローズのパキケフーズ。

マハラのマハラショップ。

チャパティのやどかり亭。

これらショップの売上金が金庫に保管される。つまり、三人は金を預ける立場にあるのだ。金が持ち出されるのではなく、持ち込まれるという安心感から、警備員の警戒心は麻痺した。

ましてや相手は三人そろって皆、幹部。言われる前に金庫室のドアを開いて待つなど、警備員はもはやドアボーイも同然だった。

軽く会釈をして、ルビーローズたちは金庫室へと消えた。警備員はドアを閉めると金庫のある部屋を背中で守り、仁王立ちで廊下の反対側ににらみをきかせた。

しばらくして、金庫室のドアが少しばかり開いた。ルビーローズが顔をのぞかせると、ちょっとお願いと声をかけてきた。

聖母の頼み事とあれば聞かないわけにはいかない。警備員は持ち場を離れて金庫室へと入っていった。

ドアをくぐった最初の部屋はケージ室だった。一列に並んだ鋼鉄の棒が天井から床までを貫いて、中央で部屋を仕切っている。棒の向こうは部屋ごと檻(おり)となっている。

その檻の前でマハラとチャパティが警備員を待ちかまえていた。警備員はいやな予感を覚えた。背中がなんだかこう、もにょもにょするような、不思議な感覚だった。逃げ腰で振り返ると、目の前でドアは閉じられた。

ルビーローズが自分の背中でドアに封をした。
後ろ手で隠していた麻縄を使って、マハラが警備員の上半身に輪をかけた。一瞬で締め上げると両腕の自由を奪った。
チャパティも隠していた縄を警備員の両足に巻き付けて、一気に締め上げた。
抵抗する間もなく、警備員は縛り上げられた。相手が管理リヴだっただけに頭が混乱してしまい、なすすべもなかった。
巨漢のマハラが警備員を小脇に抱えて奥へと運んだ。ケージ室の右端にあるゲートをくぐって檻の中に入り、突き当たりの部屋へと進む。
ケージ室の奥にはもうひとつ部屋があった。正面の壁に大きな穴があいている。鋼鉄の扉も見える。歩いて出入りできるウォークイン型の大型金庫が壁の中に設けられていた。
大きく開いた扉の向こうにはお宝が並んでいる。たっぷりとドゥードゥーの詰まった麻袋が、ラックに収納されている。
金庫のある部屋は事務室も兼ねているらしく、左手

の壁には書庫がしつらえてあった。帳簿類が整然と並んでいる。壁の前には年季の入った木製の事務机が二脚、向かい合わせにされて置いてあった。机の足元には、経理を担当する財務局の夜勤職員が二人、縛られて転がっていた。頭からすっぽりと麻袋をかぶらされている。

運び込まれたドゥードゥーは麻袋に詰めてから金庫に納められる。その袋を裂いてよれば縄となる。袋の口を結ぶ紐もよりあわせれば、やはり縄となる。袋ごとかぶせてしまえば目隠しだ。

地下三階を制圧したルビーローズたちは、ほかの階にいた夜勤職員を次々と金庫室に誘い込んだ。誘い込んでは縛り上げ、縛り上げては袋をかぶせ、無造作に床に転がした。夜間勤務の職員は数も少ないから、あっという間に地ノ塔は空になった。そして金庫室は縛られて転がる覆面リヴリーでいっぱいになった。

ルビーローズ一味は金庫からドゥードゥーを運び出した。麻袋ごと担いで、どこかへと運び去った。役割の分担も決まっているようで、もっぱらマハラとチャパティが運び役を務(つと)めていた。ルビーローズは力仕事

には参加しなかった。
目隠し代わりに袋をかぶらされても、目の粗い麻袋からはある程度のことが透けて見えた。けれども、盗み出された金がどこに運ばれたのかは、金庫室の床に転がるリヴリーたちにはわからなかった。

早出の職員が出勤してきても、すぐには騒ぎにならなかった。夜勤組の姿がなくても、トイレだろうとか、睡魔に勝てずに仮眠室だろうとか、憶測で判断された。管理機関の各部門はそれぞれ独立している。地ノ塔内のすべての部署において夜勤組の姿が見えないのだとは、なかなか気づくことではなかった。
財務局の職員が交代のため地下三階の金庫室まで下りて、ようやく異状に気づいた。警備員がいない。大事な金庫が無防備だ。恐る恐るドアを開けて中の様子をうかがえば、そこには部屋いっぱいに、縛られて転がる覆面リヴリーたちの姿。
一気に騒ぎとなった。解放された夜勤職員たちは口早に事情を語り、金庫破りの被害を知った早出職員たちは地ノ塔を封鎖するべく守衛のもとに走った。

だが、しかし。犯人のルビーローズ一味はすでに逃亡したあとだと知らされた。その一方で、手ぶらで出て行ったことも明らかになった。

経理担当の職員が大あわてで帳簿を繰(く)り、被害額を算出した。五億六千万ddが強奪されたとわかった。たったの三人で、それもわずかな時間で、遠くに運び出せる金額ではない。しかも、手ぶらで出て行ったのならなおさらだ。

現場は大混乱に陥(おちい)った。手ぶらで盗み出された大金。その金額もでかければ、犯人の正体はもっとでかい。

聖母ルビーローズの犯行――！

誰もが動揺し、興奮し、収拾がつかなくなった。

ただし、ひとつだけはっきりしていることがあった。それは、一般職員にすぎない自分たちに解決できる問題ではないということ。よりにもよって、リヴリー界でも一、二を争う人気者のルビーローズを、聖母と崇(あが)められるルビーローズを、管理リヴ委員会に所属する幹部のルビーローズを、容疑者として取り調べることなどできはしない。なによりも、その権限すらない。

あいつを呼べ――！

幸いにも、この厄介事を押しつける相手は決まっていた。捜査権を持つのはＬＩＳＤ（エルアイエスディー）だけだった。

ＬＩＳＤ。正式名称を「Livly Island Sheriff's Department」という。リヴリーアイランドの保安官事務所だ。

悪党を恐れない腕自慢が、あるいは悪党本人が、直接選挙によって保安官に選任されて四年の任期を務める。諸経費を賄うために独自の徴税権（ちょうぜいけん）を付与されており、時に苛酷（かこく）に取り立てることもあった。また、軽犯罪については即決裁判権も付与されているため、判事と検事と弁護士をも兼任し、時に恣意的（しいてき）に処罰することもあった。

これでは治安組織ではなくて犯罪組織だと、陰口をたたかれることも多い。事実、歴代の保安官のうち、最後にはＧＬＬ城の地下牢獄に投獄されてしまった者も少なくはない。

先代の保安官がそうだ。激しいリコールによって罷（ひ）免（めん）されたあと、当代の保安官によって逮捕され、管理

リヴ委員会の裁決により懲役刑に処せられた。
しかし、次に捕まるのは当代の保安官だ――との声はどこからも聞こえてこない。いまの保安官は史上初めての、女性保安官だった。汚職や腐敗との決別を謳(うた)って当選を果たした、クリーンな保安官だった。
種名はミミマキムクネ。名前はもにょりぶ。
誰もが親しみを込めて、りぶたんという愛称で呼んだ。
悪党どもはミミマキムクネの体型をからかって、裏でこっそりこう呼んだ。
どすこい娘――と。
午前八時。聖母叛逆の一報がＬＩＳＤに届けられた。

第二章　もによもによ団

一

青いチューリップは存在しない。

ユリ科の植物チューリップ。園芸用に改良されて多彩な品種が誕生したが、青いチューリップだけは存在しない。青色の色素デルフィニジンに乏(とぼ)しいのが理由で、花弁全体にこの色素が蓄積されない限り、どんな花も青く輝くことはない。

その青いチューリップが咲いている。

パキケフーズとショップゲートには、青い花弁を持った巨大なチューリップが咲き誇っている。リヴリーアイランド原産の固有種、モンスターチューリップだ。ふつうのチューリップとはちがって大木のように育つ。

しかし、パキケフーズのモンスターチューリップは心なしか、くすんで見えた。それもそのはず。チューリップの青よりも、さらにあでやかな青に染まったリヴリーがそこにいた。

青紫のミミマキムクネ。
ＬＩＳＤの保安官、りぶたんだった。
頭には制帽をかぶっている。幅がなくて細めの帽子だが、奥行きはある。四角く見えても丸みを帯びている。方舟（はこぶね）をひっくり返したら、ちょうどこんな形になるだろうか。濃紺の生地にＬＩＳＤの紋章が金糸で刺繍されている。
制帽の正面で輝く紋章は翼の生えたピグミーだ。中央にピグミーの頭部がシルエットとして配置されている。左右の上部には、翼を開いたような紋様がある。そして下部には、ＬＩＳＤの四文字がくっきりとよく見えるように縫い取られている。
りぶたんは腕組みをして、じっと考え込んでいた。ここはパキケフーズ。視線の先にはルビーローズの姿があった。
時刻は午前九時。地ノ塔のドゥードゥー金庫が破られてから、すでに三時間以上が経過している。証拠の隠滅は完璧なのか、それとも事件とは無関係なのか、ルビーローズは今日も笑顔を振りまいて楽しそうに働いていた。

それにしても、謎の多い事件だった。
本当にルビーローズたちが犯人なのか？
だとしたら、正体はバレているのになぜ監禁した職員に目隠しをしたのか？
そもそも手間暇かけて夜勤職員を全員監禁する必要があったのか？
そして、どうして手ぶらで出て行けたのか？　奪われた大金はどこに？

犯人は奪った金をムーブで持ち出したわけではない。それははっきりしている。なぜなら、地ノ塔はプロテクションゾーンだからだ。ムーブでもドライブでも出入りはできない。ホームやランダムも同じ。呪文で移動はできないように、ＬＩＰＳ（リップス）上でプロテクトがかけられている。
リヴリーアイランド・ポジショニング・システム、通称ＬＩＰＳ。ミュラー博士が開発した、リヴリーアイランドの座標空間識別システムだ。現在地を正確に把握することで、ムーブなどの呪文を用いたリヴリー

が目的地にきちんと移動できるようシステム化されている。

リヴリーたちが呪文ひとつで、知らない場所にも安全にテレポートできるのはＬＩＰＳがあるからこそ。しかしながら、一般開放していない閉鎖区域にまで自由に移動を許したのでは都合が悪い。そこで、閉鎖区域にはシステム上でプロテクトをかけ、移動できないようにロックしてある。それがプロテクションゾーンだ。

一般のリヴリーが監視塔や地ノ塔に進入できないのは、そういうわけ。

もちろん、呪文を使わずに徒歩で入ることも許されない。飛行リヴが空を飛んでも結果は同じ。すべてのプロテクションゾーンには、特殊呪文マインドウォールをかけてある。

ＬＩＰＳに頼らずに、自分の力でプロテクションゾーンに入ろうとしても入れない。入る気にすらならない。入る気になっても入り口は見つからない。入り口が目に入っても、脳がそれを認識しない。

マインドウォールはリヴリーたちの精神に直接作用

する特殊な呪文だった。

だからこそ、謎の多い事件なのだ。

現場がプロテクションゾーンである以上、一般のリヴリーが犯人だとは考えにくい。

本当にルビーローズたちが犯人なのかもしれない。

だとしたら、監禁した職員に目隠しをする理由がわからない。

怪しまれて抵抗される危険を冒(おか)して、夜勤職員を全員監禁する理由がわからない。

そして、どうして手ぶらで出て行けたのか？　奪われた大金はどこに？

悩んでいても答えは出ない。

りぶたんは、とりあえず軽く当たってみることにした。ルビーローズをはさんで反対側から様子をうかがっていた相棒のヒナタに視線を送る。

ヒナタがこくりとうなずく。

肌色に近いベビーピンクの体に、青い目をした乙女のピキ。けれども、頭の上にはＬＩＳＤの制帽がずし

りと重く乗っている。
りぶたんとまったく同じ帽子だ。紋章も縫い込まれている。ちがいはひとつ。かぶり方だけ。細めの制帽をちょっぴり斜めに傾けて、おしゃれにかぶるヒナタはＬＩＳＤの副保安官だった。
保安官のりぶたんひとりで職務は遂行できないから、職員を任命する権限が与えられている。副保安官や保安官補佐、あるいは保安官助手などといった職種の部下を採用することが認められている。
ヒナタは補佐職の中でも最上級職に当たる副保安官として遇（ぐう）されていた。補佐的な立場ではあっても、決して部下ではなかった。公的にはともかく、私的には、ふたりの関係は対等だった。
ＬＩＳＤには汚職にまみれた忌まわしい過去がある。その轍（てつ）を踏まないように自らを律するため、りぶたんはヒナタを対等の相棒として迎え入れた。保安官選挙の際には選挙参謀も務めてくれたヒナタにりぶたんが求めたものは、部下としての忠節ではなくて、親友としての忠言だった。
自分が間違いをしでかしたならば、遠慮なく叱り飛

ばしてほしい――と。
もっとも、別の思惑もあった。丸っこいピキの体型から、のほほんとしたのんびり屋さんに見えるヒナタであるが、選挙参謀を務めただけあって、実はてきぱきとそつなく事務をこなす能吏（のうり）タイプのリヴリーだった。
つまりヒナタがいれば、りぶたんはデスクワークから解放されるわけだ。ないしょの話。事務だの経理だのといった細かい作業は苦手な、どすこい娘だった。
「ＬＩＳＤだ」
客足が途絶えたところを見計らって、りぶたんはルビーローズに声をかけた。
お下げのような耳の毛を持つミミマキムクネには不似合いな、男っぽい物言いだった。
「おまえに用がある」
「はい……」
ルビーローズは目を伏せると小さな声を落とした。
保安官が遠巻きに見つめているのは知っていたようで、声をかけられても驚いたそぶりはなかった。
「なんの話かわかるな」

「はい……」
「では、おまえが犯人なのだな」
「ちがいますっ」
ルビーローズはきっぱりと否定した。目を伏せるのをやめて、真正面からりぶたんと視線を合わせた。アカゲパキケの大きな瞳からは、まるで光線でも照射されているかのように強い光が放たれて、りぶたんの瞳を焼いた。
「ほう。ならばなぜ、なんの話かわかるのだ？」
りぶたんはルビーローズの瞳をのぞき込むと、視線の光を射込み返した。
「噂はもう耳に届いておりますから」
強奪事件が発覚してから時間もたっている。LISDに通報があり、りぶたんとヒナタが捜査に乗り出すまで、情報は漏れ放題だった。通報を受けてすぐさま箝口令（かんこうれい）を敷いたものの、人の口に戸は立てられぬという。その後もやはり、そこここで漏れていることだろう。犯人と目されてはいても、ルビーローズほどの管理リヴならば、情報が筒抜けとなっていてもなんら不思議ではなかった。

「午前四時から二時間。どこでなにをしていた？」
「いつもどおりここで営業しておりました」
「誰か証明できる者は？」
「特には誰も。店の奥で休憩したりもしましたし」
「犯人に心当たりは？」
「ありません」
「犯人はなぜ、おまえになりすましたのだ？」
「そんなこと、わたくしにわかるわけがないでしょう？」
「そうかな？　なにか隠しているようだが」
「なにも隠してはおりません」
　互いに目をそらすことなく、りぶたんとルビーローズはにらみあったまま言葉を交わす。
「盗んだ金はどこに隠した？」
「存じません」
「ほう。しらを切るのか」
「わたくしの与(あずか)り知らぬことですから」
「いいのか、それで？」
「ええ。もちろん」
「大金を強奪された夜勤職員たちは、全員牢屋送りに

なったぞ」
「えっ？」
「おまえのせいでな」
「なっ――！」
冷たく装われていたルビーローズの顔が燃え上がった。
「なんて横暴な！　職員たちは被害者ではありませんか！　それにわたくしが犯人なら、とっくの昔に逃げていて、ここにはもうおりません！　犯人でもないのに犯人扱いされるなんて！　あなた、いいかげんにしなさい！　いくら保安官だからって、おとなしく聞いていれば、このわたくしをおまえ呼ばわりするとは、無礼にもほどがありましてよっ！」
ルビーローズはりぶたんの制帽をはたき落とした。はたいたその手が、腕ごと、体ごと、わなわなとふるえている。
「まあまあ。落ち着いてくださいな、ルビーローズさん」
ヒナタがふたりの間に割って入った。自分の体で押しのけるようにして両者を引き離しにかかる。ついで

に頭もわずかに振る。
ピキの耳はふさふさの毛に覆われていて、大きくふくらんでいる。頭を少し振るだけで、毛の固まりが鞠(まり)のように跳ねる。それで顔をなでられたらくすぐったいから、りぶたんもルビーローズも反射的に離れた。
いまにも取っ組み合いを始めそうな雰囲気で、激しく火花を散らすふたりを自分の意志で下がらせ、ヒナタは巧みに引き離したのだった。
「りぶたんもっ」
そして相棒にいささかきつく注意することで、管理リヴ委員会の幹部であるルビーローズの面子(めんつ)を立てた。
「お忙しいところにお手間を取らせてしまって、もうしわけありません」
ヒナタは穏やかに会話を打ち切りにかかった。
「今日のところはこれで失礼させていただきます。でも、こういった事情ですので、またお話をうかがいに参るかもしれません。悪く思わないでくださいね」
「そう。それならあなたひとりでおいでなさい。歓迎してあげるから」
ルビーローズはヒナタにだけ笑顔を見せると、ぷい

ときびすを返して店の中へと消えていった。
「んもう。りぶたんったら。怒らせちゃったじゃない。わたし、知らないからね。あの人、幹部なのに」
「気にしない、気にしない」
どすこい娘はけろりとしている。
「それで？　なにか収穫はあった？」
ヒナタははたき落とされたりぶたんの制帽を拾い上げて汚れを払うと、相棒に渡した。
受け取った制帽をかぶりながら、りぶたんは聞いた。
「いまのルビーローズ。ヒナたんはどう思う？」
「んー」
丸い目で宙を見つめると、ヒナタは耳の毛を掻(か)いた。
「そうね。最初は少しおとなしい感じがしたけれど、怒ってからはいつもどおりのルビーローズさんだったかな。女王様っぽくて。職員さんたちのことも心配してたしね。……でも、ちょっとびっくりしたな。あのルビーローズさんが手をあげるなんて」
「そうだな。余裕がなかったな。ルビーローズにしては」
「うん」

ヒナタは視線を相棒に戻した。
その視線を目で受け流すようにヒナタを誘導して、りぶたんは歩き始めた。ふたりはルビーローズの店から遠ざかりながら、話を続けた。
「もしもルビーローズが犯人なら、どういう態度を取ると思う？」
「んー。ふつうどおり、かな？」
「犯人なのに逃亡していないということは、捕まらない自信があるわけだ。それなら、神妙にして見せたり、むきになって手をあげたりはしないだろう。ルビーローズらしくないし。不自然だ」
「そうよね」
「では、ルビーローズが犯人でないのなら、どういう態度を取ると思う？」
「うーん。……怒る、かな？」
「犯人でないのなら濡れ衣を着せられたわけだから、神妙にするどころではないな。最初っからプリプリと怒っているだろう。そのほうがルビーローズらしいし。自然だ」
「うんうん。……え？　あれ？　ちょっと待って」

ヒナタの足が止まった。
「それって変じゃない？　ルビーローズさんが犯人だとしたら態度が不自然ってことでしょ？　でも、ルビーローズさんが犯人じゃないとしても態度が自然じゃないってことよね？　なんだかややこしいけど」
「そうなるな」
「犯人にしては不自然。でも、犯人じゃないなら自然じゃないから、やっぱり不自然」
ヒナタはふと振り返ると、さっきまでルビーローズがいた場所に視線を投げた。
「犯人でも、犯人じゃなくっても。どっちにしても不自然って……」
投げた視線を急に戻すと、ヒナタはまっすぐに相棒を見つめた。
「ねえ。わたし、気づいたんだけど。ルビーローズさん。犯人のこと、なじったりしなかった。一度も文句言わなかったよ？　ルビーローズさんが犯人なら、濡れ衣着せられたふりして犯人に怒ってなきゃいけないのに。そしてルビーローズさんが犯人じゃないのなら、真犯人に怒っていて当たり前なのに」

「……」
りぶたんはヒナタの言葉に沈黙を返した。
ヒナタはその沈黙を受け取った。
会話が止まった。
ややあって、りぶたんが口を開いた。
「さてと。マハラとチャパティにも当たってみようか」
「そうね。どっちを先にする？」
「どっちでも」
「じゃ、近いからマハラさんから」
「オッケー」
ＬＩＳＤのふたりはマハラショップへとムーブして、その場から飛び去った。
誰もいなくなったパキケフーズに、どこからか飛んできたちっちゃなマダラカガが舞い降りた。マダラカガはひょこっと片手を上げて店の中をのぞき込むと、上げたその手で子供のようにごしごしと目をこすった。
「あら、いらっしゃい。ちょっぴり甘いケセランパサランはいかが？」
ルビーローズが店の奥から出てきて、ちっちゃなお

客ににこりと微笑んだ。
ケマリとハナアルキも降ってきた。ルビーローズはふたりにもやさしく話しかけた。
聖母の店に賑(にぎ)わいが戻った。

2

手描きのポートレートだった。

どすこい娘こと、LISD保安官のりぶたんがどっ

しりと構えている。特にポーズを取るわけでもなく、直立不動の姿勢だ。

もう一枚のポートレートも手描きだった。ＬＩＳＤ副保安官のヒナタがすました顔でポーズを取っている。両手を後ろに回し、体を斜めにして背伸びして、おしゃまなしぐさを見せている。

最後の一枚も手描きだったが、それには三人のリヴリーが描かれていた。

中央には胸を張り、腕を組んだりぶたんが陣取っている。

そのりぶたんの背中に隠れたヒナタが、顔と、ふさふさの毛に覆われた耳と、しっぽをのぞかせている。小首を傾(かし)げたポーズで愛嬌たっぷりだ。自分の顔を見せるのに邪魔だからと、前にいるミミマキムクネの垂れ下がった耳の毛を遠慮なく持ち上げている。りぶたんとヒナタ、ふたりの仲のよさが絵からも伝わってくる。制帽だから帽子もおそろいだ。

そんなふたりの真横にトビネが描かれていた。ヒナタが顔を出した反対側に、寄り添うようにして立っている。なんだか誇らしげな表情だ。オレンジ色に近い

卵色のトビネだった。明るい体色に、しぶいカーキ色のベレー帽がよく似合っている。
　三枚の絵にはどれも同じ画家のサインが入っていた。お世辞にもきれいとは言えない字ではあったが、見る者に語りかけてくるような絵の世界を壊すことなく、すっきりと収まっていた。
　スペルはFlame。フレイムは新進気鋭の絵本ジャーナリストだった。
「それ、いいだろう。ぼくのお気に入りなんだ」
　トビネのフレイムは自慢げにとがった鼻を天井に向けた。
「もちろん、絵の中のトビネはこのぼくだからね」
　りぶたんとヒナタに並んで描かれていたトビネは、絵を描いた本人だった。
「このベレー帽、LISDのバッジがついてるじゃん」
　団丸（だんまる）は見逃さなかった。
　よく見ると、絵の中のトビネがかぶるベレー帽にはLISDの帽章があった。艶消（つやけ）しを施された金属製らしきバッジが帽子の正面に描かれている。ピグミーの

シルエットに、広がる翼。アルファベットが四文字。ＬＩＳＤの紋章をかたどったバッジだ。

カーキ色の帽子に褐色のバッジと、どちらも茶系だから目立たない。けれども、団丸は絵の細部まで抜かりなく目を走らせていた。

「あんた、ＬＩＳＤなんだ。あたいをだましたね？」

団丸は横目でにらんだ。

ピンクのショウジョウダルマだった。ミミマキムクネよりも、はるかにどすこい体型のリヴリーだ。声を聞けば若い女とわかるが、聞かなければごついおっさんにしか見えない。

「ちがうよ。ぼくは絵本ジャーナリストだよ」

「じゃあ、これはなにさ？」

団丸は横に立つフレイムに絵を突きつけた。

太いショウジョウダルマと細いトビネが並んでいる。身長にも大きな開きがある。しかし、トビネのフレイムは体格の差に怖じけることなく、平然と答えた。

「ある事件で人手が足りなくてね。一時的に、保安官助手に任命されたんだ。この絵はそれを記念して描いたものなんだよ」

「ふーん」
筋は通っている。追及するのはやめにして、団丸は飾り棚に絵を戻した。
絵は三枚とも木製の額縁に納められていた。額の裏側に支えとなる棒がついており、置くだけで立てて飾れるようになっていた。質素な作りの額縁で、装飾もなければ塗装もなかった。余計な加工をしないことで、絵の邪魔にならないよう配慮してあった。ただ、ガラス板だけはしっかりとはめてあって、ほこりや汚れから絵を守っていた。
「あたいの絵がないじゃん」
「？」
「あたいの絵はどうして飾ってないのさ？」
「えっと……」
フレイムは返事に困った。団丸とは初対面だ。絵を描いて飾っておくような間柄ではない。
「あんた、あたいにインタビューして本にしたいんでしょ？　じゃあさ、そのくらい配慮しなよ」
「それはまあ……」
フレイムは苦笑した。

確かに、団丸をアトリエに招待したのは取材のためだ。字を読むのはあまり得意ではないリヴリーたちのために、団丸の話を絵本にして出版する。そのためにわざわざ足を運んでもらった。しかし、だからといって、気を引くために初対面の相手の肖像画を描いて飾っておくのは、あまりにあざとい手段といえた。

「本気にしたんだ？　青臭い坊やだねえ。冗談に決まってるじゃん。でもさぁ。飾るのは冗談でも、絵を描いておいてプレゼントするとか、そんな感じでおだてて損はないっしょ？　あたいからいろいろ聞き出すつもりならさ」

「言われてみればそうだよね。今度から気をつけるよ」

「今度？　……ふっ」

団丸はかすかに笑った。

悪びれもせずに次の機会を口にするとは、若いというか、幼いというか、天真爛漫なジャーナリストだった。しかも今度とは、次に団丸に会ったときという意味ではなくて、次に誰かにインタビューするときという意味のようだ。目の前にいる団丸へのプレゼントに

はまるで思いが至っていない。
「ほんと、坊やだねえ。ま、そんなあんただからこそ、裏社会に首を突っ込んでもヤケドしないのかもしれないね。よくもまあ、このあたいにツナギをつけられたもんだ。裏の連中は絵なんかもらったって動きゃしないし。あんたの人柄を気に入ったってことかねえ」
　団丸はそばにあった応接用のソファに、勧められもしないのに腰を下ろした。ショウジョウダルマの太めの体を預けられて、籐(とう)で編まれたソファがギシリと鳴った。
「それに連中はあんたがＬＩＳＤとずぶずぶだってこと、知ってんでしょ？」
　団丸は言いながら顎(あご)をしゃくって、アトリエの主に座るよう指図した。
　テーブルをはさんで対面するソファにフレイムは腰を下ろした。トビネのほっそりした体を預かっても、ソファは鳴らなかった。
「知ってると思うよ。別に隠してないし。それに、うちにはしょっちゅう、りぶたんたちも遊びにくるしね」

「りぶたん？」
「そっか。出てきたばかりで知らないんだ？　りぶたんはいまの保安官だよ」
「ああ、さっきの絵の。前の保安官を地下牢獄に送り込んだ、どすこい娘ね」
「そうそう。……あ、いや。どすこいって言うと怒られる」
　フレイムは笑った。
「前のには向こうで会ったよ。えらそうにふんぞり返ってあたいを取り調べておきながらさ。再会してみりゃ、おんなじ囚人。あれは嗤(わら)えたね」
　団丸は嗤った。
「じゃ、そろそろ始めなよ。あたいにツナギをつけた坊やに敬意を表して、話せることは話してやろうじゃん。ただし、話せないことや、話したくないことは言わないからね」
「もちろん、それでかまわないよ。でも、ぼくはこう見えて口が堅いんだ。そうでなきゃ、ジャーナリストのぼくがたとえ一時的にでも、保安官助手に任命されたりしないよ。オフレコはオフレコできちんと約束を

守るから、できるだけ話してくれるとうれしいな」
「あんたは口が堅いってこと、ツナギ役も言ってたよ。……ところでのどが渇(かわ)いたな。なんか飲み物ない？さっぱりしたやつで」
　団丸に遠慮はなかった。
「グリーンティならあるけど」
「それちょうだい」
「熱いのと冷たいの、どっちがいい？」
「冷たいやつで」
「わかった。いま持ってくるよ」
　フレイムは席を立った。
　応接ソファの後ろには丈(たけ)の長い暖簾(のれん)が掛かっていて、間仕切りとなっていた。その暖簾を合わせ目から左右にめくって奥へと抜けていったフレイムは、すぐにお盆を持って戻ってきた。お盆にはコップがふたつ載っている。中の氷がガラスに当たって、涼しい音が響いた。
　フレイムがテーブルに置こうとしたコップを直接手で受け取ると、団丸は礼も言わずにぐびぐびと飲み干した。

「うん。酸味と苦味がかすかにあって、のどごしすっきりじゃん。フサムシのグリーンティなんか、ひさしぶりに飲んだよ」
「中では飲めないんだね」
「フサムシなんて高級食材、囚人には出しちゃくれないさ」
団丸は飲み干したばかりのコップを手前に傾けた。中をのぞいて太い指を差し入れると、つるりとすべる氷を器用につまみ上げて、口の中へと放り込んだ。
「よかったらこれも」
フレイムは自分の分として用意したグリーンティをテーブルに置いた。
「ん」
団丸はバリボリと氷を噛み砕きながらうなずくと、コップの中からもう一個つまみ上げた。
「LISDだっ！」
アトリエのドアが激しく叩かれた。
「！」
つまみ上げた氷が団丸の指からすべり落ちて、テーブルの上に転がった。

団丸は反射的に立ち上がった。ショウジョウダルマの重たげな見た目からは信じられないほどのすばやさだった。
「神妙にお縄をちょうだいしろっ！」
「ちょうだいしろっ。くすくす」
ドアの外から、威圧する声と、まねをして笑う声が聞こえてきた。
ＬＩＳＤのりぶたんとヒナタだった。

３

アトリエのドアが開いた。
りぶたんはまるで我が家のように、ずかずかと中に入っていった。ヒナタもためらうことなく足を踏み入れた。
ドアをくぐると、もうそこがアトリエになっていた。部屋が広い。イーゼルが置いてある。キャンバスも架かっている。壁には何枚も絵が飾ってある。窓際にはデスクがあって、机の上に絵の具のたぐいが散らかっている。その絵の具を何度もこぼしたらしく、デスク

まわりの床が色取り取りに染まっている。
アトリエの奥には小さな絵を置く飾り棚もあった。そばには籐でできた夏向きのソファが応接用に置いてある。ソファの後ろで、隣の部屋との間仕切りになっている暖簾がゆらめく。外から入り込んだ風が抜けていくのだろうか。丈の長い暖簾は奥へと吸い込まれ、そして自分の重さで戻ってくる。
「まさか、こんな早くからお弁当食べにきたんじゃないよね？　まだ十時だよ」
笑顔で出迎えたフレイムはからかうように聞いた。
絵本ジャーナリストのフレイムだが、画家として絵だけを発表することもある。アトリエで展覧会を開くことだってある。足を運んでくれた顧客には飲み物やつまみを振る舞ったりもする。展覧会に訪れるような客はみんな上品だから、サロンとして使われてもなにも問題はない。
ところが、りぶたんとヒナタはちがった。展覧会がなくても平気でやってくる。昼には弁当持参で遊びにくる。午後には手ぶらでお茶を飲みにくる。フレイムのアトリエを食堂か喫茶店のように使っている。

「お昼前のおやつだ」
「お昼後にもおやつだ」
りぶたんの冗談に、フレイムも冗談で応えた。
「お昼にもおやつだ」
最後にヒナタが一番おいしいところを持っていった。
「あっ、そうそう。食事の話で思い出したけど、今度うちでね。バーベキューパーティーしようよ」
ヒナタがポンと両手を叩いた。
「いいね、それ。じゃあ、ぼく、カブトムシの幼虫持って行くよ」
「うん。丸焼きにするとうまそうだな」
りぶたんは自分が食べることしか言わなかった。
「わたしはケセランパサランのスープを用意するね。ケセはちょっぴり甘めだから、クロムシの胡椒(こしょう)でぴりっとした味付けで」
「うんうん。胃袋がすっきりして、バーベキューもいっぱい入りそうだ」
やっぱりりぶたんは自分が食べることしか言わない。
「……」
「……」

ヒナタとフレイムは白い目でりぶたんを見た。
「わかったわかった。シマミミズのミートソース作ってやるから」
「えー。またそれ？　すぐおなかいっぱいになるから、ぼく、食べきれないよ」
「バーベキューって言ってるのにぃ」
どすこい娘の得意料理は、結局いつも、本人の胃袋に収まってしまうのだった。
「それでいつやるの？」
「えっと……」
ヒナタはフレイムの質問には答えずに、りぶたんを見た。
「今度の事件が片付いてからだな」
りぶたんが答えた。友達同士でじゃれあう雰囲気は消えていた。
「へえ、今度はどんな事件？　勝手に本にしないから教えてよ」
「さすがに今回は、おまえもまだ知らないか」
「えっ？　なにか大事件ってこと？」
「まあな。とりあえず座って話そうか」

りぶたんは身振りでついてくるようにうながすと、応接ソファまで進んで真っ先に腰を下ろした。まるでアトリエの主であるかのような振る舞いだった。

ミミマキムクネが座ると、籐のソファがギシリと鳴った。

りぶたんの隣にはヒナタが腰掛けた。ピキが座ってもソファは音を立てた。

ふたりの正面にはフレイムが座った。やはりトビネは軽いと見えて、今度もソファは鳴らなかった。

「客だったのか？」

りぶたんの目の前に飲み干されたコップが置いてある。行儀の悪い来客だったと見えて、テーブルの上に氷をこぼしている。

「そうじゃなくて。静物画の構図を選んでたんだ」

「そうか。フサムシのグリーンティだな。うまそうだ」

「あっ、新しいの持ってくるよ」

フレイムは気をきかせようとして、下ろしたばかりの腰を上げた。テーブルの上のお盆を手に取る。

「そっちは飲みかけなのか？」

りぶたんの前にあるコップは空だが、ヒナタの前にあるコップは手をつけていないようだ。薄く透きとおった緑色の液体に、氷が浮かんでいる。
「うん？　ああ、ちがうよ。口はつけてないからきれいだよ、それ」
「では、もらっておこう」
りぶたんはヒナタの前から飲み物を失敬すると、ごくごくと飲み干した。そしてそのままの勢いで氷を口の中に流し込み、バリボリと音を立てて食べ始めた。
「わたし、いらないから。おかまいなく」
ヒナタは聞かれる前に断りを入れた。
「遠慮しなくてもいいのに」
「おや？　君に遠慮はしないぞ？」
「そういえばそうだね」
フレイムは上げた腰を下ろした。手に取ったお盆は、立てて太ももに乗せ、そのまま体で抱え込んだ。
「それで構図は決まったの？」
「どうもノリが悪くていまいちなんだ。暇だから、お昼ご飯までゆっくりしてくといいよ」
「そうしたいけど、今日はちょっとね……」

「そっか……」
誰かさんが氷を貪り食らう音がうるさくて、ヒナタとフレイムの会話はすぐに途切れた。
氷を食べ終わったりぶたんはコップをテーブルの上に戻すと、口を開いた。
「団丸を捜していただろう。ツナギはついたのか？」
「まだだけど、事件ってまさか団丸が？」
フレイムは驚いた顔で身を乗り出した。
「それはわからないが、奴がお勤めを終えて出てきた次の日に、こんな事件が起きるなんてタイミングがよすぎる」
「でも団丸さんは義賊なのに？　狙う相手がいままでとちがうんじゃない？」
ヒナタが質問した。
「世間が義賊と呼んだところで、泥棒はやっぱり泥棒だよ、ヒナたん。それに、奴が自首したってのが前から気になっていた。団丸の奴、名前は知られていても正体は不明だったのだから、泥棒稼業から足を洗うならそのまま消えればいいのに。なにもわざわざ地下牢獄に入る必要はないだろう」

「それは……そうよね」
「……」
フレイムは口をはさむことを差し控えた。こんな事件とはどんな事件なのか、いまなにが起こっているのか、早く知りたい。しかし、質問はせずに沈黙することを選んだ。
目の前でＬＩＳＤのふたりが貴重な話を聞かせてくれている。スクープだからと、フレイムが友情を裏切って報道したりしないと信じてくれている。なるべく多くの情報を得るためにも、いまは聞き役に徹するべきだった。
「奴はなにも、反省したから自首したわけではない。罪を償おうなんて、これっぽっちも思っちゃいない。奴はただ、地下牢獄に入りたかったのだ。……なにかを探して」
りぶたんのまなざしが強い光を放っていた。
「なにかって？」
ヒナタは話の続きをうながした。体をひねり、隣に座る相棒に注意を向けている。
その相棒はテーブルの上をじっと見つめている。視

線の先には氷がある。テーブルの上に転がったまま、少しずつ溶けてゆく。
りぶたんはゆっくりとソファの背もたれに体を預けた。
静かなアトリエに、籐の軋(きし)む音が流れた。
「地下牢獄は、ＧＬＬ城の地下にある」
「……うん」
ワンテンポ遅れてヒナタは相槌を打った。
「ドゥードゥー金庫は、どこにある？」
「……あっ」
ヒナタは口に手を当てた。
りぶたんはヒナタに目をやった。
「地ノ塔だから、ＧＬＬ城の地下だ……でも」
「でも？」
「でも……うーん。そうなの？」
言葉が続かずに、ヒナタは曖昧(あいまい)に問い返した。
「さあ、わからない。奴に直接聞いてみないと」
「それでフーちんのアトリエに」
「そう。それでフーちんちんのアトリエに」
りぶたんがからかった。

「フーちんちんて」
フレイムはそこで口をはさんだ。「ちん」が一個余分だと、別の意味に聞こえる。
「くすくす」
ヒナタが笑った。友達同士でじゃれあう雰囲気が戻ってきた。
心地よい雰囲気ではあったが、しかし。フレイムはジャーナリストとして、ためらうことなく流れを引き戻した。
「で、なにが起こったの？　団丸、地下牢獄、ドゥードゥー金庫。話してくれるよね？」
「……」
ヒナタの笑みが消えた。今日は、いつものように楽しい雑談ばかりとはいかなかった。
りぶたんはフレイムに話した。
今日一日の流れをかいつまんで話して聞かせた。午前四時から午前十時まで。フレイムのアトリエにやってくるまで。
一時的にとはいえ、保安官助手に任命したフレイムだ。バッジも預けた。絵本ジャーナリストが本業であ

っても、許可なく報道しないと信用できた。これまでもそうだった。友情と信頼を裏切るフレイムではなかった。

「犯人はなぜ、ルビーローズたちになりすましたんだろう？　それともまさか本物？」

事件の概略を知ったフレイムの質問攻めが始まった。

「本物かどうかはなんとも言えないが、偽者なら、なりすました理由は明白だ」

「三人とも幹部だし。三人とも金庫に出入りしても怪しまれないしね」

りぶたんとヒナタが交互に回答した。

「でも目立つよね？　その点は不利なんじゃ？」

「いや、目立つからこそ有利なのだ。ひと目でルビーローズとわかったら、もう誰もじっくり顔を見たりしないからな」

「犯人が偽者なら……わたしたちは偽者のことをダミーローズって呼んでるんだけどね。偽者のダミーローズがルビーローズさんになりすますのは、仮面をつけるようなものなの。仮面が目立てば目立つほど、逆に素顔は目立たなくなるの」

「なるほどね。通用門は顔パスで、金庫室まで顔パス。職員がこぞって言うことを聞く、魔法の仮面ってわけか。うまいところに目をつけたよね」
フレイムは無邪気にほめた。
「じゃあ、なぜ監禁した職員に目隠しをしたんだろう？　目立つ仮面のおかげで素顔を隠せたんだから、目隠しの必要はないのでは？」
若いジャーナリストは次の質問に移った。
「犯人がダミーローズなら、あくまでもルビーローズの犯行に見せかけるためだ」
「どんなに上手に変装しても、なにもかも本物とそっくりっていうわけにはいかないでしょ？　どこかしら、ちがいは出てくるんじゃない？　それを見破られないようにしたんじゃないかな。つまり、あくまでもルビーローズさんたちが犯人だと見せかけたかったのね」
ヒナタの説明に熱がこもっていた。
「犯人が本物のルビーローズなら？」
「そこはあたしとヒナたんで意見が分かれている。あたしは偽装工作だと思うな」
「わたしはちがうと思う」

「保安官の意見は？」
フレイムはあえて官名で呼ぶことで、ふたりの友人のどちらに先に質問するか、優劣をつけないように配慮した。官職ならりぶたんのほうが上だから、優先しても気が楽だ。
「偽者の犯行に見せかけるために、わざと袋をかぶせたのだ。犯人は変装がバレないようにするため、見られたくないと考えた――と思わせるための偽装工作だな」
「ううん。ちがうちがう。犯人が本物のルビーローズさんなら、ほんとに見られたくなかったの。ルビーローズさんが犯人なら、事情があってのことだと思うのね。だから、巻き込んじゃった職員さんたちにもうしわけないって、心から思っているはず。でもね、職員さんたちにはそんなことわからないでしょう？　どんな目に遭わされるんだろうって、おびえた目でルビーローズさんを見るよね？　それがね、心やさしいルビーローズさんには耐えられなかったんだって思うの。だから袋をかぶせて、職員さんたちの目を見なくてもすむようにしたの。見られないための目隠しじゃなく

って、見ないための目隠しだったのよ。だって頭からかぶせても、中から透けて見える麻袋なのよ？　見られないための目隠しになってないもの。……ルビーローズさんが犯人ならの話だけどね」

ヒナタは一気に説明した。言葉に迷いはなかった。ただし、ルビーローズが犯人だと仮定した話であると、重ねて強調した。

「どっちも一理あるよね」

フレイムは友人として、りぶたんとヒナタが意見の食い違いから対立することがないように、バランスを取ろうとした。

「うんうん」

りぶたんはあっさりとヒナタの意見を受け入れた。別に仲違(なかたが)いを恐れて迎合したわけではなく、本心からヒナタの考えも認めているのだった。

「ううん。わたしの考えであってるから。ルビーローズさんが犯人なら」

ヒナタは自説に固執した。和を捨てて対立を選ぶのはヒナタらしくないように見えるが、実は極めてヒナタらしいことだった。

りぶたんの意見を採用すれば、ルビーローズはただの犯罪者におとしめられてしまう。聖母と呼ばれて尊敬されているルビーローズのやさしさが偽りとなってしまう。それだけは受け入れられないヒナタだった。

つまり、ルビーローズのやさしいイメージを守ろうとするヒナタのやさしさが、意固地な意見となって表れていた。

「でも、どうして夜勤職員をわざわざ全員監禁したんだろう？」

フレイムは質問を変えた。

「夜勤の職員は数も少ないから、全員監禁してしまったほうが手っ取り早くて、犯人にとって安全なのはわかるけど。でも、三人組の犯人よりは職員のほうが数も多かったわけだよね？　だから、金庫室に誘い込むなんて手の込んだことをしたんだよね？　そうまでして全員監禁する必要はあったのかなぁ？」

「……」

りぶたんは答えずに横目でちらりと相棒を見た。

「……」

ヒナタは弱々しくうつむいた。

ふぅと吐息をひとつ漏らしてから、りぶたんは口を開いた。
「それは……ダミーローズ犯人説なら説明のつかないことだ」
「だよね。ダミーローズには変装がバレるというリスクがあるもんね」
言いにくそうなりぶたんの代わりに、フレイムは自分で答えた。
「怪しまれて騒がれたらおしまいだから、職員とはなるべく顔を合わせないで、金庫室だけ押さえて、あとはこっそりやったほうがいいに決まってる」
「そうだな」
りぶたんの回答が短い。
「それでルビーローズ犯人説なら？」
フレイムは容赦なく切り込んだ。
ルビーローズの容疑が濃くなるとヒナタが悲しむ。しかしながら、そんなヒナタに遠慮したくても、ジャーナリストとして質問を避けるわけにはいかないフレイムだった。
「ルビーローズが犯人なら――」

「わたしが言う」
ヒナタはりぶたんの言葉をさえぎった。
「わたしに言わせて。聞きたくないから。自分で言いたい」
「……」
りぶたんはヒナタに任せることにした。
「ルビーローズさんが犯人なら、監禁される職員さんたちのためを思ってのことなの」
「職員のため？」
フレイムは首をひねった。
全員を監禁することが職員のためだとはとても思えない。むしろ、監禁の被害者はひとりでも少ないほうが職員のためではあるまいか。
「だって、一部の職員さんだけを監禁したら、その人たちだけの責任になるもの」
「あ！　そういうことか！」
ようやくフレイムは理解した。
「地ノ塔の職員を上から下まで全員監禁してしまえば、全員の責任になる。ううん、ちがう。それほどの大事件になったら、もう職員さんたちの責任は問われない

よ。みんな監禁されたってことは、監禁されてもしかたがなかったってことになるよ。だから……だから、あえて全員監禁してしまうことがルビーローズさんのやさしさなの。あくまでもルビーローズさんが犯人ならの話だけどね」

沈んだ声でヒナタは説明したが、最後に仮定の話だと付け加えることは忘れなかった。

「うーん……」

お盆を抱えたままのフレイムは、そのお盆を見つめてうなった。聞けば聞くほど、犯人はルビーローズに思えてくる。しかし、断定するには至らない。なによりも、最大の疑問が残っている。

フレイムは顔を上げると保安官に尋ねた。

「それで盗まれたお金はどこに？」

犯人一味は手ぶらで出て行ったという。

地ノ塔はプロテクションゾーンだから、ＬＩＰＳにプロテクトがかけてある。リヴリーが安全にテレポートできるようにと、ミュラー博士が開発したリヴリーアイランド・ポジショニング・システムは使えない。呪文で移動はできない。

それなのに犯人たちは手ぶらで出て行った。奪ったドゥードゥーは持ち出さなかった。ということは――。
「まさか、お金はいまも地ノ塔の中？」
「うんにゃ」
りぶたんは即座に否定した。
「そんなはずはない」
「もう調べたんだ？」
「まだだ。塔内をくまなく調べようにも人手が足りない。職員を動員すると、犯人一味が紛れ込む恐れもある。もっとも、紛れ込んだところで、いまさらあんな大金を持ち出せるとは思えないが。犯人が職員で、隠した金をこれから先、毎日小出しにして持ち出すなんて気の遠くなる話だし。第一、そんなに長いこと隠しておけるとも思えんな。つまり……」
りぶたんは言葉を切ると、ソファの背もたれから体を起こして続けた。
「奪われた金は、すでに地ノ塔から運び出されている」
「犯人は手ぶらで出て行ったのに？」
「うん」

「現場はプロテクションゾーンなのに？」
「うん」
「マインドウォールだってかけてあるのに？」
「うん」
「犯行時間だって短かったのに？」
「うん」
「いったいどうやって？」
「わかんない」
　りぶたんはあっさりとさじを投げた。
「うーん。事件の大筋は理解したよ。これまで聞いた推理も破綻（はたん）してないと思うよ。だけど、まだ一番最初の疑問が片付いてないよ。どうして団丸を捜してるんだい？　犯人はダミーローズで、その正体は団丸だって疑ってるわけ？　ぼくには事情にくわしい者の内部犯行に思えるけどなぁ」
　いつものように休憩するために、りぶたんとヒナタはフレイムのアトリエにやってきたのではなかった。団丸の所在という情報を求めてやってきたのだ。
「確かに幹部や職員なら、地ノ塔への出入りも簡単だ。しかし、どうやって金を運び出したか見当もつかない

ような、こんな事件を起こせるのは、かつて怪盗と呼ばれた団丸くらいだ。それに奴は昨日、刑期を終えて地下牢獄から出てきている。犯人がダミーローズだとしたら、一番怪しい奴に話を聞かないとな」
「でも、今回の事件は三人組の犯行よ？　団丸さんは一匹狼でしょ？」
ヒナタが首を傾げて質問した。
「団丸は一匹狼だと、ほんとにヒナたんはそう思う？」
りぶたんは逆に質問を返した。
「え？　だって……」
「単独犯だと、団丸が自分でそう言っているだけだ。前の保安官はろくに調べてはいないからな」
「それは知ってるけど……」
「そもそも、怪盗と呼ばれるほどの盗み働きを、ひとりでできるとは思えない」
りぶたんはもう一度背もたれにもたれかかった。今度はゆっくりとではなく、勢いもよかった。しかし、籐の軋む音はりぶたんの力強い声に掻き消された。
「奴には仲間がいるはずだっ」

ミミマキムクネの目がするどく光った。
「相棒かもしれないし、手下かもしれない。あるいはボスということもありうる。いずれにせよ、奴が一匹狼の怪盗として耳目を集めているその隙に、仲間がこっそりと裏で動いているのだ。そうでなければ、神出鬼没で正体不明の怪盗なんて誕生するわけがない」
「その仲間たちが今回は犯行に加わったってこと？」
「……」
質問は副保安官のヒナタに任せて、フレイムは成り行きを見守った。怪盗団丸複数犯説は初めて耳にする。絵本伝記の執筆にも関わってくる興味深い話だった。
「ちがうよ」
声がした。
りぶたん、ヒナタ、フレイム。誰のものでもない声だった。
「あたいに仲間なんかいないよ」
フレイムの後ろ。応接ソファのその向こう。丈の長い暖簾の裏側に、声の主はいた。別に隠れるつもりはないようで、暖簾の裾から足がのぞいている。
「誰だっ！」

「誰っ！」
「！」
りぶたんとヒナタが即座に立ち上がった。フレイムは座ったままだったが、やはり驚いて振り返った。
「それにあたいが盗んだんじゃないよ」
合わせ目から左右いっぱいに暖簾を押し広げて、ピンクのショウジョウダルマがぬうっと入ってきた。
「おまえは――！」
「――団丸さん！」
りぶたんとヒナタの言葉が流れるようにつながった。
「そんな……帰ったんじゃ……」
フレイムの声がうわずっている。体で抱え込んでいたお盆がすべり落ちて、床で騒がしい音を立てた。
「そうか！　もうツナギはついていて、取材中だったのだな！」
「どうしてそれを早く言わないのっ」
りぶたんとヒナタはフレイムに怒った。
まさか部外者がいるとは思いもせずに、ふたりは捜査情報を漏らしてしまった。元保安官助手の、それも勝手知ったるアトリエだからと安心しきって用心を

怠(おこた)ってしまった。
フレイムに話すのはかまわない。緊急時の非常招集要員であるし、五億六千万ddという大金の強奪事件は、その規模と影響の大きさから見て、ＬＩＳＤの人員増強は避けられない。りぶたんとヒナタのふたりだけではとても手が足りないから、助手としてフレイムにも手伝ってもらうことになるだろう。
だが、しかし。ＬＩＳＤとは無縁の、それも元囚人の団丸に話を聞かれたのはまずかった。
「ちがっ！　裏から帰したんだ！　隠してたんじゃない！　帰ってもらったんだよ！」
フレイムはあわてた。
「いいわけじゃないよ！　ほんとだよ！　ぼくのほかは誰もいないはずだったんだ！　でなきゃ、ふたりにだって話はさせないよ！」
捜査情報の漏洩(ろうえい)は由々しき事態だ。決してＬＩＳＤを欺(あざむ)いたわけではないにしろ、フレイムはその要因を作ってしまった。最初にひと言断っておけばよかったものを、裏口から団丸を帰して事はすんだと思い込んだばかりに、とんでもない事態を招いてしまった。

しかも、責めを負うのはフレイムではない。責任はあくまでもＬＩＳＤのふたりにある。
「ちがうんだよぅ……」
いまにも泣き出しそうな声だった。
最悪の場合、友情が壊れてしまう。りぶたんとヒナタ。楽しい仲間たちとのひとときが、永遠に失われてしまう。
「坊やの言うとおりさ」
団丸はフレイムをかばった。恩を着せようなどというあさましい腹づもりからではなく、単にそれが事実だからフレイムの味方をした。
「ＬＩＳＤが来たから帰るって、あたいが言ったのさ。余計な面倒はごめんだからね。ついでに、あたいのことはだまっとくように坊やを脅してやったのさ」
「脅しただと？」
りぶたんの目つきが険しい。
「バラすともう取材には応じないよってね」
「ああ、それで……」
ヒナタがほっとしたように小さな声を漏らした。
「で、裏から出て行ったんだけど、こっそり戻ってき

たのさ」
「なぜだ？」
りぶたんはきついロ調で質問した。もはや尋問だった。
「だって気になるじゃん。あたいを呼びつけておいて、そこに都合よくＬＩＳＤが現れるなんてさ。まあ、話は聞かせてもらったから、裏はないってわかったけどね」
「どこからだ？」
「なにがさ？」
「話はどこから聞いていたのだ？」
「どこからって、あんたが坊やの飲み物をぶんどったところからだよ？」
「……」
さすがのりぶたんも沈黙した。大事な話は全部聞かれてしまっている。
「安心しなよ。漏らしゃしないから。そんなことより、犯人扱いは迷惑なんだよね。なんなら、捜査に協力してやってもいいよ。このあたいがさ」
「おまえが協力だと？」

「……」
りぶたんは思わず、ヒナタを見た。
ヒナタはヒナタで、やはりりぶたんを見たが口にする言葉が思い浮かばない様子だった。
「だってさ、わかんないって言ってたじゃん。どうやって金を運び出したか見当もつかないって。犯人の奴らがどんなからくりを使ったか、あたいが突き止めてやろうじゃない」
「容疑者に捜査させてどうする」
団丸は容疑者だと、りぶたんははっきりと告げた。
「容疑者ねえ。じゃあ、なに？　それだけのことであたいを牢屋に入れちゃうわけ？　なんだ。あんたって、そんな程度の保安官だったんだ？」
「む……！」
りぶたんは団丸をにらみつけた。
「それともなにかい？　このまま帰してくれるのかい？　いいのかなあ？　あたいは知らないはずのことを、いっぱい知っちゃったぞ？」
団丸は顎（あご）をしゃくって顔を上げると、保安官を見下す視線でおちょくった。

「むむ……！」
くやしいが自分の失態であるだけに、りぶたんも言い返す言葉がない。
「あたいから目を離さなきゃいいじゃんか。目の届くところに置いといて、いいようにこき使ったらいいじゃんか。それなら、罪もないのに牢屋にぶち込むこともなく、秘密を知ってるのに野放しにすることもないっしょ？　一石二鳥じゃん」
「そうね。団丸さんなら、わたしたちとはちがう目を持っているから……」
ヒナタは団丸の提案を受け入れた。
「前に帳簿の見方を教えたでしょ？」
まっすぐに相棒を見つめると、ヒナタは説得を始めた。
「数字が合わないのに何度見ても間違いがわからないときは、ほかの人に見てもらうのが一番だって。間違っているところを自分の目で見ても、頭は合っていると思い込んでるから、間違いに気づくことができないのね。だから、ちがう目が必要なんだって、教えてあげたでしょ？　団丸さんは元怪盗。わたしたちとはち

がう目を持っているのよ」
「こいつはただの泥棒だよ、ヒナたん。それに、いまはもう泥棒ではないとどうして言える？」
りぶたんの言葉はヒナタにやさしかったが、その目はなじるように団丸を見つめている。
「でも団丸さんは、自首したくらいなんだから――」
「ちがう。自首したのは罪を償うためではない」
ヒナタの発言をさえぎったりぶたんは語気を強めて続けた。
「おまえは地下牢獄に入りたかっただけだ。そうだろう？　団丸！」
「あんなところに入りたがる奴なんていやしないさ」
団丸はもっともらしく答えた。
「他人のことなど聞いてはいない。あたしはおまえに聞いているのだ！」
団丸の返事は、どこかの誰かを想定しての客観的な回答にすぎなかった。決して、自分のことを語ったのではない。それをさも自分のことのように話すとは、なにかやましいことがあって、口先でたぶらかそうとしているにちがいなかった。

「……」
饒舌(じょうぜつ)だった団丸が沈黙した。
「……」
「……」
りぶたんとヒナタもだまった。無言の圧力をかけている。
「……」
フレイムは意気消沈したままだが、さすがにジャーナリストだけあって、事の成り行きを爛々(らんらん)と光る目で見守っていた。
しばらく沈黙を守った団丸は、無言の行に耐えかねたように鼻から大きく息を吐くと、口を開いた。
「地下牢獄に入りたかった……か。まいったね。どうにもこうにもさ。悪党どもが陰でこそこそ悪口言うしかない気持ちがよくわかったよ。保安官。あんた、たいしたもんさ」
「おだてても無駄だぞ」
「そんなつもりはないよ。どうせ、そこの坊やの質問に答えてやる気でここまで来たんだ。あんたの質問にだって、答えてやろうじゃん」

団丸はそう言うと、暖簾から離れてソファに腰を下ろした。
二人掛けソファの中央に座っていたフレイムはおとなしく体をずらした。
フレイムと団丸が並んで腰掛けている。フレイムの前にはヒナタが、団丸の前にはりぶたんがいる。テーブルをはさんで反対側のふたりは立ったままだ。
立ったままでも、りぶたんとヒナタの視線は上向きだった。
団丸はショウジョウダルマだから立派な体格をしている。広い肩幅と太いウエストの寸胴（ずんどう）な体型ばかりが目立つが、上背（うわぜい）もかなりのものだ。
ソファに腰掛けた団丸の顔は、立ったままのミミマキムクネやピキよりも、まだ高い位置にあった。
「まあ、座りなよ。警戒しなくてもなにもしやしないさ。あたいは事件とは無関係だし、過去の罪ならもう清算したよ。お勤めは果たしたんだ。……反省する気がなくて、罪を償おうなんて思っちゃいなくてもね」
それはりぶたんの主張を認めた発言なのか、あるいは単なる皮肉なのか、ショウジョウダルマのとぼけた

表情からは読み取れなかった。
「いいだろう。聞かせてもらおう」
りぶたんはどっかと腰を下ろした。
遅れて、ヒナタも座った。
「あんたの言うように、確かにあたいは地下牢獄に入りたくて自首したのさ。でも、金庫に用があったわけじゃないよ。あたいは、ただ……」
団丸はふと、言いよどんだ。これまで隠してきたことを、いまここで話してしまっていいものかどうか、この期に及んでためらっているようだった。
「ただ、なあに？」
ヒナタがやさしく誘い水を向けた。
「ひとを……捜してたのさ」
言葉にした瞬間、団丸の両肩が落ちた。
「そう」
ヒナタは短く受けた。素っ気ない言い方ではなく、情感はこもっていたが、それっきり言葉をつなごうとはしなかった。
「……」
りぶたんはヒナタに任せて、口を真一文字に結んで

いる。
ふたりとも口数が少ないのは、団丸に語らせるためだった。
「あたいは、もうずうっと長いこと、その人を捜してるんだ」
団丸は静かに語り始めた。
「ふつうに捜しても見つからなかったから、向こうにあたいを見つけてもらおうって思ってさ。手っ取り早く名前を売るには、悪いことするのが一番じゃん。だから、あたいは盗人(ぬすっと)になったのさ。でも、貧しい者や弱い者から盗んだんじゃ、その人に合わせる顔がないよねえ。それで、人様から義賊と呼ばれて喝采(かっさい)されるような、そんな盗人になってやったのさ」
うつむいて話す団丸の声がしんみりとしている。
「でも、あたいは見つけてもらえなかったんだ」
団丸の話は続いた。
誰も横から口をはさもうとはしなかった。
「もう死んじゃったのかもしれない。それなら捜せっこない。でも、会いに来れないだけかもしれない。それなら、あたいから会いに行くっきゃない。会いに来

たくても来れない場所。って、地下牢獄くらいじゃん？」
「それで自首したのか」
りぶたんの口調が穏やかになっていた。
「そう。だから、あたいは犯人じゃないんだ。もう盗む理由がないんだ。……あたいが犯罪者としてどんなに悪さをしたって、その人が心配して訪ねてきてくれたりしないってこと、わかっちゃったもん」
さみしい声だった。
「……ははっ。なーにやってんだろうねえ、あたいってば。バカやって。人様に迷惑かけて。世間を騒がせて。何年も牢屋に入れられてさ。出てきても白い目で見られて。それでもまだ、見つけてもらえないなんてさぁ」
団丸は自嘲気味に薄笑いを浮かべて見せたが、そんな団丸を笑う者はいなかった。
「でも、あたいは捜すんだっ」
団丸の声に張りが戻った。うつむいていた顔を上げ、一直線にりぶたんを見た。その瞳には迷いもためらいもなかった。

「いまさらあきらめるくらいなら、初めっから捜しゃしないよ。昨日の夜中に坊やからツナギがついてさ。あたいの話を絵本にしたいって聞いてさ。あたいを見つけてもらうのに、そんな方法もあったんだって思って。待ちきれなくて。ここにやってきたのさ。そんなあたいがいまさら金庫破りなんかして、いったいなんの得があるってんだい？　なんにもありゃしないよ」

「それで誰を捜してるの？」

ヒナタが興味深そうに聞いた。

「いいじゃないのさ。誰だって」

「よかったらＬＩＳＤで捜してあげても……」

「勘弁しておくれよ。あたいだけの問題でいいのさ。そんなことより、こうなったらあたいにも犯人捜しを手伝わせてもらうよ。ちっとは役に立つ自信あるし」

団丸はテーブルに両手をついて身を乗り出し、自分を売り込んだ。

「それに、あたいが悪党だったから会いに来てもらえなかったのかもしれないじゃん。生まれ変わったあたいがまじめに働いたら、ちゃんと人様のお役に立てたら、会いに来てもらえるかもしれないじゃん。だから

さあ、手伝わせてよっ」
聞き入れられなければ拝み倒しそうな勢いだった。
「ね？」
ヒナタはりぶたんに同意を求めた。
団丸の後押しをするヒナタの言葉はとても短い。わずか一音だ。けれども、りぶたんとヒナタ。ふたりの間はそれで充分だった。
「……」
りぶたんはだまって制帽を脱いだ。アトリエに入ってもかぶったままだった、ＬＩＳＤの紋章入りの帽子を脱いで、逆さまにひっくり返した。
幅は細くても奥行きのある帽子だ。丸みを帯びてはいるものの、四隅（よすみ）は角張って見える。ひっくり返せば、方舟のような形をしている。
その舟の中にりぶたんは手を入れた。
「！」
「！」
ヒナタとフレイムが同時に反応した。うれしそうに視線を交わす。
なにやら、もぞもぞと手探りをしていたりぶたんは、

制帽の中から銀色に輝く物体を取り出した。それをフレイムに、ぽいと投げ渡した。
「あ、前のと色がちがう」
受け取ったフレイムにはそれがなにかわかっているようだ。
「見て見て。絵に描いたのとは色がちがうよ」
フレイムはさっそく隣に座る団丸に見せびらかした。銀色に輝いているのはＬＩＳＤの紋章をかたどったバッジだった。裏には回転ピンと呼ばれる安全ピンが留め具としてついている。先のとがったピンを受け具でホールドし、その受け具を回転させることでピンが外れないよう、ロックする構造になっている。
「ベレー帽についてたやつ？」
団丸はバッジに顔を近づけて、しげしげと見つめた。ピグミーの頭部がシルエットになっている。翼を開いたような紋様が逆三角形に広がっている。図形の下にはＬＩＳＤの文字もある。飾り棚に並ぶポートレートに描かれたバッジと、そっくり同じデザインだ。
「そうだよ。それの色違いだよ、これ。……ほらっ」
バッジを渡されたのがよほどうれしいらしく、フレ

イムは副保安官のヒナタにまで見せびらかした。
「でも、どうして色がちがうんだろ？　わかった！
前の茶色いのは保安官助手のだったけど、こっちの銀ピカは保安官補佐のだね！　ぼく、出世したんだ！」
フレイムは本当にうれしそうだ。
「くすっ」
ヒナタはこらえきれない様子で笑い声を漏らした。
「うんにゃ。それも助手のだ」
りぶたんがぶっきらぼうに答えた。
「え？　でも色が……」
「ほら、前のバッジは目立たなかったでしょ？」
ヒナタが説明役を買って出る。
ポートレートに描かれたバッジは茶系の金属に艶消しが施されていて、沈んだ色合いだった。地味な色の帽子にあわせても、まったく目立たなかった。
「だから作り直したの」
「なんだ、そっか。ちぇっ、出世したと思ったのに。でもまあ、いいや。これ、銀ピカだから新しいベレー帽にぴったりだし。ちょっと待ってて。ぼく、帽子取ってくるから」

言い終わる前に席を立ったフレイムは、暖簾を破かんばかりの勢いで、隣の部屋へと小走りに駆けていった。

「ほれ」

りぶたんは制帽の中から今度はワッペンを取り出すと、テーブルの上に投げ出した。

平べったいワッペンは音もなくすべって団丸の前でぴたりと止まった。

「なにさ、これ？」

ぺらぺらのワッペンをつまみ上げた団丸は不満げだった。

素材は制帽と同じなのか、濃紺の生地だった。制帽の紋章は金糸だが、こちらは銀糸で縫い取られている。金と銀のちがいはあっても、紋章は光を反射して輝いて見える。

決してちゃちな代物ではないが、フレイムに渡された金属製で厚みのあるバッジに比べると、ワッペンは布製で薄っぺらいだけに、明らかに見劣りがした。

「あたいはなに？　保安官助手の、そのまた下の、保安官助手見習い？」

「うんにゃ。それも助手のだ」
りぶたんは同じセリフを繰り返した。
「だって団丸さん、いま、帽子持ってないでしょ？」
またもやヒナタが説明役を買って出る。
「バッジもらってどこにつけるの？　体に穴があいて痛そうだけど」
「それもそうだわね」
言われて団丸も納得した。
「そのワッペン。裏にテープがついてるから、左胸に貼ってくださいね」
「貼るのは別にいいんだけどさぁ……」
団丸はワッペンの裏を見た。裏一面に、両面テープのようなものが貼り付けられている。片面でワッペンにくっつき、もう片面で胸にくっつくようになっている。あとは剥離紙（はくりし）をはがして、シールのように貼るだけだ。
「じゃあさ。あたいが帽子持ってきたら、坊やと同じバッジに取り替えてくれる？」
つまんだワッペンをいかにも安っぽそうにぺらぺらと振って見せながら、団丸は物欲しげな目つきでりぶ

たんに迫(せま)った。
「帽子を取りに行く暇ならないぞ」
りぶたんはソファから立ち上がった。
「そうじゃなくてさ。替えてくれるかどうか聞いてんの。別に帽子取りに帰ったりしないからさぁ」
つられるように団丸も腰を上げて、質問し直した。
「いいだろう」
りぶたんは了承した。
団丸にバッジを渡さなかったのは、なにも意地悪したからではない。ピンを刺す場所がないからワッペンを選択しただけだ。
「そういうことなら、このぺらぺらで我慢するさ」
団丸はテープの剥離紙をはがすと、ぺたりと胸に貼り付けた。
かつて義賊と謳(うた)われた怪盗は、ＬＩＳＤの保安官助手に任官した。
「遅いぞ、フレイム。置いていくぞ」
りぶたんはフレイムに声をかけた。
「はいはい、お待たせっ」
帽子をかぶったフレイムが別人となって戻ってきた。

まるで特殊部隊のエリートコマンドのようだった。画家にも絵本作家にも見えない。ジャーナリストだなんてとんでもない。ペンを好むタイプとは思えない。帽子ひとつでずいぶんとイメージも変わるものだ。

フレイムがかぶっているのはエッジの立ったベレー帽だった。左右の高さがちがう。向かって右側には厚みがあるが、斜めに下った左側は薄くなっている。ポートレートに描かれたベレー帽はふっくらしたタイプで柔らかい印象があったが、コマンド風のベレー帽は研ぎ澄まされた感じがして、線の細いトビネによく似合っていた。

しかも、色は純白。天使の羽の色だ。銀色に輝くLISDのバッジが、正面やや右の、厚みのあるところに帽章としてピン留めされて威厳を漂わせてもいる。

オレンジ色に近い卵色のトビネが純白の帽子をかぶると、明るい色で統一されて華やかさが増す。さらに銀ピカのバッジがアクセントになって、なかなかのコーディネートだ。

「あら、いいじゃない」

ヒナタはひと目で気に入ったようだ。

「……」
団丸はせわしなく目を配った。
フレイムの純白のベレー帽と銀色のバッジはかっこよかった。
りぶたんとヒナタは、部外者には入手不可能なLーSD専用デザインの制式帽子をかぶっている。金属製の帽章はなくとも、高級そうな金色の糸で紋章が刺繍されている。濃紺の制帽は色も形もフォーマルだから、青紫のりぶたんにも、ベビーピンクのヒナタにも、どちらにも似合っている。
それに対し、団丸は無帽。ピンクの体に薄っぺらいワッペンを両面テープで貼り付けただけ。どうにもみすぼらしくて、ひとり浮いて見える。
「もにょもにょ団、そろったわね」
全員集合したところで、ヒナタはようやくソファから腰を上げた。
「うわぁ、脱力系のネーミングだ。団結してるのに力が抜けそう」
フレイムが笑った。
「保安官もにょりぶと、ちょっぴりもにょもにょな仲

間たち」
ヒナタがおどけた。
「もにょもにょしていたら仕事にならんぞ」
りぶたんも冗談につきあう。
「……」
団丸は輪の中に入るきっかけがつかめなかった。
りぶたん、ヒナタ、フレイムの三人は前々からの友達同士でも、団丸は今日出会ったばかり。たったいま知りあったばかり。
「団長はりぶたんね。わたしはマスコットガール」
「ぼくは？　ねえ、ぼくは？」
「……」
団丸は口をつぐんだまま。
「そして、まるたんは荷物運び」
「まるたんって団丸か？　ぷっ」
まるまると肥えたショウジョウダルマのおなかに目をやりながら、自分のことは棚上げしたミミマキムクネがわざとらしく吹き出した。
「え？　あたい……？」
団丸は驚いて目をぱちくりさせた。

いきなりあだ名をもらって面食らったのもあるが、フレイムを飛ばして先に自分に話が振られるとはまったく予想していなかった。
「まるたん、力ありそうだもんね。それでぼくは？」
フレイムは自分が後回しにされてもすねたりしなかった。トリは最後だ。一番おいしい役回りだ。
「フーちんはお片付け係。……ねっ」
ヒナタは愛嬌たっぷりにウインクをして、すぐにりぶたんに視線を送った。
「えっ、そうなの？」
いったいどういうオチなのか、フレイムには理解できなかった。
「用意はいいか！」
保安官のりぶたんがリーダーらしく覇気（はき）のある声で吼（ほ）えた。
「はいっ」
副保安官のヒナタがすかさず返事をした。
「は――」
「おうっ！」
「――いっ」

フレイムの返事に団丸が割り込んで、声の大きさでむりやり順番を奪い取った。
ヒナタがからんでくれたので、団丸は自分の立ち位置をつかめた。輪の中に入るきっかけに迷うことは、もうない。それで安心して、遠慮なく坊やの前に割り込んだのだった。
「……」
フレイムはちらりと横目で団丸を恨めしげに見たが、文句は言わなかった。
「よし！　ついてこいっ」
りぶたんはもうひと声吼(ほ)えると、その場からムーブして飛び去った。
「おうっ！　くすくす」
ヒナタは団丸の返事をまねして、忍び笑いを漏らしながら飛んでいった。
「ラジャー！」
まねをされた団丸はひと工夫凝らしてちがう返事をし、ふたりの跡を追った。
「あっ！　ちょっと待ってよ！　ねえ！」
もう誰もいないのに、フレイムは待ったをかけた。

「ぼく、戸締まりしなくちゃ！　ねえったら！」
ここはフレイムのアトリエだ。
りぶたんたちはさっさと移動すればそれでよくても、フレイムはそうもいかない。しっかり戸締まりをする必要がある。それにもうひとつ。
「……」
フレイムはふと、誰もいなくなった応接セットに目をやった。
床にはお盆が落ちている。
テーブルの上には飲み干されたコップがほったらかしになっている。
団丸が食べようとしてコップの中からつまみ上げ、落としてしまった氷もある。テーブルの上で、溶けかけの氷がちっちゃな水たまりを作っている。
それに、なにやらくるりと反り返った半透明の紙切れも転がっている。団丸がワッペンについていた剥離紙をテーブルの上に捨てていったのだ。
「なんだよ、もう！　お片付け係って、このことかよっ」
ヒナタのオチをようやく理解したフレイムが、置い

てきぼりにされてむくれた。
格好だけなら特殊部隊のエリートコマンドに見えても、中身はまだまだ幼い、坊やのトビネだった。

第三章　地ノ塔

一

音にも闇がある。

光のない闇の世界は誰しも経験があって、そこに驚きはない。

目を閉じれば暗くなる。毛布をかぶれば真っ暗になる。窓のない倉庫。窓があるはずもない地下室。光さえ遮断すれば、完全な暗闇はいつでもどこでも訪れる。簡単に経験できることだから、光のない世界になにを感じることもない。

しかし、音の闇はちがう。音のない世界など、滅多なことでは経験できない。

耳をふさいでも音は消えない。指先で耳孔（じこう）をふさげば、筋肉の奏でる音が聞こえてくる。耳をふさいだところで、体の中の音が聞こえやすくなるだけ。

耳を覆い隠しても無意味だ。

音はエネルギーを持っている。空気にぶつかっては

これをふるわせ、鼓膜にぶつかってはこれをふるわせ、音として聞こえてくる。耳の外側を覆い隠したところで、音のエネルギーは体にぶつかって骨肉(こつにく)をふるわせ、肉体の内側から鼓膜へと抜けてゆく。

そんな音も、闇に入れば死に絶える。

たとえば山の中。風が吹けば梢(こずえ)はざわめく。鳥は歌い、虫が鳴く。足元では乾いた落ち葉が踏まれて文句をいう。山はいろんな音に満ちている。その音が、闇に喰われて死に絶える。

風がやめば梢(こずえ)は沈黙する。ひとの気配に、鳥は逃げだし、虫は息を潜める。敷き詰められた落ち葉も、湿って柔らかくなれば音を吸収する。しかし、これだけなら山中ではままあること。完全な闇にはまだ遠い。

最後に、冷たい空気に呑(の)まれて、ひとは音の闇に沈む。

空気にも温度があり、暖かい空気と冷たい空気が混ざり合うことなく境界を作ることがある。

切り開かれた登山道が太陽に焼かれ、熱い地面にあぶられて暖かい空気が作られる。

生い茂る草木は太陽熱をさえぎるだけでなく、葉か

ら水蒸気を排出することで空気から熱を奪い、冷たい空気を生み出す。山肌から染み出る水もまた空気を冷やす。

山の形状も相(あい)まって、暖かい空気と冷たい空気が交差する。焼かれた登山道を進み、暖かい空気でできたトンネルの中を歩いていても、複雑な地形に誘い込まれて、不意に冷たい空気の固まりに突入する。

その瞬間。世界の音が消える。

どこか遠くで発生したかすかな音の波は、暖かい空気と冷たい空気の境界層に跳ね返されて、耳にはもう届かなくなる。

梢(こずえ)は騒がず、動物は鳴かず、湿った落ち葉の絨毯(じゅうたん)に音を吸い取られ、暖かい空気のトンネルを抜けて冷たい空気に包まれたとき。なにも聞こえない無音の世界が誕生する。

音の闇。

それはまるで、ぎゅうぎゅうと押し固めた空気で、耳に栓をしたかのよう。耳孔だけでなく、耳全体を。耳だけでなく、頭全体を。頭の外側だけでなく、脳の中まで。すっぽりと栓をしたかのような気分になる。

いや、すっぽりではない。ずっぽりだ。
不思議な感覚だが、すぐに不安に駆られる。生まれて初めて経験する、音のない世界。耳が聞こえなくなったのではないか。そう思う。あわてて声を出せば、音はふつうに聞こえてくる。
耳は正常なのだ。音が闇に呑まれて消滅しただけ。ただ、それだけ。
音にも闇がある。
その闇がいま、地ノ塔通用門を覆っている。

りぶたんは先頭で仁王立ちとなっていた。ミミマキムクネの長い耳の毛が、螺旋状に巻かれて垂れ下がっている。垂れた先には地の底へと続く螺旋状の階段がある。
隣には、半歩ほど下がってヒナタが立ちすくんでいた。音のない世界に不安そうな顔を見せている。心なしか、ピキの太いしっぽも縮こまって見える。
ヒナタの脇にはフレイムがいた。なぜ音が聞こえてこないのか、不思議そうにきょろきょろしている。音がしなくなった世界に無意識に対抗しているのか、ト

ビネの細い爪先でかすかにリズムを刻んでいる。
団丸は一歩下がったところにいた。斜め前にはりぶたんがいる。その横のヒナタ、さらに横のフレイムと、仲間たちの背中が見える位置だ。そこで顔は動かさずに、ショウジョウダルマのつぶらな瞳を左右に走らせている。
もにょもにょ団は全員が無言だった。
通用門に入ったとたん、音の闇に呑まれたのだった。
「音が……聞こえない」
最初に口を開いたのはヒナタだった。無音の世界に耐えかねて、自ら音を生み出したようだ。
「封鎖しちゃって誰もいないと、こんなに静かなの？」
ヒナタは音を生み続けた。
「空気も冷たくて、なんだか変な感じ」
地ノ塔は封鎖されていた。ＧＬＬ城の庭園全体を封鎖してあった。
誰もいないから音がしない。風も吹いていない。通用門はコテージ風になっていて、足元の石畳は歩いても音が立たない。そして螺旋階段からは、地下で冷や

された空気がこんこんと湧き出してくる。
音の闇を生み出す冷たい空気は地の底からもたらされていた。
「換気をやめたから、地下の冷たい空気がここまで上がってきているようだ」
螺旋階段を見下ろしながら、りぶたんが説明した。
目の前に石の階段がある。壁も石で組まれている。階段は下りながら右へと曲がってゆく。左の壁が石段を押し、石段は右の壁を押し、押し出された右の壁は視界から消えてゆく。
「そっか。換気扇、止めちゃったもんね」
ヒナタは地の底へと続く階段から目を背けた。
地ノ塔は地下にある。地上にあるのは通用門だけで、塔全体が地面の下に埋まっている。きちんと換気をしないと塔内の空気がよどむから、換気口を設けてある。ふだんは換気扇で強制的に空気を循環させており、地下で冷やされた空気も換気口から抜けてゆく。その換気扇が止まったため、排気されなくなった冷たい空気が行き場をなくして、通用門にまで押し寄せているのだった。

「それにしても静かよね」
ヒナタは欄干（らんかん）に近づくと、手すりに両手を乗せて外を見た。
通用門はＧＬＬ城庭園に建てられたコテージのようになっている。庭園のど真ん中に壁のないお堂が建っており、傘のように開いた八角錐の屋根を八本の柱で支えている。柱と柱は欄干でつながって、その内側にはベンチもあった。ベンチに腰掛けると、欄干にちょうど肘が乗る。そのまま楽な姿勢で、広い庭園をのんびりと眺めることができる。八角堂は、暑い日差しをさえぎり、降りしきる雨から逃れ、庭園で休憩するための場所に見える。
その庭園は隅々まで手入れが行き届いていた。草木の精も宿っている。
庭園に宿る草木の精は女性だという。
春には乙女となって、桜をピンクに染める。梅雨時にはジューンブライドとなって嫁いでゆく。結婚するのがちょっぴり心配なのか、あじさいがマリッジブルーに染まる。
夏にはたくさんの子供たちが生まれる。セミにバッ

夕にチョウチョ。虫たちが暑い夏を謳歌(おうか)する。
秋になって涼しくなると、去っていった子供たちをなつかしむ。もうすぐ終わる自分の一生を振り返り、命豊かな生の喜びにキンモクセイが匂い立つ。やがて、眠りにつくときがやってくる。木の葉が赤く染まり、散ってゆく。
冬。草木の精は眠っている。
そして春はまた巡り、命が芽生える。
いまの季節はちょうど、草木の精がお嫁に行く前だ。一年で一番元気な年頃だ。だから、お腹が減るのも早い。
「お天気もいいし。いまからお弁当にしない？」
庭園を眺めながら、ヒナタは冗談とわかるロぶりで言った。
目の前に芝生の絨毯が広がっている。晴れ渡った空は真っ青ですがすがしい。おひさまをいっぱいに浴びながら、芝生の上でみんなで輪になって弁当を広げると、さぞかし気持ちのいいことだろう。ムラサキシジミの追いかけっこランチをするのに絶好のロケーションでもある。

それに今日は貸し切りで邪魔も入らない。
地ノ塔だけでなく、庭園全体を封鎖してあるから誰も入ってこない。ＬＩＳＤが全職員に退去命令を出し、立ち入ることを固く禁じている。
五億六千万ddもの大金が強奪されている。金庫から持ち去られている。奪われた金の行方は不明だ。探索はこれから。しかし、すでに地ノ塔からは運び出されたものと、保安官のりぶたんは見ている。
犯行時間はおよそ二時間。犯人のルビーローズ一味は午前四時に姿を見せて、午前六時に出て行った。二時間のうち、夜勤職員の監禁にも時間を費やしているから、奪った金を運び出す時間はさらに短い。遠くへ持ち去る余裕はない。おそらく、どこか近場に隠したはずだ。広大な庭園のどこかに、奪われた金が隠されていることも考えられる。
だから、庭園ごと封鎖してあるのだった。
「そういえば、守衛はどうして監禁されなかったんだろう？」
フレイムが聞いた。
りぶたんは螺旋階段を下り始めている。

「監禁してしまえば、通用門から楽勝でお金を持ち出せるよね？」
「楽勝とは限らないぞ。誰かやってきたらどうする」
階段を下りながら、振り返りもせずにりぶたんは答えた。
「実際には誰も訪ねてこなかったけれど、でもそれは結果論なのね」
ヒナタもりぶたんに続いて階段を下り始めた。
「いつ誰がやってきてもおかしくはないでしょ。だから、守衛さんを監禁すると、守衛さん役の犯人がひとり余分に必要になるわけ」
「でも、守衛を監禁しなくても、誰か来たらどのみち困るんじゃ……あっ！　ルビーローズか！」
フレイムは質問の途中で、自分で答えに気づいたようだ。階段を下りようとして、足が止まった。
「ルビーローズは見張り役だったんだ。それで自分ひとりだけ、力仕事はしなかったんだな」
ルビーローズ一味が金庫からドゥードゥーを運び出したときに、マハラとチャパティだけが運び役を務めていたとの目撃証言がある。ルビーローズは力仕事に

は参加していない。
「誰かやってきても、夜勤職員を丸め込んだ要領で、見張り役のルビーローズが対処する手はずだったんだよ」
フレイムはなにを思ったのか、後ろを向いて団丸に自説を話して聞かせた。
「わかったから行きなよ」
団丸は階段を指さした。
先に下りたふたりは螺旋階段のカーブを曲がって、姿が消えてゆく。自分の意見を語ることに夢中となって、まわりが見えなくなるとは困った坊やだった。
「あ、ちょっと待ってよ」
トビネが軽い体を活かして、一段飛ばしで階段を駆け下りる。
「……」
しんがりを務めることになった団丸は、すぐには続かずにひと呼吸置いた。
ショウジョウダルマの太い体をひねり、誰もいない庭園をゆっくりと見回す。それから、団丸は地の底へと下りていった。

「それに守衛は監禁してやらなくても、責任を問われたりしないよね」
螺旋階段にフレイムの声が反響する。
石段に石壁。天井も石造り。音の闇に呑まれていた地上とちがって、螺旋階段では音がよく響く。
地底へと下りてゆく石の階段は見るからに冷たそうだ。それでなくても日が当たらないのに、地下の空気でさらに冷やされている。もっとも、肌寒いわけではないし、目には暖かい色も飛び込んでくる。
壁にはＧＬＬ城と同じ電灯が据え付けられている。ロウソクの形をした電灯だ。炎を模した電球がオレンジ色に燃えている。
「幹部は顔パスって決まってるんだもん。犯人一味をノーチェックで通したって守衛に落ち度はないから、ルビーローズが監禁してやる必要はないもんね」
フレイムはヒナタに追いついた。
「だからって、ルビーローズさんが犯人だと決まったわけじゃないからね」
前を向いたまま階段を下りながら、ヒナタは後ろのフレイムに釘を刺した。

犯人一味は本物のルビーローズたちなのか、それとも本物になりすましたダミーローズたちなのか、LSDは断定できないでいる。
ただし、夜勤職員をわざわざ全員監禁した理由はダミーローズ犯人説では説明できない。怪しまれる危険を冒して余計な手間をかける必要はないからだ。犯人がダミーローズなら、監禁する職員の数は少ないほうが望ましい。
その点、ルビーローズの容疑は濃い。
あえて全員を監禁することで、ひとりひとりの責任が軽くなるよう配慮したと考えられるからだ。
「だいたい、守衛も犯人の一味かもしれないじゃん」
最後尾を下りてきた団丸が仲間たちに追いついた。
「守衛も犯人なら、うその証言をするだけで、手ぶらで盗み出すからくりは一丁上がりなんだからさ」
犯人のルビーローズ一味は手ぶらで出て行ったと、夜勤の守衛は証言している。だが、その言葉が真実だとは限らない。守衛も一味かもしれない。
「まさか、そんな簡単なからくりで？」
フレイムはまた足を止めると、今度もわざわざ振り

返った。
「トリックなんて、タネを明かせば簡単なものさ」
「それなら先に守衛を取り調べたほうがいいのでは？」
「坊やに言われなくても、もう保安官がやってるっしょ」
団丸はまた指を突き出すと、前に進めとトビネの坊やに指示した。
「えっ？　そうなの？」
フレイムは今度もまた一段飛ばしで階段を駆けながら、先頭のりぶたんに大きな声で尋ねた。
「当然だ。最後に犯人を見たのは守衛だからな」
先頭でりぶたんが答える。階段を下りる足は休めない。
「それで結果は？　シロ？　それともクロ？」
「さあな。たぶん、シロだろう。そもそも守衛も一味なら、守衛を叩けば犯人は芋づる式かもしれないのだから、かえって楽だ」
「じゃあ、守衛は無罪放免されたんだ」
「うんにゃ。牢屋にいる。守衛だけでなく、夜勤職員

はみんな牢屋の中だぞ」
ＬＩＳＤの保安官はさらりと言ってのけた。
「ええっ？　なんで？」
驚いたフレイムの足が止まる。
団丸は今度も注意しようと手を上げかけて、そのままゆっくりと下ろした。
先頭を切って階段を下りるりぶたんが足を止め、振り返ったからだった。
「白だとか、黒だとか、物事はそんなに簡単に割り切れるものではない。どちらでもない灰色だってある。白の裏側は黒だったりもする」
りぶたんは階段の下からフレイムを見上げて話を続けた。
「ひとが行動するとき、そこには必ず動機が存在する。こうしたい、そうしたいという思いが行動を決定づけるのだ。でも、その思いは決してひとつではない。いくつもの思いが複雑に絡(から)みあっている。動機というのは、毛糸の切れ端を集めて丸めた玉のようなものだ。外から見れば真っ白な毛糸ばかりでも、真ん中の一本はどす黒く染まっていることだってある。清く正しい

善人が、白い毛糸にしたがって善行を積み重ねていても、最後の最後にこの黒い一本だけは譲れないと、平気で悪事を働くことだってあるのだ」

「……」

ヒナタも振り返ると上目遣いでフレイムを見た。ただし今回は沈黙を守って、口をはさむようなまねはしなかった。どうやらりぶたんは、フレイムに伝えたいことがあるようだ。

「動機の毛糸玉を解きほぐすのは容易ではない。上っ面だけを見てわかったつもりになってはいけない。それはとても簡単なことだから、ついついやってしまうけれど、自分で自分をいつもしっかり見つめて、気づかなくてはならない」

「……」

フレイムはおとなしく耳を傾けている。

「ドゥードゥーを盗んだ動機。まるで職員を助けてやるかのように、あえて全員を監禁した動機。犯人の動機という、もつれた毛糸の玉を解きほぐしていけば、そこに、守衛が自ら進んで犯罪に荷担する動機が隠れているかもしれない。もしかしたら、守衛だけではな

く、すべての夜勤職員が強奪事件に協力するほどの動機が隠されているのかもしれない」
「まさか、そんな……！」
フレイムは絶句した。
「全員が犯人なら、手ぶらで盗み出すからくりは一丁上がりさ」
団丸がフレイムの背中に声をかけた。
「ひとの思いはひとつではない。本人にもわからないほどのたくさんの思いが絡みあって、ひとつのように固まって見えるだけ。ＬＩＳＤの仕事も、絵本ジャーナリストの仕事も、根っこは同じだ。遠くから一個の毛糸玉をぼんやり見るのではなく、しっかり踏み込んで、一本一本の毛糸を見つめるのだ」
「うん、わかった。肝に銘じるよ、ぼく」
説教じみた保安官の言葉を、フレイムは素直に受け入れた。
「あ、でも。だからって、職員さんたちがみんなして怪しいっていうわけじゃないのよ。それに、むりやり牢屋に入れたわけでもないからね」
ヒナタがフォローした。

「ちゃんと了解してもらってるの。犯人一味は夜勤の職員さんたちに責任を負わせたくなかったみたいだから、みんなちょっと逮捕されてくれない？　って、お願いしてあるの」
「なんだ、そういうことかぁ」
全員逮捕は合意の上と知って、フレイムは胸をなで下ろした。
「夜勤の職員さんたちが捕まったって聞いたら、犯人一味がなにか動きを見せるんじゃないかって思って、協力してもらってるのよ」
「それだけではないけどな」
りぶたんが補足した。
「もしも職員の中に犯人がいれば、自由な行動を制限したことになる。牢屋に入れられた不安から、ボロを出すかもしれない」
「でも、みんなよく協力したよね。ぼくなら牢屋はいやだよ、やっぱり」
「それは……」
ヒナタは言葉を濁すと、冷ややかな目で一段下の相棒を見た。

「ちょっぴりお願いしただけで、みんな進んで牢屋に入ってくれたぞ」
りぶたんはにやりと笑った。
「あー！」
フレイムは声だけ荒げて、追及はしなかった。
悪党どもが裏でこっそりけなすことしかできない、どすこい娘と呼ばれる保安官が、どんな風にお願いをしたのか、なんとなくわかったような気がした。
「犯人は複数犯だ。いっしょにヤマを踏んでも、動機はそれぞれ別々。揺さぶって、動機という名の毛糸玉をほぐしていけば、たった一本の糸くずで激しく対立することだってある。夜勤職員と守衛の全員逮捕はそのための一手だ。……職員の中に犯人がいてもいなくても、な」
りぶたんは再び階段を下り始めた。
「いてもいなくても？」
フレイムはヒナタを見た。
「職員さんの中に犯人がいたら、仲間から切り離されて牢屋の中で動揺するんじゃない？　一味がみんないっしょなら意志を統一できても、ひとりぼっちになっ

たら、もう自分のことしか考えないでしょ？」
ヒナタも階段を下り始めた。
「いなかったら？」
フレイムがヒナタを追いかける。
団丸も一番後ろからついてゆく。
通用門から地ノ塔へと続く螺旋階段はけっこう長い。どうやら、塔は地下深くに埋まっているようだ。
「犯人一味は夜勤の職員さんたちに責任を負わせたくなかった。だから、わざわざ全員を監禁して助けてあげた。もしもそうだとしたら、職員さんたちの全員逮捕を知って、一味はどうするだろうね？」
ヒナタは前を向いたまま、後ろのフレイムに質問を投げかけた。
「どうするって、えっと、助けにくるとか？　そういうこと？」
「いくらなんでも、助けにはこないと思うぞ？」
ヒナタはくすりと笑った。
「なんだよ、もう。わかってないの、ぼくだけ？」
フレイムは首を横に向けると後ろの団丸に視線を飛ばした。そして、階段を踏み外さないように、あわて

て前を向いた。
「犯人一味が仲間割れするかもしれないのさ」
団丸が代わりに答えてやった。
「え？　なんで？」
フレイムにはよくわからない。
「犯人一味の動機に、ずれが生じるからだ」
先頭のりぶたんが説明を始めた。
「職員をかばってやることについては、一味の動機は一致していたかもしれない。しかし、かばってやったのに逮捕されてしまった職員をどうするかは、別問題だ。おそらく、そんな事態は予想もしていなかっただろう。このまま見捨てるか否か。一味の意見が割れたっておかしくはない」
「逮捕された職員さんたちをなんとかしてやりたい犯人がいたら、見捨ててしまいたい犯人にとって、邪魔ってことになるでしょ？」
りぶたんの説明にヒナタが続く。
「そのままモメて、しっぽを出してくれるとありがたいがな」
「うんうん」

「……そうかなぁ。これだけの仕事をいっしょにやり遂げたのに、そんな簡単に仲間割れするものかなぁ？」

フレイムはりぶたんとヒナタの意見に同意しかねるようだ。

「ひとにはひとの道がある。なにもケンカ別れとまではいかなくても、犯人たちの進む道はそれぞれちがってくるだろうよ」

「……」

りぶたんの言葉に、最後尾の団丸が反応した。足を止めて立ち止まった。

「一致団結しているなら手強いが、ちりぢりになれば仕留めやすくもなる」

「でも……」

フレイムはどうにも腑に落ちないらしい。

「山の向こうに海があるなら、登山と海水浴で目的がちがっても、峠までは同じ道をゆく。それはわかるな？」

りぶたんはたとえ話を持ち出した。

「うん……」

「あたしたちの道もいっしょだ」
りぶたんの話し方がふっと柔らかくなった。
「あたしたちはいま、こうしていっしょに行動している。心の中で複雑に絡みあった動機の毛糸玉の、ほんの一本が同じ色に染まっているから、みんなでいっしょに行動しているのだ」
りぶたんは背中でやさしく語り続ける。
「でも、次の瞬間にはちがう動機で行動しているかもしれない。今日はなかよくいっしょでも、明日には、みんなそれぞれバラバラに、ちがう道を歩いているかもしれない」
りぶたんが語ったそのとき。
「！」
ヒナタの動きが一瞬固まった。階段を下りてゆく手足の動作がぎこちなくなった。
けれども、それはほんの瞬間の出来事だった。すぐ後ろのフレイムは気づきもしなかった。先頭で階段を下りてゆくりぶたんは、ヒナタに背中を向けているから、もちろん気づいてはいない。
「……」

だが、立ち止まって見ていた団丸は異変に気づいた。
わずか一瞬ではあっても、ヒナタが見せた動揺を見逃さなかった。
団丸は螺旋階段の途中で立ち止まったまま、地の底に向かう三人を見つめた。
りぶたん、ヒナタ、フレイム。なかよしの三人。いまは同じ道を同じ方向に進んでいる。でも、いつかその日が来たなら、三人はそれぞれちがう道を進むことになるのかもしれない。そして、その日はもう、そこまで来ているのかもしれない。
みんな。
それぞれ。
バラバラに。
りぶたんはそう言った。
――おれたちの道はここまでだ。
団丸の心に聞こえてくる声があった。
――おまえは右へ。おれは左へ。これからは別の道をゆく。
うつむいた団丸は自分の影を見た。壁の電灯に照らされて、足元に黒い固まりができている。

――そんな顔するなよ。いつかこの日がくることはわかっていたろ。

団丸が立ち止まっていることを知らない、新しい仲間たちは、螺旋階段を曲がっていった。前にも、後ろにも、誰もいなくなった。

――おまえなら、その人をきっと捜し出せるさ。あきらめるなよ。

ひとりっきりになった団丸は階段に腰を下ろした。

――じゃあな、D(ディー)。縁があったら、また会おうぜ。

「……K(ケイ)……」

階段に座り込んだ団丸は、そっと静かに手を伸ばすと、自分の影に触れた。

「あたいは、あたいの道を、しっかり前に進んでるよ。あんたはどうなのさ？　自分の道を、迷わずまっすぐ進んでるかい？」

そうつぶやくと、怪盗団丸はなつかしそうに黒い影をなでた。

2

金庫は空っぽだった。

中になにも入っていないから、重くて頑丈な鋼鉄の扉を閉める必要もない。守るべきものを失い、無用の長物として開け放されたままの扉が泣いていた。

「うわあ、なんにもないや。全部持ってったんだね」

フレイムは金庫の中でくるりと体を回転させた。

歩いて出入りできるウォークイン型の大型金庫だった。中は左右にパイプラックが設置されており、見た目ほどの広さはない。それでも、ほっそりとしたトビネなら、詰めれば十人は通路に並べそうだ。

「あたいも」

団丸も金庫の中に入ってみた。

円形の入り口は、まるであつらえたように団丸の体型にぴったりだった。

金庫の中は入り口よりも広いのだが、ぼってりとしたショウジョウダルマが入ると通路がふさがれて、たったひとりでもう窮屈になった。先に入ったフレイ

ムが奥に押し込まれた感じになったから、余計にせまくるしく見えた。
「全部持ってかれたわけじゃないのよ」
ヒナタは金庫の出入り口に立った。
本当はいっしょに中に入って遊びたいのか、ピキの太いしっぽがもぞもぞしている。
「一袋と三分の二、残っていたの」
「半端は置いてったのかな？」
つぶやくように言いながら、フレイムはラックにさわった。
鉄のパイプを組み合わせて、縦に二段、横に五列と格子状に仕切ってある。接合部にはパイプ継ぎ手を噛ませ、ボルトで締めてしっかり固定している。ドゥードゥーを詰めた麻袋を収納するためのパイプラックだ。それが金庫内の左右両側に設置されているから、全部で二十の麻袋を収納できることになる。
「それで盗まれたのは何袋なのさ？」
団丸もラックの手触りを確かめながら聞いた。
「十六袋よ。なんだか帳簿がいりそうね」
ヒナタは書庫へと移動した。

「十六ってことはさぁ……」
「マハラとチャパティが八往復したのだ」
ヒナタと入れ替わりに、りぶたんが金庫の出入り口に立った。丸い内枠に片手をついて体を支えている。手をついた内枠は鋼鉄製で、大きな穴があいている。扉のかんぬきを受け入れる穴だ。
「マハラさんとチャパティさんが犯人かどうかはともかく、ひとり一袋でふたりが八往復。全部で十六袋を運び出したのね」
帳簿を抱えて戻ったヒナタが、りぶたんの後ろで説明した。
ちょうど目の前にりぶたんが立っていて邪魔だ。ヒナタは背伸びしたり、しゃがんだりして隙間をうかがったが、中に入れてもらえそうな気配はなかった。
「……」
ふと横を向いたヒナタは金庫の扉に目をとめて、りぶたんが通せんぼをする理由を察した。
全員が金庫の中に入って不測の事態が生じ、扉が閉まりでもしたらたいへんなことになる。そんな事態は簡単には起こりそうもないが、万が一ということもあ

る。四人のうち、フレイムに団丸と半分が金庫の中に入っているのだから、残りの半分は外にいるべきだ。りぶたんの無言の背中がそう告げていた。
「十六袋で五億六千万ってことはさぁ……」
団丸は両手を使ってラックのひと区画の大きさを測った。
その団丸の次の質問を先読みして、ヒナタは帳簿をぺらぺらとめくった。
「一袋にいったいいくら入るのさ？」
「三千五百万ddよ」
帳簿を見ながらヒナタは即答した。
そして、顔を上げるといたずらっぽく付け加えた。
「でも、千ddが六個しか入らない袋だけどね」
「それで三千五百万ってことはさぁ……」
団丸は左手を握りしめると、拳で唇をとんとんと打った。
一袋に千ddがたったの六個しか入らないのなら、三千五百万ddの一パーセントにも満たない計算だ。
「はいはい、ぼくぼく！　ぼくが説明するよ！」
金庫の奥に押し込まれていたフレイムが伸び上がっ

て手を挙げた。
「ぼくは保安官助手の先輩だからね！　教えてあげるよ！」
「袋の中身はオーロラダイヤだね。額面百万ddのさ」
団丸は坊やを無視した。先輩の教えは必要なかった。
「……」
伸び上がって威勢もよかったフレイムが、一瞬でしぼんだ。
「ほう。よく知っているな」
りぶたんは扉の内枠に手をつくのをやめて腕組みをすると、今度は肩でもたれかかった。
「ほんと。まるたんはフーちんとちがって、保安官助手の講習、まだ受けてないのにね」
ヒナタは一歩前に出て、りぶたんの隣に並んだ。
もう通せんぼはされていないのだが、ヒナタは金庫の中に入ろうとはしなかった。
「へえ。ほんとにあったんだねえ、オーロラダイヤってさ」
「どこまで知っている？」
「なんでも聞いた話じゃさ――」

団丸は説明した。
オーロラダイヤは財務管理用のドゥードゥーだった。大きさは百ddのダイヤとほぼ同じだが、金額は桁違いで一個百万ddにもなる。世間にはまったく知られていない幻のドゥードゥーだ。
噂を聞きつけたところで、一般のリヴリーが呪文を使っても生み出すことはできない。そもそも、オーロラダイヤを生み出す呪文は「オーロラダイヤ」であって「ドゥードゥー」ではない。それに財務局の職員ですら、事務官には許されていない呪文なのだ。職員でオーロラダイヤを生み出す呪文を使えるのは、財務技官のみ。
特別な用途のドゥードゥーにふさわしく、オーロラダイヤは宝石としても異彩を放っている。色は透きとおったアズールブルー。と言いたいところだが、実は光の強さによって色が変わるという不思議な性質を持っている。強い光を浴びたときは透きとおった青でも、光が弱まってくると青い色は徐々に濃くなってゆく。
そして極め付きの現象が起こる。なんと、オーロラダイヤは発光するのだ。

ある程度まわりが暗くなると、オーロラダイヤは突然光り始める。暗闇に置いて観察すればよくわかるのだが、宝石の中に青白い光の玉が発生して、陽炎のようにユラユラとゆらめく。その光が宝石のカットにあわせて四方八方に照射され、なにもない空間がゆらめく青白い光でデコレーションされる。

まさに、オーロラダイヤと呼ぶにふさわしい宝石だった。

「でさ。額面百万のオーロラダイヤがブラックマーケットじゃ、いくらになるか知ってるかい？」

「む？　出回っているのか？」

りぶたんは思わず腕組みを解いた。

財務管理用のドゥードゥーが流出したなら、それだけで大事件だ。出物（でもの）が今回の強奪事件のブツなら、さっそく押収して関係者を取り調べる必要がある。

「そうじゃなくって、昔の話なんだけどさ。噂話に聞いただけでも、マニアって奴は欲しがるじゃん。それで、あたいがまだ自首する前にさ。オーロラダイヤを手に入れてくれっていうオファーが、闇のブローカーから舞い込んだのさ」

「怪盗団丸なら盗み出せると思ったのね。それでいくらくらいになるの？」
好奇心に駆られたヒナタの目が輝いている。
「一億で売れるとさ」
「すごい！　百倍じゃない！」
「えーっ！　じゃあ、盗まれた五億六千万ddは、闇でさばいたら五百六十億ddになるってこと？」
坊やのフレイムがとんでもない計算を持ち出した。算数はあっているが、考え方が間違っている。
「それはちがうんじゃない？　まるたんのは一個だけの値段でしょ？　一個なら希少価値があるから百倍で売れても、盗まれたオーロラダイヤは全部で、えっと、五百六十個もあるんだから、これだけ多いと値崩(ねくず)れするんじゃない？」
「あ、そっか」
フレイムはばつが悪そうにぽりぽりとほっぺたを掻いた。
「全部でそんなにあるんだ？　一袋に何個入るのさ？」
「三十五個よ」

ヒナタは帳簿を見ながら答えた。
「へえ。けっこう入るじゃんか」
団丸は上下に仕切られたラックの棚に手を置くと、ぽんぽんと軽く叩いた。
「五億六千万なんて半端な数だと思ってたけどさ。オーロラダイヤが三十五個入る袋が十六で、ちょうどその数字になるんだねえ」
「半端どころか、狙いすましたような数字だぞ」
りぶたんはまた腕を組んだ。
「奴らは一袋と三分の二を残していった。ブツをどこに運び出したのか知らんが、あと一往復するだけで、奪った金は六億に届くものを。惜しげもなく捨てていった。なぜだと思う？」
「タイムリミットだね？」
「そうだ。金よりも時間を優先したのだ。目の前にある五千万もの金を捨てて、奴らは午前六時に地ノ塔から出て行った。正確には五時五十八分だ。守衛は出退勤帳簿にそう記帳している」
「六時には撤収する予定で、金を捨ててまでそいつをきっちり守ったってわけじゃん。どう見たってプロ

の仕事じゃないのさ。ルビーローズたちにできるもんかねえ？」
　団丸は首をひねった。
「まだある」
「なにさ？　もったいぶらないでおくれよ」
「奪った袋は十六。残した袋は二。全部で十八の袋がここにはあった」
「じきに二十袋になるから、ラックが満杯になる前に、うまいタイミングで盗んでったってことかい？」
「うまいどころか、絶妙のタイミングだ」
　りぶたんは扉の内枠にもたれかかるのをやめた。腕は組んだまま、金庫の出入り口に仁王立ちとなって、話を続けた。
「ラックは余裕を持たせて満杯にしない規則になっている。十八袋が積み上がった時点で、まとめて全部廃棄処分される」
「金庫のドゥードゥーは最終的に処分されるのね」
　ヒナタは開いていた帳簿を閉じると、両腕で抱きしめるように抱え込んだ。
「たくさんのリヴリーたちが毎日いっぱいドゥードゥ

ーを出すんだもの。大事に取っておいてもしかたがないの」
「その話なら知ってるさ。ってことは、ここにあったドゥードゥーは十七袋と三分の二だったから、十八袋になって廃棄処分される直前の、一番おいしいタイミングで、犯人一味はかっさらっていったってことじゃん？」
「そういうことだ」
「……」
団丸が沈黙した。
「それだけ内部情報に通じてるのは、やっぱり……」
フレイムは最後まで言わずに、口を濁(にご)した。
「それはそうと、ひとつ教えて欲しいんだけどさ」
団丸は急に話題を変えた。
「犯人一味はなんでドゥードゥーをゲットしなかったのさ？」
素朴な疑問だった。
リヴリーはドゥードゥーに触れることで、宝石を形作っている粒子を霊子(れいし)にまで分解する能力を持っている。霊化(れいか)されたドゥードゥーは消えてなくなるように

見えるが、霊子としてリヴリーの魂魄（こんぱく）に取り込まれる。ドゥードゥーという呪文はこのプロセスを逆にして、体内で宝石を生成（せいせい）する技だ。

つまり、ドゥードゥーに触れてゲットしてしまえば、かさばる宝石を抱えて苦労して運び出す必要はないわけだ。もともと、ドゥードゥー強奪犯が手ぶらで出て行くのは当たり前ともいえる。

「まっ、あたいの知らない事情ってやつがあるんだろうけどさ」

にもかかわらず、ドゥードゥーのゲットはできないもの、運び出すしかないもの、としてこれまで扱われてきた。

保安官のりぶたん。副保安官のヒナタ。先任保安官助手のフレイム。三人には常識としてわかってはいても、新任保安官助手の団丸は知らない理由があるにちがいなかった。

「あら、ごめんなさい」

ヒナタははっとした感じで口に手を当てた。

「別に謝らなくてもいいさ。さっきの話だと、ほんとはあたい、講習受けなきゃいけないみたいじゃん」

「そうなの。保安官助手になったら講習を受ける義務があるのね。いろいろ知っておいて欲しいことがあるし。フーちんは前回受けたからもういいんだけど、まるたんは……」

どうしようと、ヒナタはすがるようなまなざしをりぶたんに向けた。

ヒナタは副保安官だ。りぶたんと対等の相棒ではあっても、公式には補佐職に就いている。相棒として、ヒナタが勝手に決めていいこともあれば、補佐として、勝手に決めるわけにはいかないこともある。

保安官助手を任命する権限はヒナタにはない。同様に、保安官助手に履修（りしゅう）が義務づけられている講習をどうするか、その裁量権（さいりょうけん）もヒナタにはない。すべてはりぶたんが決めることだ。

なぜなら、保安官として選挙で選ばれたのは、りぶたんなのだから。

「いまはのんびり教えている暇はない。すでに実地研修の形で講習は始まっているものと心得よ。場当たり的ではあるが、随時（ずいじ）習得していくように」

腕組みをして仁王立ちのどすこい娘が、しかと言い

渡した。
ふんぞり返っていばるような態度でも、ミミマキムクネには不思議と似合っていて、いやな感じはしなかった。
「ラジャー！」
団丸は敬礼をした。
どうやら自分なりにまじめに誠意を見せたつもりのようで、胸を張り、ショウジョウダルマのお腹まで無理に引き締めた。それはそれで、姿勢を正したものと理解はできるが、無理なものはやっぱり無理だった。
引き締めたばかりの団丸のお腹が、勢いもよくリバウンドした。戻ってきたお腹は、なんだかちょっぴり、前よりも太って見えた。
「くすくす」
ヒナタはこらえきれずに笑い声を漏らした。
「はいはい、ぼくぼく！」
金庫の奥に押し込まれたままのフレイムが勢いを盛り返した。
「ぼくは先輩だからね！　いろいろ教えてあげるよ！」

フレイムは後輩ができて、うれしくてたまらないようだ。裏の世界では経験も豊富なその後輩に、ついさっきオーロラダイヤの件で無視されたばかりだというのに、気後れする様子はまったくない。

「うむ」

りぶたんがフレイムの指導を許可した。

「やったぁ！　あのね、実はね――」

「そうなの！　実はねっ――」

先生役はヒナタのお気に入り。

トビネの坊やに役目を譲り渡す気はさらさらなかった。

ドゥードゥーを出したりゲットしたりは日常的によく行われるが、地ノ塔では公金を扱うから禁止せざるを得ない。そこで特殊呪文ゲット・ジャマーを塔内全体にかけてある。ジャマー系のこの技は、ドゥードゥーの霊化獲得能力を阻害する機能を持つ。そのため、地ノ塔ではドゥードゥーにさわっても自分のものとしてゲットすることはできない。

ちなみにゲット・ジャマーがかかっていても、ドゥードゥーの呪文は使えるし、ふつうにうんちをするこ

とも可能だ。これらはドゥードゥーが増えるのだから、厳しく対処する必要はない。もっとも就業規則で禁止されており、処罰の対象ではある。だから、地ノ塔にはトイレが設置されている。うんちを我慢できなくなったら、トイレで出して、財務局のトイレ番に預けることになっている。

さらにもうひとつ。

オーロラダイヤは財務管理用のドゥードゥーとして、その用途も限定されている。一時的に金庫で保管し、あとは廃棄処分と決まっている。リヴリーたちが霊化してゲットする必要はまったくないわけで、初めから抗霊化属性（こうれいかぞくせい）のドゥードゥーとなっている。

業務上の都合でオーロラダイヤを霊化獲得する必要が生じたならば、そのときにはやはりオーロラダイヤ専用の呪文が必要となる。

すなわち、財務技官のように呪文を使える立場でもない限り、オーロラダイヤは生み出すことも獲得することもできないという、きわめて特殊な宝石なのだ。

ゆえに、犯人一味も袋を背負って運び出すよりほかに手はない。

「――というわけなの」
邪魔をされないように一気に説明すると、ヒナタは満足そうに微笑んだ。
「……」
先輩面して後輩を指導するという、念願の役目を横取りされたフレイムは、ショックで口をパクパクさせた。
「じゃあさ。その財務技官とやらが犯人の一味なら、手ぶらで盗み出すからくりは一丁上がりじゃん。っていうかさ、財務技官がいないとオーロラダイヤは換金できないっしょ？　ブラックマーケットでちびちび売りさばいたんじゃさぁ、初めは高く売れたって、すぐに事情を見透かされて買い叩かれるだろうしさ。足もつくじゃんか。で、どうなのさ？　夜勤職員の中に技官はいなかったのかい？」
「オーロラダイヤを取り扱うほどのキャリア技官が、真夜中に眠いのをこらえて働いたりはしない。連中の勤務時間は九時から五時までだ」
りぶたんは皮肉を込めた。
「昼はえらいさんでも、夜は泥棒かもしれないじゃ

ん」
「肝心の呪文は財務局長が握っているからな。キャリア技官といえども、逐一(ちくいち)お伺(うかが)いを立てて呪文を授かって、初めて使うことができるのだそうだ。そして呪文を使える時間は一時間にも満たないという。犯人一味が財務技官を仲間に取り込んだところで、役には立たん」
「？」
　団丸は不思議そうな顔をした。
「あのね、オーロラダイヤの呪文は特別なの」
　帳簿を抱きかかえたまま、ヒナタが説明した。
「局長さんが腕章に呪文を吹き込んでね、その腕章を授かった技官さんがオーロラダイヤを取り扱うんだけど、でも、腕章に吹き込まれた呪文はじきに消えちゃうのね」
「へえ、そんな形の呪文もあるんだ。ＬＩＳＤのバッジやワッペンをつけてると、プロテクションゾーンもフリーパスっていうのと、似たようなもんかねえ？」
　団丸は右手の親指を立てると、左胸に貼り付けたワッペンを指さした。

「うーん。似てないけど、似てる……かな？」
ヒナタは苦しそうに愛想笑いを返した。
「だったらさぁ、その局長が一番怪しいじゃんか」
「えーっ！　ジュリエットだよ？　財務局長は！　管理リヴの！」
フレイムが大きな声を出した。
「ルビーローズが怪しいんなら、ジュリエットだって怪しいっしょ？　どっちもおんなじ管理リヴなんだからさ」
団丸の発言に、なにやら気まずい空気が流れた。
「なんだい？　ちがうのかい？」
「……微妙に、ちがうみたいなのよね。管理リヴ委員会はトップの組織だから、わたしたちＬＩＳＤにはよくわからないんだけど……」
「ミューミュー派とルビーローズ派に分かれてるって、ぼく、聞いたことあるよ」
フレイムにもようやく、うんちくをたれる機会が巡ってきた。
「情報源はちょっと明かせないけど、ミューミュー、ジュリエット、プーケ、ダークヤグラの守旧派（しゅきゅうは）と、ル

ビーローズ、マハラ、チャパティの改新派（かいしんは）が二大派閥なんだって。あとの管理リヴはどっちつかずで中立を保っているらしいよ」
「なにさ、それ。派閥争いじゃん。管理リヴも人の子なんだねえ」
「……争いにはなってないみたいだけど」
ヒナタがぽつりとつぶやいた。
「ミューミュー派が圧倒的に支配的なのだそうだ」
りぶたんにはおもしろくない話題と見えて、不快感を隠そうとはしなかった。
「ルビーローズは食糧局の局長だ。チャパティはそこの副局長。マハラにしても、アイテム類を担当する経済産業局の局長という立派な肩書きを持っている。だが、三人とも自分のショップに入りびたりで、実務は事務次官に丸投げしている。……要職を担うほどの気概を持ち合わせていないのか。それとも、やりたくてもやれない理由があるのか」
「三人とも、局長さんの肩書きは名前だけっていう噂よね。名誉職じゃないのにね」
聞かれて困るような相手はいないのに、ヒナタは声

を潜めて続けた。
「食糧局も経済産業局も、財務局長のジュリエットさんが裏で取り仕切っているそうよ」
「ふーん。まっ、えらいさんだろうとなんだろうとジュリエットが犯人ならさ、手ぶらで盗み出すからくりは一丁上がりじゃん」
「それがちがうのよね」
　ヒナタは首を振って否定した。
「ジュリエットさんはわざわざ強奪しなくても、オーロラダイヤを廃棄するときに処分したふりをして、着服すればいいのよね。なんてったって財務局長なんだもの。職権濫用（らんよう）すれば、危ない橋を渡る必要なんかないんだから」
「そういやそうだわね」
　言われて団丸も納得した。
「わかった！　敵対派閥のルビーローズ派をつぶすために罪を着せたんだ！」
　フレイムが元気よく発言した。
「ジュリエットさんの派閥のほうが段違いに強いらしいから、そこまで追い込まれてないと思うのね」

「じゃあ、ルビーローズ派が、強くてかなわない敵対派閥をつぶすために――あ、無理があるや」
フレイムは途中で自分の意見を放棄した。
「そうね、無理があるよね」
ヒナタはこくりとうなずいた。
「ルビーローズさんがジュリエットさんの足を引っ張ろうとして事件を起こしたのだとしても、なにも自分を犯人に仕立てて、わざわざ疑われる必要はないものね」
「うーん、むずかしいや。怪しいのは結局全部、管理リヴかぁ」
フレイムはベレー帽を脱ぐと、顔の前でうちわのようにぱたぱたと煽(あお)った。
「そうとも言いきれん」
りぶたんは腕組みをほどくと、もう用はないとばかりに金庫に背を向けた。
「なにも犯人は管理リヴだと決まったわけではない。職員という線も捨てきれないし、職員ですらないのかもな」
隣のケージ室に向かってりぶたんは歩きだした。

「いまから探す？」
ヒナタはあわてて帳簿を書庫に戻しに行きながら、歩み去ってゆく相棒に聞いた。
「うん」
「大仕事よね」
帳簿を戻したヒナタは小走りで相棒を追いかけた。
「でも、ほんとにあるかな？」
「探せばわかるよ、ヒナたん」
「そだね」
ふたりの声が遠のいてゆく。
「……」
「……」
金庫の中に取り残された団丸とフレイムは、顔を見合わせた。
声もかけずに出て行ったふたりは、これからなにかを探すのだという。いよいよ本格的にＬＩＳＤの捜査が始まるようだ。
「ちょっと待ってってばさ！　あたいらを置いてかないでよ！」
「そうだよ！　ぼくたち、保安官助手なんだぞ！」

太めのショウジョウダルマと、細めのトビネ。
でこぼこコンビのふたりは大あわてで金庫から飛び出すと、りぶたんとヒナタの跡を追った。

3

捜索が始まった。
隠し扉はないか。抜け穴はないか。どこかにトリックの痕跡（こんせき）が残されてはいないか。デスクを動かしては床を調べ、キャビネットをずらしては壁を調べる作業が始まった。脚立（きゃたつ）に乗って天井も調べて回る。
もちろん、隠し扉や抜け穴があると決まったわけではない。しかし、犯人一味が手ぶらで出て行ったという守衛の証言を信じるなら、どこかにからくりがあるはずだ。
だから、捜索する。
調べて空振りに終わってもなにも困りはしない。隠し扉も抜け穴もないとなれば、次のステップに移るだけだ。
守衛がうそをついているのかもしれない。やはり、

犯人の仲間なのかもしれない。そうではないとしても、席を外したり、居眠りをしている間に、ルビーローズ一味が奪ったドゥードゥーを堂々と通用門から運び出したかもしれない。守衛の腕章にスリープ・ジャマーがかけられているからといって、本人の自然な居眠りまでは防止できない。

怪しいのは守衛だけではない。夜勤職員たちの嫌疑(けんぎ)が晴れたわけではない。財務技官だって容疑者だ。なんらかの方法で授かった呪文の効力を伸ばし、呪文が切れたはずの頃合いに何食わぬ顔でオーロラダイヤをゲットしたということもありうる。財務局長のジュリエットが犯人という線だって考えられなくはない。

ルビーローズ一味。守衛に夜勤職員。財務技官に財務局長。そして、いまだ捜査線上に浮かんではいない者ども。

ドゥードゥー強奪犯が何者であるにせよ、いまLSDにできることは、可能性をひとつひとつ消してゆくことだけ。

だから、捜索する。隠し扉や抜け穴を調べる。犯人一味を最後に目撃した守衛の証言から、洗ってゆくの

だ。
「下の階はほんとに調べなくてもいいんだね？」
脚立の上でフレイムが念を押した。
捜索は地下二階からのスタートだった。
「下には金庫しかないからな」
「それに一番最初に調べてあるもの」
りぶたんとヒナタが答えた。
「でも、なにを探せばいいんだろう？　なにか、なんて曖昧な指示だと、探しにくいよ」
「そんなことじゃ保安官助手は務まらないぞ」
ヒナタはやさしく諭(さと)した。
捜索は、バラバラに手分けするのではなく、全員がひと固まりになって行われた。
古参のヒナタと新参の団丸がコンビを組んでいる。ふたりで力を合わせて、オフィスを埋めているデスクを動かす。壁を覆い隠しているキャビネットも動かす。障害物を移動させては床や壁を丹念に調べる。
フレイムは脚立に乗って天井を調べている。身軽なトビネにうってつけの役目だ。楽な作業だと初めは喜んだフレイムだったが、すぐに無駄口が多くなった。

重い物を動かさないから気楽な作業に思えるが、顔を上げてずっと天井を見ているのはきついし、手を上げっぱなしだと腕が疲れて苦痛だ。しかも、気を抜けばバランスを崩(くず)して脚立から落っこちそうになって危ない。

りぶたんは目を光らせている。

別にさぼっているわけではない。その証拠に、仲間たちも文句は言わない。

地ノ塔は、重要拠点として地下に隠すように建築されている。塔内にはリヴリーアイランドの管理機関が集中している。

最上級機関の管理リヴ委員会がある。ドゥードゥーを管轄する財務局もある。アイランド全土を担当する国土交通局に、アイテム類を任されている経済産業局。バイオレコードは厚生労働局が、フードは食糧局がみている。ほかにも、呪文を開発する部門もあれば、モンスターの脅威からリヴリーアイランドを守る部門だってある。

これら多くの機関が機密を取り扱っているから、捜索も慎重になる。手違いがあってはならない。

りぶたんはなにもしないのではなくて、保安官として、捜索作業を監督するという重責を果たしているのだった。

「ねえねえ、この換気口は？　空気を入れ換えるために外につながってるんだから、けっこう怪しくない？」

天井を調べるうちに換気口に行き着いたフレイムは、また手を止めるともっともらしい無駄口を叩いて小休止した。

地ノ塔には窓がない。窓があっても換気はできない。土砂や地下水が流れ込んでくるだけだ。そのため、空気がよどむことのないようにと、換気扇を回して強制的に空気を入れ換えている。排気口から汚れた空気を吐き出し、吸気口から新鮮な空気を取り込んでいる。外部につながる穴はあるわけだ。

「それは気にしなくていい」

「換気扇を止めて、おおもとを調べてあるもの」

りぶたんもヒナタもちらりと見ただけで、換気口にはまったく興味を示さなかった。

「そっか。換気扇、止めたって言ってたもんね」

小休止の理由もあっさりと退けられ、フレイムはしかたなく天井を調べる作業に戻った。
結局、地下二階には隠し扉も抜け穴もなかった。怪しく思えるようなものは、なにも見つからなかった。動かしたデスクやキャビネットはそのまま放置して、LISDの一団は上の階に移動した。
「またおんなじことするのかぁ」
フレイムはぼやいた。
「これこれ。お仕事なんて、そんなものよ」
ヒナタがなだめる。
「毎日おんなじことの繰り返しなんだから。昨日はお花屋さんで、今日はお医者さんだったりしたら、いつまでたっても一人前にはなれないぞ」
「でも、ぼく。昨日は絵本ジャーナリストで、今日は保安官助手なんだけど」
フレイムがつぶやいた。
「あらまあ」
ヒナタは自分の失言に気づいた。
「だから、いつまでたっても坊やなのさ」
団丸がからかった。

りぶたんとヒナタがどっと笑った。
「なんだよ、もう！　ぽっちゃり三人娘でなかよくしちゃってさ！」
むくれたフレイムが、レディに言ってはならないことを口にした。やはり、坊やのようだ。
「なんですってぇーっ！」
真っ先に声を荒げたのはヒナタだった。
「わたしはぽっちゃりじゃないから！　グラマーなだけだから！　ぽっちゃりっていうのは、こういうのっ！」
ピキがミミマキムクネのお腹をビシッと指さした。
「ちがっ！」
りぶたんも大声を出した。
「あたしはぽっちゃりじゃないから！　グラマーなだけだから！　ぽっちゃりっていうのは、こういうのだっ！」
ミミマキムクネがショウジョウダルマのお腹をビシッと指さした。
「ちがっ！」
あわてた団丸はきょろきょろとあたりを見回したが、

ぽっちゃり三人娘の三番手とあって、もう押しつける相手はいなかった。
「あたいはぽっちゃりじゃないから！　スイマーなだけだから！　ほんとはほら、逆三角形の体なのさっ！」
そう叫ぶと、団丸は胸を張ってお腹をむりやり引き締めた。ショウジョウダルマの丸っこい体が水泳選手のように、見事な逆三角形となった。けれども、無理なものはやっぱり無理だった。それにお腹を引き締めたところで、すぐに元に戻るのは金庫の中で実証済みだ。
「くくっ……」
限界を迎えた団丸はうめき声を漏らすと、力を抜いた。むりやり引き締められたお腹が一気にリバウンドした。せっかくの逆三角形も、大きく崩(くず)れてただの三角形になった。頭を頂点にして、底辺のヒップラインは一直線だ。
ショウジョウダルマがおむすびになった。
それを見たりぶたんたちが爆笑した。
前よりも体型が崩(くず)れてしまった団丸は大あわてで、

お肉を寄せて上げて、元の丸っこい体に整えた。
仲間たちの笑いが加速した。
りぶたんは思わず、相棒の背中を叩いた。
叩かれたヒナタは、膝の力が抜けてその場にしゃがみ込んだ。笑い転げる寸前でなんとか踏みとどまっている。
フレイムは片方の手で腹を抱え、もう片方で自分の膝を叩いた。
笑いの渦に引きずり込まれた団丸も、自分のことなのに笑わずにはいられなかった。
腹の底から込み上げて、体の外にまで突き抜けてゆく笑い声が、たまった疲れを吹き飛ばした。
「さて。仕事に戻るぞ」
一段落したところで、保安官がうながした。
「うん」
ヒナタは笑いすぎてにじんだ涙を指先で拭(ぬぐ)いながら、立ち上がった。
思わぬ形でリフレッシュしたもにょもにょ団は捜索を再開した。
地下一階でも、なにも発見できない状態が続いたが、

とある小部屋に入った瞬間。全員が違和感を覚えた。フロアの隅っこに追いやられたような、小さな部屋だった。
「冷たいな」
りぶたんは足を止めた。
部屋の空気がはっきりと冷たい。肌で感じるほどのちがいがある。
「ほんとだ。なんで、この部屋だけ空気が冷たいんだろう」
部屋の中を見回したフレイムは団丸と視線があった。
「通用門に立ったときにさぁ」
団丸が口を開いた。
「螺旋階段の入り口からさ、冷たい空気が湧き水みたいにわいてたじゃん。湧き水はどっかから水が流れてくるわけだよねえ。じゃあさ。通用門の冷たい空気はどこから流れてきたのさ？」
「……ということは」
フレイムは団丸からりぶたんへと視線を移した。
りぶたんは、うんとうなずいてから号令した。
「かかれ！」

「さあ、みんな！　ここがゴールよ！　がんばろう！」
ヒナタは両手を叩いて仲間を鼓舞(こぶ)すると、真っ先にキャビネットに歩み寄った。部屋に入ってすぐ左にあるキャビネットだった。
フレイムは少し離れた場所で脚立を開いた。
団丸はヒナタに従った。
キャビネットにはペンや帳簿などの事務用品が陳列されていた。どれも新品のようだ。部屋全体に、なんだか文具店のような趣(おもむき)がある。
「この部屋なにさ？　購買部？」
キャビネットに手をかけながら、団丸はりぶたんに質問した。
「総務局の用度(ようど)室だ」
「ヨード？」
団丸は聞き返した。
「購買部みたいなものだが、品物を売っているわけではない。ここにそろえてある事務用品や消耗品は無料で配られるのだ」
「だからって、好きなだけもらえるわけじゃないの

よ」
ヒナタが補足した。
「局ごとに予算が割り振られていて、予算内でしか渡してもらえないの」
「予算だって。お役所らしいや」
脚立に上りながらフレイムが茶化した。
「ふーん」
自分から質問しておきながら、もう関心をなくしたのか、団丸は気の抜けた返事をした。
「それに購買部だったら、みんながいつも利用するでしょ？　フロアの奥まったところにあったら不便よ。……用意はいい？　せーのっ」
ヒナタの掛け声にあわせて、キャビネットがわずかに浮いた。と同時に、壁から少しだけ離れた。
「あっ、風」
ずらしたキャビネットの裏から冷たい風が吹いてきた。耳を覆う長い毛が生えているおかげで、ピキは空気の流れを敏感にキャッチできる。
「なんかでっかい穴があいてるじゃん」
壁にぺたりと頬を寄せた団丸は、キャビネットの裏

側をのぞき込んだ。
「ほんと？　じゃ、これ。ずっとあっちまで動かすからね。フーちんも手伝って」
「ラジャー」
副保安官の指示を受けたフレイムは、脚立から降りると力仕事に加勢した。
りぶたんは部下たちの作業を見守った。
事務用品を陳列したキャビネットがゆっくりと壁から離れてゆく。電灯の明かりが届く。確かに大穴があいている。壁のレンガが何個も抜き取られて、菱形の穴となっている。幅も高さも、犯人の一味と目されているマハラの大きな体がくぐり抜けるには充分なサイズだ。
りぶたんは穴の前に立った。しゃがんでのぞき込んだ。穴の奥までは電灯の明かりも届かないのでよく見えないが、確かに風が吹き出してくる。ミミマキムクネの長い耳の毛が、風に吹かれてかすかに揺れている。
「どう？」
キャビネットを邪魔にならないところまで移動させたヒナタは、りぶたんの背後に立った。腰をかがめて、

しゃがんだままの相棒に頭の上から声をかけた。
「うん」
りぶたんは生返事で振り返ると、体を大きく傾けて背後のヒナタをよけ、用度室の入り口に目を移した。そのまま、視線をドアの上へと走らせる。
ドアの上には通気孔が設けられていた。換気口ではなくて通気孔だ。小さな穴がいくつもあいたパネルが、ドア枠の上部にはめられている。用度室の空気を、廊下の空気と入れ換える仕組みになっている。
「？」
ヒナタはりぶたんの視線を追った。
フレイムと団丸も通気孔を見た。
「そうか、自然対流だったか」
りぶたんはつぶやいた。
「なになに？」
ヒナタが説明をうながす。
「電灯で暖められた空気が上に昇って通用門から抜けてゆく。減った空気を埋めようと、地底の冷たい空気が穴から吸い込まれて入ってくる。自然対流だな」
りぶたんは右手で天を指し、それから同じ手で壁の

穴を指した。
「だからこの部屋の空気は冷たくて、通用門にも冷たい空気が湧いていたのね」
ヒナタは小さくうなずいた。
「え？　上に昇るのは暖かい空気なんじゃ？　通用門の空気は冷たかったけど？」
フレイムが聞いた。
「感じ方のちがいよ。外から見たら冷たい空気でも、中から見たら暖かい空気なのね」
「あ、なるほど」
「用度室は小部屋だからな。換気口ではなく、通気孔になっている。ドアを閉じていても空気は流れるわけだ。しかし、換気扇を止めずに強制対流のままにしていたら、穴の発見は少しは遅れたかもしれんな」
「それはないと思う。こんなに大きな穴なのに」
ヒナタが笑いながら首を振った。
「じゃ、中を見よっか」
ヒナタはハンドライトをつけた。
薄ぼんやりとした明かりがヒナタの両手に灯る。限定技の結束の光によく似た感じの明かりだったが、ゆ

らめいて目障りに感じることはなかった。それに、両手の光がつながることもなかった。
「なにそれ？」
団丸が驚いてヒナタのそばに寄った。
「これ？　ハンドライトっていうの」
「そんな技があるんだ？」
「うん。あのね、地ノ塔は地下にあるでしょ？　いまは電灯で明るいけど、停電したら真っ暗になるじゃない？　それで緊急時に手元が明るくなるようにって、この技が用意されたの。非常灯ってわけね」
「あたいもそれ、使える？」
「もちろんよ。まるたんは保安官助手なんだもの。呪文はそのままハンドライトね」
「……」
団丸は教わったばかりの呪文を念じた。
手のひらが明かりに包まれた。団丸は手のひらを何度も返して、両手に灯る光を物珍しそうに眺めた。
「先に見るぞ」
りぶたんは雑談には加わらずに、ハンドライトをつけた手を壁の穴の中へと差し入れた。左手を床につい

て体を支え、頭を穴の中に突っ込む。
「犯人の痕跡があるな」
穴の中を見回したりぶたんは、ハンドライトの明かりを頼りに現場検証を始めた。
「床につもったほこりに足跡が残っている。何度も出入りしたな。たくさんの足跡だ。壁には、ほこりを拭(ぬぐ)ったような跡が見える。犯人が担いだ麻袋でこすったのだろう。壁のほこりが拭い取られて、線を引いたようになっている。高さのちがう二本の線だ。つまり、身長の異なるふたりの犯人が、麻袋を担いでここを通った」
「マハラとチャパティだね！」
フレイムが少し興奮している。
「ダミーマハラとダミーチャパティかも」
ヒナタが反論する。
「強奪したブツをここから運び出したということは、夜勤職員をわざわざ全員監禁した理由も察しがつくな。いくら人気(ひとけ)のない未明とはいえ、金庫からここまでを八往復もすれば、誰かに見られるだろう。だったらいっそ全員を監禁してしまえ、というわけだ」

「それなら、ダミーローズ犯人説も成り立つよね」
ヒナタはうれしそうだ。
犯人一味は大胆にも、地ノ塔で夜間勤務中の全職員を監禁するという暴挙に出ている。金庫室に誘い出すなどの手間と暇をかけ、怪しまれて抵抗される危険を冒してまで、あえて全員を監禁したのはなぜか。LSDではその真意を測りかねていた。ダミーローズ犯人説ではリスクを負う説明がつかない。そこで、職員をかばおうとしたと、ルビーローズ犯人説に傾いていた。
しかし、地下一階の用度室に抜け穴が見つかったことで、ようやく理由がわかった。地下三階の金庫室から麻袋を背負って運ぶのに、誰にも見つからないよう祈ってすませるわけにはいかないからだ。
「これ以上はハンドライトでは無理だな。暗すぎる」
「どれどれ」
ヒナタはりぶたんの隣にしゃがんで床に両手をついた。そして、わざと体を相棒にぶつけて自分のスペースを作り出すと、隙間から穴の中をのぞいた。
「ほんとだ。暗いね」

ヒナタはすぐに立ち上がると手を払った。
「ちょっと、わたし。営繕まで行ってくる」
「ん」
穴から頭を抜いたりぶたんは、制帽を脱いで汚れがついていないかどうか確認した。
「営繕って、オーロラライト？」
フレイムがヒナタに聞いた。
「うん。借りてくる」
「ぼくも手伝う」
ふたりは連れだって、用度室から出て行った。
「あのさぁ。ちょっと聞いてもいいかなぁ？」
ヒナタとフレイムを無言で見送った団丸が遠慮がちに聞いてきた。
「うむ」
りぶたんは穴のそばに座り込むと、両足を投げ出して壁にもたれかかった。どうやら休憩するつもりのようだ。
「ってかさ。まとめていくつも聞きたいんだけどさぁ」
「かまわんぞ。おまえは研修中なのだからな。遠慮は

いらん」
保安官助手になりたての団丸はいま、実地で研修を受けている。なにも知らないのだから、聞きたいことが山ほどあるのは当然だった。
「オーロラライトってなにさ？」
自分だけ立っているのも変なので、団丸もその場に座り込んであぐらをかいた。
「工業用のオーロラダイヤを加工して作った照明器具だ」
「工業用？」
「そうだ。財務管理用のオーロラダイヤを廃棄処分する過程で、ドゥードゥーとしての価値をゼロにしたものだ。そのままでは幻想的な光で、照明として実務には不向きだからな。加工して調光器を取り付けてある。石を板状にカットしてカンテラ風の容器に入れたり、棒状に削りだして懐中電灯風の容器に詰めたりして使うのだ」
「へえ」
「カンテラも懐中電灯もどちらもオーロラライトだが、区別するためにカンテラのほうはオーロランプと呼

んだりもする。実際、板状に加工されたオーロラダイヤの中で、青白い炎が燃えているように見えるからな」
「そっちのほうが非常灯に便利じゃん。ハンドライトよりもさ」
「うむ。それで、オーロラライトを非常灯として設置する工事が決まっていて、いま営繕が工程表を作っているところだ」
「エーゼンって？」
「国土交通局の営繕室だ。わかりやすくいうと、修繕屋だな」
「ふーん。あとさぁ、さっきから気になってたんだけどさ。レンガの中に草が生えてるじゃん？　なにこれ？」
　あぐらをかいていた団丸は四つんばいになって、壁の穴ににじり寄った。
「っていうかさ。このレンガ、枠だけじゃん？　すぐに割れるんじゃないの？　なんか、もろそう」
　壁のレンガは菱形の穴から断面をのぞかせている。中が空っぽの構造が丸見えとなっている。

ちょうど、消しゴムの紙ケースを立てたような感じだ。消しゴムのケースは正面と裏面、それに側面が紙でできているが、消しゴム本体を出し入れする上面と底面にはなにもない。内部はがらんどうだ。壁のレンガも似たような作りになっている。

もっとも、紙のように薄くはなくてしっかり厚みもあるし、強度も申し分のない素材でできている。

「それはＤＬＣ（ディーエルシー）－ＣＦＣ（シーエフシー）－Ｍ（エム）レンガだ。簡単に割れたりはしないぞ」

「なにそれ？」

「ダイヤモンドライクコーティング・カーボンファイバーコンポジット・モノコックレンガ」

なにやら小難しそうな横文字を、りぶたんは早口で並べ立てた。ただ、本人も意味まではよくわかっていないのか、棒読みだった。

「……レンガでいいじゃん」

「……そうだな」

場の空気がちょっぴり陰った。

「で、なんで草が生えてるのさ？」

気を取り直して、団丸は質問を続けた。

「レンガの中じゃん？　壁の中じゃん？」

枠だけのレンガの中に、植物が生い茂っているのは実に奇妙な光景だった。レンガの枠の中ということは、壁の中に生えていることになる。

そもそも壁の中は穴だらけだ。消しゴムの紙ケースに例えるなら、ふたつのケースを立てて並べて、その真ん中に別のケースを立てるという積み方になっている。上の段と下の段はそろわずに、互い違いになるわけだ。

この積み方だと、レンガの穴は上から下まで一直線につながるだけでなく、斜めにもつながる。そればかりか、水平方向にも波打つ曲線でつながってしまう。つまり、壁を構築しているすべてのレンガが穴でつながることになる。

その穴に謎の植物が生えている。壁の中で繁茂（はんも）している。

壁の穴は菱形だ。頂点から末広がりで、肩幅ほど開いてからは尻すぼまりになっている。菱形の底に向かうレンガは階段状で、断面がのぞいている。レンガは空洞になっており、そこに黒い植物が生えている。

のぞけば、曲がりくねった茎(くき)が何本もレンガの内側に張りついているのが見える。上のレンガへと伸びていたのだろうか、切断された茎が真新しい切り口を見せている。空洞の中には黒い葉っぱも茂っている。

「さわってみろ」

「……」

団丸は黒い植物にさわってみた。

茎も葉も、植物にしては異様に硬かった。

「鉄のツタだ」

手を伸ばしてりぶたんも黒い植物に触れた。

「耐震性(たいしんせい)と耐荷重性(たいかじゅうせい)を向上させるために、穴のあいたレンガの中に鉄のツタを這(は)わせてある。ツタだからレンガに張りつく。鉄だから簡単には折れない。複数の茎が曲がりくねって生えているから、曲げる力にも強い。鉄のツタは、鉄筋よりも優れた建材なのだ」

「これがそうなんだ。地下牢獄にも使われてるやつっしょ？」

「そうだ。あそこはここよりもっと深いからな」

「でも、こんな硬いもの、どうやって切ったのさ？」

鉄のツタは、ところどころですっぱりと切断されて

いる。
「専用の剪定バサミがある。それを使えば切るのは造作ない」
鉄のツタをさわっていた団丸は、壁の穴のさらに奥へと手を伸ばした。
壁のすぐ向こうにもうひとつ、壁がある。二重になっている。
「手前が内壁で、奥のは外壁だ」
外壁も内壁同様に、菱形に穴があいている。
「これはなにさ？　綿？」
団丸は綿のような白いものを引っ張りだした。外壁と内壁の間にたくさん詰められている。
「ロックウールだ」
りぶたんは壁に伸ばしていた手を引っ込めた。腕を組み、目をつぶり、うつむく。壁にもたれて両足は投げ出したまま、仮眠でもするかのような姿勢だ。しかしロだけは休まずに、新人を指導し続けた。
「岩を溶かして作った綿だ。ザラメを溶かしてふわふわの綿菓子を作るだろう。あんな感じだな。元は岩だから燃えないし、水にも強い。長持ちもするから、ロ

ックウールは断熱材にうってつけなのだ。ふわふわの綿が空気を包み込むからな」
「なんかそれ、聞いたことある。じゃあさ、こっちのゴムみたいなのはコーキングだね？　地下水の水漏れ防止っしょ？」
　内壁の外側に塗りたくられている半透明の物質を、団丸は指差した。同じものは外壁の両側にも塗られている。
「おしいな。それは水密シールドだ」
　目を閉じたまま見もせずに、りぶたんは回答した。
「水密……」
「ここは地の底だ。地上なら水漏れ防止はコーキングで間に合うだろう。流れ落ちる水が染み込まなければそれでいいのだからな。しかし、地下ではそうはいかない。水は溜まって地下水となる。水位が上昇すれば、地の底はそのまま水の底と化す。水圧は半端じゃないぞ」
「そんなにすごいんだ？」
「ゴムホースをくわえて風呂の底に横になってみろ。ホースで息ができるはずなのに、空気は吸えない。た

かが風呂の深さでも、水が重くて胸が圧迫されるのだ」
「へえ。でもさ、水入ってこないじゃん？　空気が流れ込んでくるってことは、この穴は抜け穴なんじゃん？　どっかに通じてるわけっしょ？　じゃあさ、なんで地下水は穴から入ってこないのさ？」
「なかなかいい質問だな」
目を閉じ、うつむいて休憩しているりぶたんが、ロだけでにやりと笑った。なんだかうれしそうだ。
「このあたりは透水層（とうすいそう）だ。帯水層（たいすいそう）までは余裕がある。壁に穴があいても、被害はおしめり程度だ。そうは言っても、大雨などで地下水位が上昇することはありうる。だから、三重の防壁に五重の水密シールドで防護しているのだ」
「三重に、五重？」
団丸は指をさして数えた。壁は内壁に外壁で二重。水密シールドは内壁の外側と、外壁の両側で三重。ということは――。
「まだひとつ、壁があるんだ？」
外壁のさらに外側にも壁があれば、計算はあう。

「そのとおり。地ノ塔を取り囲むように、外周を防護壁で覆っている。壁は、内壁、外壁、防護壁の三段構えだ」
「穴の奥に見える壁はちがうっしょ？」
団丸はハンドライトをつけた手を、穴の奥へとさらに伸ばした。
外壁の向こうにも壁が見える。
「あれは隣の部屋の壁だよねえ。左の壁は廊下だし。防護壁は右のほうにあるんだろうけど、暗くて見えないんだ？」
穴の中に頭を入れて、団丸は左右を見回した。
「そうだな。それであっている」
「ひとつの壁でふたつの部屋を仕切るんじゃなくてさ、わざわざ部屋ごとに壁を設けてあるんだ？」
「壁も柱も、多いほうがいいからな」
「さっき言ってた、耐震性と耐荷重性とかってやつ？」
「うむ」
「耐震性はわかるんだけどさぁ、耐荷重性ってどういうことさ？　地ノ塔が重いってこと？」

「塔も重いが、重しも重い」
りぶたんは休憩をやめて、立ち上がった。
「遅いな、ふたりとも」
「重し？」
団丸も立った。
「通用門から続く螺旋階段は、妙に長かっただろう？」
顔だけを団丸に向けてそう言うと、りぶたんはドアへと向かった。
「それはあたいも思ったけど……」
「あの空間に重しがあるのだ。地ノ塔が浮いたりしないようにな」
「浮くって、地ノ塔が？」
団丸は驚いた。地下にある建物が浮くなどとは考えたこともなかった。
「鉄の固まりも、薄く延ばして箱にすれば、水に浮く。浮力というのはバカにできないものだ」
「水って、地下水？」
「そうだ。地下水が上昇すれば、浮力が発生する。地ノ塔が浮いてしまっては困るから、重しを乗せてある

し、グランドアンカーも打ち込んである。この塔は、ただの鉄筋レンガ造りではないのだぞ。モルタルだって、ハイドロ・ポリマーモルタルを使っているくらいだからな」

そこまで説明して、りぶたんは用度室のドアを開けた。

ドアを開けると、ちょうどヒナタが駆け戻ってきたところだった。

「りぶたん！　たいへん！　オーロラライトがないの！」

ヒナタが叫んだ。

「全部盗まれてるっ！」

大きな声で報告するヒナタの息が荒かった。

第四章　アウターゾーン

ー

みんなでフレイムを待った。

オーロラライトの盗難を知った副保安官のヒナタが機転をきかせて、保安官助手のフレイムを事務所まで走らせている。夜間の出動に備えて保安官事務所にも支給されているオーロラライトを取りに行かせたのだ。

過去になにかと問題のあったＬＩＳＤは、重要拠点である地ノ塔に事務所を開設することが許されていない。そのため、ＧＬＬ城内のプロテクションゾーンに事務所を構えていた。

ＧＬＬ城で最も往来の激しい玄関ホールの、真下。かつて「ＧＬＬ城Ｂ１（ビーワン）地下倉庫」と呼ばれた場所。

そこに、ＬＩＳＤの事務所はあった。

「おまたせー」

ぼろぼろのワークバッグを抱えて、フレイムが戻ってきた。

バッグの中にカンテラが見える。人数分のオーロラライトをずだ袋に入れて運んできたのだとわかる。それにしても、油汚れなどが染みついた小汚いバッグだ。

「……」

なにさ、それ。きったないバッグだねえ。もう捨てちゃえばいいじゃん――いかにもそう言いたげな顔で、団丸は口を開いた。だが、汚いバッグでもまるで気にしない仲間たちの姿を見て、団丸はキッと口を結ぶと言葉にはしなかった。

いまのＬＩＳＤが貧乏なのは、周知の事実だ。

もともとＬＩＳＤには諸経費を賄(まかな)うために徴税権(ちょうぜいけん)が付与されている。必要な資金は税として取り立てることで確保する。ところが、先代の保安官が制度を悪用して苛酷(かこく)に取り立てて、私腹を肥やすという事件を起こした。先代だけでなく、同様の事件は過去に何度となく繰り返されている。

そこで、りぶたんは保安官に立候補したときに、徴税権の返上を公約に掲げた。選挙参謀を務めたヒナタの提言を全面的に採用し、税金を取り立てないことで汚職をなくそうと、「徴税返上・涜職(とくしょく)根絶」のスロー

ガンを打ち出した。
先代の保安官を罷免に追い込んだリコール運動はヒナタが主導していたこともあって、そのヒナタが推すりぶたんは、圧倒的な支持を得て保安官に選ばれた。選挙前から、どすこい娘の異名を賜って人気があったことも有利に働いた。
りぶたんは親友として、リコール運動のリーダーであるヒナタのボディガードをしていた。演説中のヒナタを襲撃しようとした暴漢をぶちかまし一発で沈めて、その場に居合わせながらなにもしなかった保安官を一喝し、壇上から拳を突きつけた。
悪徳保安官への宣戦布告ともいえる、このときの出来事が多くの人々に賞賛されて、「どすこい娘」が誕生したのだった。
徴税権を返上したために保安官事務所の開設資金にも事欠いたりぶたんとヒナタは、管理リヴ委員会に掛けあって「GLL城B−地下倉庫」の専有許可を得た。しかもそれは、ゴミ扱いされていた倉庫内の什器備品もまるごと全部、もらい下げるというものだった。
ほこりをかぶった古い机も、磨けば光る。脚の折れ

た椅子だって、接げば定まる。倉庫のゴミも、資金難のりぶたんたちには宝の山だった。
　そんなふたりの清貧活動をフレイムが報道している。字を読むのが苦手なリヴリーたちのために、絵本でわかりやすく伝えている。
　油汚れが染みついていてどれほど汚くても、ぼろぼろのワークバッグは、汚職とも腐敗とも決別して生まれ変わった新しいＬＩＳＤの象徴なのだ。
　それを捨てろだなどと、とても言えない。
　だから団丸は口を固く結んだのだった。
「ご苦労」
　りぶたんは短い言葉でフレイムをねぎらって、ワークバッグを受け取った。
　仲間たちを手招きして近寄らせると、一番上のカンテラをフレイムに渡し、次のカンテラを団丸に渡した。そして、バッグの底から拾い上げた二本の懐中電灯はヒナタと自分のものとした。
「最初にあたしが入る」
　りぶたんは一同を見回した。
「二番目は団丸だ。すぐあとに続け」

「ラジャー！」
団丸は敬礼をした。表情はあくまでも真剣だった。
「三番目はフレイムだが、安全を確認して呼ぶまで穴の外で待機しろ。中には入るな」
「ラジャー！」
フレイムもまじめな顔で敬礼をした。
「ヒナたんはしんがりを頼む」
「ラジャー！　くすくす」
ヒナタはうれしそうに敬礼をすると、忍び笑いを漏らした。どうやら、助手たちの間で流行っている返事をまねしたくてしかたがなかったようだ。
「勝手に動くな。常に二人一組で行動しろ。いいな」
「ラジャー！」
三人の部下たちが声をそろえた。そして、ひとりだけ小声でくすくすと笑った。
「よし、行くぞ」
いの一番にりぶたんは、なにが待ち受けているかもわからない危険な穴へと入っていった。
「次、あたい」
団丸がりぶたんに続いた。

壁の穴を抜けるとせまい空間に出た。用度室の壁と、隣室の壁とにはさまれている。横幅のある団丸にはいささか窮屈(きゅうくつ)だ。

オーロラライトのおかげで、あたりは明るい。

足元はレンガだった。鉄のツタが入っているから堅(けん)牢(ろう)でしっかりしている。室内とちがって床板などはなく、一面に塗られた水密シールドが剥き出しになっている。半透明の水密シールドはゴム状で柔らかい。そのため、歩くとふかふかの絨毯(じゅうたん)のような感じがした。

天井のレンガも水密シールドが剥き出しになっている。床とのちがいはほこりのつもり具合だけだ。

水密シールドは壁にも塗られていた。降りかかるようにして壁につもったほこりを、拭い取った跡がある。ドゥードゥーの詰まった麻袋を担いだ犯人が、幅のせまい通路を抜けようとして、袋で壁をこすったのだろう。高さのちがう二本の線が、両側の壁のところどころに引かれている。目測では、マハラとチャパティの身長に合致する。

りぶたんはせまい通路を進んで、地ノ塔を取り囲む防護壁に向かった。ハンドライトよりも明るいオーロ

ラライトのおかげで、防護壁が破られているのは見えている。内壁や外壁とそっくり同じに、菱形の穴があいている。

その穴の向こう側まで、オーロラライトは照らしてくれる。地の底なのに平らな地面が見える。どうやらトンネルが掘られているようだ。

用心深く防護壁に近づいたりぶたんは、腰をかがめて穴の中をのぞいた。オーロラライトが土の壁を照らし出す。正面は壁だった。トンネルは地ノ塔に平行するように掘られていた。

りぶたんは壁の穴にそっと顔を入れた。懐中電灯を握りしめた手をトンネルに入れて、左右を確認した。

調光器で強化されたオーロラライトのまばゆい光が地底の闇を押し戻す。

大きなトンネルだった。金庫破りのために掘ったとは思えないほどの規模だ。幅も高さも余裕がある。巨漢のマハラが何人も並んで全力疾走できそうなほど、広くて高い。

トンネルの左側は防護壁に沿ってしばらく直線に進み、急角度で右に折れていた。オーロラライトが突き

当たりとなる土の壁を照らしている。
右側は防護壁から離れるように、ゆるやかな左カーブを描いていた。直線に近いゆっくりとしたカーブだ。オーロラライトの光も届かなくなった先で、暗闇が待ちかまえている。
明かりの届く範囲に、障害物やトラップのようなものは見当たらなかった。代わりに、予想もしなかったものが見つかった。
トンネルの右側。防護壁にあけられた穴の近くに、レンガが整然と積み上げられていた。内部が空洞の、枠だけのレンガ。ＤＬＣ―ＣＦＣ―Ｍレンガだ。
ほかにもいろいろと置いてある。バールや、鉄のツタの剪定バサミなどの工具がある。水密シールドの分離除去剤もあれば、ハイドロ・ポリマーモルタルの界面剥離剤に、ＤＬＣ―ＣＦＣ―Ｍレンガの破砕溶剤もある。これらはすべて破壊のための道具だから、壁に穴をあけた現場に放置してあってもおかしくはない。
その証拠に、ゴミ捨て場のような区画には破壊された建材がまとめられている。剥がされてぼろぼろになった水密シールド。レンガを接合する力を失ったハイ

ドロ・ポリマーモルタル。粉々に砕かれたＤＬＣ－ＣＦＣ－Ｍレンガ。切り落とされた鉄のツタ。
破壊の道具と、破壊された建材。強奪事件の現場にふさわしいといっても過言ではない遺留品だ。
だが、しかし。破壊されていない完全品のレンガが積み上げてあるのはおかしい。破壊の現場にふさわしくない。よく見れば、おかしいのはレンガだけではない。水密シールドのボトルや、ハイドロ・ポリマーモルタルのチューブが、何本も新品で用意されている。ボトル噴霧器（ふんむき）にチューブガンと、シールドやモルタルを塗るのに必要な工具もある。壁から抜き取ったロックウールは再利用するつもりのようで、捨てずに保管されている。鉄のツタの生長促進剤（せいちょう）まで置いてある。
つまり、補修道具一式がそろえられているのだ。
「……奴らは元どおりに直す気だったのか」
予想外の成り行きに、りぶたんは思わずつぶやいた。破壊したあとを律儀に修繕する強奪犯など、聞いたこともない。
「なにがさ？」
団丸が後ろから声をかけた。団丸にはトンネルの状

況は見えないから、なにもわからない。
「あとでまとめて説明する。ここで待て」
りぶたんはトンネルに体を入れた。
トンネルの右側は、オーロラライトの光も届かなくなるほど先まで見通せる。しかし、左側はすぐに突き当たりとなり、右に折れている。角を曲がった先がどうなっているのか、そこまで確認しないことには、安全とは言えない。
「二人一組で行動しろって言ったじゃん」
「そこの角を見てくるだけだ」
「どこの角さ？　待てって言うんなら待つけどさ、あたいもそっちに行って――」
「よせ！」
りぶたんは強い口調で制止した。
「ここはアウターゾーンだ。なにが起こるかわからん」
「アウターゾーン？　プロテクションゾーンとはちがうのかい？」
「プロテクションゾーンはＬＩＰＳでしっかり管理されている。プロテクトされているから、好き勝手に移

動できないだけだ。しかし、ここはちがう」
「どうちがうのさ？」
「アウターゾーンはＬＩＰＳに登録されていない、未知の空間だ。つまり――」
りぶたんはいったん言葉を切ってから続けた。
「人跡未踏というわけだ。……犯人一味を除けばな」
「じゃあさ。この壁からそっちはシステム上、存在しない場所ってことかい？」
団丸は防護壁にあいた穴に手をかけた。
壁の穴をはさんで、ふたりの会話は続く。
「そういうことだ。おまえがなにかと経験豊富なことはわかっている。神出鬼没で正体不明として名を馳せた怪盗だったのだからな。だが、アウターゾーンに足を踏み入れたことはあるのか？　プロテクションゾーンに忍び込むのとはわけがちがうぞ」
「……うーん。正直、なんとかゾーンとか言われても、あたいにはよくわかんないんだよねえ。あたい、生まれつきマインドウォールが効かなくてさぁ」
団丸は沈んだ声で話した。人捜しのためにあえて犯罪者になったと、フレイムのアトリエで告白したとき

と似たような雰囲気だった。
「マインドウォールが効かないだと？」
りぶたんは驚いた。と同時に、怪盗団丸が神出鬼没だった理由を知った。
呪文を使ったリヴリーたちが、知らない場所にも安全にテレポートできるようにとＬＩＰＳが用意されている。しかしながら閉鎖区域には移動させられないとして、ＬＩＰＳにプロテクトをかけたプロテクションゾーンが存在する。そのプロテクションゾーンには特殊呪文マインドウォールがかけられている。
マインドウォールは、リヴリーたちが呪文を使わずに自分の足でプロテクションゾーンに入り込んだりしないように、精神に直接作用する特殊な呪文だ。それが効かないのであれば、プロテクションゾーンは出入り自由となる。
プロテクションゾーンから姿を現し、プロテクションゾーンに姿を消せば、神出鬼没のからくりが完成するわけだ。
「そうか、わかった。興味深い話だが、いまは後回しだ。穴から顔だけ出して、監視を頼む。あたしはそこ

の角まで偵察してくる」
「ラジャー」
保安官の指示に、団丸はそれ以上逆らわなかった。
りぶたんが動くと、団丸が顔を出した場所はすぐに暗くなった。りぶたんの持つオーロラライトは指向性のある懐中電灯型だ。前は照らせても、後ろは照らせない。
顔だけ出せとの指示には逆らって、団丸はオーロラランプをトンネルに入れた。カンテラ型のオーロラライトは遠くまで照らせないものの、四方をまんべんなく照らす。明るくなくては、監視の任は果たせない。
団丸は、右に左にと視線を動かした。右を向いては暗闇を凝視し、左を向いてはりぶたんの背中を見つめる。
そのりぶたんが曲がり角に近づく。
団丸は一層の注意を払う。
お辞儀をするように頭を下げて、曲がり角の奥をりぶたんが用心深くのぞき込む。
「！」
りぶたんがのけぞった。

オーロラライトの明かりを地面に向け、のぞいた先を照らさないようにした。
だが、次の瞬間には意を決したように大きく踏み込み、曲がり角の向こう側に正対(せいたい)した。両手を構えて戦闘態勢に入った。オーロラライトの明かりも、まるでそれが武器であるかのように、まっすぐ向けた。
「……！」
りぶたんの行動から異状を察知した団丸は声を出そうとして、すんでのところで呑み込んだ。
団丸には曲がり角の向こうがどうなっているのか、状況がつかめない。りぶたんが沈黙している以上、声を出すべきではない。安易に声を出してしまえば、逆にりぶたんを危険にさらすことにもなりかねない。
団丸は両腕を穴の中に入れて、いつでも援護(えんご)に飛び出せるよう準備した。
戦闘態勢に入ったりぶたんは、じりじりと前に進んだ。構えは解かずに、曲がり角の向こう側に集中している。
りぶたんが前に進むのにあわせて、団丸も少しずつ体を穴の中に入れた。肩が入り、脇が入り、ついに上

半身がトンネルに入り込んだ。
「……」
無言のまま、りぶたんが構えを解いた。戦闘態勢は解除された。
りぶたんはふだんと変わらない様子ですたすたと歩きだし、曲がり角の向こう側へと消えた。そして、すぐに戻ってきた。
どうやら安全を確認したらしく、戻ってくるのに後ろを気にする様子はなかった。
団丸の肩から力が抜けた。地面に向けて、ふぅと吐いた息で土ぼこりが舞った。
「なんだったのさ？」
団丸は戻ってきたりぶたんに聞いた。
「まとめて説明する。後ろのふたりを呼んでくれ」
そう言うと、りぶたんは額の汗を拭った。
冷たい空気で満たされている地の底が、暑いわけはない。りぶたんが拭ったのは冷や汗だった。

2

もにょもにょ団が地底トンネルに勢揃いした。

ヒナタもフレイムも、トンネルの規模に目を見張った。

それから、地面に整然と並べられた遺留品の数々に目を奪われた。

壊されて捨てられた古い建材がある。補修のために用意された新しい建材がある。工具類もそろっている。大金を強奪して手ぶらで出て行った犯人一味が、大量に残していった遺留品だ。これらから、犯人一味の意図が少しは酌(く)み取れる。

「トンネルを使って、手ぶらで盗み出したからくりはわかったけど、どうして壁を直そうとしたのかな？」

ヒナタは鉄のツタの生長促進剤を手に取った。逆手に握った懐中電灯型のオーロラライトで小瓶を照らす。

いかにも化学薬品が入っていそうな、味気ない遮光(しゃこう)瓶(びん)だった。茶褐色のガラスで光をさえぎるようになっている。ふたはスポイトを兼ねている。

壁の補修などで鉄のツタを切り落としたら、スポイトを使って切り口に生長促進剤を滴らせる。あとは壁をふさいで光を遮断すれば、嫌光性植物である鉄のツタが光合成ならぬ闇合成をして伸びてゆく。

生長促進剤がなくても鉄のツタは伸びるのだが、鉄だけに生育は遅い。早く茂らせてレンガに固着させ、早期に安全を確保するためには、生長促進剤の使用は補修作業に欠かせない工程だ。

しかし、だからといって、ドゥードゥー強奪犯がそこまで懇切丁寧に修繕するのはおかしな話だった。

「このトンネルを完璧に隠すつもりだったんだよ。証拠隠滅にもなるし。トンネルの存在がバレなかったら、次の機会にまた使うことだってできるよ」

それ以外に考えられないと、フレイムは自信たっぷりに答えた。

「あるいは、単純に地ノ塔が大事だったか」

りぶたんは異論を唱えた。

「大事な塔だから、ちゃんと修繕しようとしたってこと？　それだと内部犯行の疑いが濃くなるよね。でも、どうしてせっかく道具を用意したのに、直さないで放

置しちゃったんだろう？　まさか、いまから直しにくるとか？」
　フレイムは仲間たちを見回した。
　犯人一味は朝の六時に地ノ塔を出ている。破った壁を修繕するならするで、早いうちにすませるのが道理だ。昼飯時になってから、のこのこ直しに舞い戻るとは到底考えられない。
「もう来ないと思うな、わたし。いまからじゃ遅すぎるもの。きっとなにか、予想外の出来事が起こって直しに来れなくなったのね」
　ヒナタはそう言うと、ちらりとりぶたんの顔を見てから付け加えた。
「夜勤の職員さんたちをみんな逮捕しちゃったことと、関係あるかも」
　ＬＩＳＤは夜勤職員をひとり残らず逮捕している。正確には逮捕したのではなく、逮捕されたように見せかけるために、協力してもらっている。
　犯人一味は職員に罪が及ばないように配慮したようだから、わざと逮捕することで犯人の動揺を誘うとの名目で、職員には半ば強制的に牢屋に入ってもらった。

その結果、職員の自由な行動は制限されることとなった。もしも職員の中に犯人がいたとしたら、壁を直しに戻りたくても戻れないわけだ。
「それにしても、すごいトンネルね」
ヒナタは改めてトンネルを見回した。
「地ノ塔を造ったときの坑道かなにかかな？　オーロラダイヤを運び出すために掘ったにしては、無駄に立派よね」
ヒナタは両手を広げた。トンネルは幅も高さも余裕があって、体を大きく見せても窮屈な感じはまるでしなかった。
「いや、坑道ではない」
「ちがうの？」
りぶたんがきっぱりと否定したので、ヒナタは不思議そうな顔をした。
「もうひとつ、見せるものがある。こっちだ」
りぶたんは曲がり角に向かって歩きだした。
団丸は待ちかまえていたかのように、すかさずりぶたんに続いた。
「？」

ヒナタとフレイムは顔を見合わせた。
防護壁に沿ってまっすぐ進むと、すぐにトンネルは直角に曲がって右に折れた。
りぶたんは曲がり角で足を止め、横を向いて角の向こうにオーロラライトの光を当てると言った。
「トンネルを掘ったのはこいつらだ」
それを聞いて団丸が駆けた。
つられて、ヒナタとフレイムも駆けだした。
角を曲がると、トンネルは半分近くふさがっていた。目の前に大きな障害物がある。
まるく盛り上がった黒い点がふたつ。その下から飛び出した茶色い棒がふたつ。太い杭(くい)の並んだ焦げ茶色の柵がふたつ。
その正体は――。
「……モンスターじゃん」
団丸がうめいた。
「……死んでるのよね？　新種？」
緊張しているのか、ヒナタの声が妙に甲高い。
「……これ、モグラコオロギだよ」
フレイムがかすれた声をしぼりだした。

障害物の正体は巨大な昆虫だった。未知のモンスターだ。

ブルドーザーのバケットのような、どでかい前脚を突き出した状態で、オケラが死んでいる。胴体はトンネルの奥へと横たわっていて正確な大きさはわからないが、トンネルを半ばまでふさいだ前脚と顔だけで、巨体だとわかる。

死骸でも、モンスターを目の前にすればふるえがくる。ましてや、どれほど凶暴なのか想像もつかない未知のモンスターとなればなおさらだ。

まるく盛り上がった黒い目で、目の前の獲物を見つめているような気がする。目の下から飛び出した触角はいまにも動き出しそうだ。杭のような突起のある前脚で襲われたならば、リヴリーはひとたまりもないだろう。

「モグラコオロギ？」

りぶたんは小首を傾げてフレイムを見た。コオロギなら知っているが、モグラの意味がわからない。

「うん、大先輩のボンドさんに教わったんだけどねー」

フレイムは説明を始めた。
絵本ジャーナリストのフレイムにとって、リヴリータイムズ社のボンドは憧れの人だった。
「ミュラー博士のいる人間界にはモグラという生き物がいるんだって。オケラと同じように土の中で暮らしているんだけど、そのモグラの前脚と、オケラの前脚はそっくりなんだって。地面に穴を掘るのに最適な形ってことで似通ったわけだけど、全然ちがう生き物なのによく似た姿形になることを、収斂(しゅうれん)進化って言うんだよ。……でも、モグラやモグラコオロギの話は聞いたけど、こんな新種モンスターの話は聞かなかったなぁ。あのボンドさんが知らないんだもん。きっと犯人は偶然このトンネルを見つけたんだね」
「それはちがうな」
りぶたんは首を振った。
「そんなに都合のいい偶然など、ありはしない。偶然、新種のモンスターがいて、偶然、地ノ塔まで穴が掘られていて、偶然、夜間無人の用度室まで穴は延びていて、偶然、オーロラダイヤを盗み出すのに便利だった。とでも言うのか？」

くどいくらいに、りぶたんは偶然という言葉を口にした。
「偶然と必然が折り重なって、このトンネルはできている。なるほど、モグラコオロギの誕生は偶然だったろう。なにも犯人一味が生み出したわけではあるまい。発見したのも偶然だったにちがいない。だが、地ノ塔地下一階の用度室に向けてトンネルを掘ったのは、偶然ではない。これは必然だ。犯人一味がモグラコオロギを手なずけるか操るかして、トンネルを掘らせたのだ。オーロラダイヤを強奪して運び出すためにな」
「でも、そんな簡単に手なずけたり操ったりできる？　こんなに大きなモンスターなのよ？」
ヒナタはモグラコオロギにこわごわ近づいた。
「ふつうのモンスターとはちがうみたいだよ、ヒナたん。だって、こいつ。スズメバチに襲われて死んだみたいだから」
「えっ？　ほんと？」
ヒナタが驚いて振り返った。
モンスターはモンスターを襲わない。スズメバチにジョロウグモ。オオカマキリにタガメ。オニヤンマに

イトトンボ。モンスター同士で争っているところなど、誰ひとりとして見たことがない。
「こいつは背中の、羽の付け根のところを咬(か)み裂かれている。羽を突き破って、腹部にまで達する刺し傷もある。傷口から見て、やったのはスズメバチだ。どこかで襲われ、ここまで逃げてきたところで、毒が回って死んだのだろう」
「じゃあさ。このモンスターはスズメバチのエサってことじゃん？」
　団丸はモグラコオロギの脇に回り込んだ。爪先立ちで背伸びをして、オーロラランプを高くかざす。確かに咬み裂かれたむごたらしい傷口が見える。透明な体液が傷口からにじみ出し、体をつたって地面まで滴り落ちている。
「捕まえて、咬み砕いて、肉団子にして、幼虫のエサにしようとしたわけじゃん？　モンスター同士なのにさ」
「わかった！　モグラコオロギはリヴリーを襲わないんだ！」
　フレイムはりぶたんの真横に並ぶと、モンスターの

死骸を指さしながら、たったいま思いついたばかりの考えをぶちまけた。
「体格はモンスター並みだけど、性格はおとなしいんだ。ただ大きいだけの虫なんだよ。だからスズメバチはモグラコオロギをエサにしようとするし、犯人一味は手なずけたり操ったりできたんだよ」
「いきなり大胆な仮説だな」
「でも、説明はつくよ」
「あくまでも仮説にすぎん。自信があるからといって、盲信はするな。殉職（じゅんしょく）者は出したくない。モグラコオロギを見つけても、うかつに近寄るんじゃないぞ」
りぶたんはオーロラライトを握る手で、フレイムの胸をトンと突いた。
「え？　ほかにもまだいるってこと？」
「そうだ。よく見ろ。こいつはトンネルよりも小さい。穴を掘ったのはもっとでかい奴だ」
「ああ、それで。トンネルを掘ったのはこいつらだって、複数形だったのね」
ヒナタはモグラコオロギの死骸と背比（せいくら）べをした。
たとえ性格がおとなしくても相手はモンスターだ。

死んでいなければ、顔の前に立つ気にはなれない。モグラコオロギの顔はヒナタよりもずっと大きい。生きていれば、頭から丸かじりにされそうな恐ろしさがある。

「事件の概要も、だいたい見えてきたな」

「そうね」

ヒナタはモグラコオロギから離れると、りぶたんとフレイムのそばに寄った。

場の空気を読んで、団丸も戻ってきた。

「犯人一味はモグラコオロギを発見した。それが、すべての始まりだろう」

りぶたんが静かに語り始めた。

「目撃報告は一件もなく、噂すら聞かないのだから、モグラコオロギの発見場所は近場ではあるまい。誰にも見られない場所。おそらくは、怪物密林の奥深くだろう。怪物の森では近すぎる。かといって、ミュラー山脈を越えたのでは、はるかに遠すぎる」

りぶたんの推理に、部下たちはだまって耳を傾けた。

「一味の規模は三人以上としかわからないが、これだけのヤマを踏むのに、事前になにひとつとして情報を

漏らさなかったところをみると、統制の行き届いた集団であるにちがいない。少数で、精鋭だと思われる」
「……」
ヒナタがコクリとうなずいた。
相棒の同意を得たりぶたんはそのまま話を続けた。
「精鋭とはいえ少ない人数で、ＬＩＰＳに頼ることのできない未踏査のジャングルに分け入るとは、悪党ながら恐れ入った胆力（たんりょく）だ。ただ者ではないな。小役人ごときにできる芸当ではない」
「じゃあ、やっぱり――」
口をはさんだフレイムを、ヒナタが肘で小突いた。
「続けて、りぶたん」
「犯人一味がなぜ、危険を顧（かえり）みずに、怪物密林に足を踏み入れたのかは置こう。どのような目的があったにせよ、地ノ塔へのトンネルを掘るために、存在するかどうかもわからない未知のモンスターを探索しに赴（おもむ）いたりはしないだろう。こいつを見つけたのは、あくまでも偶然だ」
りぶたんはモグラコオロギにライトを当てた。
「そして、一味はこいつを操る術（すべ）を会得した。モンス

ターであるにもかかわらず、スズメバチに襲われたということは、この新種はいささか毛並みがちがうようだ。フレイムの言うように、リヴリーを襲わないのかもしれない。となれば、調教もやってやれないことはないだろう」

仮説を取り上げられて、フレイムは自慢そうに胸を張った。

「一味がモグラコオロギを利用しようと血道を上げた動機なら、問わずともわかる。モグラコオロギを使えば、地底のトンネルが手に入る。安全な地下に、専用道を思うがままに張り巡らすことができるのだ。怪物密林にいかなる用があるのか知らんが、専用道さえあれば行き来する時間を短縮できる上に、隠密行動も取れるからな。ジャングルをさまよい歩いてモンスターの標的となる危険も減るわけだ」

「でも、ひとつだけ足りない物があった」

ヒナタはオーロラライトを消した。

「そう。足りなかった」

りぶたんもオーロラライトを消した。

「……」

フレイムと団丸は、手にぶら下げていたオーロラランプを持ち上げた。互いに無言で視線を交わしてから、カンテラ型のオーロラライトを消した。
明かりが消えると暗闇が襲いかかってきた。地の底に日光は届かない。さっきまで透明だった空気が、一瞬で闇色(やみいろ)に染まった。
「あ！　あっ！　あーっ！」
事件の真相を悟って、フレイムが言葉をなくした。
「犯人の狙いは明かりだったんじゃん！」
団丸も驚いて大きな声を出した。
「そうだ」
黒一色の、なにもない世界にりぶたんの声が響いた。
「見てのとおり、真っ暗なトンネルの中では、なにもできやしない。歩けるものなら、歩いてみろ。たった一歩、足を踏み出すことがどれほどたいへんか」
明かりのない地底のトンネルは真っ暗闇だ。足を踏み出したその先に、地面があるのかどうかさえわからない。それに動いてしまえば、たちまち前も後ろもわからなくなる。これでは進むどころではない。
「進むには明かりが必要だ。だが、ハンドライトの光

では弱すぎる」
りぶたんはハンドライトを灯した。
まっすぐ伸ばされた保安官の手がかすかに光って、四人のリヴリーが暗闇に浮かび上がった。しかし、仲間たちの姿がうっすら見えるだけ。少し離れたモグラコオロギの死骸は闇に呑まれて見えない。
「焚き火なら少しは明るいが、移動しつつ照明として使うには難がある」
りぶたんはトーチを放った。
火のついた松明がくるくると宙を舞って地面に落ちた。落ちた瞬間に松明は本数を増やして、そのまま焚き火となった。
リヴリーには特殊な能力がある。霊子を自在に操る能力。霊能力だ。
この世もあの世も、三千世界のすべては霊子で構成されている。霊子を元に万物を創造することを造化という。そして万物を元の霊子に戻すことを霊化という。造化も霊化も、神の業だ。
神である造物主が行ったことを、人間の錬金術師がまねようとし、その結果として生み出されたリヴリー

は、ほんのちょっぴり神業を使える不思議な生き物だった。
神業が使えるといっても、なんでも好き勝手に創造できるわけではない。そんなことが可能なら、リヴリーは神になれる。残念ながらリヴリーの能力は著しく低く、できることには限りがある。しかも、力を行使するには複雑なプロセスを踏まなければならない。それ以前に、プロセス自体を開発する必要がある。
そのための機関が呪文科学局だ。目的を果たすのに必要なプロセスを開発し、手っ取り早く使いこなせるよう、短い言葉に呪文化する。あとは呪文を念じるだけで、秘められた神業能力が瞬時に発動する。
トーチの呪文を覚えてさえいれば、薪(まき)はなくとも、火をおこさずとも、松明は現れて、焚き火は燃え盛る。ちっぽけな力でも、確かにそれは神の業だった。
「でも、なにかに燃え移ったら危険よね」
ヒナタがウインドを使って、焚き火を吹き消した。
「トンネルの中じゃ燃える物はないかもしれないけど、火事になったら逃げ場がないもの」
焚き火が消えてハンドライトの明かりが残った。薄

ぼんやりとした明かりは焚き火に負け、前よりも暗く感じられた。
「そこで、犯人一味はこれに目をつけたわけだ」
りぶたんはオーロラライトのスイッチを入れると、手首のスナップをきかせて懐中電灯をバトンのように放り上げた。
前は照らせても後ろは照らせない懐中電灯が、空中で縦に回転する。強い光が円を描き、渦を巻く。たたずむリヴリーたちの背後で、影が踊った。
「ひとつあれば、たちまち明るくなるからな」
りぶたんは放り上げた懐中電灯を受け止めた。
「大金が盗まれたので、お金目当ての犯行だとわたしたちは思い込んでしまったのね」
ヒナタは余計なアクションを入れずに、ふつうにライトをつけた。
「ほんとだよ。ぼくなんか、絶対にお金だって思ったもん」
「あたいもさ。まさか明かりが欲しいだけなんて、そんなこと考えもしなかったさ」
フレイムと団丸はスイッチをひねった。オーロララ

ンプが四方を照らして、トンネルの中はすっかり明るくなった。
「犯人は真っ先に、営繕室のオーロラライトを盗み出したのね。それから金庫室のオーロラダイヤを、タイムリミットまで盗めるだけ盗んだの。時間切れになって金庫にはお宝がまだ残されていたのに、ただのライトがひとつも残っていなかったのは、そういうわけだったのよ。なによりも明かりが欲しい犯人にとって、一個百万ddもするオーロラダイヤの幻想的な光よりも、調光器が取り付けてあってちゃんと照明器具として使えるオーロラライトのほうが、価値があったってことね。犯人はお金なんてどうでもよかったの」
ヒナタの説明に、りぶたんが大きくうなずいた。
「でも、お金なんてどうでもいい犯人って、誰だろう？」
フレイムは純粋な疑問をヒナタにぶつけた。
しかし、トビネのまっすぐなまなざしは、ヒナタには痛かった。
「……」
ヒナタはだまって目を伏せた。

「犯人の正体に、もはや思い迷うことはない」
りぶたんは仲間たちを見た。
団丸がいる。フレイムがいる。そして、目を伏せたままのヒナタがいる。
「地ノ塔の内情に通じ、職員を庇(かば)い立(だ)てし、壁の補修に心を砕く。団結は固く、情報は漏らさず、少数で精鋭。ＬＩＰＳに頼らず、モンスターを恐れず、怪物密林に踏み込むだけの度胸と戦闘力を併(あわ)せ持つ。そもそも怪物密林に赴くことさえ尋常ではないというのに、発見した新種モンスターを意のままに操るほどの気概を示す。なおかつ、目先の小金はもとより、大金ですら平気で捨て去る。金目当てなどという、さもしい性根ではなく、明らかに、大志を抱く者ども」
りぶたんはもう一度、仲間たちを見た。
団丸がいる。フレイムがいる。そして、ヒナタがりぶたんを見つめている。
そのヒナタが無言のまま、ゆっくりとうなずく。
りぶたんもうなずき返す。
「犯人は……ルビーローズ一味だっ」
力強い声が地底のトンネルにこだました。

3

トンネルを掘るのは厄介(やっかい)だ。

なにしろ土の中だから、目印となるものがなにもない。左右にずれるどころか、上下にもずれてしまう。闇雲に掘ったなら、絶対に地ノ塔にはたどりつかない。

そこで測量の必要が出てくる。

別に高度な知識はいらない。ごくごく初歩的な技術で充分だ。

棒を三本用意する。長い紐も用意する。重しもいる。できれば、滑車を取り付けた重しが望ましい。

モグラコオロギは生き物だから、機械のようにまっすぐな穴を掘ることはできない。巨体だから、細かく制御するわけにもいかない。そこで、とりあえず好きに掘らせる。方向だけを大まかに指示して、あとは成り行きに任せる。

しばらく掘り進むと、目に見えるほどのずれが生じる。そうなって初めて測量をし、修正を施す。

カーブを描いたトンネルに棒を立てる。横幅をきち

んと測って、棒はトンネルの中央に立てる。三本の棒で基準点・中間点・最奥点の三つのポイントが定まったら、今度は棒の間に紐を渡す。カーブが右曲がりの場合は、三点が紐で結ばれて「く」の字になる。

真ん中のくびれた部分で、紐が交差する角度を水平面で調べれば、左右のずれが何度になるのかわかる。直線でどのくらい進んだのかも求めることができる。

ただし、高低差は測ることができない。張った紐は自身の重さでたわむから、紐が交差する角度を垂直面で調べても意味がない。

高低差を測るには重しを使う。張った紐に滑車を引っかけ、重しをすべらせる。紐がたわんでいても一向にかまわない。すべり始めた重しはやがて止まる。止まった場所が真ん中だ。紐の長さを左右で比較しておおむね一致すれば、トンネルは二点間で高低差なく、ほぼ水平に掘られている。そうでなければ、紐の両端で深度に相違があるわけだ。

正確な測量にはほど遠いが、やり方は簡単。それにトンネルは、なにも地下一階の用度室にピンポイントで到達する必要はない。地ノ塔にたどりつけばそれで

いい。
「そうしてぶち当たった場所が、そこだ」
りぶたんは親指で背後の防護壁を指し示した。
「死骸と同じ方向から掘り進めてきたのだな。……となると、こっちのトンネルは怪物密林に続くと見ていいだろう」
横たわってもう動かないモグラコオロギの後方に、りぶたんはオーロラライトの光を飛ばした。
「ほんとだ。ここの水密シールド、新しいや。塗り直してあるよ」
フレイムはランプをかざしながら防護壁に近寄った。
「ってことはさ。ここの壁を破ってさ、塔のどこいらへんか確認したってことじゃん」
団丸も防護壁の前に立った。
「えっ？　壁を破ったらトンネルがバレるよ？」
「使えない坊やだね。中の音が拾える程度にこっそり壊すって意味さ」
「あ、そっか。耳を当てて音を聞けばいいもんね。それに、中からわざと音を立てたりもできるよね」
「そういうことさ。位置さえ特定できりゃ、あとは壁

沿いにさ、目的の場所までトンネル掘るだけじゃん」
「なるほどねー。でも、どうせ外からトンネルを掘ってきたんだから、そのまま金庫に穴をあけちゃえばよかったのにね」
「なに言ってんのさ。金庫ってのは、破られないように頑丈に作ってあるものなのさ。壁だって、薄っぺらい作りじゃないしさ。だから、正面から扉を開けて盗むのが一番簡単なんじゃん」
「あ、そっか。それによく考えたら、金庫に穴をあけちゃうとトンネル隠せないや」
「ったく。坊やだねえ」
「てへっ」
「……」
背後で騒ぐふたりを尻目に、りぶたんは心配そうにヒナタを見つめた。
これまで精一杯ルビーローズをかばってきたヒナタだが、ついに観念した。犯人はルビーローズになりすましたダミーローズだ、との説はもはや成り立たない。
なぜならば、隠しトンネルがある以上、ダミーローズがわざわざ通用門をとおる必要はないからだ。トン

ネルから侵入したほうが人目を避けられる。
「……」
落胆が激しいのか、ヒナタは肩を落として伏し目がちに足を踏み出した。
「……」
声をかけようと、りぶたんは近づいてくるヒナタに手を伸ばした。けれども、なぐさめる言葉が見つからない。
しかし、ヒナタは元気だった。
りぶたんとすれちがう瞬間に、ヒナタはミミマキムクネの脇腹のお肉をむぎゅっとつまんだ。
「！」
不意を突かれたミミマキムクネの耳の毛が跳ね上がった。
「くすくす」
ヒナタは、気を回しすぎるやさしい相棒をおちょくってみただけだった。
「壁の向こうは食堂かな」
背中を向けている助手たちに、ヒナタは声をかけた。
「うん。ぼくもそう思う。あっちの穴が用度室だから、

このあたりはちょうど食堂だよ」
フレイムは力を込めて壁を叩いた。
柔らかい水密シールドの下に、硬いレンガがある。ＤＬＣ－ＣＦＣ－Ｍレンガはハイドロ・ポリマーモルタルでしっかりと接合されているようだ。鉄のツタの生育状況はわからないが、叩いて崩（くず）れるようなもろさはない。
補修道具一式を取りそろえるだけあって、犯人一味の工事に手抜きはないようだった。
「壁を壊して現在地を確認したら、そのあとほんとにちゃんと直したのね。ほら、横を見て」
用度室の抜け穴に向かう防護壁を、ヒナタは指さした。
「？」
後ろで指さされても右か左かわからない。フレイムは右を見た。
「？」
後ろで指さされても左のことだとわかる。右には土の壁しかない。団丸は左を見た。
「！」

フレイムと団丸の目があった。
「……」
団丸は困った顔を見せると、坊やの頭を鷲づかみにしてむりやり反対側に向けた。横と言われて、どうしてなにもないほうに顔を向けるのかまったく理解できないと、しかめっ面の表情が物語っていた。
その様子を見て、ヒナタがくすくすと笑った。
「あ、シールドが！」
むりやり反対側を向かされたフレイムの目に、水密シールドを補修した跡が飛び込んできた。横から見るとよくわかる。用度室の抜け穴までずっと、防護壁の水密シールドがきれいになっている。
「ここのシールドは塗り直してあるのに、同じ感じであっちまでずっと続いてるよ」
フレイムははしゃぐように駆けだした。
「へえ。マジじゃん」
団丸は防護壁の水密シールドを検分しながら、ゆっくりと歩いた。
「そうね。よく見ると全面的に塗り直してあるのよね。たぶん、モグラコオロギがここを掘ったときに、水密

シールドを削り取ってしまったんじゃないかな」
ヒナタは指先でそっとシールドを押した。厚みも弾力性も申し分ない。薄く塗って手を抜こうなどとは考えもしなかったようだ。犯人にとってどうでもいいはずの補修工事を、職人並みの頑固さで完璧に仕上げているのだから、逆に好感すら覚えてしまう。
「……さすがね……」
ヒナタは声を潜めて犯人をほめた。見えないところでも決して手を抜かないなんて、さすがはルビーローズさんね、と。
「見て見て！　ここにシールドのかけらが埋まってるよ！」
フレイムが地面を指さした。用度室の抜け穴まで、半分ほど戻った場所だった。
水密シールドのかけらが土の中に埋まった状態で、少しだけ頭をのぞかせている。しゃがみ込んだフレイムがつまんで引っ張っても、ゴム状のシールドがほんの少し伸びただけ。
オケラのモンスターがごつい前脚で削り取っただけあって、地面に埋まった水密シールドのかけらは意外

に大きいようだ。
「あっ！　ぼく、わかったよ！」
フレイムはしゃがんだまま顔を上げた。
「これだけ大きなトンネルだと、掘った土を運び出すのはたいへんだなって思ってたけど、実はそうじゃなかったんだ。土は運び出してないんだよ」
「運び出さなくてどうするっていうのさ？」
団丸は坊やの突拍子もない発言につきあった。
「簡単だよ。土を押しのけるように掻き分けながら穴を掘って、掘った土はまわりに押しつけて固めちゃえばいいんだよ。それだったら運び出さなくてすむし、壁も天井も固く締まって落盤しにくくなるよ」
「……あんたって……」
団丸は驚いて足を止めた。なにかを言いかけて、言葉を呑んだ。
「フーちんって、すごい！」
ヒナタが団丸の気持ちを代弁した。
「なるほど。そういうことか」
りぶたんは地面を蹴るようにして踏みつけてみた。
場所がトンネルなので地面が押し固められていても、

なにも気にならなかった。ごくふつうの歩きやすい道だから、意識することすらなかった。
しかし、よくよく考えてみればフレイムの言うとおりだ。トンネルを掘って土を運び出すのはたいへんな作業だ。そして掘っただけなら地面はやわらかくて歩きにくいだろう。
オーロラライトを向けて、りぶたんは壁や天井も調べた。どちらも土が引き締まって見える。崩(くず)れ落ちそうな気配は微塵もない。
「よく気づいたな」
「うん。だって、シールドのかけらが深く埋まってるんだもん」
保安官にほめられて、トビネの坊やはうれしそうに照れた。
「よーし！　あたいだって負けらんないっ」
対抗心に火がついた団丸は、オーロラランプをかざしてトンネル内を舐めるように調べ始めた。
「あっ！　見っけた！」
団丸もなにかを発見したようで、地面を指さした。
「ほら、ここ！　タイヤの跡じゃん！」

「どれどれ」
おもしろそうに団丸のあとをついて回っていたヒナタが、指さされた場所をのぞき込んだ。
「トンネルがどこまで続くのか知らないけどさ。道具や材料を担いで運び込むのはたいへんじゃん？　レンガなんかいっぱいあるし。それでさ、運ぶのになんか使ったなって思ってたらさぁ。あたい、見つけたよ」
「ふむふむ」
「ほら。ここにタイヤの跡、あるじゃんか。これ一本しか見当たらないしさぁ。工事用の一輪車じゃないの？　道具とか材料とか運び込んでさ、盗んだブツもこいつで運び出したのさ」
団丸が指さす先には、地面にうっすらとタイヤの跡が残っていた。そこだけ土もやわらかかったようだ。
タイヤの跡は一本だけで、左右のどちらにも、対になる痕跡は見当たらない。どうやら、工事現場でよく見かける一輪の手押し車を使って、補修道具一式を運び込んだものと思われた。そして、強奪した品物を積み込んで運び去ったのだろう。
「まるたんって、すごい！」

ヒナタが素直にほめた。
「このくらい、どってことないさ」
鼻の穴を大きくふくらませて、ショウジョウダルマが謙遜した。
「よく見つけたな。その調子で向こう側も頼む」
りぶたんはタイヤの跡を確認すると、顎(あご)をしゃくってトンネルのさらなる奥を指した。用度室の抜け穴から見て、右側のトンネルだ。直線に近いゆるやかな左カーブを描いて、暗闇へとつながっている。
「そっか。あっちにタイヤの跡がなかったら、トンネルのこっち側が使われたって、しぼり込めるよね。ぼくが見てくるっ」
「それはちがうぞ」
「えっ？」
フレイムは駆けだそうとして足を止めた。
「タイヤの跡がないからといって、使われなかったことにはならない」
「じゃあ、なにを探すの？」
「もちろん、タイヤの跡だ。もしもあれば、向こう側も使われたと断定できる。安易にしぼり込もうとはす

るな。まずは確認することが大切だ」
「うん。わかった」
フレイムは返事もそこそこに用度室の抜け穴まで駆け戻ると、地面を丹念に調べながら奥へと足を運んだ。
「……」
りぶたんは動かずに、張り切る助手を見守った。
隣にヒナタが並んで、やはりフレイムを見守った。
ふたりの後ろには団丸がいる。
「向こうにもタイヤの跡があったらどうするのさ？」
団丸は保安官の背中に問いかけた。
「別にどうもしない。向こうもこっちも、どちらも使われたという事実を確認したことになる」
「タイヤの跡があれば、使われた。なくても、使われなかったことにはならない。ってわけじゃん？　それってさぁ、なんていうかさぁ……」
団丸の声に溜息（ためいき）が混じっている。
「徒労か？　捜査なんてそんなものだ」
振り返りもせずにそう言うと、ミミマキムクネが腕を組み、胸を張った。
どれほど無駄骨を折ろうとも、一切苦にはならない

ぞと、体で語っていた。
「……」
ヒナタはちらりと隣を盗み見て、相棒のいつものポーズをまねした。
「あった！　あったよ！　こっちにもタイヤの跡が！」
オーロラランプを掲げたフレイムが、ランプごと勢いよく手を振った。
「そうか。あったか」
りぶたんはぐっと顎（あご）を引いた。
「一味が用度室に狙いをつけたのはわかる。夜間は無人だし、置いてあるのは消耗品ばかりで貴重品などはないから、警備も手薄だ。それに角部屋で目立たないからな」
「その点、食堂は夜中でも休憩しに来る人がいたりするものね」
ヒナタは物まねポーズをやめて、両手を下ろした。
「だが、なぜトンネルは奥へと続いているのだ？　怪物密林からトンネルを掘り進めてきて、目的地の用度室にたどり着いた。しかし、そこで終点とならずに、

さらに先へと掘り進めたのはなぜだ？」
りぶたんは腕を組んだまま、隣の相棒に顔を向けた。
「タイヤの跡があるってことは、トンネルの向こう側でもなにかを運んだってことよね」
「運んだ物は、補修道具一式に、強奪品だ」
「用度室から左カーブでこのまま進んだら、ショップゲートあたりに行き着くんじゃない？」
「あそこにはパキケフーズもあるが、マハラショップもあるな」
「なんでも調達するマハラさんのお店ね」
「奴がいれば、補修道具も建材も、一式そろえるのはわけない」
「ということは、向こうのタイヤ跡は、道具類を運び込んだときのもの」
ヒナタは正面に向かって指をさした。
「そして、こっちのタイヤ跡は――」
さした指を固定したまま、ヒナタは体ごとくるりと回転した。
振り返った指の先には、団丸がいた。
「盗んだブツを運び出したときについたのさ」

ヒナタの代わりに団丸が答えた。
「なになに？　どうしたの？」
フレイムが戻ってきた。
「これからどうする？　ダミーのみなさんを逮捕する？」
ちょっぴり斜めに傾けてかぶる制帽に手を当てて、ヒナタは装いを整えながら保安官に確認した。ＬＩＳＤの副保安官として、さらに一歩踏み込んだ捜査活動が始まる予感に襟を正したのだった。
「ダミーのみなさんって？」
なんのことやらフレイムにはわからない。
「ダミーローズはいたのよ。ルビーローズさんの代わりに、お店で働いているの」
「あ！　そういうことか！　事件を起こしたり、トンネルを掘ったりする間、ショップに身代わりを立てておいたんだ！」
「そう。わたしたち、話を聞きにショップを訪ねたんだけど、ルビーローズさんの態度が変だったのね。犯人でも、犯人じゃなくっても、どっちにしても不自然な態度だったの。それにね、犯人のこと一度もなじら

なかったのよ。自分が犯人なら、濡れ衣着せられたふりして怒るのがふつうでしょ？　そうじゃないなら、真犯人に怒っていて当たり前よね？　なのに、ルビーローズさんは犯人に一度も文句を言わなかったの」
「言わなかったのか、それとも言えなかったのか」
りぶたんは歩きだした。用度室の抜け穴へと戻ってゆく。
「ショップの主として振る舞ってはいても、その正体はただの替え玉。偽者にすぎん。強奪犯でも、相手は本物のルビーローズだ。おいそれと文句は言えまい。それに、おそらくは好きで替え玉をしているのだろう。ルビーローズになりたくて。だとすると、口が裂けても文句は言わないか。……自分自身の存在を消し去り、他人になりたがるとは。哀れなことだな」
「複雑なファン心理ね。それにしても、あのとき、ちゃんとバイオレコード見たらよかったね」
ヒナタはりぶたんのすぐ後ろに続いた。
「うんにゃ。バイレコは偽造してあるはず」
「そっか……。そうよね。でないと、ダミーとして身代わりは務まらないものね」

「チャパティはああ見えて、知恵が回る。手抜かりはないだろう。マハラはそそっかしいが、物資の調達にかけては誰にも引けを取らない。このふたりが組めば、バイレコの偽造など朝飯前だろうよ」
「そんなふたりを抜群のカリスマで引っ張ってゆくのが、聖母と慕われるルビーローズさん。……手強いわね」
「そうだな。ダミーどもも一筋縄ではゆくまい」
「バイレコの偽造を暴けなかったら、身代わりだって証明できないね。……あ、待って。いつからダミーなんだろう？　もしかしたら、もうずっと？」
「うん。身代わりになりっぱなしではないにしても、ずいぶんと前から入れ替わっているはず。トンネル工事に着工するよりも前から替え玉をやっているはず。連中はもう、本物になりすますことに慣れているな。だから、化けの皮は簡単に剥がれないとみるべきだ」
「それなのに態度が変だったってことは、事件は知らされてなかったってことかな？」
「前もって知らせると情報も漏れやすくなる。なにより、なにも知らないほうが本物らしく振る舞える。そ

う考えたのかもしれない。まあ、おかげでダミーローズが動揺し、失敗してくれたわけだが」
用度室の抜け穴まで戻ってきて、りぶたんは足を止めた。
ヒナタと、だまって聞き耳を立てながらついてきた助手たちが保安官を取り囲んだ。
「これからどうするの？」
改めてヒナタは確認した。
「うん」
りぶたんは短くうなずいてから、言葉を継いだ。
「奪われた大金。盗まれた明かり。地底のトンネル。新種のモンスター。おまけに、ここはアウターゾーンだ。応援が必要だな」
「ＬＩＳＤに手を貸してくれる人、いるかな？」
ヒナタは助手たちに目をやった。
フレイムや団丸のように、自ら進んで協力してくれる人材がほかにもいれば、ありがたい話だ。しかし、事ここに至っては、もはや一般のリヴリーは受け入れられない。捜査の舞台は安全な地ノ塔から、危険なアウターゾーンへと移るのだ。

フレイムには絵本ジャーナリストとしての使命感があるし、なんといっても保安官助手の経験者だから、多少の危険も承知で任せられる。
団丸には元怪盗という特殊なキャリアがある上に、なによりもうっかり捜査情報を漏らしてしまった負い目もあって、目を離すわけにはいかない。
このふたりは別にして、さらに応援を募るとなると、対象は当然ながら管理機関の職員に限定される。
「とりあえず、地ノ塔の封鎖は解除だ」
「夜勤の職員さんたちも釈放してあげないとね」
「そうだな。連中の何人かが協力してくれるといいのだが」
「それは……たぶん無理だと思う」
ヒナタが苦笑した。
「全員逮捕はちとやりすぎたか」
「結局さぁ……」
団丸が遠慮がちに口をはさんだ。
「トンネルから侵入しないでわざわざ通用門をとおったのはさ、職員に罪を着せないためってことっしょ？
犯人は自分たちだって見せつけておいてさ。でもシ

ョップには、事件と無縁のダミーがいて本物になりすましているから、犯人の正体は謎になるって筋書きだったんじゃん？」
「そうだな」
「んでさぁ。破った壁は完璧に直してさ。このトンネルは隠し通すつもりだったんじゃん？　道具も材料もそろってるわけだしさ」
「うむ」
「じゃあさ。ルビーローズたちはなんで壁を直さなかったのさ？」
　団丸に聞かれて、りぶたんとヒナタは顔を見合わせた。
「夜勤職員はもう関係ないじゃん。逮捕したから動きが取れなくて、壁を直しに来れなかったって話はさ、もうちがうんじゃん」
「ほんとだよ」
　フレイムも話に割り込んできた。
「逮捕されて動けないのは夜勤職員で、ショップにいるのはダミーなんだよね。じゃあ、ルビーローズ一味はどこに行ったの？　壁を直せるのに直しに来ないで、

トンネルを隠そうとしていたくせに隠すのやめちゃって、ルビーローズ一味はどこに消えたの？」
フレイムはじっとりぶたんを見つめた。
団丸も答えを待っている。
けれども、りぶたんはその答えを持ち合わせてはいなかった。
「なぜだ？」
りぶたんは一味が強奪品を運び去ったと思われる方向をにらんだ。
「ブツを運び出したあと、なぜ戻ってこなかった？いや、そうではない。運び出す前に、先に、壁を直してしまうのが道理だ。修繕する気でいるのなら」
りぶたんの言うとおりだ。
ルビーローズ一味がトンネルの隠蔽（いんぺい）を目論んで壁を修繕する気なら、真っ先に直すべきだ。
盗んだブツをトンネルに隠し、通用門から地ノ塔の外に出て、犯人は自分たちだと見せつける。そして、どこかからトンネルに入って抜け穴までやってきたら、まず最初に用度室の壁を修復する。
トンネルを隠蔽するなら、それが最善の方法だ。

しかし、一味はそうしなかった。壁には手をつけずに、真っ先にブツを運び出した。
そして、そのまま戻ってこなかった。
戻らなかったばかりに、隠しトンネルは露見(ろけん)した。
用意した補修道具一式は無駄になった。
「ルビーローズ一味に、なにがあったのだ？」
準備万端整えておきながら、肝心の作業を放棄したルビーローズ一味。
ふと、りぶたんの背筋に冷たいものが走った。
地の底に横たわる暗いトンネルのどこかで、ルビーローズたちが闇に喰われて消えてしまったような、そんな気がした。

第五章　ペットモンスター

一

クローゼットの中にいたのはカマキリだった。
オオカマキリの幼虫で、羽はまだ生えていない。
羽を除けば見た目は成虫と変わらないのだが、小さい分、かわいらしかった。
成虫のオオカマキリなら、その昔「パーク建設予定地ブルー」に棲(す)みついていたローズウッドのように、凶悪そのものだ。クローゼットに押し込めたところでおとなしくはしないだろうし、そもそも押し込めることすら難しいだろう。いったいどれほどのリヴリーが犠牲になることか。
その点、クーたんはおとなしかった。クローゼットに入れても暴れたりはしなかった。外に出せば、りぶたんにすり寄ってきた。エサを与えると、むしゃむしゃとがっついて食べた。そして食べ終わってから、クーと鳴いた。

クーと鳴くから、クーたんと名付けられたのだった。
ちっこくてもモンスターなのに、甘えた声で鳴くのがまたかわいかった。しかし、鳴かないはずのカマキリが鳴く理由を思うと、りぶたんの気持ちは沈んだ。
クーたんは胸に火傷を負っていた。腹の火傷はもっとひどく、焼け焦げて体に穴があくほどだった。クーたんが腹をふくらませてからしぼませると、体にあいた穴からなぜだか音が出た。声を出して鳴いているように見えても、そうではなかった。音が出るのは、火傷のせいで障害が残ったからだ。
焼いたのはリヴリーだった。
リヴリーはモンスターを殺せない。技を使っていくら攻撃しても、モンスターは死なない。気絶するだけだ。だが、クーたんは技ではなく、道具を使って攻撃されていた。悪質なケースだった。ただし、違法ではなかった。モンスターを保護する法律などは存在しない。
大勢のリヴリーがよってたかって、カマキリの幼虫をリンチしているところに出くわし、りぶたんは怒声を張り上げた。相手が悪名高いＬＩＳＤの保安官だと

知って、不届き者どもは逃げ散った。あとに残されたのは、花火の燃えかすと、生きたまま焼かれて殺されかけた、小さなカマキリだった。

そばに寄ると、まだ幼いカマキリはおびえて後ずさった。ふるえる体で必死に逃げようとした。モンスターの面影はどこにもなかった。……いや。むしろ、つぶらな瞳でモンスターを見つめていた。緑色をした複眼に映し出されたそのモンスターは、ミミマキムクネの姿をしていた。

りぶたんは思った。

いったい、どちらがモンスターなのだろう。平和に暮らすリヴリーたちに襲いかかる巨大昆虫がモンスターなのか。それとも、巨大昆虫を見つけ次第、問答無用でリンチにかけるリヴリーのほうがモンスターなのか。

リヴリーは昆虫を食べる。昆虫は巨大化してリヴリーを襲う。もしかしたら、これは虫たちによる報復ではないのか。だとすると、もしもリヴリーが昆虫を食べなくなったら、世の中は変わるのだろうか？　少しは平和に、なるだろうか？

クーと鳴く声がした。
助けられて保護されて、すっかり元気になったカマキリの幼虫が、そっと前脚を伸ばして飼い主の頬をなでた。いっしょに暮らす大好きな飼い主にケガをさせることのないようにと、棘(とげ)のある鎌はしっかり折りたたんでいる。
「……クーたん……」
頬をなでる幼いカマキリの前脚を、りぶたんはなでさすった。
「りぶたん、いる？」
突然ドアが開いてヒナタが入ってきた。
りぶたんは大あわてでクーたんをクローゼットに隠した。幼虫でもカマキリだ。ちっこくてもモンスターだ。リヴリーといっしょに暮らすことは許されない生き物だった。
「どうした？」
クローゼットの扉を閉め、りぶたんは何食わぬ顔で返事をした。
部屋はワンルームだった。廉潔(れんけつ)をもって旨(むね)とするいまのＬＩＳＤは給料もろくに出ない。ヒナタに手伝っ

てもらって、島にログハウスを自分で建てた。ドアを開けると家の中が丸見えとなるのもあんまりなので、竹を使って屏風型のブラインドスクリーンもこしらえた。

クローゼットを覆い隠すように立ててあるスクリーンのおかげで、クーたんはヒナタに見られなかった。

「……」

なにやら気まずい雰囲気を感じ取ったのか、ヒナタは沈黙した。

「現場には助手たちを残してきたのか？」

りぶたんはブラインドスクリーンの陰から出た。たいしたことはなにもしていなかったようなそぶりでごまかした。

「……ううん。もう帰した」

ヒナタの声が重い。

「帰した？」

りぶたんは素知らぬふりを続ける。

「うん。防衛局の人たちがモグラコオロギを調べに来てね。しばらくかかるって言うから、戻るまで現場をお願いして、フーちんとまるたんには家に帰ってお昼

ご飯を食べておいでって、言っといた」
「そうか」
りぶたんは食卓についた。せまい家なのでほかにテーブルはない。ただし、椅子だけは二脚用意してある。家まで訪ねてくるのはヒナタだけだから、もうひとつはヒナタ専用の椅子だ。
フレイムに用があって三人で集まるときは、フレイムのアトリエに押しかけるか、保安官事務所を使う。坊やのフレイムではあったが、乙女の自宅を訪ねるのは気が引けるらしく、りぶたんの島にやってくることはなかった。
「それで応援はどうだったの？　誰か協力してくれる人、いた？」
「うんにゃ。ひとりもいなかった」
「やっぱりね……」
ヒナタは溜息をつきながら、椅子に腰掛けた。
ＬＩＳＤは評判が悪い。過去に何人もの悪徳保安官を出し、世間を騒がせてきたせいで、りぶたんとヒナタによって生まれ変わったいまでも、昔の陰口がついて回る。

特に、管理機関の職員からは蔑(さげす)まれることが多い。各機関の長はいずれも管理リヴが務めているが、LISDの長はりぶたんだ。保安官ではあっても管理リヴではないから、どうしても格下だと軽んじられてしまう。

それにLISDだけが地ノ塔に事務所を開設できないことも見下される原因となっている。資金に困って「GLL城B(ビーワン)I地下倉庫」を無償で借り受け、そこを事務所としたことも輪をかけている。LISDと呼ばずに、陰でこっそり倉庫番と呼ぶ職員もいるのだ。

しかし、りぶたんとヒナタはくじけなかった。

いばらの道ではあっても、それがふたりの望んだ道だった。

「結果的に今回は、やりすぎちゃったものね」

「そうだな」

「夜勤の職員さんたちは牢屋に入れたし。地ノ塔を封鎖したから業務に支障が出たし。抜け穴調べで動かした机とかは、ほったらかしで元に戻さなかったし。また嫌われちゃったよね」

「すまん」

りぶたんは小さく頭（こうべ）を垂れた。
「なに言ってるの。わたしだって賛成したことじゃない。それに、これはわたしたちの選んだ道だもの。りぶたんのゆく道はわたしの道。わたしのゆく道はりぶたんの道。ふたりでそう決めて、これまでずっとやってきたんだもの。これからも、ずっとやっていくんだもの。ずっとずっと、いつまでもいっしょに。ねっ」
「うん」
どすこい娘がはにかんで、ちょっぴり頬が赤く染まった。
「それでクローゼットには誰がいるのかな？」
ピキがいじわるく笑った。
「え？」
「あわてて誰かを隠したとこ、見ちゃったもん。わたしがドアを開けたら、ちょうどその人の名前を呼んでたでしょ？　あんなところに隠れて、ふたりでなにをしていたのかな？　相手は誰なのかな？　彼氏？　ねえ、彼氏でしょ？　こいつぅ」
ヒナタは指を伸ばして、ミミマキムクネのほっぺをぷにっと押した。

「ちがっ！　そんなんじゃ……！」
「さっ！　紹介して！」
いきなり立ち上がると、りぶたんを出し抜いてヒナタは一気にダッシュした。
「ちがうってば！」
りぶたんも椅子から立ち上がって、ヒナタを捕まえようとしたが手遅れだった。せまい家の中では、ダッシュを許した時点で勝負はついた。
「さあて。りぶたんの彼氏はどんな人かな？」
期待に胸をふくらませて、ヒナタはクローゼットを開けた。
「クー」
がらくただらけのクローゼットの中に、カマキリがたたずんでいた。
「かっ、かっ、……彼氏！」
「カマキリっ」
指をさして、どもりながらもボケてきたヒナタのその手をはたいて、りぶたんはツッコミを入れた。
「ちぇ」
「ちぇじゃない」

「彼氏かと思ったのにぃ」
「彼氏じゃない」
がっかりして肩を落とすヒナタと、なぜだか勝ち誇るりぶたん。しかし、ふたりの立場はすぐに逆転した。
「で、また拾って来ちゃったのね」
「……ごめん」
りぶたんがシュンとなった。
「この子がケガしているところを見ると、なにがあったか手に取るようにわかるけど」
「クー」
「え？　いま、この子鳴いたの？」
ヒナタが驚いた。鳴く昆虫も多いが、カマキリは鳴かない。
「そういえば、さっきのもこの子なの？　てっきり、なにかが軋(きし)んだ音かと……」
「うん。お腹をやられたところがちゃんと治らなくて、音が出るみたい」
「そう……」
言葉をなくしたヒナタに、クーたんが近づいた。
小首を傾げて、初めて会ったピキを見上げると、ク

ーたんは鎌を折りたたんだ前脚でヒナタの手に触れた。
まるで、手をつなぎたがっているかのようだった。
「かわいい！」
「ね！　名前はクーたんってつけたんだ。それでねー
ー」
「りぶたん」
　ヒナタの声が急に冷たくなった。
「いっしょには暮らせないってこと、わかってるでしょ」
「……ごめん」
「ようやく、ここまで来たのよ。でも、まだなにも始まってないのよ」
「……うん」
「前の保安官は悪い人だったけれど、それでもリコールするのはたいへんだった。保安官選挙は圧勝したけれど、それでも気は抜けなかった。そうして、わたしたちはLISDを手に入れた。どうして保安官になったのか。なんのために権力が必要なのか。もちろん、覚えているよね？」
「うん。あたし、絶対に忘れない」

「それなのに、りぶたんがここで降りてどうするの？
　このカマキリが、クーたんが、目を離した隙に誰かにケガをさせたらどうするの？　いまはおとなしくてかわいくても、大きくなれば獰猛なモンスターになってしまうのよ。そして、責任を取ってりぶたんが保安官を辞任することになったら、わたしたち、せっかく手に入れたＬＩＳＤを手放すことになるのよ。やっとここまで来れたのにっ！」
　ヒナタは本気で怒っていた。
「……ごめんよ。ヒナたん」
　りぶたんはうなだれた。
「あれから、もう何年になるのかな」
　ヒナタの声がやさしくなった。
「あの日。わたしたちのゆく道が決まったよね。ふたりで泣きながら、誓いあったよね」
「うん。覚えてる」
「ねえ、りぶたん。わたしたちふたりで決めた、この道。とっても険しい道だけれども、あの日のわたしたちをもう二度と悲しませないように、最後までしっかり歩こうよ。いつまでもずっと、ふたりでいっしょに

歩こうよ」
「うんっ」
ピキが両手を伸ばして、ミミマキムクネの両手をつかんだ。
ふたりは、手と手を固く握りしめあった。

2

茂みの奥でなにかが動いた。
原っぱには誰もいなかった。りぶたんとヒナタだけだった。
ふたりでどんぐりを拾っては、遠くに投げて遊んでいた。拾うことにも、投げることにも、意味はなかった。ただの遊びだ。
ふたりはまだ子供だった。
投げたどんぐりが転がって、茂みに入っていった。両手で抱きかかえるのがやっとの、大きなどんぐりだった。枝を押し分け、葉っぱを押しのけ、どんぐりは茂みの中で騒がしい音を立てた。
その音に驚いたように、茂みの奥でなにかが動いた。

「なんかいるー」
りぶたんは茂みを指さして、ヒナタを見た。
「行ってみよっ」
ヒナタはりぶたんの手を引っ張って、茂みの中に入っていった。
茂みの奥に隠れていたのは茶色のカマキリだった。まだ幼虫だ。
のけぞるようなしぐさで、突然目の前に現れたリヴリーを警戒している。
「これ、食べれる？」
じっとカマキリを見ながら、りぶたんが聞いた。
「えー、モンスターだよ」
「これ、こわい？」
「こわくないよ、赤ちゃんモンスターだもん」
「じゃあ、りぶたん。お友達になる」
「モンスターと？」
「うん。なかよくする」
「じゃあ、ヒナタもそうする」
幼いふたりは、幼いカマキリと友達になることにした。

りぶたんもヒナタも、モンスターを攻撃するような呪文はマスターしていなかった。
そして、カマキリの幼虫もリヴリーを攻撃できるほど大きくはなかった。
互いに相手を攻撃できない者同士の出会いは、とても平和だった。
「名前はどうしよっか？」
「あのねえ。りぶたん、チョコたんにする。ヒナたんは？」
「それじゃあ、ヒナタもチョコたんにする」
「やったあ！」
茶色のカマキリはチョコたんと名付けられた。
ヒナタがおやつのウスバカゲロウを与えて、ふたりでチョコたんがご飯を食べるところを見守った。
「食べてる食べてる」
「お腹すいてたんだね」
「うん」
出会いは平和だった。
しかし、長くは続かなかった。
原っぱに若者の集団がやってきた。子供を追い払い、

傍若無人に振る舞う不良どもだった。
「悪いお兄ちゃんたち、また来たー」
「しー。見つかったら、チョコたんがいじめられちゃう」
「うん。りぶたん、静かにする」
茂みの奥で子供たちは息を潜めた。隠れるのは得意だった。
けれども、カマキリのチョコたんはそうもいかなかった。名前をつけて、ご飯をあげて、友達になったつもりでいても、言葉は通じない。意思の疎通(そつう)はできない。相手はただのモンスターだ。
カマキリは好き勝手に動いた。
りぶたんとヒナタを警戒して隠れていたくせに、なにもしないでエサまでくれたふたりが無害だとわかると、幼さゆえにリヴリーそのものが無害だと判断してしまったのかもしれない。
「動いちゃダメ」
「じっとしてなくちゃダメ」
子供たちの警告は、モンスターには届かなかった。
「おっ、見ろよ。チーカマじゃねえか」

「暇つぶしにちょうどいいや。やっちまおうぜ」
「マジかよ。弱すぎてつまんねえよ」
「そんならよ。どんぐりぶつけるっつーのはどうよ？」
「なにそれ。だっせえ」
「うるせえよ」
獲物を見つけた不良どもがチョコたんを取り囲んだ。
「ダメーっ！」
我慢できずにりぶたんが飛び出した。
「いじめちゃダメっ！」
「なんだ、このチビ？」
「ほっとけよ、ガキなんか」
必死になって飛び出した幼い子供の心中を、思いやるような相手ではなかった。
不良どもはどんぐりを拾い上げると、カマキリめがけて力いっぱい投げつける遊びを始めた。
「ダメーっ！」
チョコたんを守ろうと、ヒナタも飛び出した。
「いじめないでっ！」
ヒナタは両手を広げてチョコたんの前に立ちふさが

り、自分の体を盾とした。
「じゃますんなよ、ガキ！」
「そこにいると当たるぞ、チビ！」
「つーか、むしろ当てろ！」
不良のひとりがわざとヒナタを狙った。
幼いピキの頭よりも大きなどんぐりが、ヒナタのおでこに命中した。
大きさに比例して、重さもそれなりにあるどんぐりだった。しかも、たちの悪い不良が手加減することなく、力いっぱい投げつけている。
ぶつけられた衝撃でヒナタは頭を反らせ、崩(くず)れ落ちるように尻餅をつき、仰向けにひっくり返った。
「うわーんっ！」
大声で泣きわめきながら、りぶたんが突進した。
目の前でチョコたんばかりか、大好きなヒナタまでいじめられ、考えるよりも先に体が動いた。
「うおっと！」
一発ぶちかまそうと頭から突進してきた幼いミミマキムクネを、不良のひとりが片手で押さえた。
人数も、体格も、初めから勝負にはならなかった。

「チビのくせに、生意気なんだよ！」
不良は上から圧力をかけて、押しつぶすような感じでりぶたんを突き倒した。倒されて腹這(はらば)いになったりぶたんの足をつかむと逆さまに持ち上げ、ハンマー投げの要領で遠心力をつけてから放り投げた。
りぶたんは遠くまで飛ばされた。斜めに飛んで、木の幹に腰からぶち当たり、弾みで水平に回転しながら茂みの向こうに落ちていった。
「うは！　いまのおもしれー！」
「ムクネ投げ世界新記録っつーことで」
「ミミマキ死んだんじゃね？」
「つーか、そこのピキ。もう動かねえし」
「爆笑」
小さな抵抗者を情け容赦なく排除した不良どもは、ターゲットをカマキリにしぼって、リンチを続行した。
大きなどんぐりを拾っては力いっぱい投げつける。よってたかってみんなで投げつける。無抵抗のカマキリの幼虫を、バカ笑いしながら攻撃し続ける。
やがて、チョコたんはぐったりと地面に伸びて動かなくなった。

ぷりぷりと音を立てて、ほんのわずかなドゥードゥーをチョコたんは漏らした。
「しょぼっ」
文句を言いながらも、不良どもは我先にドゥードゥーを拾った。
拾い終わると、もう動かなくなった獲物に対してリンチを再開した。
弱者を痛めつける残虐（ざんぎゃく）な遊びは、いつまでも続けられた。
ヒナタは横たわったまま、動かなかった。目をつぶっている。気絶したのかもしれない。
りぶたんはぼろぼろの体で茂みから出てきた。
ヒナタもチョコたんも、地面に横になって動かないのを見ると、よろめいていたりぶたんの背筋が伸びた。怒りのあまりに、いつもは垂れ下がっている耳の毛がわずかに持ち上がった。巻かれた螺旋も広がって、大きくふくらんだ。
幼いながらも知恵をしぼって、りぶたんは今度は無言のまま突進した。
全力で駆けて、ついさっき自分を投げ飛ばした不良

の背中に頭突きをぶちかました。不良はちょうど、どんぐりを拾おうとしてかがんでいた。
「いってぇーっ！」
思わぬ反撃を食らって、不良は声を上げた。
しかし、口で言うほどに痛みがあったかどうかは疑問だ。
全力でぶちかましたにもかかわらず、りぶたんは逆に跳ね飛ばされた。どんなに勢いをつけても、体格の圧倒的な差は埋めようもなかった。
「うわ！　だっせえ、こいつ！　チビにやられてやがんの！」
「うるせえ！」
仲間に嗤われて、反撃を食らった不良がキレた。
「このガキ！　ぶっ殺してやるっ！」
不良は、ミミマキムクネの長い耳の毛を片方だけ引っつかむと、そのままちぎりそうな勢いで持ち上げた。
「ぐっ……！」
片方の耳の毛にりぶたんの全体重がかかった。
手を伸ばして抵抗しようにも、ちっちゃなおててはとどかない。

いくら体の小さな子供でも、体毛で体重を支えれば泣きたくなるほどに痛い。子供だけになおさらだ。
それでも、りぶたんはもうわめいたりしなかった。くやしくて涙はぽろぽろこぼれたけれども、唇を噛みしめ、ぐっと痛みをこらえ、不良をにらみつけた。
そして、短くて届かない足で、何度も相手を蹴ろうとした。
何度も。何度も。……何度でも。
「てめえら！　なにをしてやがるっ！」
しわがれた大声が原っぱに響き渡った。耳にしただけでふるえが来そうなほど、迫力のある声だった。
「そこを動くんじゃねえ！」
別の大声も響いてきた。こちらもまたドスのきいた声だった。
「ヤクザだ！」
「やっべえ！」
「逃げろっ！」
弱い者には強かった不良どもが、あっという間に飛んで逃げていった。
手を放されて、りぶたんは落下した。突然のことで

うまく着地はできなかった。地面で背中をしたたかに打ち、息が苦しくなった。
「なんて無道なことをしやがる！」
しわがれた声の主に、りぶたんは抱え起こされた。ショウジョウダルマの老人だった。
「こりゃ、ひでえや。叔父貴（おじき）。お嬢（じょう）と同じくらいの歳の子ですぜ」
遠くまで放り投げられて全身傷だらけの子供を、心配そうにのぞき込んだもうひとりもまたショウジョウダルマだった。
「おい。いまのハナタレ小僧どもを取っ捕まえてこい」
老人が命令した。感情を抑えた声に、怒りのほどがうかがえた。
「すぐに若いもんを走らせまさぁ。一歩間違えりゃ、お嬢がこんな目に遭（あ）わされたかもしれねえ。イカレたガキども、ただじゃおかねえや」
もうひとりのショウジョウダルマは飛び去った。
あとには老人が残った。
「……ヒナたんは？　……どんぐりぶっつけられた、

ヒナたんは？」
老人の腕の中で苦しそうに息をしながらも、りぶたんは真っ先にヒナタの心配をした。
「ピキの子かいな。ケガしとらんとええが」
老人はりぶたんを抱え上げて、ヒナタのところまで連れて行った。
「これ、嬢ちゃんや。……これ」
りぶたんを抱きかかえたまま、老人は地面に横たわるヒナタを揺すった。
「……！」
しばらく反応しなかったヒナタは、いきなり跳ね起きた。
「おっと。じっとしてな、嬢ちゃん。これは何本か、わかるかいな？」
老人は指を一本立てて、ヒナタの眼前に突き出した。
「一本……」
ヒナタは答えてから、不思議そうな顔で老人を見た。
「うむ。もうだいじょうぶ。ちぃと頭がしびれとったのじゃろうて」
どうやら、ヒナタは脳震盪（のうしんとう）を起こしていたようだ。

「チョコたんは？　ねー、どんぐりぶっつけられた、チョコたんは？」
ヒナタの無事を確認すると、りぶたんはせがむように老人に訴えた。
「ん？　カマキリかいな？」
「チョコたん、さっきお友達になったの。りぶたんとヒナたんとなかよしなの」
「なるほどのう」
老人はヒナタもいっしょに抱え上げて、カマキリのところまで子供たちを運んだ。
「む……」
カマキリの幼虫は死んでいた。気を失ったのではなく、命を失ったのだと、老人にはひと目でわかった。
モンスターを殺せる技はリヴリーにはないが、道具を使えば殺すことは可能だ。そして、不良どもはどんぐりを道具として使ったのだった。
「チョコたんも頭がしびれてるの？」
りぶたんは老人に聞いた。
「……」
老人は返事に困った。とりあえず、ふたりを地面に

降ろした。
「チョコたん、これ何本？」
りぶたんは老人のまねをして、指を一本立ててカマキリの死骸に突きつけた。
老人がヒナタに指を数えさせた意味は、りぶたんにはわからなかった。寝ている者を起こすおまじないだと思っていた。
「……チョコたん、死んじゃったの？」
ヒナタが老人に聞いた。
「うんにゃ。死んどらん。気絶しとるだけじゃて」
老人はうそをついた。
「チョコたん、起きて。これ何本？」
「チョコたん、死んじゃったのよね？」
同い年のふたりだったが、成長の度合いには差があった。りぶたんはまだまだ幼く、ヒナタはもうしっかりしていた。
「うんにゃ。ええか、嬢ちゃんたち。リヴリーはのう、モンスターを殺せないんじゃ。じゃからして、このカマキリは死んどらん」
老人はうそを突き通すことにした。

「うそ」
しかし、ヒナタには通じなかった。
「それ、技の話だもん。ヒナタ、知ってるもん。悪いお兄ちゃんたち、技は使わなかった。どんぐりぶつけてた。チョコたん、死んじゃったんでしょ？」
「……うむ」
うそを見破られた以上、老人もうなずくしかなかった。
「……えっ……えぐっ……」
ようやく事の次第を呑(の)み込めたりぶたんがべそをかき始めた。
「……うっ……うえっ……うえーんっ」
嗚咽(おえつ)をこらえきれなくなったりぶたんは、火がついたように大声で泣き出した。
友達に泣かれて、ヒナタもこらえきれなくなった。自然に涙があふれてきた。
「ええ。ええ。いっぱい泣いたらええ」
老人は子供たちの気がすむまで泣かせることにした。
「泣くのが終わったら、カマキリを埋めてやろうのう」

「どうしてチョコたんは殺されたの？」
握りしめた拳で涙を拭いながら、ヒナタが質問した。
「モンスターじゃからかのう」
「どうしてモンスターは殺されるの？」
「リヴリーとモンスターはのう。仲が悪いんじゃ」
「どうしてなかよくできないの？」
「そうじゃのう。なかよくできたらええと、わしも思っとるんじゃよ」
老人は子供たちの頭をなでた。
「りぶたん。チョコたん、埋めてあげようよ」
「……んっ……ぐすっ……」
涙を拭き拭き、りぶたんがうなずく。
「よし。わしが嬢ちゃんたちを秘密の場所に連れてってやろう」
「秘密の場所？」
ヒナタは泣くのをやめた。涙はこらえて、むりやり止めた。
「うむ。すぐ近くにあるんじゃが、とても遠い場所じゃでな」
「近くて遠いの？　それ、天国？」

りぶたんはまだ涙をこぼしている。
「はっは。天国に行くのは困るのう。わしにゃあ、まだまだ、やらねばならんことがあるでな」
老人は子供ふたりを片手で抱きかかえた。そしてもう片方の手で、カマキリの死骸を持ち上げた。
「誰も来ない場所に連れてってやろう。そこなら、カマキリも静かに眠れるじゃろうて。お墓も壊されたりはせんからのう」
老人は茂みの奥に向かって歩きだした。
茂みを抜けると、広大な空間が見えた。遠くまで青い空が広がっている。空の下にはどこまでも続く原っぱがある。
それは別に珍しい光景ではなかった。見慣れた光景だった。
りぶたんもヒナタも、かくれんぼや鬼ごっこで、茂みを抜けたことは何度もある。原っぱの向こうにも原っぱがあることは前から知っている。だだっ広い原っぱが存在することは、誰だって見ればわかる。
しかし、存在を知ってはいても、なぜだか足を運んだことはなかった。目には見えても、ないも同然の空

間だった。不思議なことに、誰もいない広大な原っぱがあると知りながら、そこに行ってみようと考えたことは一度もなかった。

老人の歩みは止まらなかった。

りぶたんとヒナタの思考が止まった。なにかを考えることも、思うことも、急にできなくなった。ただ目を開けて、景色を漫然(まんぜん)と見つめていた。

その目も勝手に閉じた。頭の中がむぎゅっとなった。世界が小さく押しつぶされて頭の中に入ってきた。押し込められた世界はさらに小さく縮んで、脳内でぐるぐると回転した。

そして世界は回るのをやめると、一気に弾けた。頭の中から世界が飛び出して広がっていった。子供たちは驚いて目を開けた。目を開けると、そこにはふだんとなにも変わらない世界があった。

「さあ、ここじゃ」

老人は歩みを止めた。

原っぱから歩いただけだった。どこにもテレポートはしていない。それに、歩いた距離もたいしたことはない。

だが、そこはもう遠い場所なのだと、地面に降ろされた子供たちも肌で感じた。近くて遠い、不思議な場所にやってきたのだと。
「頭がむぎゅってなったー」
りぶたんは老人を見上げた。
「変な感じだったよね？」
ヒナタはりぶたんに聞いた。
「うん」
りぶたんがうなずく。
「ここはのう。秘密の場所なんじゃ。誰にも言うてはならんぞ。カマキリを埋めてやるんじゃからのう」
「りぶたん、ないしょにする」
「ヒナタもないしょにする」
「よしよし。いい子じゃ。さて、穴を掘ろうかいな」
老人はカマキリの死骸を地面に横たえると、手ごろな大きさの石を拾い、穴を掘り始めた。
それを見て、りぶたんとヒナタもまねをした。石を拾って、ちっちゃなおててで手伝った。
穴はすぐに大きくなった。子供たちが加勢したとはいえ、ほとんど老人がひとりで掘った穴だった。

「よし。このくらいでよかろうて」
穴の中にカマキリの死骸が安置された。
「さ、埋めておやり」
老人にうながされて、子供たちはカマキリの死骸に土をかけた。
途中でりぶたんが何度かしゃくりあげたが、泣き出すのはこらえた。
りぶたんとヒナタはふたりで協力して、チョコたんを埋めた。
「ヒナタ、お花摘んでくる」
「りぶたんもー」
子供たちが花を探して駆けだした。
花々が咲き誇るような原っぱではなかったが、所々に名もない小さな花が咲いている。りぶたんとヒナタは連れだって、名もない花を摘んで回った。
老人はかぶせた土を手で押し固めると、最後に、穴を掘るのに使った石を墓標(ぼひょう)代わりに置いた。
かわいらしいお花を摘んできた子供たちは、今度も老人をまねて、自分たちが使った石を墓標とした。それから花びらをきれいに並べて、供(そな)えた。

「しっかり拝(おが)んでおくのじゃぞ。ここにはもう来れんからのう」
「えー。りぶたん、明日も来る」
「そりゃ無理じゃ。嬢ちゃんたちはここには来れんのじゃ」
「だいじょうぶ。りぶたん、おじいちゃんに連れてきてもらう」
「おじいちゃんとな？」
首を傾げる老人を、りぶたんはまっすぐ指さした。
「わしかいな。……なあ、嬢ちゃんたち」
老人はしゃがむと、子供たちと同じ高さの目線で話しかけた。
「リヴリーとモンスターがなかよくできたらいいと思わんか？」
だまってうなずく子供たちに、老人は熱心に語り始めた。
「わしにはのう。嬢ちゃんたちと同じくらいの歳の孫がおるんじゃ。女の子なのに腕白(わんぱく)でのう。悪そうばっかりしよるんじゃが、いつかモンスターに手を出して、とんでもないことになりゃせんかと、わしは心配しと

るんじゃよ。モンスターものう。チョコたんみたいにおとなしかったらええが、中にはこわいのもおるからのう」

子供たちはうんうんとうなずく。

「それでのう。わしは偉い人に会うて、リヴリーとモンスターをなかよくさせてくれるよう、頼むことにしたんじゃ」

「偉い人って？」

ヒナタが聞き返す。

「ミュラー博士じゃ」

「博士はどこにいるの？」

「うむ。ずっとずっと遠くにな、おられるのじゃよ。天よりも、ずうっと高いところにのう」

老人は大空を見上げた。

「りぶたん、知ってる。それ、天国」

「はっは。嬢ちゃんにはかなわんのう。ミュラー博士に亡くなられたら困るんじゃ。なんせ、このわしは、これから博士に会いに行くんじゃからのう」

老人は両手を子供たちの肩に置いた。

「なあ、嬢ちゃんたち。わしはこれから遠くまで行か

にゃあならん。嬢ちゃんたちをこの場所に連れてきてやることは、もうできん。その代わりじゃ。嬢ちゃんたちが大きくなるまでに、リヴリーとモンスターがなかよくいっしょに暮らせる世界にしてやろう。博士に会うて、頭を下げて、頼み込んで、平和な世界にしてもらうんじゃ」

「ほんと？」

ヒナタの顔が明るくなった。

「うむ」

「わあ！」

りぶたんもうれしくてたまらない顔で、ヒナタと見つめあった。

「さあ。チョコたんにお別れじゃ。これが最初で最後の墓参りじゃからのう」

「うんっ」

モンスターとなかよくできる未来がやってくる。

その言葉を信じたりぶたんとヒナタは、ちっちゃなおててを合わせた。ふたりで並んでチョコたんのお墓を拝んだ。

「チョコたん、ヒナタのこと忘れないでね」

「チョコたん、りぶたんのことも忘れないでね」
手を合わせて拝んでいると、目頭が熱くなってきた。
ついさっきまで、元気にしていたチョコたんだった。ご飯もおいしそうに食べていた。それなのに、いまはもう動かない。動かないで、冷たく暗い土の下にいる。
りぶたんの目から涙がぽろりとこぼれた。
ヒナタの目からもしずくが滴り落ちた。
ショウジョウダルマの老人が平和な未来をもたらしてくれても、チョコたんは生き返ったりしない。チョコたんはこのままだ。このままずっと、土の下。
「チョコたん、かわいそう」
りぶたんが嗚咽を漏らした。
ヒナタは手を伸ばしてりぶたんの両手を握りしめた。自分の体をりぶたんに向け、握りしめた手を引っ張って、りぶたんを自分のほうに向き直らせた。
「ねえ、りぶたん。チョコたんは助けてあげられなかったけれど、未来のチョコたんは助けてあげようよ。ヒナタとりぶたんで、ふたりで力を合わせて、リヴリーとモンスターがなかよくいっしょに暮らせる世界にしようよ。そうしたら、チョコたんも安心して生まれ

変わってこれるよ、きっと」
「うんっ」
こぼれる涙を拭おうともせずに、ふたりはちっちゃなおててを強く握りしめあった。

3

雨が降った。
風も吹いた。
夏には太陽が照りつけ、冬には雪がつもった。
それでも、チョコたんのお墓は昔のままだった。
墓標代わりに置かれた三つの石が、ほんのちょっぴり地面に埋もれている。大きな石がひとつ。小さな石がふたつ。あの日と同じ場所に、いまもある。
「あのときのままね」
ヒナタはお墓を見つめた。
時は流れても、思いはいつでも過去に帰る。
お墓も。ふたりも。なにもかも。あのときのままだった。
「そうだな」

りぶたんは強くなった。
いまではＬＩＳＤの保安官だ。あのときは守ってやれなかったチョコたんも、いまならかすり傷ひとつ負わせることなく守ってやれる。
「結局、あのじいさんには二度と会えなかったな」
「そうね。おじいさん、元気でいてくれるといいな」
あの日の次の日。りぶたんとヒナタは原っぱでショウジョウダルマの老人を待った。
次の日も、そのまた次の日も、待ち続けた。
老人が遠くに行くことはわかっていた。ミュラー博士に会いに行くなどと、ふつうなら鵜呑(うの)みにしないようなことでも、幼い子供たちは信じた。なにより、原っぱで暴れ放題だった不良どもが、あの日を境にぷっつりと姿を見せなくなったことで、真実味も増した。
悪いお兄ちゃんたちはお灸(きゅう)をすえられたんだよ。ふたりでそう話し合った。
老人が遠くに行くとわかっていて、幼いふたりは待ち続けた。一縷(いちる)の望みにすがったのだ。もしかしたら、まだ出発していないかもしれない。また原っぱに来てくれるかもしれない。そう思った。

しかし、老人は二度と再び、ふたりの前に姿を現すことはなかった。

ふたりは成長した。

成長して大きくなった。

大きくなって、ＬＩＳＤの保安官と副保安官になった。ふたりは真っ先に、あの日の不思議な老人のことを調べた。

老人が連れて行ってくれた秘密の場所はプロテクションゾーンであろうと、ふたりは見当をつけていた。長い間、どこにあるのかわからなかったチョコたんのお墓も、プロテクションゾーンをフリーパスできる特権を手に入れてみれば、あっさりと見つかった。

いつもの原っぱの奥にあるプロテクションゾーンに、お墓はあった。老人が言ったように、すぐ近くでとても遠い場所だった。

お墓の場所は判明したが、老人の正体はわからずじまいだった。

プロテクションゾーンに出入りできたからには、老人は管理機関の職員かとも思われたが、それらしい人物は当時の職員名簿には載っていなかった。それに不

良どもは、老人と連れの男をヤクザと呼んだ。ヒナタは脳震盪を起こしていて記憶が曖昧だが、りぶたんははっきりと耳にしている。

ヤクザならＬＩＳＤに資料が残っていそうなものだが、不思議なことに当時の資料だけが抜け落ちていた。

それでも、一度だけ情報が舞い込んだ。

――その昔、ショウジョウダルマの親分が博徒の一家を構えていたという。なにかと面倒見のいい親分を慕って、賭場では気っぷのいい乙女が壺を振っていたそうな。

古い話とあって、情報はたったそれだけだった。

老人が本当にヤクザならば、管理機関の職員だったとは思えない。しかし、そうなると御法度稼業のヤクザがプロテクションゾーンに出入りできたことになり、それもまたＬＩＳＤのふたりには信じられない話だった。

「そういえば、団丸はマインドウォールが効かないそうだ」

「ほんと？」

「うん。生まれつき効かないと本人が言っていた」

「おじいさんもそうだったのかな？」
「じいさんもマインドウォールが効かなかったのなら、団丸同様、プロテクションゾーンへの出入りも自由だったろうな」
「ふたりともショウジョウダルマね」
「うん」
「おじいさん、わたしたちと同じくらいの歳の、孫娘がいるって言ってたよね」
「うん」
「もしかすると、もしかする？」
「まさか」
　りぶたんは一笑に付した。
「世の中、そんなにせまくはない。あれだけ捜しても、どこの誰やらわからなかったじいさんの、孫娘がいまはあたしたちといっしょにいるだなんて」
「そうね。おじいさん、捜しても見つからなかったよね。でも、まるたんも誰かを捜していて見つからなかったのよね」
「……」
　りぶたんは無言でヒナタを見つめた。

「もしかすると、もしかする？」
「まさか」
　否定するりぶたんの声が小さかった。
「おじいさん、わたしたちが大きくなるまでに、リヴリーとモンスターがなかよくいっしょに暮らせる世界にしてやるって、言ってくれたのに。わたしたち、もう大きくなっちゃったね」
「うん。でも、じいさんは失敗したわけじゃない」
「そうよね。おじいさんのおかげで、いま、わたしたちがこうしてここにいるもの」
「クー」
　散歩に飽(あ)きたのか、クーたんが鳴いた。
「放してもだいじょうぶそうね」
「……うん」
　りぶたんがないしょで飼っていたカマキリを逃がすために、ふたりはプロテクションゾーンまでやってきたのだった。
「もっと遠くで放さないとね」
「……うん」
「りぶたん。わたしたち、大事なお仕事の途中なの

よ」
　気分が沈んでいるりぶたんに、ヒナタは発破(はっぱ)をかけた。
「これから地底トンネルを調べなくちゃならないのよ。アウターゾーンなんだから。どんな危険が待っているか、わからないんだから」
「そうだな。あたしたちふたりでやらないとな」
　りぶたんは、自分たちふたりだと言った。
「やっぱり、あの子たちは連れて行かないつもりなのね」
「うん。応援がいるならまだしも、誰にも協力してもらえなかった以上、危険な捜査にあいつらを巻き込むわけにはいかない。ヒナたんだって、そのつもりでふたりを家に帰したんでしょ？」
「ちぇ。バレてる」
「ちぇじゃない」
　ふたりはくすくすと笑いあった。
「じゃ、急ごうよ。お昼休みが長くなると、フーちんに怪しまれそう」
「フレイムか。あいつは深く考えることなしに、いき

なり答えにたどり着いてしまうようなところがあるからな」
「理詰めじゃなくっても、物事の本質をしっかり見抜いてしまうのは画家としての才能なのよ」
「じゃあ、その才能は絵で活かしてもらうとするか」
「そうね。保安官助手になって張り切っているおふたりさんには悪いけれど、そのままずっとお昼休みを過ごしてもらって、危険な仕事はわたしたちでやろうね」
「うん。おいで、クーたん」
りぶたんはクーたんに向かって手招きをした。
「クー」
すっかりりぶたんになついているカマキリのモンスターは、呼ばれるとすぐにそばまで来た。
りぶたんはクーたんを抱きかかえるようにして自分の体に止まらせると、ヒナタに告げた。
「グラスガルフに放そう」
「あそこなら、怪物密林に近いものね。クーたんもそっちに行ってくれるよね」
「うん」

ひとこと答えて、りぶたんは飛び去った。
ヒナタもすぐに跡を追った。

怪物密林は文字どおりジャングルだった。
凶暴なモンスターがうようよしている暗黒地帯だ。
怪物の森にもモンスターは出るが、恐ろしさは密林の比ではない。
そもそも怪物の森は、怪物密林の一部だ。密林に生い茂る木々は段々とまばらになって、周辺部では森となる。森と密林に明確な境界はない。ジャングルと呼べるほど木が生い茂ってはいない端っこが、森と呼ばれているにすぎない。
森は草原に接している。突然、木がなくなるのでこちらの境界ははっきりしている。
その草原が森に食い込んでいる一角がある。草原が食い込んだというよりは、森がへこんでいるというべきだろうか。地形によるものか、地質によるものか、定かではないが、森に深々と食い込んで密林にまで達している。
木がなくて見通しがいいため、草原は森や密林より

も安全だ。逆にモンスターにとっては危険が増すようで、草原にはあまり出没しない。そのため、怪物密林にまで食い込んだ草原は、草の湾「グラスガルフ」と名付けられ、ＬＩＰＳ（リップス）の管理下に置かれた。

つまり、グラスガルフは安全にテレポートできる最も遠い場所のひとつであり、最も怪物密林に近い場所だった。

りぶたんとヒナタはそこに降り立った。

ヒナタはふと視線を感じて振り返った。

遠くに物見櫓が見える。てっぺんの監視所で、なにかが日光を反射してきらりと光る。双眼鏡かなにかで監視員がこちらを見ているようだ。

「すぐにチェックが入るなんて、仕事熱心ね」

ヒナタは遠くの監視所に向かって敬礼をした。

先方はすでに、ＬＩＳＤの制帽を確認していることだろう。保安官と副保安官が公務で訪れたと、判断したにちがいない。ヒナタの敬礼はほんのご挨拶（あいさつ）だった。

「ここはプーケ線の真上だからな。連中も気は抜くまい」

りぶたんは抱きかかえていたクーたんを地上に降ろ

した。
プーケ線とはモンスター防衛線のことだった。
防衛局長プーケの提案により構築された要塞線だ。四つの要塞を拠点にして、怪物密林を堰(せ)き止めるような形で弓形(ゆみなり)に延びている。
グレート・リヴリー・ランドの開発に先駆けて、怪物密林に潜むモンスターの脅威からリヴリーアイランドを守るべく、要塞が築かれた。
要塞は司令官の名を取ってそれぞれ、ミューミュー要塞、ジュリエット要塞、プーケ要塞、ダークヤグラ要塞と命名された。ふだんは防衛武官を要塞司令官代理として配置してあるが、有事の際にはミューミューたち管理リヴがすぐさまテレポートして陣頭指揮を執(と)ることになっている。
要塞の建設は安全確保を目的として行われたのだが、建設時の騒音か振動かが、怪物密林のモンスターを刺激したようだ。皮肉なことに安全を求めた結果、モンスターの大規模襲撃を誘発する事態を招いてしまった。
世に言う「モンスター津波」である。
強大なモンスターをも撃破できるよう、要塞には

「要塞砲メガスリング」を配備してあった。だが、大地を埋め尽くし、大空を覆い隠し、さながら津波のごとく押し寄せたモンスターの大集団に対して、巨砲はあまりにも無力だった。

砲弾を急造の榴弾（りゅうだん）に変更することでなんとか持ちこたえ、モンスターの群れを撃退することには成功したが、争乱のさなかに、建設途中だったダークヤグラ要塞は陥落（かんらく）した。

事態の収拾後も、同じ失敗を繰り返さぬよう、要塞の再建は見送られた。プーケ線はダークヤグラ要塞を欠きつつもそのまま維持されたが、防衛線にほころびが生じたことにより、モンスターのＧＬＬ侵入を許す羽目となった。

その被害が顕著（けんちょ）に現れているのが、怪物密林の末端に当たる怪物の森だ。

ジャングルを思わせる深い森をグレート・リヴリー・ランドに取り込み、密林のモンスターはダークヤグラ要塞とプーケ線でシャットアウトするという大胆な開発計画が仇（あだ）となったのだった。

「そういえば、聞いた？　主席防衛武官が更迭（こうてつ）された

話」
　ヒナタは視線を物見櫓から相棒へと移した。
「うんにゃ。どうせまたモンスター殲滅作戦を上申して、プーケに干されたのだろうよ」
　りぶたんは逆に、振り返って遠くの物見櫓に一瞥を投げた。
「そうみたい」
「あの作戦は連中の悲願だからな」
「防衛局はモンスター津波でたくさんの戦死者を出したものね」
「正直言って、プーケには感謝している。あれほどの惨劇を目の当たりにしながら、首尾一貫して殲滅作戦を拒絶し、武官どもを完全に抑え込むなど、あの女でなければできまい」
「そうね。プーケさん、局長なのに幹部職員のみんなと対立してまで、よくやってくれてるよね」
「しかし、ひとつだけわからないことがある」
「なあに？」
「なぜ、プーケはモンスターを恐れないのだ？　殲滅作戦は論外だが、防衛局の考え自体は理解できる。モ

ンスターを恐れてのことだからな。だが、殲滅作戦を頑(がん)として受け入れないプーケは、なぜモンスターを恐れないのだろう？　プーケだけではない。ミューミュー派はどいつもこいつも、モンスターを怖がっていないように見える。かといって、モンスターとの共存を願うような、しおらしいことも言わない奴らだ」

りぶたんはいつもの癖が出て、腕を組んだ。

「考えすぎなんじゃない？」

「そうかな？」

「そうよ。だって、プーケさんがモンスター防衛線を提案したのよ。要塞だって、防衛線には軍事拠点が必要って、プーケさんが言い出したんじゃない。モンスターが怖いから、そういう話になるんでしょ？」

「それはまあ、そうだが……」

「プーケさんたちミューミュー派は、モンスターと棲(す)み分けできればそれでいいって思ってるんじゃないかな。争いさえなくなればいいのね。別に共存したいわけじゃないから、モンスターが栄えようと滅びようとどうでもいいのよ。ただ、モンスターを生み出したのはミュラー博士なんだから、ミューミュー派は自分た

ちの手で滅ぼそうなんて絶対に考えないはず。だって、あの人たち。ミュラー博士を神として崇(あが)めているんだもの」

「問題はそこだ」

りぶたんはすり寄ってきたクーたんの背中をなでた。

「博士はなぜ、リヴリーだけでなく、モンスターまで生み出したのだろう？　モンスターはリヴリーを殺せるのに、リヴリーはモンスターを殺せないようにしたのはなぜだ？　そして、呪文では絶対に殺せないモンスターを、道具を使って殺すことは許されるのか？」

難しい質問だった。正解など、誰にもわからない。

ヒナタはしばし沈黙し、熟考してから口を開いた。

「わたしね、こう思うの。もしかしたら、博士はわたしたちで実験してるんじゃないかって。きっと博士のいる人間界も、いがみあって、憎みあって、殺しあったりする世界なのよ。そんな地獄のような世界に、争いのない日は訪れるのか。それとも、永遠に争いあうのか。博士はわたしたちリヴリーを観察することで、見極めようとしているんじゃないのかな。……だから、わたしたちは人間界のひとたちの分まで、しっかりし

なくちゃいけないのよ。モンスターが怖いから憎いからって、殺してすませてはだめなの。リヴリーとモンスターがなかよくいっしょに暮らせる世界にしなくちゃならないの」

「だとすれば、ミューミューたちは間違っているな。プーケ線で線引きをして棲み分けても、憎みあう未来はなにも変わりはしない。それどころか、要塞を巡って戦争をやらかす始末だ。モンスター津波からこっち、防衛局から聞こえてくるのはモンスター皆殺しの話ばかりだ。事態は確実に悪化している。それに近頃は……」

言いかけて、りぶたんは口をつぐんだ。

「……それに近頃は、モンスターを殺すための呪文まで極秘に開発しているという噂」

ヒナタが代わりに口にした。

「あくまでも噂だが、要塞を作るなら呪文だって作りかねないな」

「ねえ、りぶたん。わたしたちリヴリーはどこに行こうとしているの？　殺しの道具に、殺しの呪文。いまはみんな、モンスターを滅ぼそうとして頭がいっぱい

みたいだけど、もしもモンスターがいなくなったら、そのあと道具と呪文は誰に使うの？」
「誰にって……」
「リヴリーしかいない世界で、殺しの道具と殺しの呪文を、誰に使うの？」
「……」
りぶたんは返事に詰まった。いつもの癖で組んだ両腕もほどけて、力なく垂れ下がった。
リヴリーしかいない世界なら、使う相手も、リヴリーしかいない。
殺しの道具も。殺しの呪文も。
厚い雲が太陽にかかって、草原に影が差した。吹き寄せる風が急に冷たくなった。
「いけない。この話はまた今度にしようよ。早く捜査に戻らないと、お昼休みが長くなりすぎて、あの子たちに怪しまれちゃうぞ」
「うん。わかった」
りぶたんはクーたんを追い立てた。垂らした両腕の手のひらを、外に向けて大きく振った。
「さあ、行くんだ。おまえの棲む場所は向こうだ」

「クー」
クーたんは飼い主が遊んでくれていると思ったようだ。棘（とげ）のある鎌を折りたたんで、前脚をりぶたんの両手の上に置いた。
「ちがうってば。もうお別れなんだよ」
口ではそう言いながらも、りぶたんは目を細めてクーたんを見つめた。
「説明してもペットにはわからないのよね。だから、はっきりわかるような行動を取るしかないの。クーたんはここに……捨ててゆくのよ」
ヒナタはりぶたんから目をそらした。
――捨てろ。
それは、言わなければならないひと言だったが、言いたくはないひと言だった。
「ごめんね。わたし、先に行ってる」
ヒナタは飛び去った。いたたまれない気持ちになって、逃げ出したのだった。
別れの場面も、つらそうにするりぶたんの姿も、もう二度と見たくはないヒナタだった。
「……」

自分のせいで相棒を苦しませてしまったことを、りぶたんはいまさらながらに知った。
クーたんを拾いさえしなければ、拾ってもすぐに逃がしておけば、ヒナタは余計なひと言を口にして苦しむことはなかったのだ。
りぶたんはようやく、心を鬼にする決心がついた。
放す、逃がすと、口にするのは簡単だが、実際には捨てることになる。互いに愛着を覚えているというのに。互いに離れたくはないというのに。それでも、一方的に冷たく捨て去らねばならない。
こんなことなら、いっそ出会わなければよかったと、りぶたんは悔やんだ。
けれども、すぐに後悔の気持ちを打ち消した。
出会えてよかった。クーたんが元気になってくれてよかった。
ふたりでいっしょにご飯を食べたね。
ふたりでいっしょにベッドで眠ったね。
いっしょに暮らせて、とっても楽しかったよ。
そして――。
「さようなら」

りぶたんは、手のひらに乗せられたクーたんの前脚から、両手を放した。
「リヴリーには気をつけるんだよ。あれは……」
クーたんに別れの言葉を告げる。
「……モンスターだから」
そう言い残して、りぶたんはクーたんを捨てた。
「クー」
クーたんはあたりを見回した。
かくれんぼなのだと思った。大好きな飼い主が遊んでくれているのだと信じた。
危ないところを助けてくれた飼い主だった。大切にかわいがってくれた飼い主だった。
暗いところに閉じ込めるときには、いつも決まって悲しそうな目をしていた。
明るいところに出してくれるときには、本当にうれしそうに笑っていた。
「クー」
クーたんはもう一度あたりを見回した。
でも。
飼い主はもう、どこにもいなかった。

「クー、クー」
クーたんは前脚を上に伸ばして抱っこをせがんだ。
後脚を伸ばしたり縮めたりして体を上下させ、早くとせがんだ。
こうすれば、飼い主はいつも抱きかかえてくれた。
いつだって、抱っこしてくれた。
棘(とげ)のある鎌はしっかり折りたたんでいる。大好きなあの人に、ケガなんてさせられない。
「クー……」
でも。
いつも抱きかかえてくれるあの人は、もう現れなかった。
「ク……」
クーたんは鳴きかけてやめた。
お腹から音が出ると、あの人は振り向いてくれた。
あの人は話しかけてくれた。
でも、あの人はもういない。
「……」
クーたんは鳴くのをやめた。
捨てられたのだと、悟った。

密林に向かってクーたんは歩き始めた。
無言だった。カマキリは鳴かない。
あの人はもういないのだから、音を出す理由がない。
クーたんはとぼとぼと足を運んだ。
ふと気になって、振り返ってみた。
いたずら好きなあの人が、笑顔で待っていてくれるような気がした。
「……」
でも。いない。
誰も待っていない。
あの人はもういないんだ。
あの人にはもう会えないんだ。
「クー」
最後に一度だけ、クーたんは鳴いた。
さっきまであの人がいた場所に向かって、鳴いた。
大好きなあの人に、お別れを伝えた。
ありがとう。さようなら。
草原を渡ってきた冷たい風が、さっきまであの人がいた場所の温かい空気を、吹き流していった。
「……」

クーたんは密林に向かった。
もう二度と振り返ることはなかった。
もう二度と鳴くこともなかった。
もう、二度と。

第六章　モンスター津波

一

地底のトンネルに戻ると仲間が待ち構えていた。
「ほらね。ぼくの言ったとおりだよ」
「マジじゃん。あたいたちを置いてきぼりにする気だったんじゃん」
フレイムと団丸だった。
オーロラランプを地面に置いて、なかよく並んで立っている。
「おまえたち……」
防護壁の穴をくぐり抜けたりぶたんは、トンネルの中で抜け目なく待機していた助手たちを見てあきれた。
「こら、君たち。お昼休みはどうしたの？」
りぶたんに続いて穴をくぐり抜けてきたヒナタは苦笑した。
危険な捜査に巻き込むまいと一計を案じたのに、無駄骨だった。

「もちろん、休憩したよ。ね？」
「うんうん。ちゃんと家に帰ったさ。ほら見なよ、この帽子。いかすっしょ？」
頭にかぶったカウボーイハットのつばを、団丸は指で押し上げて見せた。
つばは左右で上向きに反り、帽子のてっぺんは左右がへこんでいる。色はジェットブラック。ピンクのショウジョウダルマによく似合っている。
「そんなわけでさぁ。これ、取り替えてくんない？」
団丸は胸に貼り付けていたＬＩＳＤのワッペンを引っ剥がすと、保安官に差し出した。
「バッジに取り替えてくれる約束だったじゃん」
「そうだったな」
りぶたんは制帽を脱ぐと逆さまにひっくり返した。ＬＩＳＤの制帽はひっくり返すと方舟のような形をしている。舟の中に手を入れて、りぶたんは銀色のバッジを取り出した。
バッジはＬＩＳＤの紋章をかたどっていた。ピグミーの頭部がシルエットになっている。左右に広がる翼の紋様がある。一番下にはＬＩＳＤの四文字がどっし

りと構えている。
差し出された団丸の手にバッジを置くと、りぶたんは引き替えにワッペンを回収した。そのまま帽子の中にワッペンをしまい込んで、制帽をかぶりなおす。
団丸は鼻の穴をふくらませて、うれしそうにバッジを帽子に取り付けた。
バッジの裏には回転ピンが留め具としてついているから、つけるのは簡単だ。ピンを帽子に刺す。先のとがったピンは受け具でホールドする。その受け具を回転させて、ピンが外れないようにロックする。
ＬＩＳＤのバッジが帽章となってカウボーイハットを飾った。
「むふぅ」
喜びをこらえきれないらしく、団丸の鼻息が荒い。すぐにかぶってしまうのはもったいないとでも思ったのか、つばの反り具合を整える。
ついでに、団丸は仲間たちの装いをちらちらと盗み見た。
紫がかった青色のミミマキムクネがいる。同系色の濃紺の制帽が似合っている。

肌色に近いベビーピンクのピキがいる。暖色でも淡い色合いの体なので、寒色でも濃い紺色の制帽は似合う。それに、フォーマルな帽子をちょっぴり斜めに傾けたかぶり方がおしゃれだ。

卵色のトビネもいる。オレンジの体に純白のベレー帽と、華やかだ。しかもコマンド風のベレー帽は見た目も鋭く、線の細いトビネにぴたりと合って強く見える。

ＬＩＳＤ専用デザインの制式帽子には、濃紺の生地に金糸で、紋章が真正面に刺繍されている。コマンド風のベレー帽には、純白の生地に銀色で、バッジが正面やや右のところにピン留めされている。

三人ともかっこいい。

それなのに、いままで団丸だけが帽子をかぶっていなかった。団丸だけが胸に薄っぺらいワッペンを両面テープで貼り付けていた。団丸だけがみすぼらしかった。

しかし、いま。団丸は待望のバッジを手に入れた。お気に入りのカウボーイハットも持参した。

団丸は誇らしげに帽子をかぶった。

LISD LIV-TAN . LIVLY TACHI NO INBOU.

乙女色のショウジョウダルマがいる。ピンクの体に、ジェットブラックのカウボーイハットがクールに決まって、いなせな姐御に見える。つばの広い帽子はちょっぴり太めのぽっちゃり体型にもばっちり似合うし、純黒の生地に銀色のバッジが輝いてハイソな雰囲気を醸し出している。

「はいはい。もにょもにょ団、そろったわね」

ヒナタが笑っている。

身につけたものは帽子と帽章だけなのに、ドレスアップにこだわって自分のファッションにうっとりする団丸は、やっぱり女の子だった。

「防衛局の人たちは？」

ヒナタは助手たちに聞いた。あたりに気配はない。トンネルにいたのはフレイムと団丸だけのようだ。

「さっき帰ったよ」

「あたいたちが戻ってきても、まだモグラコオロギを調べてたんだけどさ。なんか変な悪口言いながら帰っていったさ。あいつら、感じ悪いったらありゃしない」

フレイムは我慢したようだが、団丸は遠慮なく不満

をぶちまけた。
「ごめんね」
ヒナタはふたりに謝った。
ＬＩＳＤは管理機関の職員から蔑（さげす）まれている。中でも、防衛局からは特にうとまれている。そして、その理由はフレイムにも団丸にも関係のないことだった。
「なんで、あんたが謝るのさ。悪いのはあいつらじゃん。こっち見て男らしく正面から文句を言うなら、あたいがこっぴどく言い返してやるんだけどさ。こっちは見ないでよそを向いてさ、ぎりぎり聞こえるような小声でさぁ、通りすがりに悪口言いやがんの。ねえ？」
団丸は横にいるフレイムに同意を求めた。
「……」
ヒナタが痛々しくほほえんでいる。顔で笑って、目で謝罪している。
「あいつら、なんて言ったっけ？　モンスター愛護派どもめ、だっけ？　助手なんかやってると死ぬぞとか、大きなお世話だよねえ？」
団丸は引き続きフレイムに話しかけたが、フレイム

はなにも答えずにしっぽでそっと合図を送った。
トビネの長いしっぽの先が、ショウジョウダルマの細い足をなでた。
「？」
団丸は合図の意味がわからなかった。目を合わせようともしないフレイムを不思議そうに見つめて、それから視線を移した。
ヒナタの笑みが消えて、うなだれている。
りぶたんは腕を組んで、目をつぶっている。
フレイムはそっぽを向いて、沈黙したまま。
気がつけば、なにやら空気が重苦しい。
「……」
団丸はカウボーイハットのつばをつまむと、ばつが悪そうに引き下げた。事情はさっぱりわからないが、目を隠してなにも見えないふりをして、知らん顔を決め込んだ。
「ところで、おまえたち」
りぶたんが目を開けて、何事もなかったように話を切り出した。
「覚悟はできているのだろうな」

突き刺すようなまなざしで、助手たちを脅しにかかる。
「わたしたちだけなのよ。応援はひとりも来ないのよ」
ヒナタはもうあきらめていた。いまさら逃げ帰るようなふたりではない。
「なに言ってんのさ。あたいたちが応援なんじゃん」
「そうだよ。ぼくたちだってＬＩＳＤなんだぞ」
「だが、臨時雇いの助手だ。なにも無理をする必要はない」
「それなら、ぼくはジャーナリストだ。この事件の顛末を、しっかり見届ける義務がある」
フレイムは絵本ジャーナリストだった。字を読むのが苦手なリヴリーたちのために、絵本で報道するのが仕事だ。評判の悪いＬＩＳＤを健全な組織に立て直そうと、涙ぐましい努力をする女性保安官たちの活躍を、絵本にして伝えた実績もある。
「それなら、あたいは……。あたいは、えっと……」
団丸は世間を騒がせた怪盗だった。自首して裁きを受け、地下牢獄から出てきたばかりだ。ＬＩＳＤに犯

人扱いされはしたが容疑ならもう晴れたし、漏れた捜査情報もいまとなっては隠すほどのこともない。危険な捜査に付き合うだけの道義的な理由はなかった。
「それなら、あたいは暇だからっ」
団丸は、やけになって開き直った。
「……」
一瞬、場が静まりかえった。
「くすくす」
真っ先に笑い声を漏らしたのはヒナタだった。
「そうか。暇ならしかたがないな」
りぶたんは団丸の言葉を真正面から受け止めた。先を読んでトンネルで待機するなど、やる気満々の助手たちをこの期に及んで追い返すつもりはなかった。
「いいか、おまえたち。ここはアウターゾーンだ。LIPSの管理区域外だ。危なくなっても、どこにもテレポートはできない。それを忘れるなよ」
りぶたんは厳しい口調で念を押した。
「ラジャー!」
助手たちは声をそろえて敬礼した。
「それでは二手に分かれる。ヒナたんはフレイムを連

れて、右側を頼む」
「ラジャー！」
ヒナタも助手たちをまねて、うれしそうに敬礼した。
「捜査といっても、ルビーローズ一味がいまだにトンネル内に潜伏しているとは思えん。これから手分けして行うのは、トンネルの探索だ。どこにどんな危険が隠れているか、わからない。単独行動は禁止する。常に二人一組で動くように。見た限りでは一本道のトンネルだが、分岐（ぶんき）があってもおかしくはない。分岐点に出たら、そこで引き返せ。道が枝分かれしているからといって無闇（むやみ）に進めば、目印のない地底のトンネルで迷うぞ。目印をつけたところで安心とはいかない。側道（そくどう）から出てきたモンスターに退路を断たれる恐れもある。そうなれば、出口があるかどうかもわからないトンネルをひたすら前に進む羽目となる。分岐点に出たら一旦、引き返すのだ。それから、モグラコオロギには注意しろ。見つけても手出しは無用だ。リヴリーを襲わないモンスターだと、決まったわけではないのだからな」
長々と注意を与えながら、りぶたんは三人の補佐職

ひとりひとりと視線を交わした。
「ラジャー！」
保安官の注意を肝に銘じつつ、三人は直立不動で元気よく返事をした。そして、ひとりだけくすくすと忍び笑いを漏らした。
「よし行くぞ。ついてこい、団丸」
りぶたんは首をひねって団丸に同行をうながすと、懐中電灯型のオーロラライトを手に、トンネルの左側に向かった。
防護壁に沿ってまっすぐ進み、突き当たりを右に曲がる。行く手をモグラコオロギの死骸がさえぎる。高くて広いトンネルを半ばまでふさいだ巨体の脇を通り抜ける。
そこで、ふと、りぶたんは足を止めた。二手に分かれて歩きだしてから、どれほども進んでいない。
「攻撃技の使い方を教えておかねばならんな」
振り向いたりぶたんはモグラコオロギの死骸に目をやった。
背中に傷がある。羽の付け根が咬み裂かれている。羽ごと腹を刺した傷もある。襲ったのはスズメバチだ。

モグラコオロギも脅威だが、スズメバチはもっと恐ろしい。それに、モグラコオロギとスズメバチの争いに巻き込まれる危険だってある。
　なにが起こるか見当もつかないアウターゾーンなのだから、モンスターに襲われるその前に、身を守る術（すべ）を団丸に伝授しておく必要があった。
　保安官助手に任命されると講習を受けなければならないのだが、時間的な余裕もなく、団丸は実地研修の形で必要に応じて知識を習得することになっている。
「あれじゃん？　ターゲット指定の代わりにさ、指とかさして方向指定するんじゃん？　派手なアクション付けたり、大声で呪文唱えたりしてさ」
「なんだ。知っていたのか」
「あたい、前の保安官にけっこういろいろやられたからさぁ」
「そういえば、なにかと経験豊富だったな」
　りぶたんは皮肉を言ってにやりと笑った。
「でもさ。攻撃は食らったけど、やり方知ってるわけじゃないし。どうやんのさ？」
「うむ。教えてやろう。だが、本来なら講習で時間を

かけて学ぶことだ。はてさて、どこから手をつけたものやら……」
保安官が迷っている。
「むずかしい話？」
「別にむずかしくはないが、ちょっぴりややこしいかもしれん。講習ではまず、ＬＩＰＳについて教わる。管理ブロックについて。拡張機能の呪文ブースターと呪文ブレーカーについて。ここまではシステム特論だ。それから、呪文と技の講義に移る。霊力について。射程について。ここは呪文概論だな。そして講義は我々リヴリーの持つ霊能力にも及ぶ。霊化と造化について。霊子について。ここは霊能原論だが、根っ子となる大事なところだぞ。三つの各論は、理論体系としては心霊論に集約されるから、まとまりはある。以上、理論の講義が終われば、最後に演習として実技を学ぶ。……とまあ、ざっとこんな感じか」
「パスー」
いかにも難しそうな説明が終わるや否や、団丸は冗談めかして講義を拒否した。
「七並べじゃないぞ」

ボケた団丸に、りぶたんは素でツッコミを入れた。
笑える話ではないから、互いに笑みもない。
「なにそれ？　お受験じゃあるまいしさぁ。そんな話、じっと聞いてる暇なんかないじゃん」
「まったくだ。このまま立ち止まって聞かせていたら、ヒナタ組はショップゲートまで行って戻ってくるな」
ヒナタとフレイムはトンネルの右側の探索を任されている。ゆるやかな左カーブを描いたトンネルは、そのまま進めばショップゲートあたりにたどり着く。物資調達能力に長けたマハラが、用意した補修道具一式を運び込むためのルートだろうと推定されている。
だとすれば、行って戻ってくるのにさして時間はかからない。
「かといって、歩きながら聞かせていたのでは、もしものときに手遅れだ」
「じゃあ、どうすんのさ？」
「理論はすっ飛ばして、実技から入ろう」
「とりあえず、やってみるわけ？　いいねえ、手っ取り早くてさ。あたい好みじゃん」
「実技は簡単だ。まあ見ていろ」

そう言うと、りぶたんはオーロラライトを左手に持ち替えて、あいた右手をかざした。
「スリング」
念じればそれでいいはずの呪文をわざわざ口で唱えて、りぶたんはかざした右手を振り下ろした。右手は水平になって止まった。指先のなにもない空間に石ころが出現し、つぶてとして撃ち出された。
つぶては右手が指し示す方向に飛び、トンネルの側壁に命中した。
モグラコオロギが前脚を使って押し固めた側壁に、穴が穿(うが)たれた。
「やることはさっきおまえが言ったとおりだ。ターゲット指定の代わりに方向指定をする。アクションを付け、呪文を唱える。動きが増えて面倒に見えるが、実はこっちのほうが楽なのだ。理論は後回しだが、楽をすれば霊力も節約できるからな」
「やってみる」
団丸は地面にオーロラランプを置くと、右手をかざした。
「スリング！」

かざした右手を振り下ろし、団丸が呪文を唱えても、なにも起こらなかった。
「あれ？　なんでさ？」
「念じるのを忘れたな」
「えー、なにそれ？　念じる必要があるならさぁ、別に楽じゃないじゃん。ふつうにやればそれでいいじゃん」
「ならば、ふつうにやってみろ」
コーチ役のどすこい娘が腕を組んだ。
「……」
団丸は口を閉じて、ふだんどおりに呪文を念じたが、やはりなにも起こらなかった。
「あれ？　なんでさ？」
「アクションを忘れたな」
「ああ！」
団丸の表情がぱっと明るくなった。
「なんか、わかったような気がする。もっかいやるから、見てて」
団丸はもう一度右手をかざした。
「スリング！」

今度はしっかりつぶてが飛んだ。
「できたっ」
「うむ。なかなか筋がよろしい」
コーチが尊大な態度でほめた。
「呪文は口先で唱えたって、だめなんじゃん。ちゃんと念じないとさ。あと、方向指定はきちんとアクションで。って、ことっしょ？」
「基本はそうだ」
「応用は？」
「コツをつかめば、アクションなしでも方向指定や位置指定はできるようになる。特に位置指定はターゲット指定よりも扱いやすいぞ。誰それという名前で指定しなくても、あそこのあいつで攻撃できるからな。まあ、ターゲット指定も確実に命中させたり、隠れた相手を攻撃できたりで便利ではあるが」
「なるほどねえ。状況に応じて指定方法を使い分けるんだ」
「ターゲット指定だけだと、同種のモンスターの群れに遭遇したときに、目の前にいる奴を攻撃できなかったりするからな」

「ああ、あれね。前にアオイトトンボが大量発生したときにさぁ。目の前の奴を攻撃するつもりでサンダー使ったのに、一番遠くの奴に落ちてちょっとびっくりしたさ。イトトンは攻撃してこないから助かったけど」
「そういうことだ。いきなり攻撃してくるような奴が群れていたら、ターゲット指定ではお手上げどころか、お陀仏だからな。……ああ、それから一番大事なことを覚えておけ」
「なにさ？」
「アウターゾーンでは方向指定しか使えないのだ。ターゲット指定も、位置指定も、全部だめだからな」
「ＬＩＰＳがないとそうなんだ？　でさぁ。アクションって、なんか作法とかあるわけ？」
「うんにゃ。まったくない。好きな振り付けでかまわんぞ」
「振り付けって……」
　団丸の顔に笑みがこぼれた。理論はともかく、実技はマスターしたので余裕が出たようだ。
「要は、気合いというか、気力というか、精神的な集

中力の問題だ。集中さえすれば声も動きも不要。だが、疲れる。精神的にな。肉体の疲労とちがって、精神の疲弊(ひへい)は霊力の減衰(げんすい)につながる。だから、声を出して体も動かし、肉体のほうを使って精神には楽をさせるわけだ。もう一度念を押すが、ここはLIPSの管理区域外だ。理論を後回しにしたからおまえにはわかるまいが、覚えておくといい。アウターゾーンでは、パークのようにいくらでも技を使えるわけではないのだ。使えば使うほど、使えなくなってゆく」

「ふーん。あとさぁ、ネットとかLISD専用の技もあるっしょ？　あれも教えてくんない？」

「あわてるな。その前に、保安官助手になると使える専用攻撃技を教えてやろう」

「え？　そんなのあるんだ？」

「呪文はショットだ。撃ってみろ」

コーチは顎(あご)をしゃくった。

「ショット！」

団丸はスリングとまったく同じ動作でショットを放った。

指先に石ころが出現して撃ち出された。しかし、ス

リングとはちがって、発射されたつぶては細かく分裂し、拡散した。
　トンネルの壁に無数の穴があいた。穴のひとつひとつはスリングよりも小さいが、着弾範囲が広くなっている。
「これ、散弾じゃん」
「そうだ。技の正式名称は散弾投石だが、ショットガン・スリングと呼ばれることが多い。方向指定で撃てば、複数の敵をまとめて攻撃できるから、モンスターの群れをひとりで鎮圧（ちんあつ）するときなどに向く。特に近接戦闘では大活躍するぞ。しっかり狙わなくても、とりあえずぶっ放せば当たってくれるからな。散弾の一粒でも命中すれば、ダメージは小さくともモンスターの動きは一瞬止まる。その一瞬が生死を分けることもある。そいつを忘れるな」
「……でもさぁ。撃ってもかまわないのかい？」
　団丸は珍しく小さな声で遠慮しながら聞いた。
　防衛局の職員が、ＬＩＳＤをモンスター愛護派とのしっている。つまり、保安官のりぶたんと、その相棒である副保安官のヒナタが、そうなのだろう。だと

したら、気軽には撃ちにくい。
「撃て！」
りぶたんは、体格に優れたショウジョウダルマの助手を見上げると、その腹に拳を押し当てた。
「！」
殴られたほどの衝撃があって、団丸は驚いた。
「ためらわずに撃て。心配しなくても、この技を何発撃ち込もうとモンスターが死ぬことはない。気絶するだけだ。だが、おまえはちがう」
「……」
まっすぐに瞳を見つめて語りかけてくるりぶたんに気圧(けお)されて、団丸は声を出せない。
縦にも横にも大きなショウジョウダルマに比べれば、ミミマキムクネは小さい。しかし、りぶたんの迫力は体格の差など問題としなかった。
「おまえは死んではならない。そんなこと、このあたしが許さないっ」
「……ラジャー」
団丸はなんとか声をしぼり出した。
アウターゾーンに来てから、りぶたんは厳しくなっ

た。
団丸が防護壁の穴をくぐろうとしたら、よせと強い口調で制止された。事あるごとに念を押され、脅すように覚悟を問われた。なによりも、フレイムともども捜査から外されるところだった。
モグラコオロギには近寄るなと釘を刺された。モンスターが襲わないなどと盲信（もうしん）するなとも、殉職者は出したくないとも、言われた。
そして、いま。死んではならないと。死ぬことは許さないと。
殉職者。死。
助手なんかやってると死ぬぞと、防衛局の職員は捨て台詞を残した。
その話をしたら、フレイムはそっぽを向いた。ヒナタは悲しみに暮れ、りぶたんは苦しみに耐えている様子だった。空気が重かった。
そういえば――。
団丸は思い出した。地下牢獄にいたときに、囚人仲間から流れてきた噂話に聞いたことがある。
ＬＩＳＤに死人が出た。保安官助手がモンスターに

やられた。そのことで、管理リヴ委員会が保安官の責任を問い、査問会を開くことになった。
吹聴していたのは、りぶたんに捕まった男だった。ざまあみやがれ、どすこい娘め。男は悪態をつき、次の話し相手を見つけては同じ話を繰り返していた。
団丸は聞き流した。前の保安官ならともかく、新しい保安官とは無縁だった。なにが起ころうと、どうでもよかった。そんなことより、地下深くの牢獄で自分のためになすべきことがあった。団丸はＬＩＳＤの殉職者の話を忘れた。
それをいまになって、急に思い出したのだった。
「あたいは……」
腹に押し当てられたままのりぶたんの拳を、団丸は両手で包み込んだ。
「あたいは死なないから。だいじょうぶ。ショットガン・スリングぶっ放して、しっかり生き延びてやるさ」
「うむ」
力強くとうなずくと、りぶたんは手を引っ込めた。
「実技は終わった。さあ、行こうか」

りぶたんは団丸に背中を向け、すたすたと歩きだした。
「えっ？　ネットは教えてくんないの？」
地面に置いたオーロラランプを団丸はあわてて拾い上げた。
「それは歩きながらだ。ついでに理論も覚えてもらうぞ」
「パス２（に）」
「パス３（さん）で破産だからな」
ボケた団丸に、りぶたんがツッコミを入れた。
前を向いて歩き始めたふたりは、なにやら楽しそうだった。

2

リヴリーはなにも知らない。
呪文を念じるだけで、技は使えるものだと思い込んでいる。
いつでも、どこでも、何度でも。使えるものと信じ切っている。

ビューを使えば遠くの相手のバイオレコードをのぞけるのに、その相手にハートが届かなくても不思議には思わない。

なぜ、遠くにまで届く技があるのだろう。

どうして、遠くには届かない技があるのだろう。

その答えはＬＩＰＳ（リップス）にある。

リヴリーアイランド・ポジショニング・システム、ＬＩＰＳ。ミュラー博士が開発したリヴリーアイランドの座標空間識別システムだ。現在地を正確に把握することで、リヴリーたちが目的地まで安全にテレポートできるよう、システム化されている。

通常、リヴリーはＬＩＰＳの管理区域内にいる。プロテクトの有無に関係なく、ＬＩＰＳの管理区域はブロックごとに細分化されている。これを管理ブロックと呼ぶ。

すぐ隣であっても管理ブロックが異なれば、テレポートしないと移動できない仕組みになっている。

管理ブロックのサイズは一定ではないが、大きなブロックであれ、小さなブロックであれ、そこで使われた技はブロック内の隅々にまで効果が及ぶ。広大なブ

ロックでも技が届くのは、ＬＩＰＳの呪文ブースターが働くからだ。
ＬＩＰＳには、拡張機能として呪文ブースターと呪文ブレーカーが用意されている。
呪文ブースターは霊力を増幅する。遠く離れたブロックまで技が届くようになるし、少ない霊力で技を使うことができるので疲れなくなる。
反対に呪文ブレーカーは霊力を遮断（しゃだん）する。すぐ隣のブロックであっても技は届かなくなるし、場合によっては呪文そのものを打ち消すこともある。
ビューが遠くに届き、ハートが遠くに届かないのは、それぞれの技に呪文ブースターと呪文ブレーカーが働いているからだ。
ちなみにジャマー系の技も、呪文ブースターや呪文ブレーカーと連動する形で、ＬＩＰＳのシステムに組み込まれている。ゲット・ジャマーがそうだし、マインドウォールもそうだ。
ドゥードゥーをさわってもゲットできないようにゲット・ジャマーを地ノ塔全体にかけてあるが、なにも塔内にくまなく呪文をかけて回ったわけではない。シ

ステム上で一括登録してある。システマチックに効率よく処理しないと、マインドウォールなどはとてもじゃないが、手が回らない。

こういった事情を、リヴリーはなにも知らない。知る必要がないからと伏せられているので知りようがない。

たいていのリヴリーは、生まれてからずっとLIPSの管理区域内で過ごしている。呪文を念じるだけで、いつでも、どこでも、何度でも、技は使えるものと思い込んでしまうのはしかたのないことだ。

常に呪文ブースターの恩恵に浴(よく)するのであれば、思い込んだままでも支障はない。

だが、しかし。

LIPSの管理区域を離れてアウターゾーンに足を踏み入れると、もう呪文ブースターの効果は期待できない。

技を使えば使うほど、霊力を消耗する。

技を遠くに飛ばせば飛ばすほど、霊力を消耗する。

そして、限界を迎えるときがくる。

呪文を念じても。声を張り上げて唱えても。技が発

動しないときがやってくる。
霊力ゼロ。
それは、アウターゾーンでは死を意味する。
「システム特論はだいたいそんなところだ」
理論の講義もひと区切りついて、りぶたんは足を止め、小休止にした。
地底トンネルはここまで危険もなく、平坦で歩きやすかった。右方向にゆるやかにカーブしているものの、オーロラライトのおかげで先まで見通せて、神経をすり減らすようなこともなかった。
「霊力を節約しろって、口を酸っぱくして言ってたのは、そういうわけだったんじゃん」
「そうだ」
「でもさぁ。思ったより簡単な講義じゃんか。理論とかいうからさぁ、もっとむずかしい話かと思ってたさ」
「噛み砕いてわかりやすく説明してやったからな。あとで総務局監修の教科書を見せてやろう」
りぶたんがニヤニヤしている。
「ないしょの話だが、あたしたちが講義を受けたとき

に、ヒナたんが居眠りしたほどの内容だぞ」
「え？　マジで？」
「ないしょだぞ」
「ラジャー」
団丸もにやりと笑った。

「それで次はなんだっけ？　呪文概論だっけ？」
「うむ。呪文と霊力、技と射程についてだ」
「あたい、どうもピンとこないんだけどさぁ。霊力ゼロって、そんな簡単に使い果たすもんかねえ？」

「技を使いまくれば、じきに干上がる」
「アウターゾーンと知っててさぁ、そんなに使う？」
「使うさ。怪物密林ならな」
「あー、そっか。モンスターの群れに囲まれたときとかだ？」
「そうだ。だが、それだけではない。アウターゾーンでなくても注意するのだ。呪文ブースターに頼りすぎるな」
「え？　ＬＩＰＳの中でも注意しろってこと？　技をじゃんじゃか使えるようにするための呪文ブースターっしょ？」
「みんなもそう思っていた」
「みんな？　って、なんの話さ？」
　団丸には話が見えない。
「モンスター津波だ」
　りぶたんの表情に陰が差した。
「モンスター津波……」
　話題の重さに、団丸は声を落とした。
　りぶたんは目を伏せると、静かな口調で語り始めた。
「プーケ線はＬＩＰＳの管理区域内だった。難攻不落

の要塞でも、物見櫓の監視所でも、前線にいる誰もが呪文ブースターに慣れきっていた。怪物密林からどんなにモンスターがやってこようとも、攻撃技を好きなだけ使いまくって撃退できると、信じて疑わなかった。……しかし、あのときばかりはモンスターの数が多すぎた。まさに津波だった」

「あんた、あそこにいたんだ？　でもさ、当時はまだ保安官じゃなかったはず……」

「あたしもヒナたんも、あの日、あそこにいた。所属はＬＩＳＤではなかったがな」

「それで、あそこで、なにが……？」

　団丸は緊張して喉が渇いてきた。話すと喉の奥が貼り付く感じで、うまく声を出せない。

「あの日、ＬＩＰＳがオーバーロードした。システムを開発したのはミュラー博士でも、管理運用しているのはリヴリーだ。なにか手抜かりがあったのかもしれない。そもそも、ミュラー博士の想定外の事態だったのかもしれない。いずれにせよ、あの日、ＬＩＰＳは止まったのだ。どこの管理機関がＬＩＰＳを担当しているかはトップシークレットだから知らないが、事後

に公開された障害報告書によれば、呪文ブースターへの過大な負荷が引き金となって、システムがまるごと落ちてしまったのだそうだ。なんでも、霊力を生成して呪文ブースターへ供給する霊子炉は、メルトダウン寸前にまで追い込まれたらしい」

「……」

団丸はだまって耳を傾けている。

りぶたんがいま語っているのは、リヴリーアイランド史上最悪の惨劇だった。

「LIPSが止まった。もうテレポートで退避はできない。外はモンスターで埋め尽くされている。逃げ道はどこにもない。戦うしかない。攻撃するしかない。身を守るためには、技を使い続けるしかない。霊力を節約してなどいられない。それに、節約したところで、いずれは尽きる」

「……」

「そして、リヴリーたちは、霊力を使い果たした」

そのときの凄惨（せいさん）な光景を思い出したのか、りぶたんは天を仰いだ。それから、黙祷（もくとう）でも捧げるかのように、頭を垂れた。

「ミューミュー、ジュリエット、プーケの三要塞は持ちこたえた。要塞内部への侵攻は許さなかった。だが、建設途中だったダークヤグラ要塞は無惨なことになった。戦場は外ではなく、要塞の中だった」

「……」

ひと言も聞き漏らすまいと団丸は真剣な表情だ。

「モンスターは津波のように押し寄せてくる。呪文ブースターは切れている。退路はない。要塞の中で、リヴリーたちは侵入してきたモンスターを押し戻そうと必死に戦いながら、戦闘の真っ最中に続々と、霊力を使い果たしていった。すぐ目の前に凶暴なモンスターがいるというのに。呪文を念じても、唱えても、もう技は出ない。……ダークヤグラ要塞は陥落した。司令官のダークヤグラはかろうじて落ち延びたが、要塞守備隊は玉砕した。ほかにも、多くの部隊が全滅や壊滅の憂き目にあった。その中に、あたしたちの部隊もあった」

「え？」

だまって聞くつもりだった団丸が思わず声を漏らした。

「ダークヤグラ要塞が落ちればプーケ線を抜かれる。そうなればモンスター津波がリヴリーアイランドに到達してしまう。行って、要塞を死守せよ。そう命ぜられて、あたしたちの部隊は陣地を捨てて出撃した。けれども、すぐ目の前にあった要塞に入ることさえかなわずに、壊滅してしまった」

「モンスターチューリップ連隊……！」

団丸の背中を冷たいものが走った。

モンスター津波では多くの悲劇が起きた。ダークヤグラ要塞の陥落（かんらく）と、要塞守備隊の玉砕はその最たるものだ。モンスターの脅威を伝えようと、今日もどこかで語り継がれている。

しかし、誰も語ろうとはしない悲劇もあった。

無謀な出撃を命じられたモンスターチューリップ連隊は、モンスター津波のただなかに飛び込んで、津波に呑み込まれ、目的を果たすことなく砕け散ったのだった。心ない者はそれを、犬死にと呼んだ。

「あんたたち、あの連隊の生き残りだったんだ……」

息を呑む団丸に、りぶたんはゆっくりとうなずいた。

プーケ線には、なにもいきなり要塞が建設されたわけではなかった。線上に草原地帯もあれば、密林地帯もある。怪物が跳梁跋扈する密林は、周辺部の森でも場所によってはかなり危険だ。まずは安全を確保しないと工事もできない。

最初に、比較的安全な草原地帯に物見櫓の監視所が置かれた。監視所を基点にして、モンスター防衛線は少しずつ構築されていった。

柵を設け、塁を築き、砲を備える。粗末な柵塁から、立派な防塁へ。守備的な防塁から、攻撃的な砲塁へ。塁砦化は段階を経て実行された。

それに伴い、森や密林も必要に応じて伐採された。GLLには、ジャングルを思わせる深い森を「怪物の森」として取り込む開発計画があった。密林のモンスターはダークヤグラ要塞とプーケ線でシャットアウトするという大胆な計画に沿って、線を引くように伐採が進められ、怪物密林の一部が切り取られた。

物見櫓に柵塁、防塁に砲塁をもって、プーケ線は一応の完成を見た。しかし、リヴリーアイランドを守るためのモンスター防衛線には、もっと堅固で揺るぎな

い軍事拠点が必要だった。木造の物見櫓は細長くて弱々しく、石造(せきぞう)の砲塁は地面に張り付くように低くて頼もしくはなかった。

プーケ線が一応の完成を見たことで、安全も確保された。モンスター防衛線を要塞線とするべく、四つの要塞の建設が始まった。

建設中の有事に備えて砲塁を最前線に残し、要塞は砲塁後方に築かれた。また、建設作業員の避難所とするべく、要塞の後方には新たに防塁も置かれた。その結果、要塞は前に砲塁、後ろに防塁を伴うことになり、より堅固な塁砦群となった。

四要塞のうち、三つまでが完成した頃合いになって、怪物密林に不穏な空気が漂い始めた。それまでは散発的だったモンスターの襲撃が、日ごとに激しさを増した。

やがて、モンスターはまるで示し合わせたかのように襲撃をやめ、遠くで群れを作った。その群れがさらに群れあうことで、巨大な群団(ぐんだん)にふくれあがっていった。

尋常ではないモンスターの数を目の当たりにして、

リヴリーアイランドは臨戦態勢に入った。ミューミューたち管理リヴは要塞司令官として、それぞれの名を冠した要塞に常駐した。

防衛隊の戦意は高く、焦燥感はなかった。プーケ線はもう完成している。物見櫓の監視所が監視網を張り巡らせている。戦略上の要衝には四つの要塞が陣取り、要塞の前後にも塁砦が置かれている。要塞間にも随所に砲塁があって、にらみを利かせている。

唯一、弱点といえるのが建設途中のダークヤグラ要塞だった。逼迫した電力事情に対処するべく、南面の塁壁工事を中断して日光を採り入れていたのだが、それが裏目に出た。ダークヤグラ要塞の南側にはほとんど壁がなく、吹きさらしの状態だった。

要塞砲メガスリングを始め、全砲塔はなんとか稼働するようこぎつけたものの、壁がないのでは話にならない。

塁壁の応急工事に工兵部隊が駆り出された。

壁面からの侵入を阻止するために、要塞内部にはバリケードが設置された。足場を組んで外から合板をあてがい、壁の穴もふさいだ。最後にブルーシートをか

ぶせて足場ごと覆い隠した。
覆いはブルーシートではなく、建築工事用のメッシュシートを利用する案もあったが、シートが緑色だったため、草や葉を思わせてモンスターを招き寄せる危険が指摘された。特にオオカマキリにとっては緑が保護色となるので群がる恐れがあった。そうなれば、メッシュシートの編み目を足がかりにしてよじ登ろうとするだろうし、モンスターの重みにシートは引き裂かれてしまうだろう。
シートが破れて足場が剥き出しになれば、要塞内部と外部を隔(へだ)てるのはもろい合板だけとなる。ベニヤ板でモンスターを防げるわけもないから、足場を覆い隠すシートはブルーシートと決まった。ブルーシートなら、つるりとすべってモンスターも登れない。
応急工事は施したが、それでも要塞南面が弱点であることに変わりはなかった。ひとたび狙われたならば、たちまち窮地(きゅうち)に陥(おちい)ることだろう。ダークヤグラ要塞には南面を防御する支援塁砦(るいさい)が必要と判断され、塁砦暫壕戦(ざんごうせん)の専門部隊であるモンスターチューリップ連隊が配置された。

連隊はただちに支援塁砦の築造（ちくぞう）に取りかかった。
地面を掘り下げる。
軽くて丈夫なアルミ合金製のパイプをクランプで留めて、四角く組み上げる。同じくアルミ合金でできたメッシュフェンスを塁壁代わりに取り付ける。編み目の広いフェンスでは雨風はまったくしのげないが、モンスターの攻撃はしのぐことができる。それに、広い編み目はそのまま銃眼として活用できる。
モンスターから身を守るための檻（おり）ができたら、掘り下げた地面に速乾コンクリートを流し込み、パイプを固定する。コンクリートの床が平らに固まるのを待って、最後に機関砲を据えてアンカーを打ち込む。
これで、仮設砲塁（かせつほうるい）の完成となる。
連隊は突貫工事で九つの仮設砲塁を築いた。仮設した砲塁は塹壕でつなぎ、得意の塹壕連関塁砦陣（ざんごれんかんるいさいじん）を敷いた。
塹壕でつながった三つの砲塁がトライアングルとなり、それを三個重ねることで、全体がひとつの塁砦として機能する。戦場に描かれたその陣形が、あたかも巨大なチューリップの花びらに見えたことから、モン

スターチューリップの名を冠することになった部隊だった。
モンスターチューリップ連隊は、六個中隊と一個の特務狙撃団で編制されていた。
主力は三個ある突撃中隊で、土に擬装(ぎそう)して青天井の塹壕に身を潜め、機をうかがってはモンスター相手に突撃戦を敢行(かんこう)する勇猛な部隊だった。
その主力部隊を、砲兵中隊が仮設砲塁から機関砲で援護(えんご)した。砲塁を仮設し、塹壕を築くのは工兵中隊だった。資材などの軍需物資(ぐんじゅ)は輜重兵(しちょうへい)中隊が輸送した。
特務狙撃団は独立性の高い部隊だった。六個中隊が塹壕や砲塁を拠点とするのに対して、特務狙撃団は戦場に散らばって身を隠し、孤独な狙撃戦を展開した。二人一組の狙撃ユニットが十二個配属されており、専用攻撃技の異様さから「一つ目狙撃団」と呼ばれていた。
「それで、あんたたちはどの部隊にいたのさ？」
我慢できずに団丸は口をはさんだ。
「一つ目狙撃団だ」
「じゃあ、あんたがスナイパーで、ヒナたんがスポッ

ター？」
　狙撃手をスナイパーといい、観測手をスポッターと呼ぶ。スポッターは標的までの距離を測ったり、風の向きや強さなどを読んで、スナイパーを補助するのが役目だ。
「うんにゃ。スナイパーはヒナたんだ。遠くの的も一発で撃ち抜く腕がある。あたしはどうも遠距離攻撃は苦手だ」
「へえ、意外じゃん。あんたのほうが戦闘能力は高いのかと思ってたさ。ヒナたんはしょっちゅう、くすくす笑ってるしさぁ」
「勘違いするなよ。あたしが保安官で、ヒナたんが副保安官だからって、あたしたちに上下関係は――」
「知ってるさ」
　りぶたんがむっとしたようなので、団丸はすぐに自分でフォローした。
「前の保安官のリコール運動はヒナたんがリーダーで、あんたはボディガードやってたんでしょ？　ヒナたんはどっちかっていうと、家庭的でいいお嫁さんになるようなタイプじゃん。なのに、凄腕のスナイパーだっ

たなんて、意外っしょ？」
「うむ。ほんとはヒナたんのほうが保安官にも向いているのだ。あたしとちがって、子供の頃からしっかりしていたしな。でも、リコール運動でひと悶着(もんちゃく)あって、あたしが変なあだ名もらって妙に人気が出たものだから、保安官選挙にはあたしが出ることになったわけだ」
　ボディガードを務めていたりぶたんは、演説中のヒナタを襲撃しようとした暴漢をぶちかまし一発で沈めている。さらに、陰で糸を引いたにちがいない保安官が、その場に居合わせながらなにもしなかったことで一喝し、壇上から拳を突きつけて宣戦を布告した。
　この一件でりぶたんは一躍有名人となり、「どすこい娘」との異名を賜(たまわ)った。悪徳保安官のリコール運動にも火がついて、りぶたんは勢いもそのままに保安官選挙で圧勝したのだった。
「選挙戦術としてはそれが正解じゃん。選挙なんてさ、結局はただの人気投票なんだしさ。それで、なんで一つ目狙撃団なんて呼ばれたのさ？」
　団丸はさりげなく話題を変えた。

ヒナタが難しい教科書を前に居眠りしたなどと、長年の親友である相棒をりぶたんが自分でからかうのはよくても、団丸がまねをするのは許されないようだ。

同じようになかよくしてもらってはいても、密度はちがう。濃い薄いのちがいがある。今日知り合ったばかりの団丸は、親友で戦友のりぶたんとヒナタのように濃密な仲とはいかなかった。

「狙撃兵の専用攻撃技はスナイパーライフルだ。呪文を念じると腕にスコープが現れる」

「腕に？」

「そうだ。まっすぐ伸ばした自分の腕を銃身に見立てて、スコープをのぞく。手前はレンズになっていて、ふつうに映像が見えるのだが、目標に向けた部分にレンズはないのだ」

「レンズがないと見えないじゃん」

「見えるさ。レンズの代わりに、目玉がついているからな」

「え？　目玉？　スコープに？」

「そうだ。スコープの先に、黒い瞳に血色の目玉がついていて、こいつがぎょろりとにらむのだ」

「うわ……」
団丸はリアルに想像してしまったらしく、気味が悪そうに顔をしかめた。
「慣れるとかわいいもんだがな」
「それで一つ目狙撃団っていうんだ。でもさぁ、生き残れてよかったじゃん。モンスターチューリップ連隊ってさ、ほとんど全滅だったっしょ？」
「そうだな。連隊で生き残ったのは、一つ目狙撃団がたったの四ユニットだったからな。……おっと、いかん。話に夢中になってのんびりしすぎた。休憩はおしまいだ。さあ、行くぞ」
地の底のトンネルをりぶたんは再び進み始めた。
オーロラライトが照らすその先には暗闇が横たわっている。
遠くの闇を見つめるりぶたんの瞳が、遠い過去へと吸い込まれていった。

3

作戦は失敗だった。

モンスターチューリップ連隊が得意とする塹壕連関墨砦陣は、怒濤（どとう）となって押し寄せたモンスターの津波に歯が立たなかった。

なにしろ、一瞬で空間が埋まったのだ。快晴なのに、空を覆ったモンスターのせいで日が陰るほどだった。九つの仮設砲墨から間断（かんだん）なく砲弾を浴びせても、戦果どころか、攻撃することの意味さえ見いだせなかった。

事情は要塞でも同じだった。自慢の巨砲「要塞砲メガスリング」を始め、全砲塔はひたすら撃ち続けたが、モンスターで埋め尽くされた空間に砲撃を加えるのは、なにもない空間に弾を撃ち込むことと大差なかった。

弾幕を物ともせずに、モンスターの大群は墨砦に襲いかかった。物見櫓は監視に徹して攻撃を控えたため、多くが襲撃を免れた。だが、要塞にはおびただしい数のモンスターが群がり、砲墨と防墨はモンスターで埋まった。

激しい攻撃にさらされても、各墨砦は持ちこたえた。堅牢（けんろう）な墨壁がモンスターの侵入を阻んだ。モンスターチューリップ連隊の仮設砲墨でさえ、フェンスを破られることはなかった。

例外はただひとつ。吹きさらしの南面に応急工事を施したダークヤグラ要塞だった。

足場を覆い隠すシートがメッシュシートでは、登られて破れてしまうとブルーシートを選択したのだが、そのことで別の問題が持ち上がった。

想像を絶する数のモンスターが津波と化して大挙襲来したため、飛翔モンスターが巻き起こす羽風（はかぜ）が嵐のように吹き荒れた。編み目のあるメッシュシートなら風はそのまま吹き抜けてゆくのだが、ブルーシートではそうもいかない。風をはらんだシートは帆のようにふくらみ、その中のたった一枚が風圧に負けた。

ブルーシートは針金を使って足場にくくりつけてあったが、風のすごさにその針金が切れてしまったのだ。

シートは風に煽（あお）られて、はためいた。

たったの一枚でも、ばたばたとはためくブルーシートはモンスターを刺激した。すでに砲撃戦の火蓋（ひぶた）は切

られていたが、砲撃とは無縁のただのシートにスズメバチが群がった。
シートはあっという間に咬み裂かれ、足場の覆いにぽっかりと穴があいた。いかにも巣の出入り口のように見える穴の中に、スズメバチは続々と侵入していった。
足場に侵入された以上、要塞の内と外を隔てるのはもろい合板だけとなったが、予想に反してベニヤ板は破壊されなかった。外から事態を見守っていたモンスターチューリップ連隊から警告が発せられて、要塞守備隊がベニヤ板のもろい壁に振動を与えないよう留意したこともよかったのかもしれない。
足場に侵入したスズメバチの群れは、ブルーシートを咬み裂いて穴の数を増やしていったが、ベニヤ板の壁は無傷だった。しかし、そのまま破られずにすめばよいとの願いはむなしく断ち切られた。あまりに大群が侵入したため、荷重に耐えきれずに足場が崩落してしまったのだ。
ダークヤグラ要塞南面に組まれた足場は、中段のやや上で床板が抜けた。その段に乗っていたスズメバチ

の群れは、床板もろとも下の段に落下した。衝撃で下の段の床板も抜け、その繰り返しで最下段まで一気に崩れ落ちた。

崩落した床板と、落下したスズメバチの大群は外に転がり出るような形となり、足場の梁を押した。上部に数層分の床板が残っていた足場は、そこに入り込んでいた無数のスズメバチの重さも加わって、重心が高くなっていた。また、咬み裂かれたブルーシートに群がり、足場の外側に張り付いているスズメバチも多かった。

高い重心が偏った結果、足場は倒壊した。

外向きに傾き始めると、そのままゆっくりと倒れていった。

足場が倒壊したことで、吹きさらしの壁をふさいでいた合板も引き剥がされた。ダークヤグラ要塞は弱点をさらけ出すこととなった。

しかも運の悪いことに、足場の崩落も倒壊もスズメバチを興奮させた。モンスターが事故だと受け止めるはずもなく、攻撃されたと受け取ったのだった。

叩き落とされた地面から、スズメバチの大群が躍起

になって飛び立ってみれば、目の前の壁にはいくつもの穴があいていた。まるで、蜂の巣のように……。

ダークヤグラ要塞は、要塞内部が戦場となった。要塞守備隊も奮戦したが、津波と化したモンスターの圧力に負け、後退し続けた。砲兵が退避した砲塔が沈黙し、砲兵が全滅した砲塔も沈黙した。ほどなく、ダークヤグラ要塞の全砲塔が沈黙した。外の敵を撃つよりも、中の敵を討つことが先決だった。

予想外の戦況に、戦場は大混乱に陥(おちい)った。LIPSが止まり、呪文ブースターが切れたことも拍車をかけた。ダークヤグラ要塞の危機的な状況にも、割(さ)ける援軍はなかった。どこの部隊も、持ち場を維持するのが精一杯だった。

そして、大混乱の中で総司令部は、無謀な作戦を発令した。

モンスターチューリップ連隊に対し、陣地を捨てて出撃し、ダークヤグラ要塞内部のモンスターを排除して要塞を死守するよう命じたのだった。

大義名分はあった。

ダークヤグラ要塞が陥落(かんらく)すれば、プーケ線を越えた

モンスター津波がリヴリーアイランドに押し寄せてしまう。そうなれば、リヴリーアイランドは滅亡するだろう。なんとしても要塞を守り抜かねばならない。

興亡の一戦ここにありと、そう言われて尻込みする戦士はいない。それにモンスターチューリップ連隊はダークヤグラ要塞に一番近い部隊であるし、モンスターが要塞内部への侵入を果たしたからには、南面防御のための仮設砲塁はすでに無用の長物となっていた。

「ここで大きく曲がったのか」

りぶたんの話が突然、現実に戻った。

右方向にゆるやかにカーブしていた地底トンネルが、急な角度で左に折れている。岩に当たって向きを変えたというわけでもなさそうだ。突き当たりに障害物は見当たらない。

「やはり、ちゃんと測量しつつ掘り進めてきたのだな」

目印のない地底でモグラコオロギにトンネルを掘らせるのに、ルビーローズ一味は測量を欠かさなかったとLISDは見ている。どうやら推測どおりのようだ。

「トンネルの掘削(くっさく)を担当したのはチャパティだろう。

緻密(ちみつ)な作業は奴の仕事だ」
「そうかねえ。あたいにはさぁ、慎重に測量するチャパティを尻目に、マハラがいけいけどんどんでモグラコオロギにトンネルを掘らせているさまが、目に浮かぶようなんだけどさ。でもって、ルビーローズは泥だらけになるのがいやで、トンネルを掘る仕事は任せっぱなしなのさ」
「……案外、そうかもしれんな」
りぶたんは団丸の見立てに感心した。言われてみれば、なるほどそんな光景が目に見えるようだ。
「それで続きはどうなったのさ？」
団丸は催促(さいそく)した。
無謀な出撃命令を受けたモンスターチューリップ連隊の運命やいかに？　で、話が切り替わっている。もちろん、悲惨な結末が待っていることは承知しているし、当事者のりぶたんとしてはこれ以上、語りたくないのかもしれない。しかし、ここまで話しておきながら、尻切れとんぼはなかった。
「ん？　続きというと……ああ、そうか。次は呪文概論だったな」

「ちがっ！」
団丸の反応を楽しみながら、りぶたんは続きを口にした。

連隊長は異議を唱えた。
仮設砲塁は決して無用の長物ではない。確かにモンスターは要塞内部に侵入したが、後続を断てば防御の役に立つ。ましてや、戦場を横断して部隊を要塞内へと移動させるからには、援護の砲撃は不可欠。仮設とはいえ、砲塁の放棄は受け入れがたし、と。
総司令部は即答した。是非に及ばず、と。
連隊長の異議は問答無用で却下されたのだった。
異議を唱えた一方で、連隊長は戦況を冷静に分析していた。ダークヤグラ要塞の全砲塔はすでに沈黙している。要塞守備隊の砲兵が壊滅ないし全滅したのであれば、連隊の砲兵が必要となる。要塞の砲撃は仮設砲塁のそれとは比べものにならない威力があるからだ。
つまり、砲兵の要塞移動と砲塁残留という、矛盾した問題を解決しなければならなかった。砲兵中隊をふたつに割れば、双方が弱体化する。移動させれば援護

は受けられず、残留させれば要塞の砲塔は沈黙したままとなる。

連隊長は腹をくくった。

要塞救援命令は無視できない。なによりも、要塞を守らないとリヴリーアイランドが滅びてしまう。モンスター津波にも耐えている塹壕連関塁砦陣を捨て、仮設砲塁を放棄するもやむなしの情勢だった。

連隊長は無線でダークヤグラ要塞の司令部を呼び出した。連隊がすみやかに進入できるよう、直近ゲートの開放を依頼した。要塞司令部はゲートを開けると確約し、至急の来援を要請してきた。

作戦は即決した。

陣地を引き払う以上、撤退(てったい)戦の要領で移動するのが最善の策だった。

モンスターチューリップ連隊には全部で六個の中隊がある。この中隊が、三、二、一と、規模を縮小しながら移動するのだ。

第一陣は三個ある突撃中隊が務めることとなった。突撃中隊はモンスターを相手に突撃戦を敢行する部隊だ。要塞救援の主力として、要塞内部に突入してモン

スターを排除する任務にはうってつけだった。それ以前に、戦場を横断するためのルートを切り開くことが可能なのは、この部隊しかなかった。

第二陣は工兵中隊と輜重(しちょう)兵中隊だった。第一陣の展開中は援護射撃を担当し、要塞突入後は資材を調達してバリケードを再構築するなどの任務が課せられた。

第三陣として、最後まで仮設砲塁に残るのは砲兵中隊だった。もちろんその目的は、ぎりぎりまで援護の砲撃をすることにあった。

かくして、ダークヤグラ要塞救援作戦は決行された。

「え？　あんたたちの一つ目狙撃団はどうなったのさ？」

団丸はたまらずに質問した。

特務狙撃団はもうずっと話に登場していない。無縁の部隊ならともかく、りぶたんとヒナタが所属してモンスター津波を戦い抜いた部隊である以上は、もっとくわしく知りたかった。

「任務の性質上、一つ目狙撃団はほとんど独立部隊の扱いだったからな。正確には独立狙撃ユニットか。連隊の任務といった大枠から外れなければ、あとは各ユ

ニットが独自の判断で行動できたのだ」
「へえ、そうなんだ。それで、あんたたちはなにをやってたのさ」
「団の十二ユニットは戦端が開かれる前に、思い思いの場所に散っていた。といっても、連隊を援護するという任務があるから、要塞の真横に築かれた陣地を扇形に半包囲することになった。あたしたちは後方の森に回された。団で一番年下だったし、入団したのも最後だったからな」
「後方の森って、もしかして怪物の森？」
「そうだ。ＧＬＬから見ると、怪物の森の一番奥になる。まあ、当時はまだＧＬＬはなかったけれど」
「危ない場所に回されたんだ？」
「それはちがう。後ろが怪物の森でも、あの戦場ではましなほうだった。森の木を背にして茂みに擬装し、前に集中していればよかったからな」
「ほかはもっとひどかったんだ？」
「うむ。横に回ったユニットは密林を伐採したあとの地面に伏せた。木はないから、真上からも攻撃される場所だ。前に回ったユニットは、あたしたちみたいに

森の木を背にして茂みに擬装できたけれども、侵攻してくるモンスターに対して背中を向けることになった。両脇をモンスターがずんずん通り過ぎてゆくのだ。これはきついぞ」

「前にいたら味方に撃たれるじゃん」

「うんにゃ。背にした幹にマーキングしてあるからな。下向きの三角を派手なオレンジ色でスプレーすれば、ここにスナイパーがいるぞと、味方に知らせることができる。モンスターにはわかりっこないしな」

「なるほどねえ」

つぶやくようにそう言って、団丸は口を閉ざした。

つい腰を折ってしまった話の続きを、無言でうながしたのだった。

要塞救援作戦が始まった。

仮設砲塁は要塞南面の防御をやめて、第一陣援護のための砲撃へと切り替えた。要塞に当ててもかまわんと連隊長が士気を鼓舞(こぶ)し、機関砲が火を吹いた。連隊の陣地と要塞の間にたむろしていたモンスターが薙(な)ぎ払われた。

輜重兵中隊も銃を取り、メッシュフェンスの編み目から援護射撃の弾幕を張った。
工兵中隊は砲塁から塹壕への移動に備えた。
援護を受けて、全突撃中隊が塹壕から出撃した。三個中隊が三方に展開し、第一突撃中隊は正面の要塞ゲートに向かって道を切り開いた。残る第二、第三の両中隊は側面に開いて、要塞ゲートに向かう道を確保した。
あいた塹壕に、砲塁から出撃した工兵中隊が雪崩(なだ)れ込んだ。続いて、輜重兵中隊も援護射撃を一時中断して、塹壕へと移動した。配置についた二個中隊は塹壕に身を隠したまま、弾幕を張って第一陣を援護した。
ここまでは作戦どおりだった。
モンスター津波のまっただなかに打って出たにしては、損害らしい損害もなく、上々のすべり出しといえた。
だが、要塞ゲートは閉じたままだった。
連隊長はあわてて要塞司令部を呼び出した。
突撃中隊は三個とも野っ原に立っている。塹壕という、防御に有利な拠点を飛び出して、身を守る拠り所

がなにもない原っぱに突っ立っているのだ。
機関砲に追い払われたモンスターたちが猛(たけ)り狂って戻ってきた。
重い羽音を響かせて、スズメバチが頭上すれすれを飛び交っている。ホバリングして針を突き立てようとする。体当たりをして咬みつこうともする。左右両側にはオオカマキリの壁ができている。ゆっくりと間合いを詰め、大上段からすばやく鎌を振り下ろしてくる。要塞方面からも攻撃はある。塁壁によじ登ったジョロウグモが、静かに伝い降りてくる。壁を垂直に走って襲いかかってくるのもいる。
部隊がいつ全滅してもおかしくはない状況だった。
要塞司令部は呼び出しに応じなかった。
無線通信での問いかけにも、ゲートに用意されている有線通信での問いかけにも、一切応答がなかった。要塞司令部は完全に沈黙していた。
連隊長は塹壕にいる工兵中隊を呼んだ。中から開けてもらえないゲートを、外からこじ開けることにした。
輜重兵中隊にはそのまま塹壕からの援護射撃続行を命じ、呼び寄せた工兵中隊には、ゲート開放直後に第

一突撃中隊と入れ替わるよう、厳命(げんめい)した。
要塞司令部が沈黙し、ゲートが開かないのは、ダークヤグラ要塞がすでに陥落(かんらく)したことを意味する。おそらく、司令部は全滅したのだろう。ゲートの保安要員も戦死したにちがいない。
開かないゲートの向こう側は、モンスターに制圧されているものと思われた。そこに工兵中隊が飛び込んだのでは、餌食になるだけだ。開放したゲートからは、いの一番に戦闘部隊を突入させて、ゲートの向こう側にいるであろうモンスターを鎮圧する必要があった。
連隊長の指令は的確だった。戦況の分析も見事で、有能な指揮官だった。
ただし、運には恵まれていなかった。
ゲートが開いた。
工兵中隊はすかさず後退した。反転して弾幕を張り、飛翔モンスターの警戒に当たった。
それまで弾幕を張っていた第一突撃中隊は、工兵中隊と入れ替わって、ゲートに正対した。専用攻撃技で突撃銃と化している利き腕を構えて、真っ暗なゲートの中へと突入した。

いや。
突入しようとはしたが、中隊は要塞の中に一歩も入れなかった。ゲートの奥で闇が蠢(うごめ)いたかと思うと、噴き出すような勢いで飛び出してきた。暗闇に潜んでいたのはスズメバチの群れだった。
思うに、電力事情の悪化が招いた悲劇であったのかもしれない。
そもそもダークヤグラ要塞の南面に塁壁がないのは、電気が足りなくて電灯がつかないからだった。日の当たる南面の塁壁工事を中断して、日光を採り入れていたのだ。
電気が足りないがゆえに壁がなく、壁がないがゆえにモンスターの侵入を許し、要塞は落ちた。
そして。
電気が足りないがゆえに要塞内は暗く、暗いがゆえにモンスターの姿は見えず、連隊は滅んだのだった。
明るい外から見れば、暗い屋内はよく見えない。それと同じことが要塞ゲートでも起こった。ましてや、晴天(せいてん)が曇天(どんてん)に思えるほど、モンスターが空を覆って日が陰っている。外が暗くなった分だけ、屋内の闇も濃

くなっていた。
ゲートの向こう側にはモンスターがいると、第一突撃中隊は承知の上だった。塹壕から出撃して道を切り開いたように、ゲートから突入して進入路を確保する気でいた。モンスターがひしめいていても、得意の突撃戦でぶちかますつもりだった。一気呵成に制圧しようと、戦闘意欲にあふれていた。
それなのに、第一突撃中隊は後れを取ってしまった。
ぶちかましたのはスズメバチだった。ゲートが開放されるや否や、いっせいに飛び出してきた。それも低空飛行だった。低いゲートがスズメバチに低く飛ぶことを強いた。
飛び出す勢いと低空飛行が、勝敗を決した。
スズメバチの先頭集団が撃たれて墜落しても、群れの勢いがあまりに激しく、かつ、地を這うような低空飛行であったため、後続のスズメバチが倒れた仲間にぶつかって、勢いよく押し出した。
墜落したスズメバチは仲間の盾となった。中隊が突撃銃を連射しても、すでに倒した相手にしか、弾は当たらなかった。そして、低空飛行で飛び出してきたス

ズメバチの群れは、倒れた仲間の体を突き飛ばすようにして押し出し、そのまま中隊に激突させたのだった。

結果的にスズメバチは高度な戦法をやってのけたことになる。

盾を使って身を守り、その盾を相手にぶつけることで、中隊の隊形を崩(くず)している。偶然の出来事とはいえ、見事な戦いっぷりだ。

さすがにこれは連隊長にも予想できなかった。連隊長だけではない。戦場にいる誰もが予想しえなかったことだろう。スズメバチが盾を使うなどと、誰が想定するものか。

第一突撃中隊は弾き飛ばされた。火力を集中させようとして組んでいた横列(おうれつ)隊形は、見るも無惨に粉砕された。

弾き飛ばされた中隊と、激突してきたスズメバチは、後ろの工兵中隊をも巻き込んだ。ゲートに背中を向けて弾幕を張っていた工兵中隊は、事情も理解できないままに、後ろからの衝撃を無防備に食らうこととなった。

連隊の出端(でばな)を折ったスズメバチは中央突破にも成功

した。正面にいた第一突撃中隊を蹴散らし、中央にいた工兵中隊を押しつぶして、戦場を左右に引き裂いたのだった。

側面に展開していた第二、第三の両突撃中隊が分断された。前のオオカマキリに立ち向かえば、後ろのスズメバチに咬まれてしまう。振り向いてスズメバチに備えれば、背中をオオカマキリに斬られてしまう。

戦場の右と左で、第二、第三の両突撃中隊は腹背に敵を受けた。

戦場の中央では、第一突撃中隊と工兵中隊が敵との乱戦に陥った。

すでに作戦は破綻し、隊形も崩壊。連隊は潰走状態にあった。モンスターに包囲されて逃げるに逃げられないから、立ち止まって戦っているにすぎなかった。

敵と味方が入り交じっているものだから、砲兵中隊も輜重兵中隊も思うように援護できなかった。仮設砲塁の機関砲も、塹壕の小銃も、味方を誤射することのないよう、敵しかいないような周辺部に撃ち込むのが関の山だった。

一つ目狙撃団の援護はもっと役に立たなかった。

そもそもスナイパーの基本戦術は、遠距離精密射撃で敵の指揮官などを撃ち倒すことにある。しかしながら、モンスターの群れに指揮官はおらず、すべてが一兵卒である以上、狙い撃つべき相手はどこにも存在しないのだった。

「え？　そうなんだ？」

団丸はまた話の腰を折った。

たいそうな異名を持ったスナイパーの軍団が、役立たずだとは思いも寄らないことだった。

「認めたくはないが、事実だ」

「それならどうして専門部隊があるのさ？」

「まったく役に立たないわけではないし、建前としては、スナイパーの養成もおろそかにすべきではないからな。まあ、たぶん。本音は別のところにあるのだろうが……」

りぶたんは含みを持たせた言い方をした。

「なんなのさ？　本音って？」

団丸は食らいついた。

「うむ。防衛局でまことしやかにささやかれている仮説に、マスターモンスター説というのがある」

「なにさ、それ？」
「モンスターを支配するモンスターのことだ。スズメバチを例に取ればわかりやすい。クインという名の女王蜂がいるからな」
「ああ、そういうこと。つまり、ほかのモンスターにもそれぞれ、王とか女王とかの、マスターモンスターがいるってわけ？」
「確認されたわけではないぞ。あくまでも仮説だ。そして、ここから先は陰謀論めいた話になってくる。オオカマキリのマスターモンスターはローズウッドで、タガメのマスターモンスターはウォーターグリフォン。二匹はただのモンスターのふりをしてリヴリーアイランドに居座り、じっとリヴリーたちを観察している。来るべき終末戦争に備えて……」
「マジで？」
「だから仮説だ。なにひとつ証明されてはいない。しかし、根強い説ではある。そこで、マスターモンスターが本当に出現しても一発で仕留められるように、スナイパーの養成に手は抜かないし、選抜したトップスナイパーが切磋琢磨（せっさたくま）するよう、一つ目狙撃団に集めた

わけだ」
「え？　じゃあ、あんたたちってエリートじゃん。スナイパーのさ」
「すごいのはあたしじゃなくて、ヒナたんだ。選抜テストで三位だったんだぞ。もっとくわしく説明するとだな。選抜テストは一つ目狙撃団のメンバーも含めた、全狙撃ユニットが対象となる。ヒナたんはその中で三位に入ったわけだ」
「ベストスリーじゃん」
「選抜テストで狙撃団のメンバーを抜くと、入れ替え戦に出場できる。抜かれたメンバーは入れ替え戦に出なくてはならないから、あたしたちが挑戦したときは団のツートップとなるユニットを残して、ほかはすべてが入れ替え戦に回るという前代未聞のケースになったのだ」
「ふむ」
「入れ替え戦は演習形式で互いを撃ち合う。だから、現役組に有利とされている。仲間同士でつるんでもかまわないからな。入団したければ、現役組をまとめて撃ち倒せるだけの技量を示せというわけだ」

「ふむふむ」
「そしてヒナたんは、入れ替え戦で二位となったのだ」
りぶたんは足を止めて振り向いた。
まるで自分のことのように胸を張って、後ろをついてきた団丸に自慢した。
それでもまだ自慢し足りないのか、もうひと言付け加えた。
「しかも、初めての挑戦でな」
「ヒナたんって、かわいい顔してすごいんじゃん」
「うむ。まあ、顔はあたしのほうがかわいいけれど」
「……」
団丸は返事を控えた。
そこがツッコミどころなのかどうか、いまいち判断に迷った。もしかしたら、本気で言っているのかもしれない。
「あれ？　でもさ……」
選抜テストで三位、入れ替え戦で二位なら、一見すると三位から二位に順位が上がったように思える。しかし、よくよく考えてみれば、選抜テストの一位と二

位は入れ替え戦に出ていないのだから、それで二位ということは順位をひとつ落としたことになりはしないか。

「順位、一個下がってるじゃん」

「……それにしても長いトンネルだな」

りぶたんはわざとらしく話をすり替えた。

「もうそろそろ、怪物密林に入った頃合いか……」

前を向くと、りぶたんはそそくさと歩きだした。

凄腕をふるって、ヒナタは現役組の十二位から四位までをことごとく仕留めた。もちろん、スポッターのりぶたんも協力した。けれども、入れ替え戦の一位突破がかかった最後の大勝負で、現役組三位のスナイパーに撃たれてしまったのは、ほかでもないりぶたんなのだった。

スポッターがいなくてもスナイパーは活動できるが、相棒を失えば、入れ替え戦はそこで終了となるルールだった。

「……」

団丸は追及しなかった。態度を見れば、誰がしくじったのか一目瞭然だ。

「それで続きは？」
りぶたんが話をすり替えたのに便乗するように、団丸は話を元に戻した。
「一つ目狙撃団の援護も役に立たなくて、そのあとどうなったのさ？」
要塞ゲートをこじ開けたらスズメバチが勢いよく飛び出してきて、連隊は大混乱に陥（おちい）っている。敵と味方が入り交じって思うように援護もできないと、話はそこまで聞いている。
「さすがのヒナたんも、仲間を援護することはできなかった」
りぶたんの声が重い。言葉が地面に落ちてゆく。
「しかたないじゃん。モンスターがうじゃうじゃいたんだからさ。できることは全部やったっしょ？」
「あたしもスナイパーライフルを使った」
りぶたんは右腕を持ち上げると、なつかしむようにさすった。
「遠距離攻撃は苦手だったじゃん。がんばったさ」
「そうだな……」
連隊壊滅の危機に、一つ目狙撃団は死力を尽くした。

すでに連隊長との通信は途絶している。団の十二ユニットも、三個が失われている。残る九ユニットに対し、一つ目狙撃団の団長は全員狙撃を命じた。観測手であるスポッターも、見ていないで仲間を援護しろとの命令だった。

九ユニットから十八丁のスナイパーライフルが火を吹いた。

モンスターチューリップ連隊の四個中隊を援護するための、十八丁。

絶望的に少ない数だった。だが、しかし。本当の絶望はこれからだった。

「そして、ついに、始まってしまった」

りぶたんの足が止まった。

体が重くて前に進まないような、そんな感じだった。

「……」

りぶたんの後ろで、団丸もだまって足を止めた。余計な質問はしなかった。なにが始まったのかは、ピンときた。

りぶたんは口を酸っぱくして言っている。霊力を節約しろと――。

「リヴリーたちは次々に、霊力を使い果たしていった。戦闘の真っ最中なのに。目の前にモンスターがいるのに。呪文を念じても。唱えても。もう、技は出なかった」

りぶたんがうつむいている。

「……」

団丸はりぶたんの背中から目をそらした。

ここより先は、聞くのもつらい話だった。

戦場は地獄と化した。

霊力を使い果たして戦闘能力を失ったリヴリーと、倒されても気絶するだけのモンスター。

リヴリーはモンスターを殺せないが、モンスターはリヴリーを殺せる。

一方的な虐殺が始まった。

機関砲も、突撃銃も、狙撃銃も。リヴリーのすべての攻撃は技だった。機関砲は道具として作られてはいても、砲弾は呪文で生み出している。小銃類はまるごと全部が技だ。道具は一切使用していない。

リヴリーの攻撃はすべて、呪文を使って技を放った

ものだった。
撃たれて倒れたモンスターは死んだのではなく、気絶したにすぎなかった。
倒れたモンスターは目が覚めると元気満々で戦闘に復帰したが、倒れたリヴリーはそのまま冷たくなっていった。
リヴリーたちは思い知った。
自分たちが相手にしていたのは、決して数の減らない敵だったのだと。
ＬＩＰＳが落ちずに、呪文ブースターがきちんと機能してくれさえすれば、リヴリーたちも決して減らない霊力でモンスターを迎え撃つことができる。けれども、まるで空気のように、あって当たり前と思っていた機能が麻痺して、リヴリーたちは思い知った。
自分たちは、本当はか弱い生き物だったのだと。
技が使えなくなって初めて、リヴリーたちは思い出した。遠い昔のことを。子供の頃のことを。モンスターと戦う呪文をまだ覚えていなかった、あの日のことを。
目の前にいるそれを見て。手も足も出なくなって。

ようやくリヴリーたちは思い出した。
モンスターは恐ろしいのだと――。
塹壕から出撃した四個中隊は全滅した。
連隊の主力である第一から第三までの突撃中隊と、工兵中隊は戦場に散った。連隊の陣地と要塞の間にある原っぱに、屍（しかばね）を累々（るいるい）とさらした。
ごく一部は塹壕に逃げ戻ることに成功したが、塹壕の中で輜重兵中隊と運命を共にした。
モンスターを避けようと防御のために掘った塹壕ではあるが、完全に身を守れるわけではない。スズメバチは腹を入れて刺そうとするし、ジョロウグモは細長い脚を差し入れて掻（か）き出そうとする。オオカマキリに至っては、塹壕にまたがって仁王立ちになると、細身の上半身と長い鎌を活かして、塹壕の底にまで届く攻撃を見舞った。
塹壕は、水のない釣り堀と化した。
仮設砲塁に立てこもった砲兵中隊も長くは持たなかった。
隙間だらけのメッシュフェンスでは姿が丸見えで、いないふりもできない。モンスターが檻に群がった。

モンスターに襲撃されても、アルミ合金製のパイプは丈夫で折れ曲がることはなかった。塁壁代わりに取り付けたメッシュフェンスも、見た目の細さとは裏腹に、パイプと同じアルミ合金製で丈夫だった。もろかったのは、クランプだった。

資材をつなぎ合わせたり、物を固定するときに使う金具をクランプという。パイプとパイプ。パイプとフェンス。どちらも、間にクランプを噛ませてボルトとナットで締め上げ、がっちりと固定している。

そのクランプがゆるんだ。

パイプやフェンスを固定するために締めてある、ボルトとナットがゆるんだのだった。

仮設砲塁はパイプをクランプで留めて、檻状に組み上げてあった。メッシュフェンスもクランプで留めて、取り付けてあった。檻に群がったモンスターは中に押し入ろうと、四方八方から押し合った。東から押し、南から押し、西から押し、北からも押した。モンスターはよってたかって、仮設砲塁を揺り動かした。

この揺れる力が致命傷となった。

そもそも仮設砲塁は、モンスターに取り囲まれて揺

すられるような事態を想定していなかった。モンスターが衝突するような、直線的なダメージしか考えていなかった。

それもそのはず。足を止めて取り囲むようなモンスターは、機関砲で薙ぎ払ってしまえばいいのだから。万一、虚を衝かれても、砲兵が小銃で撃ち倒せばよい。そのためにフェンスはメッシュにしてある。床以外の全方向に向かって、弾は撃ち出せる。

取り囲まれるような事態が起こるはずはなかった。事実、モンスター津波に直撃されても、仮設砲塁は持ちこたえている。群がるモンスターを機関砲と小銃で撃退している。

仮設でも、砲塁だった。

中にいる限り、外のモンスターは怖くなかった。

呪文ブースターがある限り、弾は尽きなかった。

しかし、呪文ブースターは切れた。弾は尽きた。外のモンスターは中に押し入ろうと取り囲んで、激しく檻を揺さぶった。

檻を揺すられて、留め具のクランプが少しずつゆるんでいった。

パイプとパイプをつなぐ力が弱くなった。パイプとフェンスをつなぐ力も弱くなった。がっちり固定された檻も、クランプがゆるめば、おしまいだった。

パイプを押せば隙間が広がるようになった。パイプの隙間を広げると、フェンスが落ちた。フェンスが落ちると、パイプはさらに隙間が広がった。破滅へと至る悪循環だった。

九つの仮設砲塁は、ひとつ、またひとつと、つぶれていった。揺すられ、ゆるんで、広がり、落ちた。

砲塁でも、仮設だった。

臨時の構築物だった。恒久的な拠点ではなかった。ダークヤグラ要塞の南面を防御するために、急遽築造された支援塁砦だった。

要塞に塁壁があれば、いらない施設だった。モンスターが津波となって押し寄せてこなければ、不要な檻だった。

仮設砲塁は構造的にもろかった。

モンスターチューリップ連隊は、六個中隊と一個の特務狙撃団で編制されている。

その六個中隊は全滅した。

動いている仲間はひとりもいなくなった。連隊の陣地と要塞の間にある原っぱにも、塹壕にも、仮設砲塁にも、生存者がいないのはモンスターの動きを見ても明らかだった。戦う相手がいなくなったからと、モンスターは移動を開始した。

連隊は壊滅したのだった。

一つ目狙撃団の団長は攻撃中止命令を出した。援護すべき仲間はもう、どこにもいない。

いや、仲間はいた。団の仲間がいた。七ユニットが残っている。援護のための全員狙撃で警戒がおろそかとなり、二個が失われてしまったが、狙撃ユニットはまだ七個が戦える。

団長は残存ユニットに対し、攻撃を中止して霊力の回復に努めるよう指示した。

メンバー全員がだまって従った。異を唱える者はいなかった。呪文ブースターが効かない状況で、戦闘中に霊力を使い果たすとどうなるのかは、たったいま目にしたばかりだ。……見たくはなかったけれども。

「それでプーケ線はどうなったのさ？」

団丸はそらしていた目を、りぶたんの背中に戻した。

「ダークヤグラ要塞は落ちたっしょ？　じゃあさぁ、プーケ線は抜かれるじゃん？　リヴリーアイランドにモンスター津波が押し寄せるんじゃん？　でもさ、なんにも起きなかったよねえ？」

実際には、リヴリーアイランドに被害は及ばなかった。要塞が陥落（かんらく）してモンスター防衛線を破られたのに、当のモンスターはリヴリーアイランドを目指すことなく、前線にとどまった。

「すべてはリヴリーの被害妄想だったのだ」

りぶたんは地底のトンネルを再び進み始めた。

「モンスターは怖い。モンスターは襲ってくる。そういう恐怖心ばかりを募らせて、ちっともわかりあおうとはしなかったから、過剰な防衛意識が根付いてしまったのだ。よく考えてみろ。リヴリーを食い殺そうと、どこまでも追いかけてくるモンスターがいるか？　いや、いない。襲われてもその場から逃げ出せば、モンスターはもう追いかけては来ない。そうだろう？」

そう。りぶたんの言うとおり。テレポートして逃げたリヴリーを、さらに追いかけるモンスターなど聞いたこともない。

「モンスターはリヴリーを付け狙ったりしない。攻撃されて反撃するか、出会い頭に襲撃するか、そのどちらかだ。つまり、モンスターは初めから、リヴリーアイランドなど眼中になかったのだ。プーケ線を破っても、ただの一匹たりともリヴリーアイランドには向かわなかった。どうでもよかったのだ、リヴリーアイランドのことなど。ダークヤグラ要塞を落としたモンスターが次に向かった先は、依然として戦闘状態にあるほかの要塞だった」

「モンスター津波のターゲットは要塞だったってこと？」

「そうだ。問題は要塞だったのだ。確かに凶暴なモンスターはいる。出会っただけで突然襲いかかってくる。駆除したところで、怪物密林から続々と流れ込んでくるから、プーケ線を引いて警戒するのは当然だ。物見櫓の監視所は必要だろう。撃退するための砲塁もあったほうがいいかもしれない。だが、要塞まではいらなかったのだ」

　要塞の建設が始まって、モンスターは騒ぎ始めている。

木造の物見櫓は細長くて、石造の砲塁は地面に張り付くように低くて、どちらも目立たなかったからか、建設してもたいした騒ぎになっていない。
「モンスターが騒ぎ始めた理由はわかっていない。要塞建設時の騒音か振動がモンスターを刺激したという説が有力だが、あたしはちがうと思っている。モンスターは本能で悟ったのだ。危険な生き物が巨大な巣を作っている、とな」
「そっか。モンスターから見れば、リヴリーのほうが危険なんじゃん」
「そういうことだ。視点を変えれば、誰もが理解するはず。モンスターはリヴリーなのだと」
「……」
団丸はふと足を止めた。
防衛局の職員にモンスター愛護派とののしられた理由がようやくわかった。なにがどう愛護派なのか、そこまでくわしくはわからないが、うとまれる理由だけはわかった。
モンスター津波で防衛局は、武官級も含めて実に六分の一もの職員を失っている。六人に一人が死んだわ

けで、そのほとんどがダークヤグラ要塞と運命を共にしている。
それなのに、その被害を、悲惨な実態を、モンスターの脅威を、誰よりも一番よく知っているはずのモンスターチューリップ連隊の生き残りが、いまはモンスターの愛護に勤(いそ)しんでいるのだとしたら。
防衛局を離れ、ＬＩＳＤの保安官と副保安官として、モンスターを守る側に立っているのだとしたら。
これは防衛局にしてみれば、裏切り者でしかないだろう。
モンスターはリヴリーだと、りぶたんは言った。
なるほど。これではうとまれるはずだ。
嫌われて、それでもなお、ふたりは主義主張を変えていない。固い絆そのままに、信念を貫き通して、自分たちの道をしっかり前へと進んでいる。
団丸はりぶたんとヒナタの芯の強さを知った。
「……」
そして、団丸は一抹(いちまつ)の不安を覚えた。
りぶたんの、ヒナタへの友情は揺るぎないようだ。
だが、ヒナタはどうなのだろう。ヒナタの、りぶた

んへの友情は揺らいではいないだろうか。
友情は揺るぎないのだとしても、固い絆で歩んできたふたりの道は、いま、分岐点に差しかかっているのではあるまいか。
通用門から地ノ塔へと降りてゆく長い螺旋階段で、団丸は見た。
りぶたんがフレイムを諭(さと)そうとして、今日は同じ道を歩む仲でも明日はちがう道を歩んでいるかもしれないと、そう語ったときにヒナタは動揺を見せた。
気が合えば合うほど、つきあいが長ければ長いほど、別れは切ない。
団丸とK(ケイ)は短いつきあいだった。突然出会って、突然別れた。これからは別の道を進むのだと、一方的に別れを告げられた。それはしかたのないことだった。団丸には尋ね人がいた。Kには探し物があった。ふたりとも、自分の道に人生を賭けていた。気の合う相棒のためでも、回り道をする余裕はなかった。
たまたま進む道がいっしょになって、ふたりは手を組んだ。そして分かれ道でコンビを解消した。盗賊「怪盗団丸」は解散した。団丸はひとを捜して地下牢

獄へ入るべく、自首をした。Kはいずこともなく去っていった。縁があったら、また会おうぜ。そう言い残して。

縁はもうないのか、それっきりKとは会っていない。つきあいは短くても、団丸にはつらい別れだった。つきあいが長ければ、もっとずっと悲しい思いをしたことだろう。

りぶたんとヒナタは幼なじみの親友だという。これまでずっと、ふたりでいっしょにやってきた相棒だという。悲惨な戦場でも共に戦っている。

そんなふたりの分かれ道が、もうそこまで来ているのだとしたら……。

「……それでもひとは、自分の道を進むのさ」

団丸はぽつりとつぶやいた。

「なにか言ったか？」

少し離れたところでりぶたんが振り向いた。

団丸が足を止めて物思いにふけっていたので、距離が開いている。

「どうした、そんなところで立ち止まって。疲れたのか？」

「うんにゃ」
「まねをする元気はあるようだな」
「？」
　まねと言われて、団丸は気づいた。そういえば、りぶたんも「うんにゃ」を口癖にしている。
「トンネルはまだまだ先がありそうだ。続きはどうする？　呪文概論の講義がいいか？　それとも、あたしたちが要塞司令官のダークヤグラを落ち延びさせた話がいいか？」
「えっ？　まだ続きがあるんだ？」
「あるとも。ダークヤグラは要塞司令部にいた。無傷だった。まわりには司令官を守って玉砕した要塞守備隊が横たわっていた。仲間たちの亡骸（なきがら）に囲まれてじっとたたずんでいたダークヤグラは、おそらく、要塞と運命を共にする気だったのだろう。そうでなければ逃げ出したはず。だが、奴は管理リヴだ。むざと死なせるわけにはいかん。そこで団長命令で、あたしとヒナたんがダークヤグラに張り付いて警護し、残りのメンバーが周辺を警戒して、奴を落ち延びさせたのだ。……どうだ？　もっとくわしく聞きたいか？」

「聞きたいっ」
団丸の鼻息が荒い。
「ならば、しっかりついてこい。さあ、行くぞ」
りぶたんは前を向くと歩きだした。
「ラジャー！」
団丸は駆けた。
――ひとにはひとの道がある。
螺旋階段でりぶたんはそう言った。
りぶたんとヒナタが分かれ道に出くわしたとして、そこで別れるのか、それとも共に進むのかは、本人たちが決めることだ。なにも他人の悩みを先取りして、団丸が我が事のように思い悩む必要はない。
団丸は足を飛ばした。
悩みも不安も、地底トンネルの暗闇に置き去りにした。

第七章　后土（こうど）の城

一

分かれ道が見えた。

地ノ塔地下一階、用度室の抜け穴から始まった長い道は、初めての分岐点を迎えた。

誰からも協力を得られずに、たった四人で取りかかった地底トンネルの探索だった。スタート地点で二手に分かれた。講習を受けていない新人保安官助手の団丸は、保安官のりぶたんが面倒を見ることにした。保安官助手の経験があるフレイムは、副保安官のヒナタに預けた。

二手に分かれたときに、りぶたんは単独行動を禁じた。常に二人一組で動くよう、指示した。分岐点では引き返せと、厳しく言い渡した。

分岐点でさらに二手に分かれると単独行動になる。それでは不測の事態にもひとりで対処せねばならず、後れを取りかねない。

二人一組で行動したとしても、分岐点で片方に進めば、もう片方から出てきたモンスターに退路を断たれる恐れがある。そうなれば、出口があるかどうかもわからない地の底のトンネルをひたすら前に進む羽目となる。

乏(とぼ)しい人員で、危険を回避しつつ安全にトンネルを探索するには、分岐点で引き返す必要があった。そこより先は次回に持ち越しとなる。

「あそこまで行ったら折り返すぞ」

りぶたんはオーロラライトを持つ手を突き出した。

「ラジャー」

団丸はりぶたんと並んで歩いていた。

手にはオーロラランプをぶら下げている。周囲をまんべんなく照らすランプのおかげで、足元は明るい。背後の暗闇も、ランプの明かりに押されて迫ってはこない。

一方、りぶたんが持つオーロラライトは懐中電灯型で、正面に向ければ、後ろはもとより足元でさえ照らせなかった。その代わり、加工されたオーロラダイヤの光は指向性を持って、遠くまで届いた。

その遠くに闇はもうない。これまでずっと、行く手にはオーロラライトの光も届かないほど先に、暗闇があった。しかしいま、闇は消えて突き当たりとなる壁が見えている。一歩進むごとに、土の壁が模様まではっきりと見えてくる。左奥に向かって斜めになった壁だ。

どうやら、漢字の「入」の字に近い丁字路（ていじろ）のようだった。

りぶたんと団丸は手前の左から来ている。右には急角度で曲がって、斜め後方に延びてゆくようだ。左はゆるやかに曲がって、さらに奥へと進むらしい。斜め向きの壁を見ると、そう思えた。

「それにしてもさ。ここまでずっと一本道だったから迷わなくてすんだけどさ。地底で、おまけにトンネルの中だからさぁ、方向がさっぱりつかめないじゃん。いまどっちに向かってるのさ？」

「さあな」

「いま何時なのさ？」

「さあな」

明かりがあるから暗闇を徘徊するよりもましだが、

目印のない地底トンネルでは方向感覚が狂う。時間の経過もすっかりわからなくなる。
「よくもまあ、こんなトンネルを掘ったもんだねえ」
団丸は半ばあきれて、半ば感心した。
トンネルを掘ったのはモグラコオロギでも、掘らせたのはルビーローズ一味だ。きちんと測量をして、方向感覚を狂わせることなく見事に竣工(しゅんこう)している。
「一味にはチャパティがいるからな。見かけによらないとは奴のことだ。おっとりしているようで、頭は切れるし、知恵もある。根気のいる仕事も奴に丸投げしておけば、着実に仕上がってゆく。無口でおとなしい性格にだまされるなよ。ああ見えても、お茶会の暗殺者と異名をもらった奴だ。まあ、誰かを殺したわけではないがな」
「お茶会の暗殺者？　すごいんだか、すごくないんだか、よくわかんないけどさ。とろそうに見えてやるじゃん」
「マハラはマハラで、あのとおりそそっかしい奴だが、荷動きには抜け目がない。おちゃらけた性格でも、物資を調達するときは別人だな。でかい体で動きもすば

やい。ひと呼んで、マッハのマハラだそうだ。まあ、そう呼ぶのは本人だけだがな」
「自分で自分にかっこいいあだ名付けたんだ？　だめじゃん」
「ルビーローズは、正直言ってよくわからん。聖母と呼ばれるだけあって、確かに面倒見はいい。上品に振る舞ってもいる。だが、あたしにはどうも猫をかぶっているように見えるのだ」
「面倒見がいいのも、上品なのも、ただのふりってこと？　ほんとは性悪？」
「うんにゃ。素で面倒見はいいと思うぞ。演技ではあそこまで慕われまい。それに性悪なら、マハラもチャパティも弟分のようになびいたりはしないだろう」
「一味のふたりは弟分なんだ？　管理リヴ同士なのにさ」
「上下関係とまではいかなくても、一目置いているのは間違いない。ふたりがルビーローズのことを、姐御とか姐（あね）さんとか呼ぶのを聞いた職員は多いぞ。まあ、ただの悪ふざけなのかもしれんが」
「聖母ルビーローズ姐御……？」

おしとやかな聖母のイメージに、姐御は重ならない。どうにもギャップがある。自分で口にしておいて、団丸は首をひねった。

「似合わないのは聖母のほうだ」

「ルビーローズの姐御？」

「それならしっくりくるな。実際、奴は姐御肌なのだ。面倒見はいいが、決して上品ではない。マハラもチャパティも、ルビーローズの気っぷのよさに惚れ込んだのだろう。奴のカリスマもそこから来ている」

「へえ。ルビーローズは姐御肌なんじゃん。なんか、わかるような、わからないような、微妙な感じだけどさぁ」

雑談に花を咲かせるうちに、分かれ道に出た。

漢字の「入」の字に似た丁字路だった。

りぶたんと団丸が通ってきた左手前のルートは、分岐してきたようだ。

トンネルは左奥から掘り進めてきて、そのままま っすぐ右斜め後方へ抜けたものと思われた。そう考えるのが自然だ。もしも右斜め後方から掘ってきたのなら、地ノ塔のある左手前へ抜けるのに、わざわざ遠回りを

したことになる。
ふたりは分岐点に足を踏み入れた。
りぶたんはオーロラライトで右斜め後方を照らした。ゆるい左カーブでトンネルは延びている。はるか先までは照らせないが、明かりの届く範囲にはなにもなかった。
「こっちは問題ない。そっちはどうだ」
「んー。なんか、岩があるっぽい……」
団丸はオーロラランプをかざして左奥を照らした。ランプの明かりは遠くまで届かないが、その遠くに岩のようなものがぼんやりとかすんで見えた。
「さあ、戻るか」
りぶたんは振り向きざまにライトの光を飛ばした。
遠くにある岩がはっきりと見えた。トンネルの真ん中に転がっている。黄色と黒の縞模様(しまもよう)をした、丸みのある岩だった。
「！」
黄色と黒の派手な模様は警戒色だ。もちろん、岩ではなかった。
「スズメバチだ。あわてるな」

りぶたんは小声で注意した。
ライトの光も直接当てないように、少し下に向けた。
「向こうは気づいていないようだ。こっちに尻を向けているし、もしかしたら寝ているのかもしれん」
「モグラコオロギをやった奴じゃん」
地ノ塔のそばで死んでいたモグラコオロギには、スズメバチに咬まれた傷と刺された傷があった。
「だろうな。しかし、奴はなぜ、あそこで止まっているのだ？」
りぶたんはライトを正面に向け直した。
じっとしているスズメバチの鼻先には、大きな岩があった。今度は見間違いではない。本物の岩だ。トンネルをふさいでいる。
「行き止まりじゃん」
「いや、ちがう。よく見ろ。奥の岩に、手前の岩がかぶさっている。隙間があって、あいだを通れる――」
りぶたんの言葉が途切れた。
スズメバチが音もなく動いたのだった。
巨体に似合わないすばやさで、スズメバチはくるりと反転した。

大きな顔がこちらを向いた。顔の左右は、縦長の目が大部分を占めている。黄色い顔に黒い目をしている。その目がオーロラライトの光を反射した。

光り返してなお、暗闇よりも暗い目だった。

スズメバチは羽ばたくと、地底トンネルの中を飛んだ。高くて広いトンネルは、スズメバチが羽ばたいて飛べるだけの余裕があった。

「ちぃ！」

りぶたんは団丸の前に出た。新人の助手を背中でかばった。

どうやら相手は、出会っただけで襲いかかってくる凶暴なタイプのようだ。一気に迫ってくる。

「ネット！」

りぶたんはネットを放った。ＬＩＳＤ専用技の捕縛（ほばく）ネットを投擲（とうてき）した。

オーロラライトを瞬時に左手に持ち替えて、あいた右手をだらりと下げ、呪文を唱えると同時に腕を跳ね上げた。跳ね上げた腕の指先は、飛んでくるスズメバチにぴたりと向けられた。

指を向けたのは方向指定のためだった。

アンダースローのアクションで呪文を唱えたのは、肉体を使うことで精神的な負担を軽減し、少しでも霊力を節約するためだ。アウターゾーンに呪文ブースターはない。霊力を節約しないとどうなるかは、骨身にしみているりぶたんだった。

空中に捕縛ネットが出現した。六角形の網だった。クモの巣に似ているが、粘着はしない。六つの角には楔（くさび）がついていた。

捕縛ネットは真っ平らのまま、ターゲットに向かって飛んでいった。見るからに技だ。現物の網を投げれば、こうは飛ばない。

スズメバチはまっすぐ捕縛ネットに突っ込んだ。避けようとはしなかった。一直線に、最短距離でリヴリーを狙ったのだ。荒々しい行動から察するに、ネットを突き破って襲いかかるつもりでいたようだ。

ターゲットを捕らえたネットはそのまま相手を包み込み、絡め取った。スズメバチは羽ばたくことができなくなって、失速した。もっとも、そのまま墜落させたのでは、りぶたんたちに激突する恐れがあった。それではネット越しに攻撃されてしまう。

「ハーケン！」
りぶたんは天井に向けて、さらに腕を跳ね上げた。
スズメバチを絡め取った捕縛ネットから、六本の矢が飛んだ。六角形の先端にあった楔が弧を描いて飛び、トンネルの天井に突き刺さった。
ハーケンはネットの補助呪文だった。
ほかの呪文を補う呪文のことを補助呪文という。ハーケンを単独で使用してもなにも起こらないが、ネットに追加する形で使用すると、捕縛ネットを天井から吊るしたり、壁や床などに固定することができた。
ハーケンが天井に打ち込まれてネットは固定されたが、それだけでは突っ込んできたスズメバチの勢いは殺せなかった。ネットで包まれた玉がりぶたんめがけて飛んでくる。
ハーケンとネットはザイルで結ばれていた。ザイルには伸縮する機能があった。ハーケンが飛んだときに矢のように見えたのは、ザイルが伸びたからだ。
そのザイルがぎりぎりのところでピンと張って、玉の勢いを完全に殺した。
りぶたんの目の前だった。

絡め取られたネットの中でスズメバチは悪あがきをした。咬みつこうと頭を動かして巨大な顎(あご)をガチガチと鳴らした。体を折り曲げて尻を突き出し、するどい針で刺そうともした。

りぶたんは仁王立ちだった。モンスターの巨体にもひるまなかった。スズメバチの攻撃が届かないことは見切っていた。

玉は重力に引かれて落ちながら、振り子のように戻っていった。

「ザイル」

りぶたんは天井に向けた手を、巻くように動かしてザイルの長さを調節した。ハーケンとネットをつなぐザイルが短くなった。

ザイルもまた、ネットの補助呪文だった。

玉は完全に宙吊(ちゅうづ)りとなった。中でスズメバチが暴れるため、揺れは収まらなかったが、とりあえず危険は去った。

「これこれ。あたいも前の保安官にやられたっけ」

団丸はなつかしそうに捕縛ネットをながめた。

「ネットにハーケンにザイルだ。手順は教えたとおり。

次はおまえがやってみろ」
ザイルを巻き終わって、りぶたんは手を下ろした。
「次？」
「残念だが、長くは持つまい。ハーケンは抜け落ちるだろう。なにしろ、土を押し固めただけの天井だからな。地面も壁も同様。ここではネットの固定は無理だ」
りぶたんはオーロラライトを向けて、前方の岩を照らした。さっきまでスズメバチがいたところだ。大きな岩がトンネルをふさいでいるように見える。
「あの岩にハーケンを打ち込めば固定はできる。だが、ネットを固定したところでなんの解決にもならない。問題は、どうやってそいつをトンネルの外に追い出すか、だ」
今度は網の中のスズメバチにライトを向ける。
「攻撃技を出しても意味ないよねえ？」
「霊力を無駄遣いして気絶させて、そのあとどうやって運び出すつもりだ。出口まで引きずるのか？　そいつに自分から出て行ってもらえば、力は温存できる。それに、スズメバチは攻撃されると仲間を呼ぶぞ。リ

ヴリーアイランドでは呼びかけに答える仲間も近くにいないだろうが、怪物密林ではそうもいかない。そしておそらく、この上はもう密林だ」
　りぶたんは天井を照らした。
「地底のトンネルだから安全度は高いだろうが、そいつのほかにも潜り込んだスズメバチがいれば、閉ざされた空間だけに、逆に危険度が増す。ネットのように、ダメージを与えず、攻撃したことにならない技を使うのがベストだ」
「網は半日くらい持つっしょ？」
「呪文ブースターがあればな」
「ないじゃん」
「まあ、半日持ったところで、その前に網を咬み切られるのが落ちだな。この様子だと」
　スズメバチはネットに咬みついている。大顎（おおあご）をワイヤーカッターのように使って、網を断ち切ろうとしている。
「このままほったらかして引き返してもさぁ、どうせ逃げずに追いかけてくるんだよねえ」
「そうだな。このまま戻ったところで、そいつを地ノ

塔まで案内するだけだ。その先にはヒナたんたちがいる。ここでモンスターに出くわしたのはあたしとおまえの不運だ。運の悪さを仲間に押しつけたりせずに、あたしたちで解決するぞ」
「それはあたいも賛成だけど。じゃあ、どうすんのさ」
「あそこで止まっていたということは、岩の向こう側からやってきたのだろう」
りぶたんはもう一度、ライトを前方の岩に向けた。
「岩の隙間はスズメバチには通りづらいのかもしれんな。だから、モグラコオロギはスズメバチに襲われても逃げ切れたのではないか。岩のこちら側で襲われたのなら、トンネルの中で撒くのは無理だったはず」
「とりあえず、岩の向こうまで運び出す？」
「それはむずかしそうな気もするがな。ちょっと見てくるか。ここは頼んだぞ」
りぶたんは小走りに駆けだした。
「頼まれてもいいけどさぁ。それ、単独行動じゃん」
団丸は不平の言葉をりぶたんの背中にかけた。
単独行動を禁じ、常に二人一組で動くように指示し

たのはりぶたんだ。
「すぐ戻る」
りぶたんは足も止めずに答えると、宙吊りになったスズメバチの脇を駆け抜けた。
スズメバチがりぶたんに襲いかかろうとして、玉の揺れる向きが変わった。
「……」
団丸はしかたなく、その場に待機した。
岩にたどり着いたりぶたんの姿が、薄い暗闇に溶けてゆく。
奥の岩と、手前の岩の間に入り込んだとは理解できるが、団丸の持つオーロランプでは明かりが届かずに、おぼろげにしか見えなかった。
地底のトンネルにひとり残されても、団丸は恐怖を感じなかった。
前からも後ろからも暗闇が迫ってくる。前の闇はその先にりぶたんがいて心強いが、後ろの闇はちがう。地ノ塔へと続くルートはずっと先にヒナタたちがいても、もう一本は未知の空間だ。なにが潜んでいるかわからない。

それでも、団丸は怖くなかった。暗闇にひとりでいることには慣れがあった。団丸はかつて、怪盗と呼ばれた盗賊だった。闇に潜むのは御手の物だ。コンビを組んだ相棒だって、いつも闇の中にいた。背後の暗闇にはいまもその相棒がいて、団丸の背中を守ってくれているような、そんな気がした。

団丸はランプを地面に置くと、カウボーイハットを脱いだ。特にやることもないので、帽子のつばの曲がり具合にそっと手を加えた。カウボーイハットの魅力はつばの曲がり具合にある。つばが描く曲線をシェイプと呼ぶ。シェイプのラインは帽子によって異なる。買ってきて、ただかぶればいいというものではなかった。

「？」

団丸はふと振り向いた。

背後の暗闇から、かすかに風が吹いてきたような気がした。

こんなときヒナタがいてくれたら、ピキの大きくて丸い耳の毛で、もっと敏感に空気の流れを感じ取ってくれただろう。りぶたんでもいい。ミミマキムクネの

巻かれて垂れ下がった耳の毛で、風を感じてくれたにちがいない。
けれども、団丸はショウジョウダルマだった。長い毛は生えていないし、丸い体は見た目とちがって空気抵抗も少ない。
坊やはどうだろう。フレイムに思いを馳せて、団丸はにやりと笑った。トビネの長く太いしっぽで風を受けても、あの坊やならたぶん気づきもしないさ。そう思った。
帽子にピン留めしたＬＩＳＤのバッジをそっとなでると、団丸はカウボーイハットをかぶりなおした。

りぶたんが戻ってきた。
「大きな岩が続いている。モンスターがなんとか通れるだけの隙間はあるが、つづら折りになっていて抜けにくい」
「運び出すのは無理っぽい？」
「不可能ではないが、かなり苦労するな。それに抜けたところで、岩がごつごつ突き出した荒れた道が待っている」

「じゃあ、引きずって運び出すのは無理じゃん」
「道なら、ほかにもあるぞ」
りぶたんは団丸の背後に広がる暗闇に目を向けた。
「そっちのルートが使えるはずだ」
「そっちって、あっち？」
驚いた団丸は体をひねって、後ろを指さした。
「そうだ」
分岐点は丁字路になっている。
スズメバチは左奥から潜り込んできたと考えられる。そうでなければ、隠れるところもない地底トンネルの中で、獲物のモグラコオロギに逃げられたりはしないはずだ。左奥にはつづら折りの難所がある。スズメバチも戻ろうとしながら、進むのをためらったか、億劫（おっくう）に感じて足を止めたほどの岩場がある。
難所を通ってスズメバチを外に引きずり出すのは、なるほど苦労するだろう。だからといって、地ノ塔へのルートを使うわけにもいかない。そのルートはおそらく、ショップゲート近辺（きんぺん）のプロテクションゾーンに抜けるはず。安全なパークでショッピングを楽しんでいるリヴリーたちのすぐそばで、凶暴なモンスターを

解き放つなど言語道断だ。
となれば、残るルートはひとつしかない。
「分岐点で引き返せと言ったが、あたしたちは引き返せなくなった。モンスターに出くわしてしまったからな。連れ帰るわけにはいかないのだから、進むよりほかに手はあるまい」
分岐点では引き返すように、りぶたんは仲間たちに厳命している。
片方に進めば、もう片方から出てきたモンスターに退路を断たれるかもしれない。そうなると後戻りもできずに、出口があるかどうかもわからない地底トンネルをひたすら前に進むことになってしまう。
しかし、事情は変わった。モンスターに見つかってしまった。引き返せばモンスターを案内することになってしまうから、もはや引き返すことなどできない。分岐点をどちらかに進むしかないのだ。
左奥には確実に出口があると思われるが、難所もある。難所を抜けても、岩の突き出た悪路が続く。スズメバチを引きずってゆくのは難儀する。
だが、残るルートにも問題はあった。

「出口がなかったらどうするのさ？」
「なければ引き返す。だが、出口はあるだろう。トンネルをよく見てみろ」
りぶたんはオーロラライトの光を使って、トンネルの壁に線を引いた。奥から奥へ。左から右へ。光の線は一直線に伸びた。
「見ろ。まっすぐだ。多少、左に曲がってはいるが、地ノ塔へのルートなど無視してずっと先まで掘り進めてある。なぜだと思う？　マハラが調子に乗って、うっかり掘りすぎたのか？」
「それは……よくわかんないけどさぁ」
丁字路は漢字の「入」の字に似ている。左奥から掘り進めてきて、まっすぐ右斜め後方へと抜けている。左手前に進む地ノ塔へのルートは、あとから掘られている。
「これがメイントンネルなのだ。いや、言い方を変えよう。第一坑道だ。分岐して、地ノ塔経由でショップゲートに抜けるルートは第二坑道。ルビーローズ一味は、起点から終点までを一本のルートでつなぐ気はなかったと見える。少なくとも二本の坑道に掘り分けて

いる」
「なんでそんな面倒なことをしたのさ？」
「さあな。進路を誤っていないか確認するためか？
いや、ちがうな。それなら確認がすめば埋め戻すはず。
それに、ずっと先まで掘るのもおかしな話だ。必要な
ルートだから、掘り進めたのだ。初めからそういう計
画だったのだ。しかし、なんのために？　非常事態に
備えて、別の出口を確保したのか？」
　自問自答するりぶたんに、団丸も答えを提供した。
「換気のためとか？　ほら、地ノ塔だってしっかり換
気対策してたじゃん。地底のトンネルなんだからさぁ、
ここもやっぱり換気に注意する必要があるんじゃん」
「ふむ。しかし、換気口なら小さな縦穴一本ですむだ
ろう。いや、それだと雨が染み込むか。雨は地面が吸
い取っても、夜間に地底の明かりが地上まで漏れる恐
れがあるな。とすると……」
　りぶたんは自問自答に戻った。腕組みをしてうつむ
き、考え込んでいる。
「そういえば、気のせいかもしれないけどさ。さっき、
後ろから風が吹き抜けていったような気がしてさぁ」

「風が？」
「そそ」
「ふむ。ならば、やはり換気口か。それでいて非常口も兼ねている、というのはどうだ？」
「悪くないじゃん。新鮮な空気は入ってくるし、いざとなったら逃げられるし……あ！」
話の途中で団丸は声を大きくした。
土を押し固めただけの天井に打ち込んだハーケンが、音もなく抜けたのだった。
宙吊りにされていたスズメバチが落ちた。重たげな震動が地面を伝わって、りぶたんと団丸の足まで届いた。
「待て！　あわてるな！」
りぶたんは呪文を唱えようとした団丸を制止した。
「そいつには自分で動いてもらおう。外までな」
「え？　じゃあ……」
「たとえ出口がなかろうとも、おまえには付き合ってもらうぞ。さあ、行こうか」
りぶたんは団丸をうながすと、分岐点を右斜め後方に折れるルートへ進んだ。

地面に落下したスズメバチはしきりに飛ぼうとしている。だが、捕縛ネットに絡め取られているので羽ばたくことができないでいる。

「あたしは前を見る。おまえは後ろを見ろ。スズメバチから目を離すな。ネットの効力はじきに切れる。その前に、網が外れたり、咬み切られることもありうる。援護はしてやるから落ち着いて、次のネットはおまえが放て」

「ラジャー」

役割の分担も決まった。りぶたんは遠くまで届くオーロラライトで進路を警戒し、団丸はあえて退路を断たせたスズメバチを警戒する。

そのまま進んで、もしも出口がなければ、骨折り損。行く手に別のモンスターが現れたならば、挟(はさ)み撃ち。トンネルの中という閉塞空間で、ほかに有効な選択肢がないにしても、あまり賢いとは言えない作戦だった。

「心配するな。出口はきっとある。理由があって、地底トンネルを二本に掘り分けたのだ。一味はトンネルを隠し通すつもりで、破った壁の補修道具一式まで取

りそろえている。用意周到な連中だ。行き止まりのトンネルを意味もなく掘ったりはしないだろう。そして、ここまで分かれ道はなかったのだから、この一本だけが行き止まりの偽装ルート、などということもあるまい」

「ちょい待ち！」

団丸が大きな声を出した。

「どうした？」

りぶたんは振り返った。

落下したスズメバチはネットに絡め取られたまま、体を持ち上げた。編み目から脚を出し、するどい鉤爪で地面を引っ掻くと、のそりと動いた。依然として飛べない状態ではあるものの、スズメバチは歩く能力を取り戻したのだった。

歩くことさえできれば、獲物に襲いかかることもできる。

スズメバチは走りだした。

捕縛ネットを頭からかぶったまま、六本の脚で土を蹴って駆けた。

「ハーケン！」

りぶたんが呪文を唱えた。水平に伸ばした腕を振り下ろす。
駆けだしたスズメバチに引きずられていたハーケンが、地面に突き立てられた。
ネットが固定されて、スズメバチに急ブレーキがかかった。
「よし、この調子でいこう。奴が走る。ハーケンで止める。それの繰り返しだ。ネットが切れたら掛け直す。ふたりで交代すれば、霊力の消耗も気にするほどではない。次は頼んだぞ」
「ラジャー。まずハーケン、網が切れたらネット」
団丸は手順を復唱した。
出番はすぐにやってきた。
宙吊りになったときはハーケンが抜けるまで手も足も出なかったスズメバチだが、今度は天井ではなく地面に固定されている。脚は使える。
脚の先にある鉤爪で踏ん張って、スズメバチは巨体をゆっくりと前に運んだ。ザイルがピンと張る。前に進もうとするスズメバチと、地面に打ち込まれたハーケンの力比べとなる。

勝敗は初めから明らかだった。土を押し固めただけの地面では、しっかり固定もできない。
土がゆるんだ。ハーケンはすっぽ抜けた。
りぶたんと団丸は足早にその場から離れた。スズメバチから距離を取らないと、同じ場所で技を掛け続けることになる。それでは前に進めない。
力業（ちからわざ）でハーケンを引き抜いたスズメバチは、逃げる獲物を追った。
今度は団丸が追いすがるスズメバチを足止めした。その次はりぶたんが止めた。ふたりで代わる代わる呪文を唱えながら、トンネルの奥に向かってスズメバチを誘導していった。
途中でネットが切れたら、即座に呪文を掛け直した。飛翔モンスターに得意の空中戦をさせてやる必要はない。地面を走らせたほうが戦闘能力は下がる。
それでも危険なモンスターであることに変わりはなかった。走らせて足を止めるという、一連の行動に慣れてルーチンワークと化しても、りぶたんと団丸は互いに離れなかった。相方が失敗してもすぐに援護できる態勢を維持した。

やがて、前方から暗闇が去り、薄明かりが差し込み始めた。外界の光だった。
りぶたんが第一坑道と呼んだトンネルには、やはり出口が設けられていた。その出口に向かって、トンネルは登り坂となった。
「マジじゃん。ちゃんと出口あったじゃん」
「思ったよりも遠い出口だったがな」
「このまま外まで行くっしょ？」
「うむ。きっちり奴を連れて行く」
外の明かりが見えても、ふたりは警戒を怠(おこた)らなかった。すぐ後ろには凶暴なモンスターがいて、前には出口がある。決して安全な出口ではないから、気がゆるむこともなかった。
「外に出たらさぁ、怪物密林だよねえ？」
「たぶんな。気を抜くなよ」
「ラジャー」
坂を一歩登るごとに、前方の明かりが強くなってゆく。まぶしくて、先の状態はよく見えない。すっかり暗闇に慣れてしまった目に、外から差し込む光が突き刺さる。オーロラライトのやさしい光とちがって、日

光は攻撃的だ。明かりが目に痛い。
しかし、じきに順応した。立ちはだかる壁のような坂が見えた。降り注ぐ光が路面を照らして、長く急な坂道は濡れたように光っている。ずっと上にある出口を見上げてまぶしさに目を細めると、光る坂はまるで滝のように見えた。
トンネルは出口に向かって急斜面になっていた。崖と呼んでも差し支えないくらいだ。傾斜がきつい上に、かなりの高低差がある。登るには四つんばいになって、体重を手足に分散させる必要があるだろう。両足で立って登るのは至難の業だ。
「ちっ。すべり台じゃあるまいし。階段くらい刻んでおけばいいものを」
りぶたんが文句をつけた。
地面は押し固めてあるから、確かによくすべりそうだ。
「これさぁ。やばいじゃん。すべり落ちたところヘスズメバチとか、ありそうじゃん」
「やむをえん。あたしが先に登って、出口の安全を確認する」

「あたいはここでスズメバチの足止めだね」
「宙吊りにしろ。もう走らせる必要はない」
りぶたんはトンネルの端にオーロラライトを置いた。上から光が降り注いで周囲は明るい。照明はもういらなかった。それに急な坂を登るには、両手を自由にしておく必要があった。スズメバチを外に連れ出したらトンネルに戻ってくるのだから、明るい地上にオーロラライトをわざわざ持って上がる理由もない。
点灯したまま地面に置かれた懐中電灯型のライトは、トンネルの奥で網をかぶって蠢(うごめ)くモンスターを照らした。
団丸もトンネルの端にオーロラランプを置いた。
「安全を確認したら降りてくる。交代するから、おまえが先に外に出ろ」
「え？　なんでさ？　無駄手間じゃん。あんたが先に外に出たんでいいっしょ？」
「外も危険だが、一番危ないのはしんがりだ。おまえがすべり落ちても、この高さでは上から援護はしにくい。だから、あたしが下に残る」
トンネルの端から中央へと戻りながら、ふたりは話

し合った。
「じゃあさ。あたいが先に登って安全を確認して、そのまま外に出たらいいっしょ？　それなら無駄もないじゃん。だいたい、あたい、こう見えてけっこう身軽なんだけどさぁ」
「そういえばそうだな。おまえは怪盗と呼ばれた盗賊だった。いいだろう。それでいこう」
　りぶたんはトンネルの奥を見た。
　地面に打ち込まれたハーケンを引き抜こうと、スズメバチが踏ん張っている。抜けるのを待たずに、りぶたんは呪文を唱えてスズメバチを宙吊りにした。
　天井から吊られたスズメバチはなにもできない。これでしばらく、時間は稼げる。
　りぶたんが視線を戻すと、団丸はもう登り始めていた。四つんばいになって、崖のような斜面をすいすいと上がってゆく。ショウジョウダルマの大きな体に似合わず、軽やかな身のこなしだ。さすがは元怪盗。なにかと豊富な経験が物を言うようだ。
　坂を登る団丸に注意を払いつつ、りぶたんは出口とトンネルの奥とを交互に警戒した。出口はまぶしく、

トンネルの奥は暗い。目にはつらい作業だった。
「やばいじゃん。なにこれ、柵があるじゃん」
上から声が落ちてきた。
「なんかさぁ、出口にふたがしてあるじゃんか。フェンスみたいなのでさ」
「モンスターの侵入防止用か。抜け目のないことだな」
見上げたりぶたんは、手をかざしてまぶしい光をさえぎった。目をこらしても、フェンスとやらは外の光に埋もれて見えない。
「外せないのか？」
「ちょい待ち」
「ただのモンスター対策だろう。リヴリーにも外せないような柵は取り付けないはずだ。第一、出られないのでは非常口にならん」
「あっ！　軽い！」
団丸の体がぐいっと伸びて、地上に出たのが下からも確認できた。
「このフェンス軽い。固定もされてないしさ。出口の穴にかぶせただけじゃん」

「そうか。それより、周囲を警戒しろ」
「……オッケー！　問題なし！」
「よし。いまからあたしも上がる」
りぶたんは最後にもう一度、宙吊りにしたモンスターに目を走らせた。
スズメバチはなにもできずにじっとして、恨めしそうに獲物を見つめている。
「あたいが見張るよ！」
団丸は上からりぶたんを見守っている。
りぶたんは両手をついて、急な坂道を登り始めた。太めの団丸がすいすい登っていったのだから、団丸よりもぐっとスリムなりぶたんがすべり落ちるようなみっともないまねはできない。
とはいえ、心配はいらなかった。団丸に盗賊の経験があるなら、りぶたんには保安官の経験がある。一つ目狙撃団の一員として、モンスター津波を生き抜いた経験だってある。防衛隊の教練（きょうれん）は過酷だった。斜面を登るくらいで後れを取るような、りぶたんではなかった。
団丸に負けない早さで、りぶたんもすべり台のよう

な坂道を登っていった。
中ほどまで登ったときに、かすかに響く振動があった。地面に触れる手足が目には見えない揺れを感じ取った。耳にも振動は届いた。空気のふるえが音となって伝わった。
「……」
りぶたんは右手を放して体を起こすと、首をひねって下を見た。
崖のように急な坂道のせいで、トンネルは大きく縦に曲がっている。一本の同じトンネルなのに、縦穴と横穴に分かれているように見える。
その横穴から、網をかぶったままのスズメバチが這(は)い出してきた。
ハーケンはついさっき天井に打ち込んだばかりだ。宙吊りにされたスズメバチは手も足も出ないから、ハーケンが抜けるまでにはいま少し時間がかかるはず。
それなのに、明らかに早いタイミングでハーケンが抜けている。
いままではスズメバチを足止めしても視界には常にリヴリーがいたが、今回は坂を登ることで、スズメバ

チの視界からリヴリーが消え失せている。どうやら、獲物に逃げられると思ったスズメバチがあせって暴れて、ハーケンが早く抜け落ちたようだ。

這(は)い出してきたスズメバチは顔を上げてすぐに獲物を確認した。なにしろ一本道だ。坂を登ってゆく獲物をじっと見つめていたのだろうし、きょろきょろと周囲を見回すことはなかった。

スズメバチは走るのと変わらない速さで坂を登りだした。脚なら六本もある。鉤爪もついている。押し固められた上に急斜面のすべる坂も、スズメバチには平地も同然だった。

りぶたんはあわてなかった。スズメバチが迫ってきても、モンスター津波の最前線に比べれば、どうということはない。

「ハーケン」

りぶたんは落ち着いて対処した。

霊力節約のためのアクションとともに呪文を唱え、改めてハーケンを天井に打ち込み、スズメバチを宙吊りにしようとした。

だが、しかし。足場が悪かった。

体重を支えていた左足がすべった。
りぶたんは両手両足を使って、急斜面を登ってきた。下を確認するために右手を自由にして、体重の分散先が減った。右肩を上に向けるようにして体を起こしたため、体重が左足に偏(かたよ)った。
その左足がすべってしまった。
バランスを崩(くず)したりぶたんは、滑落(かつらく)するまいと反射的に右手で地面をつかもうとした。
呪文の方向指定が乱れた。
天井に向けた指先に従って、ハーケンは真上に飛んだ。指がよそを向いたことで、ハーケンもよそを向いた。スズメバチを宙吊りにするための楔は、どこにも打ち込まれなかった。伸びたザイルが空中をむなしく飛んで、力なく落ちた。
足をすべらせてしまったりぶたんも、力なく落ちていった。
押し固められた地面につかむところはなかった。踏ん張ろうにも坂の傾斜はきつすぎた。すべり落ちる体を止めることはできなかった。
落ちる先にはスズメバチがいた。

宙吊りにされることを免れたモンスターは脚を止めて、落ちてくる獲物を待ちかまえている。六本の脚には鉤爪がついているから、スズメバチが足をすべらせることはなかった。そして、捕縛ネットを頭からかぶっていても、咬みつくことはできた。全身をネットに絡め取られていても、毒針を突き刺すことだってできた。

スズメバチのハンデは飛べないことだけ。しかし、獲物は自分からすべり落ちてくるのだから、飛ぶ必要はまったくなかった。

「ちぃ！」

滑落しながらも、りぶたんは体勢を整えた。

ぶざまにすべり落ちたのでは餌食になる。窮地を脱するには、もはや一戦するよりほかに手はなかった。

体はどんどんすべり落ちてゆく。止めるすべはない。スズメバチを宙吊りにしようにも、ハーケンはあらぬ方向に飛び去り、ザイルは伸びきっている。ザイルを縮めてハーケンを打ち直す余裕はない。

捕縛ネットの上からネットをかぶせることもできない。それが可能なら、新しいネットでスズメバチを宙

吊りにするという手もあるだろうが、ネットの呪文を重ねると技は取り消されてしまう。ボタンスイッチと同じ原理だ。押せばオンになり、もう一度押せばオフになる。

ネットをすばやく二回唱えれば、オフのあとにオンにはできる。しかし、さらに続けてハーケンも唱えなければならない。ザイルも必要だ。つまり、四つの技を立て続けに放つ必要があるわけだが、それでは間に合わない。

目の前に迫ったスズメバチに対して、打つ手はひとつ。

攻撃あるのみ。

ダメージを受けたスズメバチの隙を突いて、脇を駆け抜けるのだ。どうせ下まで落ちるのなら、いっそ加速して一気に通り抜けたほうがいい。そうすることで、すべり落ちてはいても方向だけはなんとかコントロールできる。右を抜けるか、左を抜けるか。それとも上を飛び越すか。

攻撃に耐えたスズメバチはすぐさま襲いかかってくるから、もちろん、攻撃技は連射する。

りぶたんはＬＩＳＤの保安官であり、一撃でモンスターにフルダメージを与える専用攻撃技も持っている。しかし残念ながら、いまこの瞬間に使いこなせるような技ではなかった。

――ああ、そういうことか。

りぶたんは唐突に悟った。

地底トンネルにはスズメバチが潜り込んでいた。ルビーローズ一味はそのトンネルを抜けていった。両者は鉢合わせした。スズメバチは一味に襲いかかった。けれども、一味は一瞬でフルダメージを与えてスズメバチを気絶させ、難なく通り抜けていったのだ。

ルビーローズ一味にはお茶会の暗殺者がいる。

――思えば、便利な技だな。

急斜面をすべりながら、りぶたんは全神経を集中させた。

連続攻撃をして一気にすり抜けるのだから、反撃の心配はいらない。むしろ、すり抜けて背後に回り込んだあとのほうが問題だ。

攻撃してしまえばスズメバチは怒り狂う。援軍を呼び寄せる恐れがある。しかも、トンネルの奥とはちが

って出口は目の前だから、スズメバチの援軍が駆けつける可能性は高い。
その出口には団丸がひとりでいる。足をすべらせたばかりに、りぶたんは団丸と分断されてしまうのだ。
スズメバチの援軍が来る前に団丸と合流しなくてはならない。保安官助手とはいえ、新人の団丸がたったひとりで、モンスターに挟み撃ちにされるような事態はなんとしても回避せねばならぬ。もう二度と殉職者は出さないと、涙とともに心に刻んだ、りぶたんだ。
仲間を亡くすくらいなら、いっそ我が身をモンスターに捧げたほうが、つらくはない。
「……」
りぶたんは攻撃のタイミングを計った。
スズメバチが吊り上がった目でにらんでいる。
巨大な顎をガチガチと咬み鳴らして、リヴリーのやわらかい体を咬み裂く瞬間を待っている。
「ネット！」
トンネルに団丸の雄叫びが轟いた。
クモの巣に似た六角形の網が飛んできた。
網が捕らえたのはスズメバチではなく、りぶたんだ

った。
「！」
思わぬ展開にりぶたんは驚いた。
スズメバチを攻撃しようとした矢先の出来事だった。
捕縛ネットに熟達するべく、ヒナタとふたりで技の掛け合いをして練習したことはあるが、実戦で自分が捕縛されるとは思ってもみなかった。ネットは不届き者やモンスターに掛けるものであって、保安官たる自分が掛かるものではなかった。
「ハーケン！」
団丸が吼えた。
網の先端にある楔が飛んだ。
後ろからりぶたんにかぶさった勢いをさらに加速する形で、上のハーケンは下へ、下のハーケンは上へ、右は左へ左は右へと、正面で交差して飛んでいった。
下からのハーケンが股間を抜けて、ネットが両足をすくい取った。りぶたんは網の中に絡め取られた。
六本のハーケンは上下に分かれた。
上からの一本は直下の地面に打ち込まれた。左右斜め上からの二本もそれぞれ斜め下に飛び、地面に突き

刺さった。
下からの一本はザイルをぐっと伸ばして直上に打ち込まれた。左右斜め下からの二本もやはりザイルを伸ばして斜め上に飛ぶと、天井に刺さった。
ハーケンは三本ずつ、天と地に打ち込まれた。伸びたザイルがピンと張った。りぶたんの滑落に急ブレーキがかかった。
獲物が落ちてこないと見るや、スズメバチは再び坂を駆け上がった。
「ハーケン！　ザイル！」
スズメバチがりぶたんに襲いかかるよりも早く、団丸はハーケンとザイルを立て続けに操った。
ハーケンは地面に打ち込まれた三本だけが抜けた。ザイルは天井へと伸びる三本だけが縮んだ。
りぶたんを包み込んだネットが一気に引き上げられた。
スズメバチは地面で咬みつこうとして失敗し、伸び上がって空中で咬もうとしてまた失敗した。そして巨体を伸ばしても、天井まで顎（あご）は届かなかった。
このときばかりは、トンネルの傾斜がりぶたんに有

利に働いた。地面が崖に見えるほどの急斜面だったため、斜めに傾いた天井も高くなっている。高さが増した分だけ、スズメバチの顎(あご)も遠のいたのだった。

「ハーケン！」

またもや呪文が唱えられた。

モンスターの脅威からりぶたんを救うために、団丸も必死だった。

抜けた三本のハーケンが飛んでいった。坂道の少し上に、三本とも打ち込まれた。トンネルを軸にして見れば、天井に刺さった三本に対して平行の位置だった。つまり、もしもトンネルが傾いていないとすれば、真上と真下の位置関係となる。

「ザイル！」

天井に伸びるザイルがゆるめられた。と同時に、地面に続くザイルが縮んだ。

りぶたんを包んだネットの玉はスズメバチの顎(あご)へと落ちかけて、紙一重のところで弧を描き、地獄のハサミから逃れた。

またしても咬みつき損ねたスズメバチは、玉を追いかけてさらに坂を登った。

上のザイルがゆるみ、下のザイルが縮んで、ネットの位置はちょうどトンネルの真ん中となった。天井からも地面からも等距離だ。しかし、りぶたんを包んでできた玉は垂れ下がっており、低い位置にあった。モンスターを包めるほどの網だ。リヴリーには大きすぎた。

スズメバチの顎(あご)も、今度は届く。

「飛ばすよっ！」

団丸が叫んだ。

「！」

その瞬間、りぶたんは団丸の意図を理解した。

出口で待つ団丸が両手を勢いよく巻いた。右手は天を指し、左手は地を指している。

すべてのザイルが一気に縮んだ。天井に突き刺さったハーケンには三本のザイルが伸びている。地面に打ち込まれたハーケンにも三本のザイルが伸びている。ザイルはネットにつながっている。ネットの中にはりぶたんがいる。

一気に縮んだザイルがネットを高速で引き寄せた。垂れ下がる玉が宙を飛んでゆく。

「ハーケン！」
六本のハーケンが抜かれた。
加速した玉はそのまま出口に向かって一直線に撃ち出された。
捕縛ネットでりぶたんの救出を試みた団丸の、見事な作戦だった。ただし、出口までりぶたんを飛ばすには少しばかり勢いが弱かった。
「ネット！」
団丸はりぶたんに掛けた捕縛ネットを取り消した。
ボタンスイッチは押すだけでオンをオフにできるように、ネットも呪文を重ねるだけでオフにできる。
網が消えた。絡め取られた捕縛ネットから解放されて、りぶたんの体が自由になった。後ろから網打ちにされて両足をすくわれたりぶたんは、仰向けになっている。
りぶたんは空中でくるりと体の向きを変えた。地面が見えた。出口も見えた。
飛ぶ勢いが弱い。このままでは出口に届かない。着地してもそこは急斜面だ。すべり落ちればスズメバチが待っている。

りぶたんは少しでも出口に近づこうと、右手を精一杯伸ばした。
団丸は重心を地上に残しつつ、片足を坂道に下ろして、手を差し伸べた。
出口に向かって飛んでゆくりぶたんと、その出口で待つ団丸。
伸ばされたミミマキムクネの手を、ショウジョウダルマがつかんだ。
がっしりつかんで放さずに、団丸は渾身(こんしん)の力をふりしぼって、りぶたんを明るい地上まで引っ張り上げた。
勢い余った団丸はそのまま後ろに倒れ込んだ。倒れながらもりぶたんの手は放さずに、少しでも遠くに行けるように、危険から遠ざかるようにと、引っ張りながら投げた。団丸は自分よりも遠くへ、りぶたんを逃がしたのだった。
背中から倒れ込んだ団丸は、りぶたんを投げて、うつぶせに倒れた。
投げられたりぶたんは、両手を地面につくと肩口から縦に回転して前受身(まえうけみ)を取り、無事に着地した。ＬＩＳＤの制帽が脱げかかったが、すかさず手で押さえた。

虎口(ここう)を脱したとはいえ、地上の安全も長くは持たない。りぶたんはすぐさま団丸に駆け寄ると、腕をつかんで引き起こした。
「立て！　隠れるぞ！」
「ラジャー！」
団丸はあわてて立ち上がった。
「そこの茂みだ！　裏へ回れ！」
ふたりはすぐそばにあった灌木(かんぼく)の茂みに隠れた。裏に回ってしゃがみ込む。
地底トンネルを出ればそこは怪物密林だと踏んでいたが、ジャングルにしては意外に樹木が少ない。GLLの怪物の森よりも明るくて、開けた環境だ。隠れられる場所は限られていた。
「来たぞ。音を立てるな」
出口の穴から触角が見えた。
「……」
団丸は返事すら控えて息を殺した。
地の底からスズメバチが這(は)い上がってきた。日光を浴びた巨体の、黄色と黒の縞模様がなんともまがまがしい。草木の色とまったくなじまない。

スズメバチは逃げた獲物を探すそぶりを見せた。
りぶたんは賭けに出た。
すぐそばに隠れているから、探されたら簡単に見つかってしまう。しかしながら、スズメバチを攻撃したわけではないのだから、しつこく探されるとも思えなかった。そもそもスズメバチは来た道を引き返そうとして、つづら折りの難所で立ち往生していた。地底の暗闇で途方に暮れていたわけだから、無事に地上に戻れたからには、巣に帰りたくなるはずだ。
りぶたんは声を出さずに呪文を念じて、スズメバチにかぶせた捕縛ネットを解除した。邪魔な網を消してやれば、スズメバチは空を飛んで巣に帰ると読んだのだ。
網が消えて自由になって、スズメバチは獲物を探すのをやめた。その場で触角の手入れを始めた。時折、羽も動かす。
「……」
りぶたんと団丸はじっと待った。
時の流れが遅い。ただ隠れているのはもどかしい。息を詰めていると、息苦しくて逆に声が漏れそうにな

る。いっそ、スズメバチをぶっ飛ばしてやろうかとも思う。トンネルの外に連れ出すことには成功したのだから、もう我慢することもない。遠慮なく攻撃して、あとはトンネルに逃げ込んでしまえばいい。出入口にモンスター侵入防止用のフェンスをかぶせてしまえば、追撃の心配もいらない。

「！」

スズメバチが動いた。

不穏な雰囲気を感じ取ったのか、りぶたんたちが隠れている茂みに顔を向けた。体がでかいから、顔を向けただけで茂みをのぞき込むような形になった。

モンスターが漂わせる威圧感に、団丸が固まった。

りぶたんは茂み越しにスズメバチをにらみつけた。攻撃の準備も、決意も、整っていた。

だが、スズメバチは目の前の茂みに獲物が隠れていることにはまるで気づかなかった。すぐに体を動かすと、また向きを変えた。そのまま何度か向きを変えて、ぐるりと体を一周させた。

そして、激しく羽ばたくと飛び立った。

羽風（はかぜ）が茂みの隙間を縫って、吹き抜けていった。ス

ズメバチの恐ろしさとは裏腹に、強い羽風が緊張した体に当たるのは心地よかった。
大空高く舞い上がったスズメバチは、脇目もふらずにそのままどこかへと飛び去った。
「ぶっはー」
団丸が息を大きく吐き出した。
そのままごろりと寝転がって大の字になる。自慢のカウボーイハットが脱げても、形崩(かたくず)れを心配する様子もない。
「よくやったな。礼を言うぞ」
りぶたんは団丸をねぎらった。
「おかげで助かった」
「なに言ってんのさ。あたいたち、仲間じゃんか。あんたが保安官で、あたいが保安官助手でさ。助けあうの当たり前じゃん」
団丸は寝転がったままだ。すっかり神経をすり減らしたらしく、目をつぶって休んでいる。もっとも、ロを休ませるつもりはないようだ。
「だいたいさぁ。あんた、スズメバチぶっ飛ばす気だったっしょ？」

「まあな」
　しゃがんでいたりぶたんも、その場に座り込んでひと息入れた。
「あんたの背中、やる気満々だったもん。すべり落ちたと思ったらさ。すべり降りる体勢にさっさと変えちゃってさ。ぶっ飛ばすぞ、この野郎って、背中が言ってるじゃん。なんかもう、あたい、びっくりしたっていうか、あきれちゃってさぁ」
　団丸の愚痴は続いた。
「あそこでぶっ飛ばしたら、あとがたいへんじゃん。気絶するまで攻撃しないといけないしさ。それだと霊力減っちゃうし。下手したらスズメバチの仲間がやってくるじゃんか。うまい具合にいってもさぁ、気絶したスズメバチを運び上げなきゃなんないし。あんな急な坂なのにさ。ほんとにもう。あたい、一度に頭使いすぎて、くたびれちゃった」
「すまなかったな」
　りぶたんは両手を後ろに回して体を支え、青い空を見上げている。
「……」

団丸は愚痴をこぼすのをやめた。
ひと言も反論せずに受け止めるりぶたんに、いつまでもこぼし続けるのはみっともなかった。
「さてとっ！」
大の字になっていた団丸は体を起こした。
愚痴をこぼしたところへ催促（さいそく）されては立つ瀬がない。声を出して自分自身に活を入れ、やる気を奮い起こすと、立てとうながされる前に団丸は自分から立ち上がった。
「よし、行くか」
団丸が立ったので、りぶたんも腰を上げた。
「ぐずぐずしてるとさぁ、ヒナたんや坊やに追いつかれちゃうじゃん。早く来なよ」
帽子を拾い上げた団丸は軽くはたいてかぶりなおすと、トンネルの出入口に向かった。
「ラジャー」
りぶたんは返事をして、にやりと笑った。仲間たちの間で流行っている返事をようやくまねできたのだった。
ふたりはトンネルの出入口に戻った。

地面にぽっかりとあいた大きな穴のそばに柵が転がっている。モンスターの侵入を防止するためのフェンスだ。
「これは……」
りぶたんの視線がフェンスに釘付けとなった。
「でかいのに軽いんだよねえ、これ」
団丸はフェンスの枠をつかむと軽々と持ち上げた。
四角い枠の中に、格子状に編み目が入ったフェンスだった。それが金具で何枚も留められて、大きな穴もふさぐほどになっている。
「アルミ合金製のメッシュフェンスだ」
「え？　これがそうなんだ？」
「うむ。連隊が仮設砲塁に使用したものとそっくり同じだ」
片側を団丸が持ち上げて斜めになったフェンスを、りぶたんも持ってみた。
モンスター津波の際に、塁壁のないダークヤグラ要塞南面を防御するため、モンスターチューリップ連隊は仮設砲塁を築いている。軽くて丈夫なアルミ合金製のパイプとフェンスをクランプで留めて、檻を作って

いる。
「もしや、これは……いや、まさかな」
なにかを言いかけておいて自分で否定しつつも、りぶたんはきょろきょろとあたりを見回した。
「もしかしたら、もしかする？」
団丸はりぶたんの顔色をうかがった。
「そうか、ここはプーケ線のそばか。とすると……」
りぶたんは空を見上げて太陽の位置を確認した。
「怪物密林の端っこってこと？　それであんまり木が生えてないんだ？」
「向こうだな」
団丸を無視してりぶたんは歩きだした。
どうやら、なにも聞こえていない様子だ。
「……」
団丸はだまってりぶたんについて行った。二、三歩足を運んでから、ふと気がつくとあわてて後戻りをして、トンネルの出入口にフェンスをかぶせた。そして、大急ぎでりぶたんを追いかけた。
りぶたんが先頭を歩き、団丸があとに続いた。
木々を縫い、藪（やぶ）を漕（こ）ぐ。

背丈よりも高い草むらを抜けると、目の前が突然開けた。森を伐採してできた草原が広がっている。緑色に染まった草原の所々に切り株が残っている。

「あ……！」

団丸は声を漏らした。

草原には焦げ茶色の武骨な建築物がそびえ立っていた。片面に壁のない要塞が、角をこちらに向けている。

「……ダークヤグラ要塞」

団丸はつぶやいた。

なにもかも話に聞いたとおりだった。要塞は南東の角を見せている。正面に怪物密林が広がる東には、ちゃんと墨壁があった。しかし、日の当たる南には壁というものがなかった。

応急工事で墨壁をふさいだ足場は、いまも倒壊したままになっている。原形はとどめていないが、足場を覆い隠していたブルーシートの切れ端がわびしく風に吹かれている。

倒壊した足場の手前にはいくつもの残骸があった。残骸を結ぶ線も見える。地面に穴が掘られて、線のようになっている。

モンスターチューリップ連隊の塹壕連関塁砦陣は、九つの仮設砲塁を塹壕でつなぐ。
地面に掘られた穴は塹壕だった。
残骸は仮設砲塁だった。
モンスターに取り囲まれて揺すられ、つぶされたのだ。それをモンスターの侵入防止用フェンスとして、ルビーローズ一味は再利用したようだ。
「……」
りぶたんはなにも言わなかった。
声すら出さなかった。
だまって、かつての戦場を見つめた。そして、そっと静かに目を閉じた。
ともに戦い、散っていった戦友たちの在(あ)りし日の姿が、まぶたの裏に浮かんだ。
物資を輸送した輜重兵中隊。砲塁を仮設し、塹壕を築いた工兵中隊。群がるモンスターを機関砲で薙ぎ払った砲兵中隊。土に擬装して塹壕に身を潜め、要塞への進路を切り開いた突撃中隊。
モンスターチューリップ連隊の仲間たちは、ひとりも生還しなかった。

一つ目狙撃団のメンバーも半分以上が帰らなかった。
要塞司令官のダークヤグラを最後まで守り抜いて、要塞守備隊も玉砕している。
命をかけてリヴリーアイランドを守った、兵(つわもの)たち。
りぶたんは目を開けた。
陥落(かんらく)して放棄され、いまはもう朽ち果てた要塞が、暖かな陽光を浴びていた。

2

分岐点に戻ってきた。
ダークヤグラ要塞をあとにして、地底のトンネルに潜った。オーロラライトを拾い、来た道を後戻りした。
りぶたんはなにも語らなかった。団丸もなにも聞かなかった。
会話のないまま、ふたりはだまって足を運んで、分岐点まで引き返してきた。
りぶたんは懐中電灯型のオーロラライトを逆さまに持つと、地面を引っ掻いた。ダークヤグラ要塞の近くに出るルートに、大きく×(バツ)印をつけた。地ノ塔へと続

くルートから線を引いてきて、つづら折りの難所に向かう矢印を刻んだ。
分岐点で引き返さずに左に進んだと、別行動を取っているヒナタたちにメッセージを残したのだった。
「見てのとおりだ。戻らずに進むぞ」
「そう来ると思ったさ」
地底トンネルを探索するにあたり、分岐点で引き返すよう指示したりぶたんであるが、スズメバチに出くわして前に進まざるを得なくなった。その結果、分かれ道の一方は探索を終えた。ダークヤグラ要塞の近くに出るとわかったし、出入口にはモンスターの侵入防止用フェンスもある。
一方の安全を確認した以上、分岐点で引き返す理由はもはや存在しなかった。
「盗んだオーロラダイヤをあの坂から運び出したような痕跡はなかった。ルビーローズ一味はこの道を進んだと見て、間違いはあるまい」
りぶたんは道をふさいだように見える大岩にライトを当てると、足を踏み出した。つづら折りを抜けるところまでは下見もすんでいるから、足取りも軽い。

「あたいもそう思うよ。ブツを運ぶのに工事用の一輪車を使ってるんだからさ。あんな急坂を一輪車まで運び上げたんなら、いくら押し固めた地面だって跡くらいつくよねえ。でもさ、跡なんかなんにもなかったじゃん」

団丸はりぶたんと並んで歩いた。

少し進むと、岩にぶち当たった。遠くからは行き止まりに見えても、近くに寄ってみれば、奥の岩に手前の岩がかぶさっているとわかる。岩と岩の間に隙間があって通れるようになっている。決して広くはない道だったが、モンスターには窮屈でも、リヴリーには余裕があった。

岩場に入ると景色が一変した。

まっすぐな土のトンネルは、岩の回廊(かいろう)となった。折れ曲がった道が大きな岩を取り巻いている。硬い岩を砕くことはせずに、岩肌に沿って弧を描き、やわらかい土の中を掘り進めている。岩にぶつかっては曲がり、またぶつかってはくねっている。

「もうトンネルじゃないじゃん。洞窟じゃん」

岩に囲まれて曲がりくねる道は、確かにただの洞窟

に見えた。
「うわー。これ、くぐるんだ？」
岩は天井にもあった。左右をふさいだ大きな岩の上に、さらに大きな岩が乗っかっている。三方を岩に囲まれて、門のように見える。さすがにモンスターも岩の門をくぐり抜けるのに苦労したと見えて、そこだけ地面が掘り下げられている。
「スズメバチがここを通るのをいやがった気持ちもわかるな」
りぶたんは門の手前で立ち止まった。
天井の岩に手を添えて奥をのぞき込む。これから真下をくぐり抜けるかと思うと、頭上の岩の、大きさも重さも考えたくはなかった。
「頭をぶつけるなよ」
りぶたんは巨岩の底をくぐった。
団丸はお気に入りのカウボーイハットを脱いでからくぐり抜けた。
「曲がりくねった道はここまでだ」
大事そうに帽子をかぶり直す団丸に、りぶたんは声をかけた。

「といっても、見てのとおり。この先も荒れた道が続くがな」
門を抜けると岩の回廊は終わった。少しだけ見通しがよくなった。ただし、トンネルのようにまっすぐで平坦な道とはいかなかった。
回廊を抜けても洞窟は続いた。大きな岩が消えて曲がりくねる道ではなくなっても、そこら中にごつごつと岩の突き出した悪路が待っていた。しかも下り坂だ。傾斜はゆるやかだったが、さらに地中深くへと潜ってゆく。
「なるほどねえ。ブツを運ぶのに、不安定な一輪車を選んだ理由もわかったさ。つづら折りはあるし。バカでかい岩の門はくぐるし。おまけにこんな荒れた道に出るんじゃさぁ、二輪とか四輪とかじゃ使い物にならないじゃん」
ルビーローズ一味は強奪品を運び出すのに工事用の一輪車を使ったと見られている。地底トンネルは広く高く、地面も押し固められていて歩きやすい。それなのに、タイヤがひとつしかなくて不安定な一輪車をわざわざ利用するのは解せない話だった。

しかし、地底の道は整備されたトンネルばかりではなかった。巨岩を取り巻くように折れ曲がったところもあれば、岩の底をくぐり抜けるところもあった。

難所を抜けても悪路は続いた。地面のそこここに岩が顔を出している。押し固められた土の上をタイヤが軽快に転がっても、すぐに岩に乗り上げてしまう。二輪車や四輪車ならば、タイヤが岩に乗り上げるたびに傾いて、積み荷も崩(くず)れるだろう。その点、一輪車はバランスさえ取れば傾くこともない。

「ほら！　見なよ、そこ！　タイヤの跡じゃん！　そっちも！」

ひとりでさっさと歩き始めた団丸が、ルビーローズ一味の痕跡を発見した。

「まあ、そうあわてるな」

りぶたんは新人の助手をなだめつつ、ゆっくりと歩いた。

団丸の言うように、確かにタイヤの跡がいくつも残っていた。地面に埋まっている岩の手前に、轍(わだち)があった。

岩のないところは土が押し固められているのだが、

なにも岩の根元まできっちりと固められているわけではなかった。それに、地面に埋もれた岩の上に浅く残る土は、押しても固めようがない。
つまり、岩に接する地面はゆるいままだった。そこにタイヤの跡が残った。一輪車が岩に乗り上げるとき、そして岩から地面に降りるときに、柔らかいままの土に轍を刻んだのだ。
「やはり、この道を使ったのだな」
かがんで轍を検分したりぶたんは、顔を上げると洞窟の前方を見た。オーロラライトが照らす先に闇はない。土を押し固めてできた天井が、斜めに落ち込んで視界をさえぎっている。見通せるのはそこまで。下りの傾斜がきつくなって、道は地の底へと消えている。
「そろそろ地上に向かうかと思えば、ここに来てさらに潜るとはな」
「地面の下をそんなに降りてってどうすんのさ？」
「さあな。いずれにせよ――」
りぶたんは話しながら立ち上がった。
「道が登りであろうと下りであろうと、跡を追うだけだ」

りぶたんは先頭を切って追跡を再開した。
たったいまりぶたんの前を歩いたばかりの団丸は、ごく自然な流れで、安全な後ろに回された。
岩だらけの悪路でも、進む速度は落ちなかった。りぶたんと団丸の荷物は手に持ったオーロラライトだけで身軽だし、穴を掘ったのはモンスターだ。どんなにせまいところでも、モグラコオロギが通り抜けるだけのスペースはあるから、リヴリーには充分な広さが確保されていた。
追跡を再開して、初めのうちこそ口を閉ざしていたふたりも、すぐに雑談に興じるようになった。
「道が下りになったけどさぁ。段差はほんとないよねえ。岩の門のところが掘り下げられてたくらいでさ、ほとんど全部平らじゃん？」
「モグラコオロギにはひとまたぎの段差も、リヴリーには壁となって立ちはだかるからな。穴を掘らせた連中がしっかり手綱をさばいたのだろうよ」
「でもさぁ、たいしたもんだよねえ。いくらちゃんと測量したからってさ。こんな土の中でも方向を見失わないなんてさ。なんかあってもアウターゾーンじゃ、

どこにも飛べないじゃんか。そりゃあさ。連中は三人とも管理リヴだからさ。マインドウォールとかも関係ないんだろうけどさ。でもさぁ――」

「――そういえば」

だらだら続きそうな団丸の話をりぶたんはさえぎった。

「おまえはマインドウォールが効かないのだったな」

「うそじゃないよ。あたい、生まれつきマインドウォールが効かなくてさ」

「それで神出鬼没だったわけだ」

団丸は神出鬼没で正体不明の怪盗だった。

自首して地下牢獄に投獄されたものの、神出鬼没で正体不明のからくりは黙(もく)して語らなかった。

名前は「団丸」だと自ら本名を名乗って犯行に及んでいたのに、ビューをかけても「対象が存在しない」とシステムにはねられた。当然、ドライブで追跡もできなかった。誰もが「団丸」という名前は偽名だと思い込んでいた。

ところが、自首して本名だとわかって世間は驚いた。LISDはもっと驚いた。どこでどうやってジャマー

系の呪文を手に入れたのかと、当時の保安官は団丸を追及している。
本名でビューをかけてもバイオレコードをのぞけなかったのは、団丸がビュー・ジャマーを使っていたからだった。ドライブも同様だ。
正体不明のからくりはジャマーにあった。団丸が黙秘を押し通したので、入手先は不明のままだが、からくりは解明された。
残るは神出鬼没のからくりだったが、こちらも解明されたものと見なされた。
ジャマー系の呪文を会得していたくらいだから、プロテクションゾーンをフリーパスできるアイテム類も手に入れていたにちがいないと判断された。ふたつそろえば、誰だって神出鬼没で正体不明になれる。
団丸が頑(がん)として口を割らないものだから、完全解明は断念された。代わりに、プロテクトが書き換えられた。LIPSを使えば、全プロテクションゾーンのプロテクト更新も瞬時に完了する。
プロテクトの更新は簡単だったが、プロテクションゾーンをフリーパスできるアイテム類の取り替えは繁

雑を極めた。新しいプロテクトに対応したものとひとつひとつ交換するのだから手間がかかる。それでも、部外者にプロテクトを破られた状況を放置するわけにはいかないから、二度とアイテムが流出せぬよう、細心の注意を払ってすべてが交換された。

かくして、流出したであろうアイテムは無効化された。部外者がプロテクションゾーンに出入りすることは再び不可能となった。団丸が会得していたジャマー系の呪文も剥奪(はくだつ)されて、怪盗はただの盗人として地下牢獄に放り込まれたのだった。

だが、事情はちがった。

団丸はプロテクションゾーンをフリーパスできるアイテムなど隠し持ってはいなかった。生まれつきマインドウォールが効かないだけだった。プロテクションゾーンから姿を現し、プロテクションゾーンに姿を消す、神出鬼没のからくりはいまも有効なのだ。

それはなにも団丸ひとりの特技ではなかった。りぶたんとヒナタは、子供の頃に不思議な老人と出会っている。管理機関の職員でもないのにプロテクションゾーンに出入りした老人を知っている。

不良どもは老人をヤクザと呼んだ。ＬＩＳＤには資料が残っていなかった。当時の資料だけが抜け落ちていた。

捜しても老人は見つからなかったが、一度だけ情報が舞い込んだ。

――その昔、ショウジョウダルマの親分が博徒（ばくと）の一家を構えていたという。なにかと面倒見のいい親分を慕って、賭場（とば）では気っぷのいい乙女が壺（つぼ）を振っていたそうな。

情報はたったそれだけで、役には立たなかった。

ところが、りぶたんとヒナタは団丸に出会った。

老人はショウジョウダルマだった。団丸もまたショウジョウダルマだった。

老人はプロテクションゾーンに出入りできた。団丸は生まれつきマインドウォールが効かなかった。

ＬＩＳＤのりぶたんとヒナタが捜しても、老人は見つからなかった。団丸は人を捜すために悪党となってまで名を売ったが、相手に見つけてはもらえなかった。

そして。

老人には孫娘がいた。りぶたんやヒナタと同じくら

いの年頃の……。
「おまえ……」
りぶたんはふと足を止めて振り返った。
「……」
無言で、今日知り合ったばかりの助手を見つめた。
「なにさ？」
「……いや、なんでもない」
りぶたんは視線を落とすと、前を向いた。
口をつぐんで、なにも言わないことにした。
仮に団丸が老人の孫娘だったとして、その事実を確認してどうなるというのだろう。思い出話に花が咲くだろうか。楽しい話題になるだろうか。遠い昔のことを語り合うのは、なるほど楽しいかもしれない。意外なところで接点があったとなれば、ぐっと親近感も増すだろう。
だが、そのあとはどうなる。咲いた花は枯れるもの。
老人はどこにもいなかった。ＬＩＳＤの保安官と副保安官が総力を挙げて捜索しても、発見には至らなかった。役に立たない噂話をたったの一件拾えただけで、老人の消息をつかむことはかなわなかった。

それを団丸に伝えることになる。
おまえは祖父を捜しているのだろう。しかし、その祖父ならどこにもいないぞ。ＬＩＳＤが捜しても見つからなかったのだ。おまえは祖父会いたさにあえて悪党となり、自首をして地下牢獄にまで捜しに行ったそうだが、なんとも無駄なことをしたものだ。地下牢獄にいないことなど受刑者名簿を見ればわかるし、犯罪者として悪名を轟かせても見つけてはもらえなかったのだからな。いまさら性根を入れ替えてどうなる。世のため人のために尽くしたからといって、祖父と再会できる保証などありはしないぞ――と。
「……」
りぶたんは無言で進んだ。
足を止め、振り返り、団丸に呼びかけたことを後悔した。
ショウジョウダルマは恰幅（かっぷく）がいい。背は高く、肩幅は広く、どっしりとしていてたくましい。ましてや団丸は、世間を騒がせたほどの怪盗だった。なにかと経験も豊富で、地下牢獄での懲役もきっちり勤め上げている。

けれども、おとなしくりぶたんについてくるショウジョウダルマはちがった。
保安官に話しかけられて、つぶらな瞳をぱちくりさせたそのリヴリーは、祖父が恋しいだけの女の子だった。
「なにさ。急に呼びかけて、なんでもないなんてさぁ。気になるじゃん」
「ん？　いや。……おまえ、腹は減らないかなんて聞くのも、保安官の沽券（こけん）に関わるかと思い直してな」
「あんた、おなかすいちゃったんだ？」
「まあな」
「そろそろ、おやつの時間なんだ？」
「そうだな」
「食いしん坊とは聞いたけどさぁ、この状況でおやつはないっしょ？」
「おまえ……」
りぶたんはまた足を止めて振り返った。
「誰に聞いた？」
今度は無言ではなく、今日知り合ったばかりの助手を問い詰めた。

「え？　えっと、それはほら……誰だっけ？」
「フレイムめ」
団丸がごまかすのなら、相手はひとりしかいない。
「あとで冷蔵庫、空っぽにしてやる」
「あたいも手伝おっか？」
おどける保安官に団丸も調子を合わせた。
「よし。おまえは冷凍庫を空っぽにしろ」
「ラジャー」
くだらない話に花が咲いて、ふたりは笑いあった。
ただの冗談なら、咲いた花が枯れようと萎(しお)れようと、気に病むこともない。
雑談を続けながら、りぶたんと団丸は洞窟を下っていった。フレイムがちょうどいい話のネタになった。
新進気鋭の絵本ジャーナリスト。
青臭い坊や。
ほめているのか、けなしているのか、どちらとも言えない内容で話は弾んだ。
しかし、楽しい会話は突然打ち切られた。
「……」
りぶたんの足が止まった。

「どうしたのさ？」
「……静かに」
「？」
耳を澄ませると、低くて重い音がどこからか聞こえてきた。
「地鳴り？」
団丸は天井を見上げた。
もうずいぶんと地中深くに潜っているはず。押し固めただけの天井の、さらにその上には、厚い大地が積み重なっている。音が落盤の前兆なら極めて危険だ。
手にぶら下げていたオーロラランプを、団丸は高くかざした。明かりを近づけて洞窟の天井を照らしてみたが、落盤の兆候はなかった。上からは砂粒ひとつ落ちてこない。
「ちがう。羽音（はおと）だ。スズメバチのな」
「！」
団丸はあわてて振り返った。追い払ったはずのスズメバチが、ダークヤグラ要塞近くの出入り口から舞い戻ってきたのなら、退路を断たれたことになる。
「後ろではない。前だ」

りぶたんは身じろぎもせずに正面をにらんでいる。
「前ってさ、あの向こう？」
団丸はランプを持つ手を突き出した。
洞窟は硬い岩に進路を阻まれて左に折れている。
「明かりを消せ」
りぶたんはオーロラライトのスイッチを切った。
団丸はだまって従った。ランプを胸元に寄せて、スイッチをひねる。
照明が消えて空気が黒くなった。なにも見えなくなった。地の底に日光は届かないから、完全な暗闇が訪れる――はずだった。
「あっち、明るいじゃん。でもさ、外のはずないっしょ？」
闇に目が慣れると、かすかに漏れてくる明かりが行く手に見えた。
「おまえ、覚悟はできているな」
りぶたんは前をにらんだまま、後ろの団丸に聞いた。
「なにをいまさら……」
「覚悟はできているのだな」
りぶたんは重ねて問いただした。聞こえてくるスズ

メバチの羽音よりも重い声だった。
「もちろんさ。あたいを誰だと思っているのさ」
「そうだな。おまえは神出鬼没で正体不明の怪盗だった」
「ちがうね。このあたいはさ――」
団丸はりぶたんの背後から抜け出ると、隣に並んで胸を張った。
「ＬＩＳＤの保安官助手なのさっ」
「そいつは頼もしい」
背の高いショウジョウダルマを横目で見上げると、漏れてくる薄明かりの中でミミマキムクネがにやりと笑った。
「では、行こうか。向こうにいるのは、スズメバチの群れだ」
「え？　群れ？」
「そうだ。たった一匹が羽ばたいたくらいで、こんな音は響いてこない。それに、この音には聞き覚えがある。なにしろ、夢にまで出てくる音だからな」
「モンスター津波のときの……」
「ルビーローズ一味はこの先に進んでいる。だが、そ

こにはスズメバチが群れて飛んでいる。はてさて。いったいなにが起こっているのやら」
りぶたんは歩きながら手を伸ばすと、団丸に左に開くよう身振りで指示した。そして自分は右へと寄った。
団丸は指示に従い、左に寄った。ふたりとも張り付くように洞窟の壁を背にした。
りぶたんはまた手を伸ばし、団丸に待機を命じた。自分は壁から背中を離すと、慎重に前に進んだ。
少し進んでから立ち止まったりぶたんは壁を背にして、身振りで団丸を呼んだ。自分の横まで来たらそこで停止せよと、手で合図した。指示をする間も、顔はまっすぐ前を向いている。
団丸がやってきて、指示どおりに足を止めた。りぶたんはまたひとりで先へと進み、団丸を呼び寄せた。
洞窟の進路が折れ曲がっている地点に向かって、足音を殺したふたりのリヴリーが交互に忍び寄っていった。
りぶたんは岩に行き当たった。
モグラコオロギは硬い岩を避けて穴を掘っている。道は左に折れている。左奥から掘り進めてきて、岩に

突き当たり、右へと曲がったのだ。その道をりぶたんと団丸は逆にたどっている。
りぶたんは団丸を呼んだ。しかし、今度は少し手前で立ち止まらせた。
「……」
「……」
保安官と保安官助手がアイコンタクトを交わした。漏れてくる明かりは強くなっている。
りぶたんは岩に張り付いたまま、横向きに足を運んだ。岩に沿ってゆっくりと進む。体を傾けて、左奥の様子をうかがう。
スズメバチの羽音は低く重く響いてくる。
左に曲がる道は両側が岩壁になっていた。少し先で岩の壁が途切れて、今度は右に曲がっている。右奥から差し込む明かりが強い。しかし、日光ほどにまぶしくはなかった。
安全を確認したりぶたんは、岩の廊下に団丸を呼んだ。そしてまた、ふたりで交互に進んだ。りぶたんは右に。団丸は左に。今度は右に折れる曲がり角に向かって、静かにそっと近づいた。

あと少し進めば曲がり角というところまで来て、団丸が足を止めた。

りぶたんの動きも止まった。

団丸はランプを地面に置いた。両手をそろえて差し出すと、左右に開いて見せた。空間が広がっていることを身振りで伝えたのだ。同時に、照明がいらないことも動作で語った。左の壁際を進む団丸には、右に曲がった先がどうなっているか、りぶたんよりも早く目に入ったのだった。

りぶたんは小さくうなずいた。確かに、曲がった先はかなり明るいようだ。団丸に待機を指示すると、りぶたんもオーロラライトを地面に置いた。

不測の事態に備えて両手を自由にした上で、りぶたんは慎重に横歩きをした。背中を岩壁に押し当てたまま、前に進んだ。

曲がり角へと近づく。道はほぼ直角に曲がっている。しかし、岩は直角に曲がってはいない。出っ張ったところもあれば、引っ込んだところもある。なにより厚みがあるから、顔だけ出してのぞいても見える範囲は限定される。偵察するには体をさらすしかない。

安全を確認しつつ、りぶたんは角を曲がった。
岩の廊下を抜けた。広い空間に出た。
地ノ塔の抜け穴から続く地下の道は、巨大なホールへとつながっていた。
目の前が崖になっている。はるか下まで落ちてゆく。崖下の地面は整備などされていない。大小さまざまな岩が転がっている。どうやら地底ホールは自然にできた空間のようだ。モグラコオロギが掘ったにしては、規模が大きすぎる。
ＧＬＬ城がいったいいくつ入るだろうか。ホールの全体は見えなくとも、高さだけで相当なものだとわかる。地下に隠れた地ノ塔は抜きにして、ＧＬＬ城三つ分ほどの高さがありそうだ。見下ろせば、四階風ノ間の格子窓から外を眺めたときよりも、ずっと高く感じる。見上げれば、玄関前から火ノ塔を眺めたときよりも、首が痛くなる。
「！」
目の隅に動くものを捉(とら)えて、りぶたんは息を殺した。岩の一部になりきった。
左奥の天井付近から、なにかが転げ落ちてきた。い

や、落ちたのではなかった。舞い降りたのだ。黄色と黒のまがまがしい縞模様が空中をすべってゆく。

顔は動かさずに視線だけを上げてみれば、ホールの向こう側、左奥の天井近くに穴らしきものが見えた。開口部が横向きになっているのか、りぶたんの位置からは穴そのものは見えない。重なりあう岩が見えるだけだ。おまけに下から見上げるものだから、なおのこと判別しづらい。しかし、さっきまでいなかったスズメバチが急に湧いて出たからには、ただの壁であるわけがなかった。

ホールの左奥から右奥に向かって飛んでいくスズメバチを、りぶたんは息を止めたまま見送った。侵入口を見落としたために、舞い降りたスズメバチから丸見えの場所にりぶたんはいた。岩に張り付いてじっとしていても、青紫の体色は目立つ。

幸いなことに、動かない物体はスズメバチの興味を引かなかったようだ。りぶたんはほっと息を漏らした。

どうやら、ホールに侵入口をあけたのはスズメバチではないようだ。穴掘りはこれまで同様、モグラコオロギの仕業らしい。よく見れば、ホールの向こう側に

道があった。半分くりぬくような形で壁面を削り取って、通路が掘られている。地底ホールの絶壁を横断する断崖(だんがい)通路だ。

通路は下りながら右へと延びてゆく。そのままホールをぐるりと回って、りぶたんのいる場所へとつながるのだろう。りぶたんの目の前で道は途切れて崖となっているが、背にした岩を回り込めば、ホールのこちら側にも断崖通路が掘られているにちがいなかった。そうでなければ、先行したルビーローズ一味は一輪車ごと崖から身を投げたことになる。

壁から突然出現するスズメバチに注意を払いながら、りぶたんは摺(す)り足で少しずつ動いた。飛び交うスズメバチの羽音が耳を打つ。障害物がなくなり、モンスターが群れて羽ばたく音は直接、耳に届く。

空中をスズメバチが埋め尽くしている。どれもが右奥を向いている。そろって興奮状態だ。戦闘の真っ最中なのだとひと目でわかった。地面には数え切れないほどのスズメバチが転がっている。完全にのびて仰向けにひっくり返り、ぴくりともしないスズメバチがいる。グロッキー状態なのになんとか飛び立とうと、羽

をばたつかせてもがくスズメバチもいる。
どこからか明かりが差してくるのでよく見える。
りぶたんは岩の出っ張りから顔をのぞかせた。明かりの正体が見えた。
巨大ホールの右隅に、光る城がそびえ立っていた。
城といっても、建築物ではなかった。うっすらと光っている上に遠いので素材まではとてもわからないが、その造形は明らかにリヴリーが手を加えたものではなかった。デザイン性は皆無だ。
地の底で城のようにそびえ立って光っているのは、なにかの巣だった。
そして、巣には無数のスズメバチが群がっていた。もちろん、スズメバチの巣ではない。モンスターの軍団は光る城を攻撃しているのだった。
「なにさ、あれ？」
いつの間にか団丸がそばまで来ていた。岩の廊下を抜けて、りぶたんとは反対側の角に立っている。
「……」
待機を命じたままなのに逆らった部下をりぶたんはじろりとにらんだが、下がれとの指示は出さなかった。

ショウジョウダルマの肥えた体は岩肌のへこみに押しつけられて、すっかり薄っぺらくなっている。おまけに、左奥から舞い降りてくるスズメバチからは死角となる位置でもある。

でかい図体を巧妙に隠し、気配も完全に絶って忍び寄っているのだから、さすがは元怪盗だった。

「光ってるのはオーロラダイヤだよねえ？　でもなんで全体が光るのさ？　あの巣はガラスかなんかでできてんの？」

「巣材まではわからんが、光源は盗まれたブツだろうな。日光にしては色が青すぎる。一味は地底に明かりを灯したくてブツを盗み出したわけだが、トンネル用だと思ったのは間違いだったな。地底の城の、照明だった」

「城って、あれは巣じゃん？」

「そうだ、巣だ。だがな。規模といい、照明といい、城と呼んでも差し支えはあるまい。それに、スズメバチの群れに攻め立てられて、ルビーローズ一味が籠城（ろうじょう）しているぞ」

「マジで？　あの中にいるんだ？」

「てっぺんをよく見てみろ。寄せ手のスズメバチが迎撃されて落ちてゆく」

光る城にはスズメバチが群がっていたが、密度にばらつきがあった。ただの壁のところには少なく、出入り口があると思われる場所には密集していた。特に、城ならば天守に当たる大櫓（やぐら）の最上階には殺到している。群がるスズメバチのその上に、さらにスズメバチが群がってこぶを作っている。こぶごと蠢（うごめ）くから、それがモンスターの固まりなのだとわかる。

「あっ」

団丸が声を漏らした。

盛り上がって蠢くこぶがまるごと吹き飛んだ。

吹き飛ばされたスズメバチの固まりは空中でちりぢりになったが、羽ばたいて逃げることもできずに、渦巻く突風に呑み込まれた。

縦に回転する竜巻だった。ストームの呪文で発生する竜巻を横倒しにした感じだが、それが風の渦を巻きながら突き進んでいった。まるでストームとウインドをあわせたような呪文だ。

渦巻く突風は吹き飛ばしたスズメバチを吸い込み、

進路上を飛ぶスズメバチをも吸い込んで、吹き抜けていった。
縦に回転する風の渦に呑まれたスズメバチは、渦の真ん中から外側へと飛ばされた。しかし、渦の外に出ることはなかった。渦の中心と外周の、中ほどにとどまって、そこで体を激しく錐揉(きりも)みさせた。
竜巻が吹き抜けて風の渦から解放されたスズメバチは、そのまま錐揉(きりも)みしながら墜落していった。
地面に転がるスズメバチに仲間が増えた。
「やはり、いたか。ルビーローズめ」
消滅した竜巻の残り風が吹いてきた。ミミマキムクネの長い耳の毛が風に煽(あお)られた。モンスター津波では、風にはためくブルーシートがスズメバチを刺激している。りぶたんは両手で耳の毛を押さえた。螺旋状に巻かれて垂れ下がる耳の毛を、下から上へと押し上げながら、小さくまとめた。
「いまのルビーローズの技なんだ？」
団丸の視線はりぶたんのヘアスタイルに釘付けとなった。
いつもはリズミカルに上下するミミマキムクネの耳

の毛が、バネのように伸びた状態から、ゼンマイのように巻かれた状態に変わっている。りぶたんが手を放してもスタイルは崩(くず)れない。短くまとめ上げた毛は、サンタ帽の先にあるボンボンのようだった。それを頭の両横にくっつけていると、なんだか新種のリヴリーに見えた。

「うむ。奴の専用攻撃技、薔薇(ばら)の竜巻だ。呪文はローズ・ストームという」

「ローズ・ストーム……」

団丸は墜落したスズメバチを見ようと、岩のへこみから体を起こした。

「一撃でフルダメージを与えることはないが、気絶はしなくても、しばらくは飛び立てまい。なにしろあれは、えげつない技だからな」

説明をしながら、ボンボンムクネが後戻りを始めた。

「見た目は縦に回転して進むストームだが、中はもっと複雑だ」

「竜巻の中？」

「そうだ。あれは逆回転二重竜巻構造になっている。外側の竜巻の中に、逆方向に回転するもうひとつの竜

巻が隠れているのだ」
「それで吸い込まれたスズメバチが、真ん中よりもちょっと外側で錐揉(きりも)みしたんだ。ふたつの竜巻の間でさ」
「そういうことだ。内側のやつは外に向かって風を吹くが、外側のやつは中に向かって風を吹く。あれに呑まれると、逆向きのふたつの竜巻にはさまれて、激しく回転させられるのだ。しかも、風の棘(とげ)を食らうというおまけ付きでな」
「風の棘(とげ)？」
「ふたつの竜巻が逆向きに回転しているから、気流の乱れも尋常(じんじょう)ではない。小さな竜巻が次々と発生しては、大きな竜巻の間で錐揉(きりも)みする獲物に襲いかかるという仕組みだ」
「それが風の棘(とげ)……」
「竜巻に棘(とげ)がある。だから、技の名前は薔薇の竜巻。ルビーローズにはうってつけだな」
「なんか、それってさぁ。聖母らしくないじゃん」
「言ったはずだ。奴は上品ぶっているだけだと。聖母ルビーローズなどではない」

「ルビーローズの姐御？」
「それなら技もぴったりだろう」
りぶたんは岩の廊下まで戻った。
さっきまでいた場所は、侵入口から入ってくるスズメバチに丸見えだった。スズメバチが目の前の戦場に気を取られて、岩に張り付いて動かないリヴリーに気がつかないのだとしても、そんな幸運に頼ってばかりもいられない危険な場所だった。
りぶたんが曲がり角の岩陰に身を隠すと、ちょうど左奥の侵入口からスズメバチが舞い降りてきた。続いてもう一匹。さらにまた一匹。りぶたんは団丸に合図を送った。
団丸は岩のへこみに体を押しつけた。岩は左側にあるから、左奥から舞い降りてくるスズメバチからは死角となる。
三匹のスズメバチはよそ見をすることなく、まっすぐ通り過ぎていった。
りぶたんと団丸が潜む横穴は、リヴリーが歩いてほんの数歩程度の奥行きしかない。すぐに左に折れて岩の廊下となる。スズメバチが間近を飛ぶのならともか

く、離れたところを飛ぶ以上は、ホールの壁面にできたへこみ程度にしか見えないのだろう。
　りぶたんはそのまま岩陰に身を隠し、侵入してくるスズメバチを見張った。ふと思い出して、頭のボンボンに手をやると毛先をつまんで引っ張り下ろした。つまんだ指を放すと耳の毛が一気に縮んで、また伸びた。螺旋状に巻かれたミミマキムクネの耳の毛が、上下に小気味よく揺れた。
「あんなところに籠城してるからさぁ、地ノ塔の壁を直しに戻れなかったんじゃん？」
「だろうな」
「抜け穴をふさぐ前にモグラコオロギの死骸に気づいてさ。異変を知って、あわてて駆けつけたんじゃん？」
「たぶんな」
　地ノ塔の抜け穴から強奪品を運び出したルビーローズ一味は、破った壁を修繕するつもりで補修道具一式を取りそろえておきながら、肝心の作業は放棄した。そのため隠しトンネルは露見（ろけん）し、ＬＩＳＤの追跡を許すこととなった。

トンネルの隠蔽(いんぺい)を目論みながら、いったいなぜ、ルビーローズ一味はなにもかも放り出して消えてしまったのか。

その理由は謎だった。しかし、いま目の前で起きていることを見れば、謎は自(おの)ずと解けた。

怪物密林の地下深くで、人知れず籠城戦が行われている。

強奪品で明かりを灯した地底の城に、ルビーローズ一味が立てこもっている。光る城を攻め落とそうと、スズメバチの軍団が押し寄せている。

首尾よくブツを盗み出した一味は、壁を修繕する前に異変を察知したのだ。抜け穴の近くでモグラコオロギが死んでいることに気づいた。あるいは、見つけたときはまだ生きていたのかもしれない。

一味は城へと急いだ。壁を直す時間すら惜しんだ。盗んだブツは照明として欠かせないから、先を急ぎながらもしっかりと運んだ。

途中で出くわしたスズメバチはお茶会の暗殺者が一撃で仕留めた。外に放り出す余裕はないから、そのまま放置して城に駆けつけた。

その時点で、どれほどのスズメバチに襲撃されていたかはわからない。城が落ちていないところを見ると、一味が不在の間も防戦に努めた戦力があるのだろう。それはひょっとすると、城のような巣を築いた者たちだろうか。

ルビーローズ一味は城に入った。そして地底の暗闇に明かりを灯して、籠城したのだった。

「でもさぁ。籠城なんかしたって、勝ち目ないじゃん？」

「別に勝つ必要はないぞ。連中は、負けなければそれでいいのだ」

「そうかもしんないけどさぁ……」

「勝つための戦いと、負けないための戦いはちがう。そもそも、籠城というのは負けないための戦い方だ」

「それはそうだけどさ」

「勝てるかどうかは敵次第でも、負けるかどうかは自分次第だからな。やりようはある」

「そうなんだ？」

「そうとも。知恵をしぼって策を練ったところで、敵もそうなら勝負は互角。勝てはしない。ということは

だ。逆に、敵がどんな知略をひねり出そうとも、知恵をしぼり、策を練り、努力を惜しまなければ、負けはしないということだ」
「でもさ。モンスターに知略なんかないじゃん？」
「だが、殺されることもなければ、屈服することもないぞ」
「？」
　団丸は小さく首をひねった。
「敵を殺せば戦いは終わる。敵を屈服させても戦いは終わる。しかし、モンスターを殺せる呪文などないし、モンスターが降参することもない。うがった見方をするならば、モンスターには、死なない知恵と数の減らない策があるということだ。こんなに恐ろしい敵はおるまい」
「……」
　かつてモンスターチューリップ連隊に所属し、モンスター津波を生き延びたりぶたんの言葉に、団丸はだまりこんだ。
「連中がここに駆けつけたとき、すでに戦端は開かれていたはず。孤立無援のルビーローズ一味に援軍など

いない。よりにもよって、怪物密林のスズメバチを群れごと敵に回したからには、劣勢は火を見るよりも明らかだ。ならばいっそ、城など見捨ててしまえばよかったのだ。そうすれば、連中は安穏(あんのん)としていられた。それをあえて死地に飛び込み、籠城して受けて立ったからには、それなりの勝算あってのことだろうよ」

「負けないための知恵と策があるんだ？」

団丸がそう言った瞬間、地底ホールに竜巻が吹き荒れた。

「度胸と戦闘力もな」

岩陰にいるりぶたんの耳の毛が風に吹かれた。

「でもさぁ。この調子じゃ霊力持たないじゃん？」

「問題はそこだ。まあ、戦術は悪くないがな」

「そうなんだ？」

「うむ。どうやら出入り口は防御に徹し、戦闘力はてっぺんに集中させているようだ。敵が群がるのを待ってから叩いている。ご丁寧に空中にいるのも巻き込んでな。大技を使えば確かに霊力の消耗は激しいが、まとめて多くの敵を撃つことができたならば、効率はいいわけだ」

効率はよくても、スズメバチの数は減らなかった。撃墜されても死んだわけではない。気絶しただけだ。死んだようにのびていても、気絶から覚めたスズメバチは勇んで戦線に復帰した。そして侵入口からは続々と増援が到着した。一匹、また一匹と、元気満々な兵士が戦場にすべり降りてゆく。

「あたい、思うんだけどさぁ」

通り過ぎてゆくスズメバチを横目で見ながら、団丸はなにやら言いにくそうに切り出した。

「なんだ？」

りぶたんは侵入口を見張っている。

「あのさぁ、ルビーローズ一味ってさ。実は援軍を待ってるんじゃないの？」

「援軍だと？」

りぶたんの視線が横に動いた。

「あんたはさっき、孤立無援のルビーローズ一味に援軍なんかいないって言ったけどさ。それ、ちがうんじゃん？」

「ショップにいるダミーローズたちが動くというのか？　あれは事情もろくに知らないただの替え玉だ

ぞ？　それとも、ほかにまだ仲間がいるとでも？　ちがうな。連中は少数精鋭主義のはずだ。そうでなければ、これだけの秘密は保てまい」

「だからさ……」

団丸は指を立てるとりぶたんを指し、それから自分自身を指した。

「……あたしたちが？　援軍？……」

りぶたんはあっけにとられて、口を閉じるのを忘れた。

「だってさ。地ノ塔にあんなおっきな抜け穴残してきてるじゃん。壁を直すのやめちゃったの、自分たちが一番よくわかってるじゃん。だったらさぁ、穴を見っけたＬＩＳＤがそのうちやってくることくらい、わかるっしょ？」

「……む」

りぶたんの口が真一文字に結ばれた。

「ルビーローズ一味はさ、ここの様子を確認したら舞い戻って壁を修繕するつもりだったのさ。でもさ。それをあきらめた段階で、ＬＩＳＤの介入を援軍と見なして、籠城作戦に組み込んだのさ」

「うんにゃ！」
りぶたんがうなった。
「おまえの話はよくわかった。まさかそんな筋書きだったとはな。だが、ひとつだけ間違っているぞ」
「間違い？」
「ここから引き返して、確実に壁を修繕できるとは限るまい。むしろ、証拠の隠滅は手遅れと見るべきだ」
「じゃあ……」
「そうだ。奴らめ。抜け穴をわざと放置したな。異変を察知した時点で、スズメバチの撃退は手に負えないと判断したにちがいない。そこで、ＬＩＳＤを呼び込むという奇策に出たのだ。あたしたちを利用するつもりでな！」
握りしめた拳でどすこい娘が岩を叩いた。
「援軍だけが頼みの籠城はままあること。ドゥードゥー強奪犯が捕縛を覚悟の上でＬＩＳＤを呼んだからには、ほかに策などないということか」
「どうするのさ？」
「どうもこうもない。取っ捕まえて、縄を打つだけだ。あたしは保安官だからな」

りぶたんは制帽に手を伸ばした。
細くて長い帽子だった。方舟をひっくり返したような形をしている。正面にはＬＩＳＤの紋章が刺繍されている。
その紋章をりぶたんは押した。バネ仕掛けが作動して、帽子の中にしまい込まれていた羽根飾りが奥から起き上がってきた。
白い羽根飾りだった。帽子と同じくらいの長さがあり、それが手前でピンと立っている。管理リヴのチャパティが赤いターバンに黒い羽根飾りを立てているが、それによく似た感じだった。
「いよいよ緊急出動だね。腕が鳴るさ」
団丸は片手でカウボーイハットをつかむと、小刻みに左右に動かし、少しだけ深くかぶり直した。
「いや。行くのはあたしひとりだ」
「え？」
団丸の手がカウボーイハットから放れた。
「おまえは戻って、ヒナたんと合流しろ。子細を漏らさず伝えるのだ」
「なに言ってんのさ！　あんたひとりで城までたどり

着けるわけないじゃん！」
　団丸は声を荒げた。
　ルビーローズ一味が立てこもっている城にたどり着くには、地底ホールの絶壁を横断する断崖通路を行くしかない。身を隠すところはどこにもなく、群れ飛ぶスズメバチから丸見えとなる危険なルートだ。前後をふさがれたなら、たちまち窮地に陥（おちい）る。足を踏み外せば、はるか崖下まで落ちてゆく。
　ルビーローズ一味は三人組だったから、互いに援護しあって城までたどり着けた。モンスターの数もいまよりずっと少なかったはず。それをひとりで行くとは正気の沙汰ではない。自殺行為だ。
「だが、行かねばならん」
　りぶたんの目に迷いはなかった。
「無茶だってば！　だいたい、二人一組で動けって言ったの、あんたじゃんか。ヒナたんとこにはさ、ふたりで走って戻ればいいじゃん」
「それではおそらく、間に合うまい。籠城した一味がいかに効率よく防戦したところで、相手は死ぬこともなければ数が減ることもないモンスターだ。いずれは

霊力も尽きる。連中は、すでに六時間は戦い続けているはず。すぐにでも援軍が必要だろう。たとえそれが、たったひとりの援軍であろうとも」
「だったら、あたいもいっしょに行くさ！」
「これは命令だ！」
言うことを聞かない新入りの助手に、保安官が怒鳴り声を叩きつけた。
「おまえの任務は重要なのだぞ」
そして、落ち着いた声で付け加えた。
「ルビーローズ一味はモンスターを相手に戦争をしている。もはや捕り物ではない。防衛隊の出番だ。おまえは急いで戻って、ヒナたんに事情を知らせるのだ」
「……」
団丸はもう逆らわなかったが、すんなり従おうともしなかった。
「そんなに心配そうな目をするな。なに、あとはあたしの相棒がうまくやってくれる」
「保安官だからって、なんであんたひとりがそんな無茶をやらかす必要があるのさ。そりゃあ、一味はみんな管理リヴだけどさ。でもさ、籠城する羽目になった

のは自業自得じゃんか」
「ほんとうにそう思うのか？」
りぶたんはやさしく問いかけた。
「スズメバチの襲撃が始まったとき、一味はここにいなかった。襲われて逃げ出したモグラコオロギに気づいて駆けつけたのだ。連中は安全な場所にいたのに、わざわざ自分から戦場に飛び込んだ。そして籠城した。なぜだと思う？　盗んだブツなら手元にある。横取りされる心配はないぞ。モンスターがオーロラダイヤを欲しがるわけはないからな。あの城にしても、スズメバチが去ったあとに戻れば安全だろうに」
「……」
団丸はだまってりぶたんの話を聞いている。
「連中は城に立てこもって戦っている。負けないための戦いをしている。敵はモンスターのスズメバチだ。ブツを奪われることもなければ、城を壊されることもない。ならばなぜ、ルビーローズ一味は戦うのだ？　いったいなにを守っている？」
「守る？」
「そうだ。守るものがないのであれば、戦う理由もな

い。ブツでもなく。城でもなく。なにを守る？」
「守るもの……って、それはスズメバチが狙うもの？」
「……」
今度はりぶたんがだまった。団丸が正解に気づくのを待っている。
「まさか、モグラコオロギ？　守るものって、モグラコオロギなんじゃん？」
「それと城を築いた者たちもな」
「あの城を？」
「オケラが巣を作るとは聞いたことがない。城のような巣を築いたのは別のモンスターだ。外観から察するに、あれは蟻塚だろうな。モグラコオロギにアリ。どうやら一味は、怪物密林の奥深くで、リヴリーを襲わない新種のモンスターを二種類も発見したようだ」
「そんなことってあるんだ？」
「怪物密林は危険すぎて未踏査だからな。新種の宝庫だ。足さえ踏み入れたなら、新発見も難しくはないだろう。もっとも、生きて帰るのは難しいが」
りぶたんは岩の廊下を少し戻って、地面から懐中電

灯型のオーロラライトを拾い上げた。
　団丸は地底ホールを見て安全を確認してから、小走りでりぶたんのそばまで行った。
「こいつを持ってゆけ。遠くまで照らせるし、持ったまま走りやすい」
「でもさぁ……」
　りぶたんが差し出したライトを、団丸は受け取ろうとはしない。
「いいか、ルビーローズ一味はモンスターを守っている。これがどういう意味か、わかるか。トンネルを掘らせて、城を築かせて、都合よく利用はしても、モンスターを道具扱いしなかったということだ。見捨てることもできただろうに。そうはしないで、いっしょに立てこもって戦っている。……それなのに、このあたしが背中を向けて立ち去ることなどできるだろうか。いや、できはしないっ」
　りぶたんは一歩前に出ると、自分の倍近くも背丈のある助手の顔に向けて、ライトを突きつけた。
「おまえが気にする必要はない。別に保安官の義務で援軍に赴くわけではないからな。これはあたしの選ん

だ道だ。あたしは、あたしのために、前に進むのだ」
「……そっか。それがあんたの道ならさ。邪魔するわけにゃ、いかないねえ」
団丸はオーロラライトを受け取った。
「あんたは前へ。あたいは後ろへ。進む方向がちがってもさ、これでお別れってわけじゃないからね。あたいは必ず、ここに戻ってくるよ。絶対にね。そんときは、あんたといっしょに戦ってやろうじゃん」
「いいだろう。頼りにしているぞ」
「任せなよ。ショットガン・スリング、ぶっ放してやるさ！」
団丸はオーロラライトを握った手で威勢よくガッツポーズをした。
その団丸の背後から、闇が襲いかかってきた。
突然、日が陰った。いや、日ではない。地の底に日光はささない。陰ったのは、巨大ホールから漏れてくる光だった。
光源は盗まれたブツだ。ドゥードゥー金庫に保管されていた五百六十個ものオーロラダイヤが強奪されている。営繕室にあったオーロラライトもひとつ残らず

盗み出されている。ダイヤもライトも、闇を照らす明かりとしてアリの巣に運び込まれた。ガラス質の鉱物を材料にしたらしい蟻塚は、全体が光り輝いてホールを照らしている。

それが陰った。差し込む光をなにかがさえぎったのだ。

「行け！」

りぶたんは団丸の腕をつかむと、もぎ取りそうな勢いで引っ張った。同時にすれちがうように前に出て、自分よりも体の大きな助手を背後にかばった。

「ネット！」

ＬＩＳＤ専用技の捕縛ネットが投擲された。

「ハーケン！」

クモの巣に似た六角形の網の先端から、六つの楔が発射された。

「ザイル！」

楔と網をつなぐ紐が縮んだ。

岩の廊下の曲がり角に、捕縛ネットの壁ができた。ハーケンはがっちりと岩に食い込んでいる。ネットもザイルもピンと張っている。通り道に張られた網はク

モの巣そのものに見えたが、獲物に粘着して捕らえる機能はなかった。
獲物がネットにぶつかった。
団丸はオーロラライトの光を浴びせた。
捕縛ネットに顔を突っ込んで、そのまま押し破ろうともがいているのは、黄色い顔に、暗闇よりも黒い目を持った怪物だった。
怪物は目の前にいるリヴリーに気づくや否や、激しく暴れ出した。頭を振って網を外そうとした。外れないとわかると、今度は網に咬みついた。咬み切れるまでじっとしてはいられないようで、少し咬むとすぐに頭を振り、網を引き千切ろうとした。
「え？　なんで？　ほかのはみんな通り過ぎて行ったじゃん？　なんでこいつだけ、こっちに来るのさ！」
「さてはこいつ。さっきの奴か」
りぶたんは両手を構えている。腕を前に突きだして、戦闘態勢だ。
「あっちの出口から追い出した奴？」
「たぶん、そうだ。舞い戻ってきてのぞいてみれば、そこにあたしたちがいたと、そういうわけだ」

しっかり構えたまま、りぶたんは網に近づいた。網は曲がり角に斜めに張ってある。
網の前でりぶたんは横を向いた。正面にあるホールは見えない。短い横穴をスズメバチが体でふさいでいる。
「危ないじゃんか！　なにをする気なのさ？」
「いいから、おまえは行け。あたしはこいつをネットごとぶっ飛ばす。そのままホールに出て、こいつを引きつけながら城に向かう。ホールに通じる道は二本しか確認できていない。あたしたちが使えるのはこの道だけだ。ここをスズメバチで埋めるわけにはいかない。わかるな」
「わかるけどさ。でも、ネットごとぶっ飛ばすって、そんな技ないじゃん」
「あたしを誰だと思っている」
りぶたんは目の前の大きな的に狙いをつけた。
まっすぐ伸ばされたりぶたんの両腕に電気が走った。放電して火花が散った。腕の間に大きな石が出現すると、腕から石に向かって電気が流れ込んだ。飛び散る火花が激しくなった。石は空中にぽっかりと浮かんで

いる。
「シュート！」
爆発したかと思うような速さで、石が飛んだ。尾を引くように稲妻も走った。衝撃波に打たれた横穴に土煙が舞い、遅れて轟いた発射音が岩の廊下をふるわせた。
石の砲弾はネット越しにスズメバチの顔面に命中し、巨大なモンスターをぶっ飛ばした。
岩に食い込んだハーケンは抜けなかった。ザイルも切れなかった。捕縛ネットは飛ばされなかった。砲弾に突き破られて、網がずたずたに裂けてしまったのだった。
「……なに……それ……」
団丸は息を呑んだ。
「レールガン・スリングだ」
りぶたんは構えを解かなかった。技を放ったあとも両腕には電気が走って、チリリと光っている。
「ネットごとぶっ飛ばすのは失敗したがな」
ゆっくりと歩き出したりぶたんは、天井から垂れ下がるネットの切れ端をつかんで引っ張った。網はたや

すく千切れてしまった。りぶたんは破れた捕縛ネットを解除した。
「マイン」
そのまま後ろに向かって、りぶたんは右手を優雅に舞わせた。光る指先が空中に輝く線を残した。
無限大の記号が描かれた。８の字が横向きになっている。記号の両端と中央の三点が強く光って、輝く線を吸い込んだ。三つの点は球状にふくらんだ。中空（ちゅうくう）構造の球体ができた。まるでシャボン玉のようだった。
ふわふわと浮かんだ玉の表面を、電気が光りながら走っている。団丸は思わず触ろうとして、手を伸ばした。
「機雷だぞ。それは」
「えっ！」
団丸の手が感電でもしたかのように跳ねた。
「静電機雷という技だ。触れるとサンダーになる。誘爆することもあるから、気をつけろよ」
「なんでそんな……」
団丸とりぶたんの間に三個の機雷が浮かんでいる。すぐ近くにいるふたりの距離を、兵器が遠く引き離し

ている。
「知れたこと。機雷でここを封鎖するのだ。あたしは打って出る。おまえは援軍を呼びに行く。ここを守る者はいなくなる。この道は援軍が通る道だ。そして、籠城しているバカどもをしょっ引いて撤退する道でもある。スズメバチを通すわけにはいかない。……もう、のんびりはしていられないしな」
りぶたんは団丸を見つめた。静かな瞳だった。
「……」
団丸は無言でうなずいた。
確かに、おしゃべりをする余裕はなかった。スズメバチを攻撃した。戦闘は始まったのだ。口を動かすよりも、体を動かすときだった。
「わかったら、さっさと行け」
「ラジャー！」
団丸は大声で返答すると、りぶたんに背中を向けて駆けだした。
岩の廊下を抜け、突き当たりを右に曲がり、振り返ることなく走り去っていった。
「頼んだぞ。怪盗団丸」

いなくなった助手に、りぶたんはそっと声をかけた。

3

りぶたんはホールに向かった。

短い横穴の中ほどで、もう一度機雷を仕掛けた。

すでにスズメバチをぶっ飛ばしたあとなのだから、姿を隠すようなことはしなかった。道の中央を堂々と進み、崖の手前で立ち止まった。

先ほど偵察したときのように岩に張り付いてはいないので、光る城がよく見えた。

群れ飛ぶスズメバチはどれも城を向いている。攻城戦に夢中で、背後の異変にはまだ気づいていない。

りぶたんは横穴の入り口にも機雷を仕掛けた。全部で九個の静電機雷が横穴を封鎖した。帯電して光るシャボン玉が空中を浮遊している。簡単に割れてしまいそうで、儚(はかな)く見える。

けれどもそれは、立派な兵器だった。

リヴリーには霊子を操るという特殊な能力がある。世界のすべては霊子で構成されている。霊子を元に万

物を創造することを造化といい、万物を元の霊子に戻すことを霊化という。
呪文科学局が開発した球状荷電(かでん)浮遊機雷の呪文「マイン」を唱えて、りぶたんは「静電機雷」を生み出した。リヴリーの持つ霊能力で造化したのだ。
もろそうに見えても、触れると「サンダー」になる機雷だった。それが要所を固めている。押し通ろうとする敵に雷撃を見舞うべく、ただひとつの通り道を静かに守っている。
封鎖を終えたりぶたんの目に、急上昇してくるスズメバチが映った。砲撃で遠くまでぶっ飛ばされ、怒り狂って飛んでくる。
りぶたんは充分に引きつけてから、今度はネットを放った。
網をかぶせられて、うまく羽ばたくことができなくなったスズメバチは失速した。そのまま崖に激突し、ぶざまに墜落していった。
レールガン・スリングを使わなかったのには理由があった。横穴が抜け道だと知っているスズメバチは、怒らせて引きつけておかねばならない。うっかりフル

ダメージを与えてしまうと、気絶したスズメバチをその場に放置する羽目になる。
気絶から覚めたスズメバチがりぶたんを追うとは限らない。横穴に向かうことも考えられる。静電機雷で封鎖してあるから簡単には突破できないが、機雷に触れてサンダーを食らったスズメバチのもとに仲間も集まるだろう。
仕掛けた機雷は全部で九個。そのすべてが爆発してしまえば、封鎖は解除される。幸い、抜け穴の存在を知っているのは、いまのところ一匹だけのようだ。りぶたんはその一匹を上手にあしらいながら、前に進むつもりだった。
横穴の入口から離れ、りぶたんは断崖通路に入った。
地底ホールの絶壁をくりぬいて道が掘られている。垂直に切り立った壁に沿ってわずかに蛇行しているものの、見通しは悪くなかった。なだらかに下りながら、光る城へと続いている。最終的には、左に曲がって城の側面に出る。
見通しは悪くなくても、戦闘には不向きだった。右は壁。左は崖。前後にしか動けない。はさまれたら身

動きがとれない。
しかし、ほかに道はなかった。崖を下りたところで、行く手には撃墜されたスズメバチが無数に転がっている。死んでいるのならともかく、気絶しているか、ふらついて飛び立てないでいるだけだ。そんなところを縫うようにして進むのは、断崖通路を行くよりも無謀なことだった。
すでに腹をくくっているどすこい娘は、身を隠すことのできない道を、平然と歩いた。
ついさっき撃墜したばかりのスズメバチが、また上昇してきた。捕縛ネットはかぶせただけだから、簡単に脱出できたらしい。前よりも怒っているように見えた。崖に激突させられて恥をかかされたと、腹を立てているようだった。
りぶたんはまずネットを唱えて、放りっぱなしの捕縛ネットを解除した。スリングなどとちがい、捕縛ネットは呪文に呪文を重ねると前のが打ち消されてしまう。呪文を連呼しても、技は連発できない。もう一度ネットを使うためには、前のを解除しておく必要があった。

再び放たれた捕縛ネットを、スズメバチは垂直に急上昇して避けた。バカではないようだ。しっかり学習している。

高く舞い上がった敵に向けて、りぶたんはハーケンを飛ばした。ザイルで絡め取ろうとした。

スズメバチはそれも避けた。体を横に傾けて、斜め下に空中をすべり降りた。飛んでくるハーケンを余裕でかわし、りぶたんめがけて突っ込んできた。

りぶたんはショットガン・スリングで応戦した。スズメバチはとっさに逃げようとしたが、逃げる前に弾が命中した。ダメージを受けたスズメバチは落下した。しかし、少し落ちただけで、空中で体勢を立て直した。りぶたんはかまわず、二発目、三発目と、上から散弾を浴びせた。そして、飛ばしたばかりのネットを解除し、改めてスズメバチにかぶせた。

スズメバチはまたもや羽ばたくことができなくなって墜落した。

ショットガン・スリングは専用攻撃技のひとつだが、なにも保安官助手専用というわけではなかった。助手になると使えるようになるだけで、保安官のりぶたん

も副保安官のヒナタも使うことができた。防衛隊は全員が会得している。モンスター津波で最も役に立った攻撃技だと言われている。

散弾だからしっかり狙わなくても命中する。特にモンスター津波では、点で打つ技よりも、面で叩く技のほうが生き延びるためには有効だった。

崖下に墜落したスズメバチをりぶたんは見下ろした。そしてゆっくりと視線を上げて、ホールの天井を見た。

地底ホールにはＧＬＬ城三つ分ほどの高さがある。火ノ塔で五階建てになるＧＬＬ城だから、三つ分なら十五階建てに相当する。それだけの高さを活かして飛翔モンスターは攻撃してくる。下からも上からも攻めてくる。

現に、たったいま崖下の地面から攻め上ってきたスズメバチが、急上昇して攻め降りてきたばかりだ。りぶたんの視線は下から上へと大きく振られた。下を見れば上がおろそかになる。上を見れば下への対処が遅れる。

敵が単独だから後れを取らなかったものの、上下から同時に攻め立てられてはたまらない。絶壁に掘られ

た断崖通路をひとりで進むのは、まさしく自殺行為だった。いずれ必ず、群れ飛ぶスズメバチにも気づかれることだろう。

それでも進むしかなかった。いまさら戻れはしない。戻って横穴に逃げ込むことはたやすい。モンスターが一匹しか通ることのできない抜け道は、敵の攻撃をしのぐのも簡単だ。しかし、それではルビーローズ一味を見殺しにすることになる。一味が必死に守っているモグラコオロギとアリも、見捨てることになる。

それはできない。

一味は逮捕する。一味に利用されたモンスターは解放する。

りぶたんはＬＩＳＤの保安官だ。ドゥードゥー強奪犯を捕まえる義務がある。

そして、りぶたんがりぶたんであるために。おのが道をゆくために。光る城に立てこもっているモンスターは救い出さねばならなかった。ましてやそれが、リヴリーを襲わない新種であるなら、なおさらだ。

侵入口からスズメバチがすべり降りてきた。また一匹、増援が到着した。

りぶたんはじっと動かずに新たな敵を監視した。できればそのまま見送りたかった。相手にする敵の数は少ないほうがいい。

だが、そうはいかなかった。スズメバチの飛行が乱れた。網をかぶって地面でのたうつ仲間に気づいた。どうやら、りぶたんと交戦中のスズメバチが通りかかった仲間に呼びかけたようだ。少し先には、薔薇の竜巻にやられたスズメバチが地面にごろごろしている。呼びかけられでもしない限り、網をかぶったスズメバチにだけ気を取られるはずはなかった。

着いたばかりの増援は降下して仲間の様子を見に行った。かぶった網から抜け出せなくてもがいている仲間のそばで、ホバリングした。スズメバチ同士でなにやら会話しているようだった。その証拠に、増援は突然顔を上げると、まっすぐりぶたんを見た。

りぶたんとスズメバチの目があった。

目があったという、ただそれだけのことで、スズメバチはいきなり興奮して挑みかかってきた。チンピラのようなモンスターだった。

りぶたんの両腕から雷光がほとばしった。レールガ

ン・スリングがぶっ放された。
レールガン・スリングは通称で、技の正式名称は電磁加速投石砲といった。両腕の間に浮かんだ大きな石を電磁誘導で爆発的に加速して発射する技だ。大型高速スリングであると同時に、サンダーまで併用している複合攻撃技だった。
もともと、りぶたんは遠距離攻撃が苦手だった。観測が任務のスポッターとして、スナイパーであるヒナタとコンビを組み、一つ目狙撃団に所属していながら、遠くの的を狙い撃つのは恐ろしく下手だった。おまけに観測手としても平凡だった。
それでもヒナタとコンビを組む限り、なにも問題はなかった。ヒナタは自分ひとりで狙撃を遂行した。観測手は不要だった。むしろヒナタは、頼りになる相棒に身を守られて、安心して狙撃に専念できたのだった。
りぶたんが得意とするのは近接戦闘だ。だから、ヒナタとのコンビは完璧だった。遠距離精密射撃のヒナタに、近距離ぶちかましのどすこい娘。相性はぴったりだ。幼なじみだから互いに相手のことを熟知しており、阿吽(あうん)の呼吸で連携も取れた。

一つ目狙撃団にいる間はそれでよかったが、防衛隊を除隊して選挙に当選し、ＬＩＳＤの保安官となったからには、苦手ですませるわけにもいかなくなった。ヒナタに頼ってばかりはいられない。

りぶたんは、弾が小さいから当たらないのだと、もっと大きな弾なら当たるのだと、そう主張した。ヒナタはくすくすと笑ったが、呪文科学局はまじめに受け止めて、新保安官のために電磁加速投石砲を開発した。

遠くの的をライフルで銃撃するのではなく、レールガンで砲撃する。大雑把な解決策だったが、小さな弾丸が大きな砲弾に変わった分だけ、当たりやすくなった。

呪文科学局は砲弾に榴弾（りゅうだん）も用意し、同じ呪文で使い分けられるように工夫した。榴弾とは散弾の強化版のようなもので、砲弾が炸薬（さくやく）で爆発する仕組みになっている。爆裂した砲弾の破片が爆風とともに的を破壊するわけだ。これなら、遠距離攻撃がどれほど下手でも外しようがない。

ただし、ピンポイントで撃ち抜くような攻撃は不可能だった。まるごと全部ぶっ飛ばすことしかできない。

ある意味、りぶたんにはぴったりの技だった。
チンピラのようなスズメバチはあっさりと迎撃された。大きな石がぶち当たり、雷撃まで食らって、真っ逆さまに墜落した。
間の悪いことに、そこへ次の増援が到着した。二匹のスズメバチが連なって侵入口から入ってきた。ホールに入るなり、目の前で仲間が攻撃されるところを見て、二匹はホバリングして警戒態勢に入った。
増援は二匹だけではなかった。壁の穴から続々と湧いて出てきた。全部で十匹ほどの集団にふくれあがった。あとから来た連中はなにも目撃していないのだが、殺気立つ先頭に刺激されて、全員が周囲を警戒した。
狡猾(こうかつ)にも仲間がそろうのを待ったのか、先頭の二匹がりぶたんめがけて空中を突進してきた。後ろの仲間たちはためらうことなく先頭に従った。
りぶたんは砲弾を榴弾に変えて、レールガン・スリングで迎え撃った。
高速で飛んでいった砲弾が炸裂(さくれつ)した。砲弾の破片が爆風に乗って、スズメバチの集団に襲いかかった。レールガン・スリングにはサンダーもセットになってい

る。爆風に殴られ、破片に打たれ、雷に貫かれて、スズメバチの集団はまるごとぶっ飛ばされた。
ふと、殺気を感じてりぶたんは光る城を見た。城に群がるスズメバチに変化はなかったが、群れ飛ぶスズメバチの後詰(ごづ)めが城に背中を向けていた。
攻城戦の真っ最中だというのに、光る城に背中を向けて、数え切れないほどのスズメバチがりぶたんを見つめていた。
黄色い顔に、吊(つ)り上がった黒い目がずらりと並んでいる。
ぞっとした。ミミマキムクネの螺旋状に巻かれた耳の毛が、ほんの一瞬、わずかにふくらんだ。
りぶたんはついに、最大の脅威に直面することになった。身を隠すことのできない断崖通路で、自由自在に空中を飛翔するモンスターと戦う羽目になったのだ。
見つかったからにはうかうかしてはいられない。先手必勝とばかりに、りぶたんはレールガン・スリングを放った。モンスターの空戦隊に榴弾で砲撃を加えた。
群れ飛ぶスズメバチの後詰めに大穴があいた。密集して飛んでいただけに、たった一発でおもしろいよう

に撃墜できた。撃ち落とされたスズメバチが地面に激突して、ボトボトと音が聞こえてくるほどだった。

しかし、楽しくはなかった。遊びではないのだ。命がけだ。

爆風に煽られて、空間が波打った。衝撃が波紋のように広がった。空中を埋め尽くした群れ全体が、たったいま自分たちが攻撃されたことを理解した。別の敵がいるのだと知った。

スズメバチ空戦隊は全機が反転した。

オニヤンマを戦闘機とするなら、スズメバチは戦闘攻撃機だった。戦闘機のように空中戦を行い、攻撃機のように地上の敵にも打撃を加えることができた。空対空の戦闘能力と、空対地の戦闘能力を兼ね備えている。

それぱかりか、地対地の戦闘能力まで有していた。地上に降りたスズメバチは戦車のようだった。六本の脚で駆けずり回って敵陣に突入できた。

スズメバチは空を飛ぶ戦車だと言えた。ヘリのようにホバリングもする。そんな強敵が密集隊形でりぶたんに襲いかかってきた。

空戦隊がいままで空中に待機していたのは、城攻めに参加しようにも取っ掛かりがつかめなかったからだ。光る城は先陣でいっぱいだった。戦いたくてうずうずしているところへ、別の相手が現れた。これ幸いと、地底ホールを群れて飛んでいたスズメバチは、そのすべてがりぶたんに向かった。

りぶたんは走り出した。転倒しないように下り坂の通路に注意しつつ、レールガン・スリングで応戦した。しっかり狙う必要はなかった。敵のいる方向に撃つだけでよかった。榴弾は確実に、敵機を撃ち落とした。対空砲火だ。盲撃(めくらう)ちでも威力はある。

スズメバチ空戦隊は爆風の輪を乗り越えるようにして向かってきた。中央を撃たれて穴があいても、周囲があいた穴を包み込む形でりぶたんの正面に殺到し、新たな中央集団を形成した。

小利口なのは固まらずに散開した。高く舞い上がって、急降下してくるのがいた。後ろに回って断崖通路を飛び、追い討ちをかけようとするのもいた。前に回り込んだのは一番ずる賢かったらしく、通路に着地するとその場で待機した。待っていれば獲物は自分から

近づいてくる。要撃戦法とは小癪なモンスターだった。
りぶたんは走るのをやめた。早歩きに切り替えた。前を撃ち、横を撃ち、振り返って後ろを撃つのは、走りながらでは無理があった。
歩く速度もすぐに落ちた。群れ飛ぶスズメバチの集中攻撃は凄まじい圧力だった。押し寄せてきたモンスターの巨体で空気が圧縮された。風が重くなった。羽風が体に絡みつく。
りぶたんの足はとうとう止まってしまった。
一本道の断崖通路で前後を扼され、包囲されたのだった。前を撃って進路を確保しても、横を撃ったときにはもう前方はふさがれた。後ろを撃ってから前を向けば、空飛ぶ戦車が進撃してくる。
レールガン・スリングも役に立たなくなってきた。
電磁誘導で砲弾を爆発的に加速して発射する方式が裏目に出た。高速弾であるがゆえに、榴弾が炸裂したときには、目の前にあるスズメバチの壁を突き抜けていた。それでも、群れの後方にダメージを与えることは可能だった。目の前の敵も、一匹ならぶっ飛ばせた。レールガン・スリングの威力をもってすれば、直線上

の敵は一掃できた。
しかし、接近する敵を防ぐには頼りなかった。威力はあっても、守備範囲をカバーできない。あたり一面が黄色と黒の毒々しい色に染まっている。
りぶたんは攻撃技を切り替えた。レールガン・スリングを捨てて、ガトリング・ショットガン・スリングを選択した。バリアのように弾幕を張って、モンスターの接近を阻むためだった。
ショットガン・スリングは散弾投石だ。それを回転式に連射するのが、ガトリング・ショットガン・スリングだった。技の正式名称は連射散弾投石という。
早い話が散弾銃のマシンガンだ。腕の先を六つの石が回転する。上の石から順次、撃ち出されてゆく。時計回りに左の石が上に来て、すぐさま発射される。腕を一周する間に石は生成され、弾が尽きることはない。少なくとも、リヴリーの霊力が続く限りは尽きない。
レールガン・スリングに比べると威力はずっと落ちるが、目の前にあるスズメバチの壁を、弾が突き抜ける心配はなかった。点で打たずに、面で叩くことができる。なによりも、両手で二丁拳銃のように扱うこと

ができた。
すでに足の止まっているりぶたんは、壁に背中を預けた。断崖通路が左右になった。
両腕を真横に開いて、りぶたんはガトリング・ショットガン・スリングの連射を開始した。腕の先で六つの石がうなりを上げて回転し、左右から迫る戦車を足止めした。
弾丸が回転して風を切る音は重く、にぶい。スズメバチの羽音にも負けないほどの迫力があった。
連射を続けながら、りぶたんは両腕を正面に向けた。敵機を扇状に撃ち、寄せ付けないようにした。
空中で撃たれたスズメバチはダメージで羽ばたくことができなくなり、落下した。ありがたいことに、下からりぶたんを狙うスズメバチにぶつかって、排除してくれた。しかし、上からりぶたんを狙うスズメバチが空いたスペースを突いてくる。
りぶたんは正面の上を撃ち、腕を左右に開きながら斜め上にも弾幕を張った。開いた腕は再び真横を向いて、左右の戦車をまた撃った。
撃たれた上のスズメバチが落下して、水平方向から

りぶたんを狙うスズメバチの障害となった。だが、今度は下の空間からスズメバチが襲いかかってきた。断崖通路に前脚をかけて、羽ばたきながらよじ登ろうとしてくる。

りぶたんは両腕を正面に戻しながら、斜め下の敵を撃ち払った。

舞うような乱射だった。

スズメバチはりぶたんに接近できなくなった。

的は大きく、弾は散弾。連射すれば、撃ち漏らすことはなかった。ダメージを受けたモンスターの動きは止まる。ひしめきあうモンスターには互いの巨体が邪魔になる。

後ろが堅固な岩壁になっているので、スズメバチも突き抜けるように飛ぶことはできなかった。そんなことをすれば、壁と仲間にはさまれて自分が押しつぶされる。

モンスター津波のときとは状況が異なった。

ダークヤグラ要塞救援作戦でゲートを開放したときに、モンスターチューリップ連隊第一突撃中隊は、低空飛行で飛び出してきたスズメバチの群れに粉砕され

た。先頭を撃っても、後続が先頭にぶつかって押し出してきた。突撃銃を連射したところで、すでに撃墜した先頭にしか弾は当たらなかった。仲間を盾に使って突っ込んできたスズメバチの前に、中隊は敗れ去った。

中隊は草原に立っていた。背後には空間が広がっており、スズメバチの飛翔を妨げるものはなかった。

りぶたんには絶壁があった。背後の守りは堅い。スズメバチが仲間ごと押しつぶそうとすれば、戦果よりも犠牲のほうが大きくなる。

とはいえ、安全が確保されたわけではなかった。隙を突かれたならば、一瞬でりぶたんの命は散る。このままずっと接近を許さなかったとしても、いずれは霊力が尽きる。

りぶたんは絶体絶命の窮地に陥(おちい)った。

ただし、あらかじめわかっていた窮地だった。群れ飛ぶスズメバチを横目に、なにごともなく光る城までたどり着けるわけがない。

スズメバチの包囲から抜け出す策はあった。

りぶたんはまず、ネットを解除した。捕縛ネットは横穴の存在を知るスズメバチにかぶせたままだ。すで

に網から脱出したのか、それともまだなのかはわからない。しかし、いまとなっては、脱出されたところでほかのスズメバチと見分けがつかない。横穴の守りは静電機雷に任せて、りぶたんは捕縛ネットを手駒に戻した。

そして、真っ正面に向けてネットを投げた。続けざまにハーケンを飛ばす。うまい具合に飛んでザイルを伸ばすハーケンもあれば、スズメバチに当たってしまうハーケンもあった。

ハーケンが飛ぼうと飛ぶまいと、関係なかった。りぶたんはサンダーを使った。狙いは捕縛ネットだが、ちょうど右上に飛んだハーケンがあったので、そこに雷を落とした。

電気が流れた。ハーケンからザイルへ、ザイルからネットへと痺れる電気が一瞬で流れた。相棒のヒナタが考案した電撃捕縛ネットだった。

ネットやザイルに触れているすべてのスズメバチが感電した。

りぶたんは両腕をそろえて右を向き、レールガン・スリングを放った。断崖通路の敵を一掃し、進路を確

保した。駆け出すと同時に、右手を肩越しに真後ろに向け、ガトリング・ショットガン・スリングを盲射(もうしゃ)して追撃を防いだ。左手のガトリング銃は切り開いた進路に入り込もうとする敵を狙った。

策が功を奏して前には進めたが、どれほども走らないうちに、また足が止まった。電撃捕縛ネットで一枚削っても、スズメバチの群れは横にスライドするだけで、フレッシュな戦力を前面に押し出すことができた。

たいして進めなくても、りぶたんにあせりはなかった。策のひとつを試してみただけだ。

捕縛ネットはなかなか便利な技だった。ただの網なのに、攻防一体の使い方ができた。りぶたんは、今度は断崖通路の左側にネットを張った。追撃してくる敵をネットで防ぎ、弾幕を張るための手数を減らした。

減らした手数はレールガン・スリングに費やした。空中の敵に向けてぶっ放し、直線上を一掃しつつ、群れの後方を榴弾で削り落とした。

スズメバチの群れは、言うなればひと玉のキャベツだった。まるごとぶつけられれば痛い。けれども一枚一枚剥いでいけば、最後に残るのはただの薄い葉だ。

簡単に突き破ることができる。
もっとも、レールガンの高速弾ではキャベツを半玉にするのが関の山。群れが薄くなると、砲弾は群れを突き抜けてしまう。
キャベツをスライスするための包丁なら、ほかにもあった。手間はかかるが、自力で包囲網を脱出する策はちゃんと考えてある。
だが、りぶたんは様子を見た。包丁でスライスするよりも、フードプロセッサーにかけてしまったほうが手っ取り早く調理できる。
籠城したルビーローズ一味が援軍頼みの作戦なら、援軍の動向には気を配っているはずだ。駆けつけた援軍を城に迎え入れるために、当然、援護をするはずだ。
りぶたんは援護の気配をうかがった。ルビーローズの薔薇の竜巻があれば、キャベツはまとめて片付く。
しかし、そのルビーローズはもうずっと沈黙している。りぶたんが地底ホールに着いてから、一発目のローズ・ストームと二発目のローズ・ストームは間隔も短かったのに、それっきり三発目がない。
ルビーローズは霊力が尽きかけていて、技を出し惜

しみしているのかもしれない。あるいは、すでに霊力が尽きてしまったということもありうる。行動を共にしているはずのマハラは一度も攻撃を繰り出していない。マハラの専用攻撃技も、薔薇の竜巻に負けない大技だ。使えばすぐに、それとわかる。

ふたりとも霊力を使い果たしてしまったのであれば、援護は期待できない。チャパティの専用攻撃技は大技ではなかった。一撃でモンスターにフルダメージを与えることができても、いまの状況では頼りにできない。

援護がないなら、自力で突破するまで。

りぶたんはほんの少し待ってみただけで、さっさと他力本願を捨てた。自分で努力したほうが、確実に事は進む。

敵中に孤立しているミミマキムクネが、横目で捕縛ネットをにらんだ。通路を追ってくるスズメバチはネットを横からすり抜けようとしていた。断崖通路は地底ホールの絶壁を半分くりぬくようにして掘られている。幅は決して広くはない。六つのハーケンのうち、外側のふたつはあまり役に立っていない。そのせいで、捕縛ネットは片方の脇がゆるくなっている。

すり抜けを狙うスズメバチをガトリング銃で押し戻して、りぶたんはキャベツスライスの仕上げに取りかかった。

サンダー・シャワーを放った。五つの雷がまとめて落ちた。

雷が五倍なら、音も五倍だ。いや、音は地底ホールに反響して五倍をはるかに超えた。地面がふるえた。空気もふるえた。轟き渡る音だけで、体が痛くなった。

雷には、直接落雷する直撃雷（ちょくげきらい）と、落雷の放電による側撃雷（そくげきらい）とがある。サンダー・シャワーによる五つの落雷は広範囲に放電した。直撃雷と側撃雷によって穴があき、キャベツの芯がえぐられた。

落雷をまぬがれた後方のスズメバチは、危険を回避しようと後退した。自分から榴弾の射程に入った。

レールガン・スリングが火を吹いた。石の砲弾が撃ち出された。遅れて轟音が響く。電磁誘導で爆発的に加速された榴弾が直線上の敵を一掃し、炸裂した。後退したスズメバチが爆風と破片と雷撃で吹き飛ばされた。

レールガンであけた穴から、りぶたんは戦果を確認

した。
りぶたんの周囲にはスズメバチの壁ができあがっている。隙間はまったくない。レールガンで砲撃して、束の間開いた穴からのぞかない限り、遠くの状況はわからない。
つまり、一連の攻撃は見えないままに実行された。サンダー・シャワーで群れの中央を撃てば後方の敵が下がり、榴弾の射程に入るであろうと、りぶたんは読み切ったのだった。
ガトリング銃を乱射して弾幕を張りつつ、りぶたんは次のタイミングを計った。
すると、急に潮が引いた。なぜだかスズメバチが下がった。
不思議な下がり方だった。波打ち際の流木が引き波にさらわれるような感じがした。いまにもりぶたんに咬みつこうと前のめりになりながら、後ろから引っ張られたかのように、するすると下がった。
引っ張られたのはスズメバチだけではなかった。制帽の羽根飾りが、吸い込まれるように前向きに傾いた。耳の毛まで引っ張られた瞬間、りぶたんは悟った。

援護の手が伸びたのだ。それも、とんでもなく荒っぽいやり方で。

そうとわかったときには、ほとんど手遅れの状態だった。群れ飛ぶスズメバチが総崩(そうくず)れになって、薔薇の竜巻に吸い込まれていった。

縦に回転する渦をりぶたんは見た。逆回りするふたつの渦が、りぶたんめがけてまっすぐ突き進んでくる。

もう弾幕は必要なかった。それどころではなかった。りぶたん自身が薔薇の竜巻の餌食になろうとしていた。

りぶたんは捕縛ネットを撃った。弾が当たって、網の一部が消し飛んだ。それでもかまわずに、二丁ガトリング銃でネットごとスズメバチを撃ちながら、網に飛び込んだ。竜巻に吸い込まれないように、体を固定しなければならない。

スズメバチはしぶとかった。二本の前脚でネットにつかまった。体は竜巻に吸われて宙を泳いでいるのに、鉤爪をネットに引っかけて耐えている。

りぶたんは情け容赦なく散弾を浴びせた。左腕を網の向こうに通し、折り曲げた腕でフックした。飛ばされないよう肘で体を支えながら、左手のショットガン

でスズメバチを撃った。
右手はハーケンを操った。外側の二本を背後の壁に打ち込む。ザイルを巻いて、網を自分の体にかぶせにかかる。天と地のハーケンもそのままでは邪魔になるので引き抜く。だが、その二本を抜いた瞬間、まるで帆のように網がふくらんでしまった。
スズメバチの巨体が薔薇の竜巻に吸い込まれようとしている。鉤爪は網に引っかかっている。網はスズメバチの大きな体を支えている。
引っ張られる力に負けて、ザイルが縮まなくなった。
りぶたんはもう、スズメバチを撃つ余裕すらなくなった。右手で縮まないザイルを巻き続けながら、左手を使って抜いたばかりのハーケンを壁に打ち込んだ。すぐにザイルを巻きにかかる。やはり途中からはもう、縮まなくなる。
このままでは吸われる力に負けてハーケンが抜けてしまう。ハーケンが抜けると、捕縛ネットは薔薇の竜巻に吸い込まれる。スズメバチといっしょにりぶたんまで、渦に呑まれてしまう。
りぶたんは右手を網の隙間から通した。両腕を前に

伸ばして、そろえた。
腕の先にはスズメバチがいる。
両腕に電気が走った。腕の間に石の砲弾が出現した。腕から石に向かって電気が流れ込み、放電で火花が散った。スズメバチの黒い目が鏡となって、飛び散る火花を映し出す。
散弾のダメージからスズメバチが回復した。渾身(こんしん)の力で吸われる体を引き寄せて、右の前脚で目の前のリヴリーに殴りかかった。二本の脚で竜巻に耐えているのに、片方を放してまで攻撃を挑むのだから、気迫のこもった一撃だった。
りぶたんはレールガン・スリングを放った。
左の前脚一本で網につかまっていたスズメバチがぶっ飛ばされた。
スズメバチは薔薇の竜巻に吸い込まれた。ネットにかかる力が弱まって、途中で止まっていたザイルが一気に巻かれた。網が一瞬で縮んだ。りぶたんは絶壁に叩きつけられた。
気を失うほどの衝撃はなかった。痛みを感じる暇さえなかった。

りぶたんの体は捕縛ネットで固定された。制帽が竜巻に吸われて脱げたが、網に引っかかって止まった。りぶたんは腕を伸ばして制帽を押さえた。

薔薇の竜巻が絶壁に衝突した。すぐ目の前で風が渦を巻いている。フードプロセッサーの回転する刃が切り刻む食材を求めている。

りぶたんは目を背けなかった。つぶりもしなかった。逆に、竜巻をにらみつけてやった。

どすこい娘ににらまれて、薔薇の竜巻が目をそらした。進路を変え、絶壁に沿って流れてゆく。りぶたんの目の前を、竜巻の壁が右から左へと横切ってゆく。

目の前が渦から壁に変わっても、吸い込もうとする力に衰(おとろ)えはなかった。六本のハーケンは踏ん張った。ザイルも負けなかった。散弾で撃たれてずたずたになったネットも懸命にこらえた。

壁の向こうに錐揉(きりも)みするスズメバチが見えた。同じ場所にとどまって、高速で回転している。そうかと思えば、竜巻の中を振り回されるスズメバチもいた。縦に回転する竜巻の中を上下にぶん回されて、ほかの仲間に激突した。

薔薇の竜巻は逆回転する二重竜巻という構造になっている。外側の竜巻と内側の竜巻があり、その間に小さな竜巻が発生して風の棘(とげ)となる。

りぶたんは見た。同じ場所にとどまって錐揉(きりも)みするスズメバチに、なにかがぶつかった。そのせいでスズメバチの錐揉(きりも)みが止まった。高速で回転する体を一瞬で止められたのでは、いかにモンスターといえども、ダメージは大きかろう。

敵も味方も吸い込みながら突き進む二重の竜巻と、内に潜む風の棘(とげ)。

聖母と慕われるルビーローズには不似合いな、恐ろしい攻撃技だった。

竜巻は通り過ぎていった。

捕縛ネットはりぶたんを守り抜いた。

嵐が去って、りぶたんはネットを解除した。前によろけるようなことはなかった。渾身の力で体を壁に押しつけていたのだ。力を抜こうにも、筋肉はまだこわばっている。りぶたんは糊付けされた体を引っ剥がすようにして、壁から離れた。

壁から離れて足を踏み出すと、そこでようやく力が

抜けた。反動でよろめいてしまったが、こけたりはしなかった。

りぶたんは脱げてしまった制帽をかぶり直した。なんとなく、おでこの左上に手を当ててみた。皮膚がささくれている。下ろした手を見つめても、血はついていない。ただのかすり傷だ。

最後に殴りかかってきたスズメバチはレールガンで仕留めた。前脚はかわしたつもりだったが、どうやらかすめていたようだ。脚の先についている鉤爪で、皮膚の薄皮をほんのちょっぴり削られてしまった。

かすり傷でもケガには変わりない。雑菌で化膿する恐れだってある。りぶたんはリヴリーの持つ霊能力で絆創膏(ばんそうこう)を作り出すと、おでこの上にぺたりと貼り付けた。

不思議なもので、ケガの存在を知るとひりひりと痛み出してきた。

貼ったばかりの絆創膏に手を当てながら、りぶたんは地底ホールを一瞥(いちべつ)した。

光る城の攻防戦に変化はなかった。

相変わらず、城には無数のスズメバチが群がってい

る。ひょっとすると、籠城しているルビーローズ一味は防戦するのに手一杯で、援軍に気を配る余裕はなかったのかもしれない。仮にのぞき窓があったとしても、モンスターの巨体にふさがれているだろう。もしもそうなら、地底ホールに響き渡ったサンダー・シャワーの轟音に、一味はふるえあがるどころか、小躍(こおど)りしたにちがいない。

そして、大喜びで支援の手を差し伸べたということか。

援護のための薔薇の竜巻がどこから放たれたのか、その痕跡は見当たらない。群がるスズメバチを吹き飛ばして技を放ったのだとしても、できた穴はもうふさがれている。

城に群がるスズメバチは、制空権を握っていた空戦隊が全滅しても気にかける様子はさらさらなかった。

スズメバチ空戦隊は全機が撃墜されており、空を飛ぶのは一匹もいない。視界が良好だと、地の底なのに晴れ渡った空のようにすがすがしい感じがした。

空中はすっきりしていても、崖下の地面は敵だらけだった。りぶたんが来る前から転がっているスズメバ

チもいれば、りぶたんの攻撃で撃ち落とされたスズメバチもいる。しかし、その多くはりぶたんめがけて殺到したところを、薔薇の竜巻に呑まれてしまった連中だった。

りぶたんはホールの左に目をやった。吹き抜けていった竜巻の通り道に、スズメバチが線を引くように転がっている。視線を上げれば、そこにはシャボン玉が浮かんでいた。三つの玉がふわふわしている。電気が玉の表面を走って、光っている。

静電機雷だった。

絶壁に沿って進んでいった薔薇の竜巻が、横穴に仕掛けておいた静電機雷を吸い出してしまったようだ。数は三個。ちょうど一セット分だ。

静電機雷は三個を一セットとして、三セットまで敷設(ふせつ)できた。四セット目を仕掛けると、古いものから解除される。吸い出されて役に立たなくなった機雷は最後に仕掛けた分だろうから、先に解除することはできなかった。もちろん、全部を解除するわけにはいかない。それでは横穴を解放することになる。封鎖した意味がない。

りぶたんは両腕を構えて、レールガン・スリングの発射態勢に入った。静電機雷を砲撃し、爆破処理しようとした。機雷の下にはスズメバチが転がっている。転がるスズメバチはそのままずっと奥まで続いている。吸い出された機雷を放置しておくと、飛び立ったスズメバチが引っかかる恐れがあった。

静電機雷に触れるとサンダーになる。雷撃を食らったスズメバチは敵を探すだろう。敵は宙に浮かぶシャボン玉だ。あたりを見回せば、穴の中に隠れているのがわかるはず。横穴の存在がバレてしまう。

りぶたんは狙いをつけた。遠距離攻撃は苦手だが、それを克服するためのレールガン・スリングだ。機雷に当てる自信はあった。

自信はあったが、りぶたんは舌打ちをすると構えた腕を下ろした。

機雷の誘爆を恐れたのだった。機雷は三個とも吸い出されて並んでいる。横穴へと連なっている。ひとつが爆発したからといってほかも爆発するとは限らないが、もしも誘爆して、三倍の威力を持ったサンダーが横穴にまで伸びたなら……。

そう考えると、爆破処理はためらわれた。
りぶたんはシャボン玉に背を向けた。機雷で封鎖した瞬間から、横穴の守りは運任せだ。いまさらどうにもなりはしない。
そんなことよりも、一刻も早く城にたどり着かねばならない。スズメバチはじきに飛び立つ。ダメージが回復すれば、離陸する。戦闘攻撃機で編制されたスズメバチ空戦隊はすぐにも来襲してくるのだ。
りぶたんは駆けだした。
全力疾走だった。耳の毛が吹き流しのように風になびいた。
断崖通路はなだらかに下っているから、勢いがつきすぎると転倒する。壁に沿って蛇行しているから、曲がりきれないカーブも出てくる。それでも、りぶたんは坂もカーブも全力で駆け抜けた。
地盤がもろかったのか、通路が崩落(ほうらく)している場所があった。絶壁に道を通したモグラコオロギならひとまたぎにできる程度の崩落(ほうらく)だったが、地面が消えている。
代わりに、橋が架けられていた。板を渡しただけの粗末な橋だ。

渡された板は、乗ればたわむかもしれない。走りながら渡るとバランスを崩しかねない。りぶたんは勢いよく飛び越えた。ジャンプすると同時に、制帽が落ちないように手で押さえた。

飛びながら下に目をやると、通路は斜めに崩れていた。斜面をすべり落ちた土砂は崖下に消えている。その崖下にきらりと輝く物があった。

着地したりぶたんは足を止めた。崖の下をのぞき込んだ。

工事用の一輪車が転落していた。麻袋も見える。袋が破れてお宝をぶちまけたようだ。光る城から届く明かりを反射して、地面に散らばるダイヤが輝いている。

苦労して強奪したブツを、ルビーローズ一味はゴール目前で失っていた。

全部は落としていないだろう。奪われたオーロラダイヤは十六袋もある。一台で運べる数ではないから、一輪車はおそらく複数台用意されていたにちがいない。一味は三人だから、三台だろうか。残る二台は無事にたどり着き、アリの巣を光る城に変えたのだ。巣材にガラス質の鉱物かなにかを使用して、オーロラダイヤ

で全体を光らせている。
いや。
よく見ると、落とされたオーロラダイヤは発光していなかった。蟻塚が光を放っているから、オーロラダイヤが発光するには明るすぎた。
暗くなると光り出すダイヤが真っ暗闇の地底にあるのだから、当然光っているものと思い込んでいたら、そうではなかったのだ。
城を光らせているのはオーロラダイヤではなく、オーロラライトだった。調光器が取り付けられて照明器具として使えるオーロラライトのほうが、地底の世界では役に立つ。明るいと発光しないオーロラダイヤは、一個百万ddもしたところで、トンネルや洞窟にぽつぽつと転がしておくくらいの使い道しかなかった。
りぶたんは前を向くと、再び足を飛ばした。つい気を取られてしまったが、光源がダイヤであろうとライトであろうと、たいした問題ではなかった。明るければそれでいい。
崩落(ほうらく)部分をすぎると、断崖通路は左に曲がり始めた。
曲がるにつれて、光る城の全貌が見えてきた。

巨城だった。
それほど大きくはないように見えていたのは、目の錯覚だった。比較対象がスズメバチしかいない地の底で、完全に見誤っていた。近づいて初めて、ＧＬＬ城の倍近くも高さがあるのだとわかった。高さに比例して、横にもでかい。
しかも、そびえ立つ城ではなかった。壁に張り付く城だった。正面はあっても、裏面はなかった。地底ホールの絶壁をそのまま城の壁に利用している。ちょうど、かまぼこを立てたような感じだ。かまぼこ板が絶壁で、板にくっついたかまぼこが盛り上がっている。
そのかまぼこを食いつぶそうと、スズメバチが群がっていた。出入り口があるところには密集し、あぶれた者は突破口を探して壁面をうろついている。
断崖通路は城の側面に突き当たって終点となっていた。蟻塚は外から判別できるような階層構造になっていないが、明らかにＧＬＬ城よりも高いところに吸い込まれて、道が終わっている。そこには間違いなく出入り口があるらしく、スズメバチが群がっていた。
最後の難関だった。

城の中に入るには、入り口のスズメバチを排除しなければならない。
レールガン・スリングは使えなかった。威力がありすぎて、城の内部まで破壊してしまう。ガトリング・ショットガン・スリングではスズメバチをその場に釘付けにするだけ。サンダー・シャワーも城に被害が出る恐れがあった。城壁を壊せば、スズメバチに突破口を与えることになる。
使える技がなかった。少なくとも、ひとつの技では排除できない。技と技を組み合わせなければならない。工夫が必要だ。
りぶたんは走りながら横を向いた。地底ホールにちらりと視線を飛ばした。
撃墜されたスズメバチ空戦隊がホールのそこここで復活しつつある。羽ばたいて上昇中のスズメバチがいる。高く舞い上がって周囲を警戒しているスズメバチがいる。めざとい者はすでにりぶたんを見つけてスクランブルをかけている。
黄色と黒の戦闘攻撃機が編隊を組んで急接近してくる。城の入り口にいるスズメバチを排除するのに、あ

まり時間はかけられない。
りぶたんが悩む必要はなかった。援軍頼みで籠城している一味が、たったひとりとはいえ、駆けつけた援軍への支援の手をゆるめるわけがなかった。
断崖通路の終点に群がっているスズメバチが吹き飛ばされた。薔薇の竜巻だった。吹き飛ばしたスズメバチを吸い込み、縦に回転しながら突き進んでくる。けれどもそれは、小さな竜巻だった。通路にちょうど収まっている。
竜巻の規模を縮小したのは、りぶたんのためだった。出入り口に群がるスズメバチに、城の中から竜巻を放つということは、その延長線上にいるりぶたんをも攻撃することになる。
同様の攻撃は先刻もあったが、今度は向きがちがう。絶壁に対し、斜めにぶつかるような竜巻であれば、片側に逃げることが可能だ。実際には逃げ出すのではなく、壁に体をくくりつける方法をりぶたんは選択したが、竜巻を避けることはできた。
ところが今度は、絶壁に沿って竜巻は進んでくる。断崖通路を駆け上がってくるのだ。前に逃げても後ろ

に逃げても竜巻の進路上。壁に体をくくりつけたところで、横から襲われるのなら無防備も同然。つまり、りぶたんには避けようのない竜巻だった。回避策がないのであれば、せめて小さな竜巻でないと、りぶたんのダメージも小さくならない。

竜巻は通路をぴったりふさいで走ってくる。まるで生き物のように断崖通路を駆け上がってくる。

りぶたんには回避できない。

前に進めば竜巻に呑み込まれるだけ。後ろに下がっても竜巻に呑み込まれるだけ。右は壁。左は崖。絶壁をくりぬくようにして掘ってある通路は、上にも下にも逃げ場はない。

りぶたんは空中に飛び出した。崖から身を投げた。竜巻を回避できる場所は、崖の外側にしかなかった。

地面が消えた。

ミミマキムクネは空を飛べない。飛行呪文は持っていない。そんなものがあれば、もっと楽ができる。しかし、飛行呪文などなくとも、ＬＩＳＤには便利な呪文があった。

りぶたんは捕縛ネットを投げた。空中に出現したネ

ットに自分から突っ込んだ。網が体を包み込む。帽子が脱げる。

脱げた帽子を口でくわえて、りぶたんは両手で網をつかんだ。両足も網にかけ、体をネットと一体化させた。それからハーケンを飛ばした。絶壁の上のほうに楔を打ち込む。あとはザイルを伸縮させれば、高さをコントロールできる。通路に戻ることも可能だ。

捕縛ネットが乗り物として使えるなど、考えたこともなかった。ネットとサンダーを併用する電撃捕縛ネットを考案したヒナタでさえ、乗ることは思いつかなかった。

斬新な発想は団丸がもたらした。急坂をすべり落ちるりぶたんを救おうとして、捕縛ネットで包み、ハーケンで固定し、ザイルを縮めて撃ち出した。あのとき、捕縛ネットの新しい使い方が編み出されたのだった。

元怪盗であるがゆえに、捕縛ネットはかぶるものという認識が団丸にはあったのかもしれない。

空中に飛び出した勢いもあり、りぶたんを包んだ捕縛ネットは絶壁から遠ざかりながら落ちていった。ネットは薔薇の竜巻から離れてゆくが、そのままでは上

から伸びたザイルが竜巻に引っかかる。
りぶたんはザイルを巻いた。ネットはブランコのように跳ね上がった。強いGがかかる。
ザイルを巻きすぎると今度は絶壁に激突する。りぶたんは途中で手を止めた。跳ね上がる勢いが弱まって、重力と釣り合った。
その結果、ほんの一瞬だけ、りぶたんは空中で停止した。
無重力。心地よい瞬間だった。見晴らしもよかった。ザイルを巻いて急上昇したことで、薔薇の竜巻を見下ろす形になった。眼下を竜巻が吹き抜けてゆく。間一髪で難を避けたのだから、ほっと安心もする。火ノ塔のてっぺんよりもまだ高い空中で、網につかまって仰向けという姿勢もスリリングだ。
だが、楽しむ暇はなかった。次の危険が迫っていた。
目の前の城を飛び立ったスズメバチがいた。その数、無数。ざっと数えることもできやしない。城に群がってはいても攻撃ポイントの出入り口にあぶれてしまい、壁面をうろつくしかなかったスズメバチが、派手に宙を舞う獲物を見つけて一斉に飛び立っていた。

さらに、スクランブルをかけた戦闘攻撃機の編隊が猛然と追ってくる。その後ろには空戦隊の僚機(りょうき)が全機勢揃いしている。

城を見れば無数の敵。

ホールを見れば無数の敵。

どちらも、りぶたんめがけて空を飛んでくる。

城の入り口にもはや障害はないが、全力で駆けようにも地面は消えている。りぶたんの体はふわりと宙に浮かんでいる。

そして、無重力が終わった。空を飛べないミミマキムクネは落下を始めた。

りぶたんは空中で器用に移動した。落下を始めた瞬間に、体を包んだ網が少しばかり広がった。そこを逃さず、網の下のほうへと移った。

捕縛ネットはモンスターを包み込めるほどに大きい。網の中央に位置していたのでは、体が包まれて不便だ。絡みつくと命取りにもなりかねない。帽子を口にくわえたまま、りぶたんはクモのように素早く動いた。

帽子を落とすわけにはいかなかった。ただの帽子ではないのだ。ＬＩＳＤの制帽だ。紋章も縫い込まれて

いる。紋章があるからこそ、りぶたんはＬＩＳＤの専用技を使うことができた。制帽は大事なアイテムだった。

網の下側に移ったりぶたんは、二本目となるハーケンを飛ばした。今度は進行方向に打ち込んだ。ザイルを縮めれば前に進むことができる。

一本目は壁に打ち込んだまま、抜かなかった。緊急時に備えて残した。

りぶたんは二本のザイルを同時に巻いた。捕縛ネットは空中を落下しながら斜めに進んで、地底ホールの絶壁へと引き寄せられていった。

戦闘攻撃機が追尾してくる。獲物を逃すまいと空中で自在に向きを変え、飛翔モンスターはぴたりとりぶたんをロックオンしている。

りぶたんは着地した。垂直に切り立った壁に降りた。断崖通路に戻ったわけではない。通路はもっと下にある。だが、りぶたんは真下にある通路を目指すことはしなかった。それでは遠回りだ。絶壁と城の入り口。二点を結ぶ最短距離を突っ走ることにした。

いままでザイルを巻いていた手で網をつかみ、その

ままぶら下がるようにして、りぶたんは絶壁を駆けた。
捕縛ネットは二本のハーケンで留めてあるから、りぶたんは弧を描いて壁を駆け下りる形になった。右手で網をつかみ、左手でガトリング銃を乱射しながら、青紫のミミマキムクネが垂直の壁を駆け下りてゆく。
口には大事な制帽をくわえている。技を使うにも無言だった。威勢のよい雄叫びどころか、呪文を唱えることすらできない。念じるしかない。いまはとにかく、光る城に逃げ込むことが最優先だった。霊力の消耗を気にかけてはいられない。
目指すは城の入り口だ。たむろしていたスズメバチが吹き飛ばされて、入り口の様子がよくわかる。地底の城は、やはり蟻塚だった。出入り口に扉はない。穴があいているだけ。扉の代わりに自分の体を盾として、白いアリが穴をふさいでいる。
蟻塚はシロアリの巣だった。
外敵の侵入を防ぐのは兵隊アリの役目だ。真白い胴体は柔らかくても、茶色い頭部は硬い。黒くて太い大顎(おおあご)がハサミのように突き出している。兵隊アリは硬い頭で巣の出入り口にふたをするのだ。

その兵隊アリが一匹だけ外に出て偵察をしていた。頭を持ち上げて、まるで周囲のにおいを嗅ぐようなそぶりを見せ、巣の中へと後ろ向きに戻って配置についた。

入り口には兵隊アリの茶色い頭が並んでいる。出入り口の穴を取り巻くようにして、突き出た大顎(おおあご)で槍(やり)衾(ぶすま)を作っている。穴の中央部分だけがわずかに空いているところを見ると、そこから中に入れとのメッセージのようだった。

弧を描きながら絶壁を駆け下りてきたりぶたんのコースが、断崖通路に対して平行になった。通路は絶壁をくりぬくようにして掘られているから、壁の中にある。

りぶたんは一本目のハーケンを抜いた。支点のひとつが消え、捕縛ネットはもう一段、落下した。りぶたんは断崖通路に飛び込んだ。

すかさずザイルを調節する。通路の地面に叩きつけられるわけにはいかない。

捕縛ネットはハーケンを中心点にして、振り子のようにふれた。ザイルが絶壁をこする。ネットは断崖通

路の中を飛び抜けてゆく。光る城の入り口が近づいてくる。

りぶたんはガトリング銃を乱射し続けた。弾幕を張る手は休めなかった。地底ホールはスズメバチに埋め尽くされているから、盲撃(めくらう)ちでも散弾は当たってくれる。

首筋がぞくりとした。スズメバチに後ろを取られたと、見なくてもわかった。頭で考える必要はなかった。答えは、体が出してくれる。

ザイルを握りしめていた手を、りぶたんは放した。後ろ向きに倒れた。見上げるようにして頭を起こし、背中を反らせて後方に倒れ込んだ。

りぶたんは空中で仰向けになった。

スズメバチは真後ろにいた。吐息がかかりそうなほど、すぐそばだった。

両手のガトリング銃が火を吹いた。仰向けの状態から逆さまになりながら、りぶたんは後ろのスズメバチに大量の散弾をお見舞いした。

そして、勢いを殺さずに体を回転させた。足がネットから離れた。

逆さまからうつぶせに、体の向きが変わった。りぶたんの目の前を断崖通路の地面が流れてゆく。両手はホールに向けて撃ち続けた。うつぶせになった体は回転運動で起き上がり、りぶたんは断崖通路に着地した。

見事な後方伸身宙返りだった。

しかし、両手を広げて観客にアピールすることはなかった。観客はりぶたんの宙返りに拍手するどころか、大顎(おおあご)を咬み鳴らして襲いかかってくる。

りぶたんは走った。城の入り口はすぐそこだ。兵隊アリが頭を揺すって、りぶたんを呼んでいる。

走りながらぎりぎりまで乱射を続け、最後にりぶたんはジャンプした。入り口を守る兵隊アリは穴を取り巻くようにしている。穴の中央部分にはリヴリーが通れるくらいの隙間が空いている。りぶたんはモンスターのシロアリを飛び越えて、穴の中へと躍り込んだ。

一瞬、心配した。兵隊アリに敵と誤認されて、咬まれはしないかと思った。入り口を守る兵隊アリたちは、ハサミのように突き出した黒く太い大顎(おおあご)で槍衾を作っている。たとえ間違いでも、咬まれたらおしまいだ。

心配は無用だった。兵隊アリはリヴリーとスズメバ

チをきちんと識別してくれた。頭を揺することで、りぶたんのにおいを嗅いでいたのかもしれない。
穴に飛び込んだりぶたんは、シロアリの上を転がった。頭は硬く、背中は柔らかかった。丸みのあるシロアリの背中を、尻に向かってすべり降りようとするりぶたんの背後で、衝撃音がした。同時に吹いてきた突風に煽られて、りぶたんはシロアリの背中から転げ落ちた。
りぶたんはすぐに立ち上がって、背後の敵に備えた。構えた両手の先で石の弾丸が回転し、うなりを上げた。だが、ガトリング・ショットガン・スリングを使う必要はなかった。籠城軍守備隊のシロアリが、攻城軍空戦隊のスズメバチをしっかり阻んでいた。りぶたんが通り抜けた隙間も、別の兵隊アリがふさいでいる。
押し入ろうとする敵に負けまいと、シロアリたちの体には力がみなぎっていた。
りぶたんは両手の先で回転する石を消した。何時間も粘り強く巣を守り続けている兵隊アリに、負けそうな気配はなかった。
ずっと口にくわえていた帽子を、りぶたんは手に取

った。緊急出動を告げる白い羽根飾りが半分に折れてしまっていたが、気にせずにかぶりなおした。
「けっこう時間がかかりましたのね、保安官」
りぶたんの背中に声がかけられた。
「もっと早くいらっしゃるかと思っておりましたわ」
聞き覚えのある声だった。
りぶたんが振り返ると、そこには赤いリヴリーが立っていた。
制帽をかぶり、腕章をつけている。額には星形のタトゥーがある。
「ようこそ。后土の城へ」
地底の蟻塚に籠城する聖母が、にこやかにほほえんだ。

第八章　アンダー・ザ・ローズ

一

皇天后土（こうてんこうど）という言葉がある。
天の神と地の神を意味する。
后土の城ならば、地の神の居城ということになる。
そこに君臨する聖母は、さしずめ大地の女神といったところだろうか。
「ルビーローズ！　おまえを逮捕する！」
りぶたんが吼（ほ）えた。
女神だろうが、聖母だろうが、関係なかった。管理リヴであることすら、歯牙にもかけなかった。りぶたんはＬＩＳＤの保安官だ。犯罪者を取り締まる使命がある。
そして、ルビーローズはドゥードゥー強奪犯だった。
后土の城などとたいそうな名前をつけたところで、地底の蟻塚は犯罪者一味のアジトにすぎなかった。
「と言いたいところだが、後回しだな。まずは状況を

説明してもらおうか」
　りぶたんは犯罪者一味のアジトに単身乗り込んでいる。マハラもチャパティも姿は見えないが、ルビーローズはひとりではなかった。兵隊アリを従えている。りぶたんの後ろには、守備隊のシロアリが出入り口を守るために固まっている。両脇には予備兵力も控えている。
　シロアリはリヴリーを襲わない新種のモンスターと見えて、脅威に感じることはなかった。しかし、味方というわけでもなかった。あくまでも、ルビーローズの配下だ。女神が命令を下せば、牙を剥くものと思われた。
　それにいまは戦争の真っ最中だ。外はスズメバチに埋め尽くされている。ルビーローズに縄を打ち、マハラとチャパティをふん縛ったとしても、そのことでシロアリの統制が乱れてしまえば、地底の城は陥落する。
　スズメバチの軍団を敵に回して籠城している以上、LISDの保安官といえども、いまは犯人一味と手を組むしかなかった。
「ついてらっしゃい。クイーン・ローズまでご案内し

ますわ」
「なんだ、それは」
「ここの最上階でしてよ」
ルビーローズは背中を向けるとすたすたと歩き始めた。
りぶたんはだまってついて行った。
蟻塚にはスズメバチが群がっていた。最上階には殺到していた。そこへ案内するということは、最も戦闘の激しい場所に行くということだ。文句はなかった。
歩くと、足元からパキポキと乾いた音が聞こえてきた。蟻塚の内部は床に枯れ木や枯れ枝が敷き詰められていた。踏むと沈み込む感じで歩きにくい。
地底の巣の中でも明るかった。天井と壁がうっすらと光っている。
巣材は石英のようだ。右の壁は絶壁の岩が剥き出しになっているが、左の壁や天井は白く濁った結晶でできている。所々に透明な部分もあって、全体的に光沢のある結晶だった。
石英の接合にはシロアリの分泌物を使ったのだろうか。結晶同士がじかにくっついているようで、漆喰(しっくい)の

たぐいは見当たらなかった。
穴をあけられた結晶もあった。それほど大きくはない穴で、中にはカンテラ型のオーロラライトが置いてあった。ライトが石英を照らし、光は結晶を透過している。同様の穴はほかにいくつもあって、蟻塚全体を光らせているのだろう。
「ここから階段ですわ。足元にお気をつけ遊ばせ」
ルビーローズが注意をうながした。
通路が枝分かれして、交差点が広くなっている。
左のルートはそのまま奥へと向かい、右の絶壁側は登りになっている。傾斜のきつい登り道だったが、壁際に竹で組んだはしごが設置されていた。どうやら、斜面に置いたはしごを階段代わりに利用しているようだ。さすがにそれだけでは転落する危険があるので、絶壁に杭を打って鎖を通している。鎖をつかんで、はしごを踏みしめ、登ってゆくわけだ。いわゆる鎖場(くさりば)である。
ルビーローズは鎖をつかまずに登っていった。もう何度も往復しているのだろうから、慣れているようだ。りぶたんは見栄を張らずに鎖をつかんで登った。

登り道にも枯れ木や枯れ枝が敷き詰められていた。結晶の先端がわずかにのぞいているのを見て、りぶたんはようやく気づいた。床もまた石英でできているのだ。光沢のある結晶だから、つるつるとすべるだろうし、第一、でこぼこしていて歩きにくい。そこで、枯れ木や枯れ枝でへこみを埋めて均(なら)し、同時にすべりにくくしているわけだ。

均すのに土を使わなかったのは、荷重対策だろうか。外から見た蟻塚はＧＬＬ城の倍近くも高さがあった。それだけ大きな城の床すべてに土を盛ると、とんでもない重さとなる。

はしごの階段を登ってゆくと、下の通路に工事用の一輪車が見えた。強奪品を地ノ塔から運び去るのに利用したであろう一輪車が二台置いてある。

二台とも裏向きにひっくり返して壁に立てかけてあるのだが、大きさにはかなりのちがいがあった。大きいのはマハラ専用だろう。並外れた体格を活かして一度にたくさん運べるように、大型一輪車を用意したように思える。

一輪車の隣には背負子(しょいこ)が三つ並べてあった。

いまどき背負子とは実に古風なことだが、今風のバックパックとはちがって、背負子ならかさばる物もくくりつけて持ち運べる。一輪車と背負子がいっしょに並べて置いてあるということは、背負子も強奪品を運び出すのに利用したのかもしれない。オーロラライトは落とすと壊れる恐れがあり、一輪車は安定性に欠けるから、ライトは背負子にくくりつけて背負って運んだのだろうか。

背負子もひとつだけ特大サイズになっている。やはりこれもマハラ専用にちがいなかった。

鎖場を登り詰めるとひとつ上のフロアに出た。平坦な通路と合流している。その通路に大穴があいていた。絶壁に穴が掘られている。しかし、すぐに行き止まりとなっていた。奥に大きな岩が見える。どうやら岩に突き当たって、掘りかけで放棄したらしい。穴の中には掘り出した土石が山と積まれている。

「脱出路を掘ろうとして失敗しましたの。ここだけではなくて、ほかにもありますわ。もしものときに逃げ込まないようにしなさい。どれも行き止まりでしてよ」

「脱出路は全滅か？」
「いいえ。ひとつだけ延びておりますわ。ですからいま、モグラコオロギたちに総出で掘らせていますの。仮に外につながらなかったとしても、そこが最後の拠り所ですものね。シロアリたちの卵や幼虫を最優先で避難させているところでしてよ。……ほら、ご覧なさい」
言った端から、シロアリがやってきた。生白い働きアリが口に幼虫をくわえて、目の前を通り過ぎてゆく。
幼虫は体が小さいだけで、見た目は成虫と変わらなかった。蛹（さなぎ）にならずに、幼虫がそのまま大きくなって成虫となることを不完全変態という。見た目は変わらなくても幼虫はやはり幼いようで、大人のシロアリにくわえられるのがいやなのか、じたばたともがいていた。一方の成虫は、非常事態をわきまえているらしく、そそくさと足早に去っていった。
働きアリに続いて、今度は兵隊アリがやってきた。よろめくように歩いている。どうやら深手を負ったようだ。ハサミのように突き出している大顎（おおあご）が、片方折れている。頭には大きな穴があいている。

兵隊アリの頭部は茶色くて硬い。その硬い頭部を盾として、兵隊アリは自分の頭で出入り口をふさぐ。当然、スズメバチの攻撃を頭で受け止めることになる。

兵隊アリは重傷だった。黒く太い大顎（おおあご）をスズメバチに咬み折られただけでなく、硬い頭部にまで穴をあけられていた。茶色い頭にあいた穴から、白い身がのぞいている。出血はなくても、凄惨な光景だった。

「そういえば、左平次（さへいじ）は無事かしら？」

「左平次？」

「地ノ塔のそばに、傷を負ったモグラコオロギがいたでしょう？」

「ああ、それなら残念だが……」

「……そう。左平次、わたくしたちに急を知らせようとして、命を落としてしまったのね」

さみしげな背中を見せて、ルビーローズは再び歩き始めた。

りぶたんはあとに続いた。モンスターに名前をつけることに抵抗はなかった。りぶたん自身、チョコたんだとか、クーたんだとか、名前をつけてかわいがっている。しかしながら、左平次という古めかしいネーミ

ングセンスには正直言って違和感を覚えた。聖母ルビーローズのイメージにそぐわない。命名したのがルビーローズだとは限らないが、マハラたちに姐御と呼ばれるリヴリーなら、なんとなくわかるような気がした。
「トンネルにいたスズメバチはそのままですの？」
振り返りもせずにルビーローズが聞いてきた。
「あれなら、ダークヤグラ要塞近くの出入り口から外に出したぞ。もっとも、地上を飛んで舞い戻ってきたがな」
「では、地ノ塔へと続くトンネルが群れに見つかってしまうかもしれませんわね。さっき見た感じでは、まだ群れには見つかっていないのでしょう？」
「うむ。まだだいじょうぶだ。しかし、その危険はある。そこでだ。一応、静電機雷で横穴の入り口を封鎖しておいた」
「トンネルがショップゲートまで延びていることは、もうご存じですわよね？」
「やはり、そうか。まあ、予想はしていたがな」
「あら？　知らないまま、こちらに先にいらしたの？」

道がまた分岐して、絶壁側が登りになった。前よりも角度が急だ。今度はルビーローズも鎖をつかんだ。
「そっちは副保安官に任せたからな」
「それで、あなたひとりですのね。ということは、ここでなにが起きているか、あなたのほかは誰も知らないのかしら？」
「うんにゃ。横穴の入り口で助手を帰した。追っ付け、防衛隊が出張ってくるだろうよ。それまで持ちこたえるのだ。いいな、ルビーローズ」
「防衛隊ねえ……」
ルビーローズはなにか言いたそうに語尾を伸ばしたが、それには触れずに別の話を切り出した。
「助手というと、絵本ジャーナリストのぼくですわね」
「いや、あいつではない。フレイムはヒナたんにつけた。あたしが連れていたのは団丸だ」
「団丸……！」
ルビーローズは驚いたらしく、足を止めて振り返った。急斜面に置かれたはしごの上だから、振り返ってもその手はしっかりと鎖をつかんだままだ。

「そうだ。かつて世間を騒がせた、元怪盗の団丸だ。昨日、刑期を終えて地下牢獄から出てきたからな」
ルビーローズが驚くのも無理はなかった。刑期を終えたところで、元犯罪者だ。元がついているからもう犯罪者ではない、などと考える者は少ない。元犯罪者は、再犯前の犯罪者にすぎない。つまり、刑期を終えたところで、犯罪者はしょせん犯罪者なのだ。誰もが色眼鏡で見る。
それなのに、そんな元犯罪者が保安官助手に採用されて、ＬＩＳＤで働いていると聞かされたならば、耳を疑うのも当然だ。
「助手として手伝ってもらっているが、なに。奴なら心配はいらない。立派に更生しているぞ。罪を犯した理由も聞かせてもらった。このあたしが保証するから、安心しろ」
「そういうことでしたら、かまいませんわ」
足を止めて会話するふたりの横を、働きアリが追い越していった。口にくわえた幼虫は、やはりじたばたともがいていた。
「そんなことより、ここでおまえたちはなにをしてい

るのだ？」
「さあ、なにかしらね」
質問には答えずに、ルビーローズは階段を登り始めた。
「答えないつもりなら、腕ずくで聞き出すぞ」
「まあ怖い」
言葉とは裏腹に、ルビーローズは平然としている。
「おい」
りぶたんは低い声で脅した。
「そうね……」
ルビーローズは横を向くと、片目でりぶたんを見下ろした。
「！」
階段の下から、ルビーローズの目を見たりぶたんは驚いた。値踏みをするような目つきだったが、思わずゾクリとする迫力があった。別ににらまれたわけではない。深い緑色の瞳で、ただ見つめられただけだ。しかし、ルビーローズの眼光はするどく、射竦(いすく)めるような威圧感があった。
りぶたんは本能で悟った。

瞳の中に棘(とげ)が生えている――と。

聖母ルビーローズはただ者ではなかった。得体の知れないなにかを内に秘めていた。そのなにかが棘(とげ)となって瞳に現れた瞬間を、りぶたんは目撃したのだった。

ルビーローズの人となりを知っているつもりでいたが、それはとんでもない勘違いだった。上品に振る舞って猫をかぶっているだけだと、正体を見透かした気でいたが、それもまた間違いだった。

ルビーローズの底が知れない。

少なくとも、りぶたんの物差しでは測れない。

つまりそれは、ルビーローズの物差しのほうが、りぶたんのものよりもずっと長いことを意味する。経験の差からくるものだろうか。だとしたら、ルビーローズはどんな経験を積んできたというのか。

りぶたんはふと、目の前にいるアカゲパキケの人生に興味を持った。なにを見つめ、なにを聞き、なにを語って、これまで生きてきたのだろう。そして、なにをしてきたのか。

いったいどんな人生を送れば、瞳の中に棘(とげ)を生やすような女が誕生するのか。

見つめるだけで、相手の心を刺し貫く眼光。そんな強さを、自分も手に入れたいとりぶたんは思った。しかしそれは、危険な衝動だった。

確かにルビーローズは姐御だった。確かにルビーローズは姐さんだった。弟分のようにルビーローズに付き従い、強奪事件にも荷担したマハラとチャパティの気持ちが、りぶたんにも理解できた。

いつかどこかで、ふたりは見てしまったのだ。そして魅入られてしまったのだ。棘(とげ)を生やしたルビーローズの瞳に。

「上についたら、お話ししましょう。あなたなら、きっとわかってくれるはず」

ルビーローズは前を向くと、竹のはしごでできた階段を登っていった。

りぶたんはすぐには続かなかった。

制帽を脱いで、ＬＩＳＤの紋章を見つめた。濃紺の生地に金糸で、翼の生えたピグミーが刺繍されている。ＬＩＳＤの四文字もくっきりとよく見えるように縫い取られている。

――あたしはＬＩＳＤの保安官だ。

心の中で声を出して、りぶたんは自分自身に言い聞かせた。肝に銘じたのだ。
りぶたんはＬＩＳＤの保安官だ。
ドゥードゥー強奪犯に魅了されるわけにはいかなかった。

最上階に近づくにつれて、通路が混み始めた。
避難途中の働きアリで渋滞している。お役ご免となったのか、負傷した兵隊アリも列に加わっている。
どうやら、みんなして最上階を目指しているようだ。
ということは、ひとつだけ延びているという脱出路は最上階にあるのだろう。そういうことなら、攻め寄せるスズメバチを撃退するための戦闘力が最上階に集中していた理由にも合点がゆく。
シロアリで混雑しているので、前に進むのがたいへんになった。リヴリーを襲わない新種のモンスターとはいえ、近づきすぎると巨体に押しつぶされる危険がある。そうはいっても、渋滞した通路では満足に距離を置くこともできない。
やむを得ず、シロアリの脚の下をくぐり抜けること

もあった。体の脇にある脚の、真下をくぐるのだ。胴体と脚にはさまれているから、もしもシロアリが動き出したらたちまち巻き込まれてしまう。

口に卵や幼虫をくわえていても、シロアリの鼻先を横切るときは、さすがに生きた心地がしなかった。

渋滞を縫うように進んで、りぶたんとルビーローズは蟻塚の最上階にたどり着いた。

がらんとした広間だった。部屋の中央にテーブルがひとつ置いてあるだけなので、かえって広さが目につく。

椅子は三脚用意されていた。そのうちのひとつにチャパティが腰掛けている。

ちょうどお茶を飲んでいたチャパティは、ティーカップを口から離してソーサーに置くと、小さくうなずいて会釈した。赤いターバンに立てられた黒い羽根飾りが、かすかに揺れた。

お茶をすするチャパティだけを見ればほのぼのとした光景だが、広間は籠城戦の最前線だった。チャパティの正面には兵隊アリが群がっている。兵隊アリの役目は出入り口にふたをすることだから、そこに出入り

口があるのだとわかる。
そして、兵隊アリが群がっているのは一ヶ所だけではなかった。その横にも、そのまた横にも、シロアリの山ができている。
「ここがクイーン・ローズでしてよ。地底ホール全体を見渡すことのできる、展望用の広間ですの」
「展望室か。それでスズメバチが群がっているわけだな」
「そうですわね。窓代わりの出入り口が全部で五ヶ所もありますの。籠城するなら、守らずに放棄したほうが利口なのでしょうけれど、そうもいきませんわね」
ルビーローズの視線の先には、絶壁にあけられた穴があった。
モンスターがぎりぎり通れるほどの穴に、シロアリが並んでいる。渋滞は脱出路の中に原因があるらしく、白い列は遅々として進まない。
「おかけになって。お茶をお出ししますわ」
ルビーローズは椅子を指して、りぶたんに着席を勧めた。
角材に板を打ち付けただけの簡素な椅子だった。角

張った形状から、角椅子と呼ばれるタイプだ。工芸品のようなデザインセンスは一切なく、素人が日曜大工で手作りした程度の代物だった。

テーブルも椅子同様の作りだった。木枠に板切れを打ち付けて天板とし、角材をつなげて脚にしている。釘はすべて天板の上から打ち込んである。どう見ても、素人細工だ。

ちゃんとした家具をはるばる持ち込むのがたいへんなのはわかる。なにしろ、怪物密林の地下にある蟻塚の、そのまた最上階だ。

おそらくは、木材だけを運び込んでマハラかチャパティが木工細工に励んだにちがいない。作りの荒さからして、にわか大工はマハラだろうか。よく見れば板の切り口がささくれている。ノコギリで切ったあと、カンナもヤスリもかけなかったと見える。

チャパティなら、もっと丁寧に作り込むはずだ。きっちりサンディングして表面をなめらかにし、仕上げにニスくらいは塗るだろう。現に、地ノ塔の食堂付近にあけた壁の穴は、職人並みの手際で完璧に修繕している。

「どうかしら？　素朴ですてきな感じでしょう。テーブルも椅子も、わたくしが作りましたのよ」
「……」
りぶたんは返事に困った。お世辞も言えずにだまりこんだ。
しぼったタオルを鉢巻き代わりに頭に巻いて、口に釘をくわえて金づちを振るう聖母の姿は、あまり想像したくはなかった。
「粗茶ですが」
ルビーローズはへりくだって見せたが、マナーはほめられたものではなかった。というのも、お茶をいれたのはルビーローズではなくて、チャパティだった。
チャパティはやどかり亭の主だ。ルビーローズが局長を務める食糧局の、副局長でもある。フードを専門に取り扱う管理リヴともなると、自分専用の食料を用意できるらしく、お茶はチャパティのフードボックスから取り出された。
フードボックスは、リヴリーの持つ霊能力で作られている。
リヴリーには不思議な力がある。霊子を自在に操る

力だ。この世もあの世も、三千世界のすべては霊子で構成されている。霊子を元に万物を創造することを造化といい、万物を元の霊子に戻すことを霊化という。

ドゥードゥーに触れることで霊子に分解し、分解された霊子を魂魄に取り込んで宝石をこの世から消してしまうように、食料もあらかじめ霊化獲得している。食事は日に三度もあって頻繁に造化するから、霊能力でフードボックスを作って効率化してある。複雑な手順を踏まなくても、手軽にいつでもごちそうにありつけるわけだ。

そのフードボックスの中から、ティーカップとソーサーが出てきた。飲み物は初めから注がれており、湯気が立っている。

「のんきに茶など飲んでいる場合か」

りぶたんは断った。

目の前には五ヶ所も出入り口があって、攻防戦が繰り広げられている。たったひとつの脱出路は渋滞しており、避難はまったく進んでいない。茶をすすってくつろぐ気にはとてもなれなかった。

「いいから座ってお飲みなさい。このお茶は、ツマグ

ロヒョウモンの幼虫を乾燥粉末にして煎(せん)じた霊茶(れいちゃ)ですのよ。ほんのちょっぴりですけれど、霊力を回復する効能がありますわ。あなた、けっこう大技を使って消耗しているでしょう。保安官」

チャパティはルビーローズにも茶を出した。エプロン姿のハナマキが給仕をすると、ウェイターにしか見えなかった。

ルビーローズは給仕されるのが当然とばかりに、礼も言わずにカップを手に取り、口をつけた。聖母や女神というよりも、なにやら女王のような風格が漂っている。広間の名称がクイーン・ローズというのも、ににやらうなずける話だった。

「おいら、穴の中を見てくるです」

チャパティは自分が使っていたティーセットをフードボックスにしまった。テーブルを片付けるその姿は、やっぱりウェイターのようだった。

「あら、そう？　でしたら、マッハにもお茶を差し入れてあげてね」

「渋滞もなんとかしてみるです」

「お願いね」

鼻の長いウェイターは、てくてくと緊張感のない足取りでお茶の出前に向かった。
眠たげな目つきで物静かに話されると気が弱そうに見えるが、チャパティはお茶会の暗殺者との異名を持つリヴリーだった。実際には誰も殺していないが、モンスターに一撃でフルダメージを与えるほどの手練(てだ)れである。
見た目にそぐわない戦闘能力を持つという点で、ルビーローズに勝るとも劣らない管理リヴだった。
「マハラは穴の中か？」
りぶたんはテーブルについた。
消耗した霊力を多少なりとも回復できるのであれば、否(いな)やはない。それに、かれこれ六時間は籠城しているだけあって、ルビーローズ一味には余裕もあるようだ。あわてるほど緊迫(きんぱく)した戦況ではないと見える。
「ええ、そうですの。モグラコオロギたちの指揮を執っておりますわ。マッハに任せると、掘り進める速さが全然ちがうから不思議ね。その代わり、まっすぐ前にしか進みませんけれども」
「いけいけどんどん、か」

慎重に測量するチャパティを尻目に、マハラがいけいけどんどんでモグラコオロギにトンネルを掘らせていると団丸は見立てたが、どうやら的中していたらしい。そして、穴の中にいたから、マハラは城の防衛に大技を繰り出すこともなかったわけだ。

「では、いただこう」

りぶたんはティーカップを手に取った。陶製のカップだった。白地に青い染め付けが鮮やかだ。

陶器を焼くときに、酸化コバルトを含んだ顔料で下絵を描くと、青い色が出る。

白地のソーサーは外周部分がミッドナイトブルーに彩られていた。暗い青は深みがあって、地色がより輝いて見える。

同じく白地のカップには、やどかり亭のトレードマークであるハーミット・クラブが描かれていた。図案化されたヤドカリが、カップの内と外でスレートブルーに染まっている。紫がかった青い色をしたハーミット・クラブは高貴な紋章のようだ。

りぶたんの体色はひと言でいえば青紫だが、スレートブルーよりもちょっぴり淡いミディアムスレートブ

ルーが基本色になっている。手にしたティーセットはスレートブルーにミッドナイトブルーだから、まるであつらえたようにりぶたんにぴったりの色合いだった。

「わたくし、この地底ホールにね……」

話を切り出したところで、ルビーローズはひと口お茶をすすった。

つられて、りぶたんもカップに口をつけた。

ツマグロヒョウモンの霊茶は、においも味も紅茶のようだった。見た目もそっくりだ。紅く、茶色く、澄んでいる。砂糖などは添加されておらず、ほどよい渋味がある。

「賭場(とば)を開こうと思いますの」

「ぶふっ」

りぶたんは思わずむせた。あまりに唐突な告白だった。

賭場とは博打(ばくち)をする所だ。つまり、ギャンブル場である。聖母と慕われるルビーローズが、暗い地底に賭場を開いて自ら胴元となり、博打で荒稼ぎを企んでいるなどと、なにかの聞き間違いとしか思えなかった。

ルビーローズの話は続いた。

とんでもないその内容に、りぶたんはティーカップを持ったまま、お茶を飲むのも忘れて聞き入った。

モンスターとリヴリーの争いは絶えない。

見つけ出されて狩られるモンスターがいる。逆襲されて命を落とすリヴリーがいる。

死ぬのは決まってリヴリーだ。モンスターはリヴリーを殺せるが、リヴリーはモンスターを殺せない。少なくとも、技では殺すことができない。

殺せない相手とわかっていて、ハンターは今日もモンスターを倒しにゆく。

その一方で、モンスターを愛護するリヴリーもいる。

攻撃能力のないモンスターをかわいがり、ペットとして飼いたいと願う。せめて気分だけでも味わおうと、モンスターに変身したりもする。攻撃能力があっても敬愛の対象となりうる。数多(あまた)のリヴリーを屠(ほふ)ってきた凶悪なモンスターのファンも少なくはない。

中には、怪物情報交換掲示板をのぞいて狩り場に乱入し、ハンティングを妨害するリヴリーもいる。荒らしと罵(ののし)られても、自身の正義を信じて疑わず、抵抗

し続ける。結果、モンスターそっちのけでリヴリー同士の戦いが始まることもある。
争いはなくならない。絶対に。
なぜなら、この世は地獄だからだ。
あの世に行けば、天国はあるのかもしれない。だが地獄なら、わざわざあの世まで探しに行く必要はない。この世にいくらでもある。
この世は殺しの世界である。
生きるためには殺さなければならない。殺して食わねばならない。
それは当然のことだから、殺して食らう者はなにも感じない。しかしながら、もしも自分が殺されて食われるのであれば、この世の悲惨な現実を思い知ることだろう。
なにも食い殺されるために生まれてきたのではない。そんなことなら、いっそ生まれてこないほうがよかった、と。
肉食だからいけないのだ、草食になれば世界は平和になると、思い違いをする者もいる。殺して食らう者の常として、草を食(は)みながらも自分が命を貪(むさぼ)ってい

る事実に気づかない。
植物も生きている。命が宿っている。足がないから逃げ出せないだけ。声が出ないから悲鳴を上げないだけ。目がないから涙を流せないだけ。
しかし、まったくなにもできないわけではない。植物だって身を守るために武装する。
身近な食べ物であるジャガイモも、芽に毒があるのはよく知られた話だ。ソラニンという名のこの物質を摂取して中毒を起こすと、ときに命を落とすこともある。
きれいな花には棘(とげ)があるというが、棘(とげ)はなくても毒がある。水仙に水芭蕉。スズランもパンジーも。シクラメンだってクレマチスだって。どれも有毒植物だ。
別にこれらの植物だけが特殊なのではない。ほかにも、多くの草木が毒を持つ。食い殺されないように。食った者が苦しむように。食った者が絶命するように。毒を持つ。
動物がいなくなって植物だけの世界となっても、殺しはなくならない。
よりたくさんの日光を浴びることができるようにと、

草木は競って葉を広げる。争いに敗れたならば、葉陰で萎(しお)れて死んでゆく。

争いに勝って高く大きく成長しても、安心はできない。日の当たる樹上に根付く植物がある。着生(ちゃくせい)植物という。初めから木の上で発芽して、それから地面に根を下ろす。元からそこにいた木を根で覆うと、絞め殺して枯らしてしまい、その木が支配していた空間をそっくり乗っ取る。

動物の世界も、植物の世界も、殺し殺されることが前提となっている。

なればこそ、この世は地獄なのだ。

地獄には地獄の流儀がある。天国を夢見るのは自由だが、地獄の住人であるという現実から目を背けてはならない。

争いごとをやめましょうというのは天国の理屈だ。きれいごとを抜かせばさぞかし心地よいだろうが、生きるためにシマミミズを食い殺し、血塗られた唇でなにをほざこうとも、偽善者のたわごとでしかない。

そのシマミミズに平和を訴えられたらどうするのか。争いごとをやめましょう、もう食べないでください、

お願いだから殺さないでと哀願されて、貸す耳はあるのか。

耳を貸せば餓死が待つ。

争わないということはそういうことだ。究極的には、死を意味する。死んでしまえばもう、誰と争うこともない。

だが、死ねない。死ぬわけにはいかない。ひとたびこの世に生を享(う)けたからには、天寿を全(まっと)うするその日まで、石にかじりついてでも生き抜かねばならぬ。

腹が減ったら食う。生き物を喰らい殺す。命を貪る。それがこの世という名の、地獄の掟。

ゆえに、争いはなくならない。この世では、地獄では、争うことが正しいのだから。

しかし、本当だろうか。

本当に、争うことが正しいのだろうか。

生きるためには食べる必要があり、争わざるを得ない。

では、食べない争いはどうなる。食べる必要がないのに、そこでも、ここでも、いつでも誰かが争っている。

いったいなぜ、リヴリーとモンスターは争うのだろうか。

リヴリーはモンスターを食べない。モンスターもリヴリーを食べない。ならば争う必要がどこにある。

そもそも、この世は本当に地獄なのか。仮に地獄だとして、地獄のままでいいのか。確かに天国に変えることは、できはしない。だが、似せることならできなくもない。たとえ偽りの天国であろうとも、真の地獄よりは救いがありはしないか。

世の中には偽善者がいる。世間にいい顔をしようと、金満家（きんまんか）が貧者（ひんじゃ）に施（ほどこ）しをして得意気になる。

醜い行為だ。偽りの善意で徳は積めない。善行（ぜんこう）は購（あがな）えない。

ところがだ。

偽善の喜捨（きしゃ）でも金は金。偽りの善意であっても貧者は助かるのだ。

なにもしない善人よりも、行動する偽善者のほうが世のために尽くしている。

ならば行動しようではないか。善人でなくてもいい。偽善者でいい。悪党と呼ばれてもかまいはしない。

いや、むしろ。
地獄のこの世では、悪こそ正義――！
「そう達観(たっかん)してしまえば、ドゥードゥー強奪犯の悪名も、逆に誇らしく思えましてよ」
カップに残っていたお茶を、ルビーローズは飲み干した。
「いやはやなんとも。とんでもない理屈があったものだ。盗人にも三分の理というやつか」
りぶたんはカップをソーサーに戻した。
お茶を注いだだけのティーカップがことのほか重かった。
「明かりが欲しくて盗みを働いたのはわかっている。その明かりはこの城を照らすために必要だった。そして城を石英で造らせたのは、城全体を光らせて地底ホールの照明とするためだな。しかし、明るくしたかったのは賭場を開くためだと？　ふざけるな。だいたい、リヴリーとモンスターの争う話が、博打にどうつながるというのだ。どっちが勝つか、賭けるとでも……」
そこまで話して、りぶたんは急にだまった。
賭けるのだ。ギャンブルは賭け事。リヴリーとモン

スターが戦って、いったいどちらが勝つのか、それを賭けて楽しむのだ。
「いいえ。ちがいます」
ルビーローズはきっぱりと否定した。
「リヴリーとモンスターは戦いません。それではリヴリーに死人が出ますわ。食べないのだから、殺さない。殺さないのだから、争わない。でも、この世はしょせん生き地獄。天国でもないのに、天国のように絶対に争わない世界なんて、望んでも無理ですわね。ですから、争いを認めますの」
「認めるだと？　おまえの話は、争わないようにする話ではなかったのか。あたしにはそう聞こえていたがな」
「もちろん、そうですわ。争わないようにするために、争いますのよ」
「……」
りぶたんは眉間（みけん）にしわを寄せた。いったいなにを言っているのかと思った。
「モンスター・スカーミッシュ。わたくし、そのように名付けることにしました」

ルビーローズは席を立った。
散策するように周囲を歩きながら、話を続けた。

スカーミッシュとは小競り合いという意味だ。
つまり、モンスター・スカーミッシュはモンスターによる小規模戦闘ということになる。
早い話が、格闘技だった。
致命傷を受けないようにモンスターに防具を着け、戦わせる。どこにどんな防具を着けるのか、そしてどう戦うのか、指揮はリヴリーが執る。これをモンスター・コマンダーと呼ぶ。戦うほうはモンスター・ソルジャーだ。
モンスターの対戦相手はモンスターであり、リヴリーが戦うのは相手ソルジャーを指揮するコマンダーとなる。モンスターとリヴリーが組んで、それぞれ肉弾戦と頭脳戦を行うわけだ。
争わないようにするためには、争わなければならない。
リヴリーには闘争心がある。すべてのリヴリーがそうだとは言わないが、少なくともハンターにはある。

一方、モンスターには闘争本能がある。出会っただけでリヴリーに襲いかかり、一発もらっただけで執拗に反撃する。

ハンターは戦いを楽しんでいる。戦うことで満足を得ている。パークに居座って移動しないモンスターも、結局は戦いを楽しんでいると言えるかもしれない。

なにごとも、満足すれば快感を覚える。気持ちがいいから楽しむのだ。脳内で麻薬のような物質が分泌され、快楽の虜（とりこ）となる。

悪いことはいけませんと戦いを禁止することはたやすいが、禁止したところで守られはしない。脳内麻薬を求めて、ハンターは戦うことをやめはしない。

そこで、モンスター・スカーミッシュの出番となる。

代償行動という言葉がある。目的を果たせなくなったときに、よく似たなにかを新しい目的に据えて、それを果たすことで満足しようとすることをいう。

たとえば、フィットネスのために山歩きをするつもりだったのに、あいにくの大雨で断念し、代わりに屋内プールで泳ぐというのも代償行動となる。山で運動できないから、プールで運動して満足するわけだ。

リヴリーとモンスターが繰り広げる無益な実戦をやめさせる代わりに、代償行動として、モンスター・スカーミッシュを催す。ルールに則った格闘技で戦わせて、そこに満足感を見いだしてもらう。

戦闘のスポーツ化である。

もちろん、ファイトマネーが出る。金額は勝敗によって増減する。

金が動けば、それは立派な経済活動だ。さらに推し進めて、ハンターだけでなく、豪商などの富裕層も引き込む。モンスター・オーナーの誕生だ。

モンスターの保有には、高額の保有権料を設定する。ただし、株式化して流動性を確保しておく。全権オーナーになりたければ、全株を取得すればいい。資金に乏しいなら、小口で株を買って株主のひとりになればいい。

モンスター株を持っていれば、ファイトマネーから配当が出る。株が値上がりしたなら売ってもいい。株の売買だけで財を成すことも可能だ。

全権オーナーや、株の過半数を取得した株主はモンスター・ブリーダーになることもできる。自分が保有

するモンスターと同種のモンスターを掛け合わせて、より強いモンスターを作出（さくしゅつ）するのだ。誕生したモンスターは競りにかけたりして市場で売却してもいいし、そのまま自分で保有してもかまわない。

金持ちは体を動かして労働することを厭（いと）うだろう。モンスターを鍛えるのは面倒だ。また、そういった能力があるとは限らない。そこでモンスター・トレーナーが登場する。モンスターを預かって鍛え上げる専門職だ。

か弱いモンスターを格安で購入して全権オーナーとなり、名ばかりのトレーナーも兼ねれば、モンスターをペットとして飼うことが可能になる。あくまでも繁殖用ということにしておいて、スカーミッシュに参戦させなければいい。

そして、試合の日がやってくる。腕に覚えのあるオーナーは自分自身がコマンダーを務めるだろう。自信がないなら、腕の立つコマンダーと契約することになる。つまり、モンスターを保有できるほどの財力がなくても、腕さえよければ試合に出て稼ぐことができる。

修行中の無名コマンダーにはレンタル・モンスター

を貸し出す。レンタルされるくらいだから決して強くはないモンスターだが、腕を磨いて勝ち抜き、名をあげれば、強いモンスターを保有するオーナーから声がかかるようにもなる。

試合は個人戦と団体戦を用意する。

個人戦は一対一、団体戦は三対三の戦いだ。団体戦といっても、コマンダーが三人集まる必要はない。ひとりで三匹のモンスターを指揮するのだ。団体戦も、試合そのものは一対一で行われる。三匹のモンスター・ソルジャーを先鋒・中堅・大将にわけ、順番に出場させる。そうなるとモンスターを出す順番も勝敗の鍵を握ることになり、予想が難しくなる。

そう、予想である。

せっかくの試合に金を賭けない手はない。ギャンブル化して、より多くのリヴリーが楽しめるようにするのだ。

ハンターはモンスターを倒してドゥードゥーを獲得することも目的とする。危険な戦闘には参加せずに、ちゃっかりドゥードゥーだけを掠(かす)め取る輩も多い。戦闘はしないが、お宝はいただくというのだから、せめ

て自腹を切って賭けてもらおう。
モンスター・オーナー。
モンスター・ブリーダー。
モンスター・トレーナー。
モンスター・コマンダー。
それに、ギャンブラー。
モンスター・スカーミッシュの開催で雇用が生まれ、金は動き、経済は活性化する。課税すれば税収も見込める。なによりも、戦闘をスポーツ化したために実戦がなくなる。モンスターに殺されるリヴリーはいなくなる。
すなわち、リヴリーとモンスターが相争(あいあらそ)うことなく、共存共栄する社会が誕生するのだ。
「これがわたくしの考えた、アンダー・ザ・ローズ計画ですわ！」
ルビーローズは両手を広げて天を仰いだ。
りぶたんに背中を向けているので顔は見えない。雰囲気から察するに、目を閉じて陶然(とうぜん)としているようだ。
きっとルビーローズには見えているのだろう。ネオンサインがきらめく地底ホールで熱狂するリヴリーた

ちの姿が。スポーツや賭け事に夢中となって、殺しあいを忘れてしまったリヴリーたちの姿が。強いモンスターはリヴリーたちのヒーローだ。もう誰も、憎んだりはしない。

「……」

りぶたんは無言だった。

なにも言わずに、お茶を飲んだ。

アンダー・ザ・ローズ計画。秘密の計画。

秘密もなにもあったものではない。熱く語るルビーローズに思わず引き込まれてしまったが、計画は妄想にすぎなかった。実現不可能だ。

まず第一に、どうやってモンスターを飼い慣らすのか。なるほど、モグラコオロギやシロアリならば飼い慣らせるだろう。だが、スズメバチは？　ジョロウグモは？　オオカマキリはどうする？　あのローズウッドを飼い慣らせるものか。

次に、秘密の計画でどうやって参加者を集めるのか。声を潜めて募ったのでは誰も来ない。宣伝すれば露見する。博打は御法度だ。ギャンブルそのものは、金を賭けたただのゲームでしかない。だが、自分を律する

ことのできない者がギャンブル中毒を起こして賭け事に依存し、身を滅ぼしてしまうために禁止となっている。大々的に賭場を開くなど、寝言もいいところだ。

そして最後に、どのようにして捕縛を逃れるつもりなのか。ルビーローズはドゥードゥー強奪犯である。犯人一味の首謀者だ。罪は重い。保安官を前にして逮捕もされずにのうのうとしていられるのは、籠城戦の真っ最中という非常事態だからだ。言うなれば、戦時特例である。逮捕を猶予(ゆうよ)されただけのことであり、赦(しゃ)免(めん)されたわけではない。

天国を夢見るなといいながら、ルビーローズ自身は夢を見ている。

地獄の現実を直視しろといいながら、ルビーローズ自身は目を閉じている。

目を開ければ、たちまち夢から覚めるはずだ。ルビーローズの目の前で、兵隊アリが出入り口を守っている。蟻塚の外にはスズメバチの大群がいる。

みんなでスポーツをしているのではない。これは戦争だ。殺しあいをしている。

「！」

お茶を飲むりぶたんの目が、ティーカップの模様に吸い寄せられた。
カップにはハーミット・クラブが描かれている。やどかり亭のトレードマークだ。
ルビーローズ一味にはチャパティがいるではないか。おっとりしているように見えても、頭は切れるし、知恵もある。そのチャパティが、アンダー・ザ・ローズ計画のほころびに気づかないわけがない。
ルビーローズが自分の考えに陶酔し、マハラが闇雲に突っ走っても、チャパティが帳尻を合わせる。地ノ塔の食堂付近にあけた壁の穴はきちんと修繕されている。地底トンネルはしっかりと目的地にたどり着いている。光る城は後々の照明まで考慮して建築されている。
一味の役割分担は明確だ。計画し、指示をするのはルビーローズ。調達し、推進するのはマハラ。修正し、補佐をするのがチャパティだ。
ということは、三つのほころびにはすでに修正案が用意されているにちがいなかった。どんな案かはわからないが、予想することはできる。

モグラコオロギもシロアリもリヴリーを襲わないのだから、その理由さえ解明できれば、凶暴なモンスターにも応用できるのかもしれない。

ギャンブルは解禁してしまえば、違法ではなくなる。

アンダー・ザ・ローズ計画が管理リヴ委員会に承認されたならば、ドゥードゥー強奪事件は勇み足ということで不問に付されるだろう。

もしも予想どおりなら、ほころびは繕われて、ルビーローズの計画は動き出す。いや、すでにもう見切り発車で動き出している。

ルビーローズはルビーローズなりに答えを出して、目的に向かって邁進(まいしん)している。それは奇(く)しくも、りぶたんと同じ目的だった。

リヴリーとモンスターが相争うことなく、共存共栄する社会。

りぶたんにはルビーローズほどに明確なビジョンはなかった。ヒナタにもない。あれば、とっくの昔にりぶたんと話し合っている。りぶたんとヒナタはとりあえず、なにをするにも力が必要と考えて、防衛隊に入隊して戦闘力を磨いただけ。そして、戦う力だけが力

ではないと気づき、権力を求めてＬＩＳＤを手に入れただけ。

そこから先をどう進むかは、いまだ霧の中だった。

２

シロアリが悲鳴を上げた。

兵隊アリがギィと叫んだ。

叫んで、消えた。出入り口の外に引きずり出されたのだった。

ぽっかりあいた穴からスズメバチが顔をのぞかせた。いやらしい目つきでアカゲパキケを見て、ミミマキムクネを見た。表情はなにも変わらないが、舌なめずりするような感じだった。

右端の出入り口でも悲鳴が上がった。白い巨体が吸い出されるように消えた。

左端でも起こった。五ヶ所もある出入り口で、兵隊アリが次々と外に引きずり出されていった。

「保安官！　手を貸しなさい！」

ルビーローズは中央の出入り口前に仁王立ちとなっ

た。
「おうっ！」
ひと声吼(ほ)えてから、りぶたんはティーカップに残っていたお茶をあおった。
「敵は戦法を変えてきましたわ！　押すのではなく、引いています！　反撃して数を減らすのよ！　援護をお願い！」
「任せろ！」
りぶたんはルビーローズのそばに駆け寄った。
自分が保安官だからと、指揮権を主張するような愚かなことはしなかった。ルビーローズの勢いを削(そ)ぐことなく、すんなりと従った。ここはルビーローズの城だ。出入り口を守っているのはルビーローズの配下だ。指揮を執るのに最適任なのは誰か、考えるまでもなかった。
「お下がり！」
ルビーローズは兵隊アリに命令した。
同時に、右足を前に出して半身(はんみ)に構えた。左腕は肘を突き出すようにして後ろに引いて、握った拳を腰に当てている。指先まで伸ばした右腕はV字(ブイ)に曲げ、体

の正面で盾のようにしている。
ただの盾ではなかった。肘から先に風が巻き付いている。
りぶたんは右腕を伸ばした。伸ばした右腕に左手を添えた。六つの石がうなりを上げて回転する。ガトリング・スリングだった。ショットガンではない。散弾を使うと、シロアリに当ててしまう恐れがある。通常弾ならその心配はいらない。
それに防御範囲は出入り口の大きさに限定される上、ガトリング銃で連射するのだから通常弾でも不足はなかった。
「ローズ・ストーム！」
シロアリが下がるタイミングに合わせて、ルビーローズは薔薇の竜巻を放った。V字に構えていた腕をまっすぐ伸ばして出入り口に突きつけた。
腕に巻き付いていた風が大きさを増しながら飛んでいった。
シロアリが下がったのでスズメバチは我先に乱入しようとしたが、真正面から薔薇の竜巻を食らって吹き飛ばされた。

放たれた竜巻は蟻塚の外で巨大化し、宙を飛ぶスズメバチを呑み込んだ。しかし、呑み込まれたのは進路上の敵だけだ。蟻塚にはスズメバチが群がっている。出入り口の前におらず、壁に張り付いている者には、なんの影響もなかった。

邪魔だった味方が消えたので、周囲にいたスズメバチが出入り口に押し寄せた。

りぶたんはそれを迎え撃った。ガトリング銃をうならせて、一匹たりとも侵入は許さなかった。

「お戻り！」

女神の命令を受け、下がったシロアリが出入り口に突進した。大顎（おおあご）で敵を突き飛ばした。撃たれたダメージで身動きできないでいるスズメバチは簡単に排除されて、出入り口の外へと押し戻された。

「さすがですわね、保安官。みごとな援護ですこと」

少し余裕を取り戻したのか、ルビーローズの口調が和（やわ）らいだ。

「任せろと言った。だが、安心するのはまだ早い。次に取りかかるぞ」

言葉を交わす間にも、右横の出入り口でシロアリが

引きずり出された。中央の敵を撃っても、出入り口はほかに四ヶ所もある。そして、敵の数を減らしたところで、すぐに埋まってしまう。
「でも、わたくし――」
「わかっている」
りぶたんはルビーローズに最後まで言わせなかった。
「ローズ・ストームは連発しようにも、待機時間が長いのだろう。だから、その間はあたしが攻撃する。レールガン・スリングで追い払うのだ。あれは連射が利くからな」
「そうね。そうしてくださる？」
「次は右だ。右端まで行ったら、そこは捕縛ネットでふさぐ。浮いた戦力はほかの出入り口に回せ。いいな」
「了解したわ」
今度はルビーローズがりぶたんに従った。
互いに我を張ろうとはしないので、ぶっつけ本番のタッグでも連携に不安はなかった。
ルビーローズの命令で、中央右の出入り口を守る兵隊アリが下がった。りぶたんはレールガン・スリング

で砲撃した。砲弾には榴弾を選択した。乱入しようとするスズメバチに応じて、轟音が三度響き渡った。
レールガン・スリングも、壁に張り付いていて出入り口の前にいないスズメバチには効果がない。周囲のスズメバチがすぐに入り込もうとしてくる。そのままレールガンで撃ち払ってもいいのだが、それではほかの出入り口の始末に取りかかれない。
三度砲撃したあと、りぶたんはガトリング銃に切り替えた。押し入ろうとするスズメバチをその場に釘付けにして、ルビーローズがシロアリにふたをさせた。
右端の出入り口もりぶたんが担当した。砲撃し、銃撃し、捕縛ネットでふたをした。六つの楔が石英の結晶にがっちりと食い込んだ。そうそう簡単には抜けないだろう。網を咬み破られない限り、ネットは持ちそうだ。
右端を守っていたシロアリは、ルビーローズが分散させてほかの四ヶ所に回した。兵隊アリを引きずり出されて薄くなった守りも、厚みが戻った。
「おまえ……」
りぶたんをそっと押しのける者がいた。

一匹の兵隊アリが捕縛ネットの守りに志願してきた。ハサミのように突き出した大顎(おおあご)を、片方咬み折られた兵隊アリだった。頭には穴があいている。

それは、ずっと下の階ですれ違った兵隊アリだった。傷口を見ればわかる。

重傷を負ってお役ご免となり、よろめく足取りで避難しようと脱出路を目指し、最上階までようやくたどり着いたところで巣の危機を知って、傷ついた己(おの)が身も顧みず、戦線復帰を決意したのだ。

武器となる大顎(おおあご)が片方しかなくとも。盾となる頭部に穴があいていようとも。捕縛ネットの守りならできるぞ、と。

兵隊アリはもう一度、首を振るようにして頭でそっと、りぶたんを押しのけた。触角でミミマキムクネの胸をつついた。ここは任せろ。そう言っているようだった。

モンスターと会話はできない。表情もわからない。シロアリには目がないから、目を見て判断することもできない。けれども、傷ついた兵隊アリの思いはりぶたんにしっかりと届いた。

「いいだろう。おまえに任せよう」
りぶたんは兵隊アリに声をかけた。
捕縛ネットで負担が減り、守る出入り口は四ヶ所となった。
「今度はわたくしが」
左端の出入り口でルビーローズが構えた。
「よし」
ガトリング銃を床に向け、りぶたんは左端へと走った。
「お下がり！　ああっ」
命令を下すと同時に、ルビーローズが声を漏らした。敵の圧力を下げて間もない中央出入り口で、一気に三匹のシロアリが引っこ抜かれたのだった。
「ちぃ！」
りぶたんは両腕をガトリング銃に変えると天井に向け、その場で足を止めた。ちょうど中央出入り口と左端出入り口の中間だった。正面には別の出入り口がある。そこでもシロアリが引きずり出されてゆく。
一気に三匹も抜き取られた中央出入り口は守備がスカスカになってしまった。予備の戦力が即座に穴を埋

めにかかったものの、攻め寄せるスズメバチがひと足先に頭をねじ込んでいる。これでは守備ラインがそろわない。なんとか押し戻せたなら問題はないが、失敗すればラインは崩壊する。

侵入しかけの敵モンスターは、ひとまず撃ち払うべきだとりぶたんは判断した。

「真ん中も下げろ！　そっちと両方みる！」

りぶたんは両腕のガトリング銃をそれぞれ右と左に向けた。

「ローズ・ストーム！」

左端のシロアリはすでに後退を始めている。ルビーローズは先に技を放った。

後退したシロアリがルビーローズとりぶたんの間に割り込んだ。りぶたんの射線がふさがれた。シロアリの巨体が邪魔をして、左端出入り口の援護ができない。

「ええいっ」

りぶたんは割り込んだシロアリに走り寄ると、そのままの勢いで白い体を駆け上がった。ジャンプをしてシロアリの脚を踏み台にし、背中の上に飛び乗った。丸みのある背中でバランスを崩さないように、足で立

たずに尻で座り、馬乗りになった。
シロアリの背中に飛び乗ってみれば、左端出入り口はいままさに突破されようとしていた。薔薇の竜巻が吹き抜けていった間隙を突いて、スズメバチが胸まで入り込んでいる。
りぶたんは両腕を向けて、二丁ガトリング銃を乱射した。
一方、中央出入り口ではさらにもう一匹が悲鳴を残して引きずり出されていった。劣勢は明らかだ。頭をねじ込んだスズメバチの前脚が、広間の中に入り込んでいる。床に鉤爪を立てて、体を引っ張り込もうとしている。スカスカの守備は押され気味で、ラインは崩壊寸前だ。
しかし、援護はできなかった。銃撃すればシロアリを撃つことになる。シロアリを撃ってしまえば、その瞬間に出入り口は突破される。
「お戻り！」
ルビーローズは左端出入り口をふさぎにかかった。割り込んだシロアリの体が邪魔をして、守備が崩壊しかかっている中央出入り口は目に入っていない。

「だいじょうぶ！　おいらが！」
赤いターバンのウェイターが駆け戻ってきた。
ハナマキが長い鼻を中央出入り口のスズメバチに向けた。
スズメバチは広間に中脚（なかあし）まで差し入れている。出入り口を突破しようとしている。まわりにはシロアリがいるから、下手に攻撃すると同士討ちとなる。
「フッ」
チャパティは鼻から大きく息を吐いた。一瞬、鼻がふくらんだ。しぼんだときには、鼻の穴からなにかが飛んでいった。
飛んでいったものは、吹き矢だった。
スズメバチの顔面に吹き矢が刺さった。細長い円錐形をした黒塗りの矢だ。それが同時に二本刺さった。ダメージを受けて動きが止まったスズメバチは、次の瞬間にはその場にくずおれた。吹き矢には即効性のある麻酔薬が仕込まれていた。
チャパティの専用攻撃技は「深い眠りの吹き矢」といった。呪文は短く、ブローのひと言だ。
吹き矢も麻酔薬もリヴリーの霊能力で作られている

のだが、チャパティの専用攻撃技にはほかと大きく異なる点があった。自分の鼻息で矢を吹き放つのだ。
自力で発射するから霊力の消耗は抑えられる。しかし、鼻から息を吐きながら声を出すことは難しいので、呪文は念じるしかない。息を吐いてばかりいると、のどが渇く。そこでお茶を飲んでのどを潤(うるお)す。
茶をすすりながら無言で攻撃し、モンスターが相手でも一撃でフルダメージを与えるから、ついたあだ名がお茶会の暗殺者なのだった。
チャパティは続けて矢を吹いた。細長い矢は、まわりにシロアリがいてもお構いなしに、スズメバチだけを確実に仕留めていった。
チャパティの援護で崩壊(ほうかい)寸前だった守備ラインが持ち直した。麻酔で動けなくなったスズメバチを押し出して、シロアリは中央出入り口にふたをした。
「なんでえ、なんでえ。ずいぶんとやばい状況じゃねえか」
ふてぶてしい声が聞こえてきた。
「おっ、どすこい娘が兵隊アリに馬乗りになってやがらぁ」

巨漢のシマオーガがのっそりと歩いて登場した。
マハラだった。ルビーローズと同じ制帽をかぶり、同じ腕章をつけている。それでいて肩口には、やどかり亭のトレードマークであるハーミット・クラブのタトゥーがある。
「まあ、なんだ。そこで高みの見物でもしといてくんな。俺様が来たからにゃあ、もう心配はいらねえってもんだ」
マハラはそのままずかずかと進んで、中央左出入り口の前で立ち止まった。右にはチャパティ、左にはりぶたんがいる。りぶたんを乗せたシロアリは出入り口をふさぐために前進したから、左端のルビーローズも姿が見えている。
「おう、おめえら。ちぃと下がってくれや」
声をかけられたシロアリが下がった。
マハラは胸の前で両腕をクロスさせた。×(バツ)印を作った。
あいた出入り口からスズメバチが一気に雪崩(なだ)れ込もうとする。
「マッハ・ハンマー!」

クロスさせた両腕を、マハラは一気に振り下ろした。
怒鳴り声とともにハンマーが出現した。短い柄のハンマーだった。いや、柄はただの飾りにすぎなかった。
ハンマーはロケット噴射でまっすぐに飛んでいった。出入り口から侵入しようとしたスズメバチを叩いて飛ばし、宙を飛ぶスズメバチを打って落とし、そのままずっと奥まで飛んでいって、地底ホールの反対側にある壁にぶち当たった。
「マッハ！」
ルビーローズが叱責した。
「おっと、いけねえや。飛ばしすぎちまったい。壁が崩れたら困るじゃねえか」
自分のミスをマハラは豪快に笑い飛ばした。
笑い声に誘われて、スズメバチが外からのぞいた。
マハラはまたロケット噴射のハンマーを飛ばした。ルビーローズに怒られないように、さすがに今度は加減した。
「このくらいにしといてやるか。おう、おめえら。あとは頼まあ」
シロアリが出入り口にふたをした。

ローズ・ストームとレールガン・スリング、それにマッハ・ハンマーの大技で、攻め寄せるスズメバチの圧力も下がった。もちろんチャパティの技も、目立たないだけで大いに役立った。

「渋滞は解消したみたいね。脱出路はどうですの？」

ルビーローズは絶壁にあいた穴に目をやりながら質問した。

遅々として進まなかったシロアリの列は、いまはもうすいすいと穴の中に消えてゆく。そして、手ぶらの働きアリが穴から続々と出てくる。一匹入れば、一匹出てくる。進む方向がちがっても、譲り合って交互通行することで、列はよどみなく流れてゆく。

絶壁にあけられた脱出路の穴は、モンスターがぎりぎり通れる程度の大きさだった。入る者と出る者が同時に通過することはできない。渋滞の原因はそこにあったようだ。

「喜んでくんな、姐御。無事に貫通でい」

「そう、よかったですわ。それで、どこに出たのかしら？　地上は安全ですの？」

「えっ……」

マハラの声が急に小さくなった。だまりこんで返事もない。
どうやら、どこに出たのか、出た先は安全なのか、確認するのを忘れたようだ。脱出路が貫通しただけで目的を果たしたものと思い込み、意気揚々と引き上げてきたらしい。
ルビーローズ一味は蟻塚に籠城している。蟻塚は怪物密林の地中深くにある。モグラコオロギたちに総出で掘らせた脱出用のトンネルが、無事に貫通して地上に抜けても、そこは危険な怪物密林だ。スズメバチから逃れた先に、ジョロウグモが網を張っていたのでは目も当てられない。
「バカねえ！　どうして確認しなかったの！」
「……面目ねえ」
マハラはリトルを使って指先ほどに小さくなった。
本気で詫びているのか、それともふざけているのか、よくわからない。けれども、憎めない男ではあった。
ルビーローズも、それ以上は叱らなかった。
「もういいわ。それより、ほかの出入り口を見回ってらっしゃい。敵は戦法を変えましたの。兵隊アリを押

しのけるのではなくって、引きずり出していますわ。
ここはなんとか、みんなで持ちこたえましたけれど、
ほかが心配でしてよ」
「合点(がってん)でい！」
マハラは元気よくダッシュした。でも、リトルのま
まだった。走っても走っても、ちっとも前に進まない。
「じゃあ、姐さん。おいらも行って、防衛線下げてく
るです。予備の兵力、なんとか捻出(ねんしゅつ)してみるです」
「そうね。お願いね」
「おう、チャッパ！　ぬかるんじゃねえぞ！」
リトルのままでもマハラは威勢がいい。
「お先するです」
チャパティはリトル・マハラをひとまたぎにして、
とことこ駆けていった。
「こら、お茶っ葉！　ぬかすんじゃねえぞ！」
ちっこいマハラは両手を振り上げてくやしがった。
「マッハ！」
ルビーローズの雷が落ちた。
「うひー！」
マハラはラージで体を大きくしながら、走って逃げ

ていった。
「防衛線を下げるとは、スズメバチを城の中に引き込むということか」
りぶたんはシロアリの背中からすべり降りた。
「ええ、そうですわ。ふたつの出入り口がひとつの通路につながるのなら、通路を押さえることで守る場所が減るでしょう？　残念ですけれど、ほかの出入り口でも兵隊アリに犠牲が出ていると思いますの。兵力を消耗したのですから、防衛線の縮小はやむを得ませんわ」
「それはわかるが、奴らを中に入れると勢いづくぞ。通路の守りを押し切られでもしたら、どうするつもりだ」
「ご心配なく。入ってきたスズメバチで栓(せん)をしますもの。かえって守りが厚くなりましてよ」
「どういうことだ？」
「ここは怪物密林の真下ですものね。最悪の事態に備えて、壁や床の中にわたくしたちリヴリーだけが通れる抜け道を用意してありますわ。もっとも、マッハはリトルで小さくならないと通れませんけれど」

「ほう、抜け道があるのか。ということは……そうか。城の中でゲリラ戦をおっ始(ぱじ)める気だな」
「ご名答ですわ。防衛線の縮小といっても、こちらが意図的に後退するのですから、抜け道から奇襲できるように計らいますのよ。あとは――」
「お茶会の暗殺者チャパティのひとり舞台というわけか」
「ですわね」
なにもかも計画どおりと、ルビーローズはにこやかにほほえんだ。
「悪くない作戦だが、はたしてうまくいくのか」
りぶたんは顎(あご)をしゃくって、壁を見ろとうながした。
「どうかしまして？」
あたりを見回したルビーローズは、すぐには異変に気づかなかった。
出入り口はしっかり守られている。兵隊アリが群がってふたをしている。五ヶ所の出入り口は、どこも異状はない。五ヶ所の……。
「いない？」
五ヶ所の出入り口のうち、右端だけは捕縛ネットで

ふさいである。当然、網の向こうにはスズメバチがいるはずだ。網を咬み切り、押し破ろうとしているはずだ。

だが、いない。網の向こうに敵の姿はない。

脅威がなくて安全だからうっかり見落としてしまうが、寄せ手のスズメバチがいないのはおかしな話だった。

「どういうことですの？　撤退したのかしら？」

ルビーローズは網を張った出入り口まで小走りをした。

「奴らがすごすごと引き下がるものか。羽音もしっかり聞こえてくるぞ」

りぶたんも走った。

クイーン・ローズと名付けられた最上階は展望用の広間だった。窓代わりの出入り口が蟻塚の壁に大きな穴をあけている。穴から外をのぞけば、地底ホール全体を見渡すことができる。

「！」

捕縛ネットの隙間から外を眺めたルビーローズは息を呑んだ。

「これは……！」
りぶたんは思わずのけぞった。
スズメバチは撤退などしていなかった。立て続けに大技で攻撃されたせいか、蟻塚からは離れたものの、闘志満々で獲物の巣をにらんでいる。低く重い羽音を響かせて、一斉にホバリングしている。増援が大挙して押し寄せたらしく、地底ホールを埋め尽くさんばかりの数だった。
そして、群れの正面中央には、ひときわ巨大なスズメバチがいた。
暗い灰色のスズメバチだった。陰に籠もった感じで、気味が悪い。
「ブラックホークか！」
拳を握りしめて、りぶたんは叫んだ。
「なんてこと！　女王軍の狩猟部隊でしたのね！　どうりで何時間も執拗に攻めてきたわけですわ！」
ルビーローズはくやしそうに二度も床を踏みつけた。
たいていのモンスターには名前などないが、とりわけ凶暴なモンスターには名前がつけられている。女王蜂であるクインの麾下（きか）には四匹の大物が確認されてい

る。アパッチ、コブラ、ハインド、ブラックホークの四匹だ。
防衛局の観測では、アパッチは近衛部隊を、コブラは偵察部隊を、ハインドは哨戒部隊を、ブラックホークは狩猟部隊を、それぞれ率いているとされる。中でもブラックホークの狩猟部隊は、群れ全体のエサを確保するために女王軍随一の兵員数だという。
つまり、蟻塚を攻め落とそうと六時間以上も攻撃してきたのは、ただのスズメバチの群れではなかったのだ。モンスター界最強を誇る女王軍の最大部隊だった。
最強の軍団の、最大の部隊。
ルビーローズがあからさまにくやしがるわけだ。これではとても勝ち目がない。敵の攻撃をしのぎきれるとは思えない。仮にしのげたとしても、あるいは無事に逃げおおせたとしても、もう地底ホールは使い物にならない。
ルビーローズが得意満面に語ってくれた、アンダー・ザ・ローズ計画。
その舞台である地底ホールも、后土の城も、もはや放棄するよりほかに道はない。よりにもよって女王軍

の狩猟部隊に目をつけられたからには、ほとぼりが冷めるのを待っての開発再開も、断念せざるを得なかった。

いや、事態はもっと深刻だ。

地底ホールにはトンネルが掘られている。地面の下をはるばる横断して、ＧＬＬのショップゲートまで延びている。そのトンネルを使って狩猟部隊がＧＬＬ侵入を果たせば、未曾有（みぞう）の惨事となる。

パキケフーズで。マハラショップで。楽しく買い物をしているリヴリーたちが血祭りに上げられてしまうのだ。トンネルを掘らせたルビーローズのせいで――。

「くっ」

ルビーローズは唇を噛んだ。

早くどうにかしなければと、気持ちがあせる。しかし、籠城の身では手も足も出ない。

赤いリヴリーの唇に、赤い血がにじんだ。

「これだけの数にブラックホークまでいては、さすがに分が悪いな。防衛隊はまだか」

空間を埋め尽くしたスズメバチにさえぎられて、横穴の様子は見えない。少なくとも、援軍が到着した気

配はない。団丸は休まず駆けているはずだ。ヒナタとフレイムはもう、地ノ塔まで引き返しているはずだ。
　団丸が帰り着けば、ヒナタに事情が伝わる。ヒナタは防衛隊を動かすだろう。モンスター津波で多くの犠牲を払った防衛隊は、モンスターの殲滅を悲願とする。裏切り者のＬＩＳＤを毛嫌いしていても、モンスターを討伐する機会が巡ってきたならば、防衛隊は重い腰を上げるはずだ。
　あとは到着を待つばかり。
「おそらく防衛隊は、動きませんわ」
　ルビーローズの声が冷たい。
「バカな。連中は――」
「いいえ、動きません」
　ルビーローズは目も冷たい。
「動きたくても、動けないのですわ。なぜなら、プーケが体を張って阻止するでしょうから」
「プーケが？　確かにあの女は防衛隊のモンスター殲滅作戦に反対しているが、これは殲滅作戦ではないぞ？」
「ちがいますわ。プーケが反対しているのはモンスタ

ー殲滅作戦ではなくってよ」
「では、なにに反対しているというのだ？　局長のくせに、あの女は防衛局の幹部職員すべてと対立しているのだぞ」
「プーケは……いえ、あの人たちミューミュー派は――」
ルビーローズの話はそこで途切れた。
ブラックホーク率いる女王軍狩猟部隊が全面攻撃に転じたのだった。
「動いた！」
りぶたんとルビーローズは捕縛ネットから離れた。
「真ん中へ！」
ルビーローズが先頭を切って走る。
出入り口の左右どちらにも対処できるように、ふたりは中央出入り口の後方に位置を取ろうとした。
しかし、寄せ手のほうが早かった。ふたりが位置につく前に、奥にある左端出入り口が突破された。
一瞬の突破だった。守る兵隊アリを押すも引くもない。巨体に物を言わせて、体当たりで弾き飛ばしたのだ。

ついに、クイーン・ローズに敵が侵入した。圧倒的な破壊力で軽々と出入り口を突破したのは、暗い灰色の巨大スズメバチだった。

「ブラックホォォォク！」

りぶたんが吼(ほ)えた。両腕をガトリング銃に変えて、撃ちまくった。

「ちっ！」

連射したのに弾は一発も当たらなかった。

体当たりで出入り口を突破したブラックホークは、中に入ると即座に反転して、あっという間に退いてしまった。初めからそういう作戦だったのだろう。中で戦う気は一切なく、出入り口の守備隊をつぶすことのみを目的としたのだ。そして目的を果たすと、吠えるミミマキムクネを尻目に、涼しい顔でさっさと引き揚げてしまった。

憎らしいほどに、見事な戦いぶりだった。りぶたんの銃撃は後追いとなって、一発も当たらなかった。ただむなしく、壁の結晶に穴を穿(うが)っただけだった。

「保安官！　そこをお願い！」

ルビーローズは左端出入り口を指さした。

兵隊アリは絶壁まで飛ばされて壁に激突し、ぐったりしている。無防備となった出入り口はリヴリーが守るしかない。

「おう！」

りぶたんは出入り口に弾幕を張った。

ところがスズメバチは顔をのぞかせることさえしなかった。これでは弾が無駄になる。霊力を消耗するばかりだ。どうせ弾幕を張るのなら、外に向かって攻撃できる射線を確保したい。敵を寄せ付けないようにしつつ、群れを撃つことができれば一石二鳥となる。

「ルビーローズ」

りぶたんはルビーローズに呼びかけると、頭をくいっとひねった。ついてこいと態度で示した。

ふたりが離れると分断される恐れがある。ついさっき、味方である兵隊アリに分断されたばかりだ。同じ失敗を繰り返すわけにはいかない。

ルビーローズは事情を察して、だまって従った。その目は周囲を警戒している。

中央出入り口と両隣は静かだった。攻防戦は起きていないようだ。右端出入り口にはスズメバチが群がっ

ていて、捕縛ネットを咬み切ろうとしていた。それを傷ついた兵隊アリが片顎(かたあご)で突いて、しきりに押し戻そうとしている。
「わたくしが攻撃しますわ」
「そうだな。敵が奥までぎっしり詰まっていても、おまえの技ならやれる」
ふたりはゆっくりと左端出入り口に近づいた。
ルビーローズは歩きながら、右腕をV字に曲げて構えた。
外が見えた。出入り口のすぐ向こうで、何匹ものスズメバチが待ち構えている。
待っていればリヴリーが飛び出してくるとでも思っているのだろうか？　まさかそんなことを考えるわけもないだろうが、襲ってこない理由はわからなかった。
「どうして、じっとしているのかしら？」
「ブラックホークの命令でも待っているのだろうよ。兵どもでは埒(らち)が明かないから、奴が出張ってきたのだ。攻撃させたところで戦果は望めないと、この数時間で答えは出ている。だから守備を崩(くず)すまで兵どもは待機させて、奴は自分で攻撃するつもりなのだ。しかし、

その戦法はさっきと同じはず。次は仕留めてやる」
弾幕を張る出入り口に注意を向けながら、りぶたんはほかの出入り口にもしきりに目を走らせた。
「別にこちらが待つ必要はありませんわね。わたくし、攻撃しますわよ」
「うむ」
「ローズ・ストーム！」
ルビーローズは薔薇の竜巻を放った。
腕に巻き付いていた風が大きくなりながら飛んでいった。出入り口の外でじっとしているスズメバチを呑み込んで、竜巻は一気に巨大化した。
だが、その進路上に敵はいなかった。まるで手の内を見透かしていたかのように、周囲に寄って、あらかじめ竜巻を避けていた。
出入り口の外にいたのは囮だった。ホバリングでじっとしていたのは、自分たちの体で壁を作って、背後を隠すためだった。
わずか数匹のスズメバチを撃つために、ルビーローズは大技を使ってしまった。
ごっそりと霊力が減った。モンスターごときに一杯

食わされたという精神的ダメージも、小さくはなかった。
「わたくしとしたことが……！」
ルビーローズの歯がギシリと鳴った。
「なんて奴らだ」
りぶたんはガトリング銃で弾幕を張り続けたが、なにもない空間に無駄弾を撃つのはむなしかった。
「……こいつ」
恨めしそうな声をりぶたんは出した。
天井付近に潜んでいたのか、ブラックホークが静かに舞い降りてきた。ガトリング・スリングの射程を見切って、安全なところでホバリングした。
「わたくしたちを嘲笑（あざわら）っていますのね！」
「舐めるなよっ！」
りぶたんはレールガン・スリングをぶっ放した。
しかし、それさえもブラックホークに読まれていた。
爆発的に加速して飛んでいった砲弾を、暗い灰色の悪魔はひらりとかわした。見て、かわしたのではない。発射する前にすでに回避行動に入っていた。ブラックホークは読み切っていたのだ。

りぶたんは敵のいない空間を撃ち抜いた。
砲撃が合図となったのか、群れが一斉に動き出した。左から右へ、上に回って今度は下へ、流れるように空中を飛び回った。地底ホールの空間をスズメバチの波濤が逆巻いた。飛び回るばかりで攻めては来なかったが、なんのための行動かはすぐにわかった。
ブラックホークが波間に消えた。
りぶたんはレールガンを連射した。スズメバチが作り出した大波を榴弾で叩いた。何匹かは撃ち落とすことに成功したものの、その中にブラックホークの姿はなかった。
「奴はどこだ！　見えるか？」
「いいえ！　うまく紛れてしまいましたわ！」
「ならば！」
りぶたんはサンダー・シャワーを放った。
地底ホールのど真ん中に五つの雷が落ちた。直撃雷と側撃雷とで、ホールを泳ぎ回るスズメバチを根こそぎ打ち倒そうとした。
五倍のサンダーに地の底がふるえた。
スズメバチの動きがぴたりと止まった。一匹残らず

ホバリングに入った。視界をふさいでいる正面のスズメバチが、カーテンを引くように左右に割れた。
「やられた……」
ミミマキムクネの耳の毛がしぼんだ。力なく垂れ下がった。
雷が落ちたホールの真ん中にスズメバチはいなかった。ぽっかりと中央をあけて、わざと周囲だけを飛び回っていたのだ。せっかくの大技も空振りに終わってしまった。
ルビーローズに続いて、りぶたんまで一杯食わされたのだった。
「ターゲット指定さえ使えましたら、こんなにくやしい思いはしませんのに」
ルビーローズが愚痴をこぼした。
攻撃技には、相手の名前を指定するターゲット指定と、相手の位置を指定する位置指定、それに、技を放つ方向だけを指定する方向指定がある。
ターゲット指定ならブラックホークの名前で必中（ひっちゅう）するし、位置指定でもあそこのあいつで当たりやすくなる。しかし、このふたつはＬＩＰＳと連動して初め

て使える指定方法だった。
アウターゾーンはＬＩＰＳの管理区域外だ。ターゲット指定も位置指定も使うことはできない。敵を倒すには方向指定で当てるしかなかった。
「それにしても、いいようにあしらわれておりますこと。わたくしたち、いささか攻め急いでいるのではなくって？」
「だが、のんびりもできん。まさか女王軍の狩猟部隊がこれほどとはな。いや、ブラックホークが来てからか。変わったのは」
スズメバチの群れが再び流れ始めた。
「シロアリの避難はあとどのくらいで完了するのだ？マハラとチャパティを呼び戻せ。このままでは……」
――落ちるぞ。
りぶたんは言葉を濁して、最後までは言わなかった。
ルビーローズは脱出路を横目で見た。シロアリは出たり入ったりしている。
「まだかかりますわね。それにマッハとチャッパには連絡できませんわ。だって、ＬＩＰＳがありませんも

の。コンタクトは使えなくってよ。でも、ふたりとも必ず戻ってきますわ」
ルビーローズの期待に応えようとしたのか、はるか下のほうからロケット噴射するハンマーが打ち上げられた。
マハラの居場所はだいたいつかめた。合流するには時間がかかりそうだ。
「いたぞ！」
波間に黒い影が奔(はし)るのをりぶたんは見た。
右のほうの出入り口に向かって飛んでゆく。狙われたのは中央出入り口だろうか。それとも中央の右にある出入り口だろうか。どちらであろうと、事前に察知したからには勝機もある。
りぶたんは右腕のガトリング銃を向けた。もちろん、銃撃はやめている。撃てば味方に当たる。即座に銃撃できるよう、石の弾丸は回転させたままだ。六つの石が腕の先で高速回転して、空気を切り裂いている。ガトリング・スリングのうなる音はスズメバチの羽音にも負けない。
ブラックホークは中央右の出入り口に突っ込んだ。

今度は中まで入り込まなかった。出入り口でピタリと止まって、守備隊だけを弾き飛ばした。
「ちっ」
狙い澄ましていたのに、りぶたんは撃てなかった。出入り口にブラックホークの顔は見えたが、撃つ前に引っ込んでしまった。
残念ながらブラックホークは討ち漏らしたが、弾き飛ばされた兵隊アリのダメージはたいしたこともなさそうだった。守備隊が配置に戻るまで、りぶたんはそこにも弾幕を張ることになった。
「では、こちらはわたくしが」
ルビーローズがV字の構えを取った。
左右の出入り口を同時に見ることになったりぶたんの負担を減らそうと、左端出入り口からの攻撃を買って出た。
ルビーローズが構えた瞬間、出入り口の外にスズメバチの壁ができた。囮の連中だ。体で壁を作って背後を隠そうとしている。
「お笑いですわ」
ルビーローズは気にも留めなかった。

最初から壁で隠されていたから、さっきは引っかかったのだ。だが今度はちがう。壁の後ろでスズメバチが飛び回っているのはわかっている。真ん中をあけてサンダー・シャワーを無駄撃ちさせた手も、薔薇の竜巻には通用しない。

「ローズ・ストーム！」

V字に構えた腕をルビーローズは伸ばした。まっすぐに伸ばして、指先を外に向けた。

腕に巻き付いていた風が吹いた。

そよ風の、竜巻だった。

「あ……」

ルビーローズが言葉をなくした。

いや、なくしたのは言葉ではなくて、霊力だった。

「もういい！　下がれ！」

「でも……」

「わかっている！　おまえはよくやった！　あとはあたしが引き受ける！　いいから下がれ！」

りぶたんは理解していた。

ルビーローズは本当によくやった。籠城して六時間も持ちこたえた。マハラは脱出路を掘っていたのだか

ら、寄せ手はほとんどルビーローズひとりで迎え撃ったにちがいない。チャパティには大技がないから、攻撃参加してもルビーローズの援護止まりだ。霊力を多少は回復するというお茶を飲みながら、だましだまし技を放って、ルビーローズは六時間も戦い続けたのだ。

よくぞいままで霊力が尽きなかったものだと、逆に感心するほどだった。

「いいえ！　わたくし、まだ戦えますわ！」

「バカな！　どうやって戦うというのだ！」

「素手でっ」

「なっ――！」

りぶたんが絶句した。

この隙をブラックホークは逃さなかった。

悪魔が仕掛けた。中央出入り口に飛び込んで中には入らずに、守備隊だけを弾き飛ばした。りぶたんの右腕は、その奥にある出入り口に弾幕を張っている。ガトリング・スリングを連射している。

弾き飛ばされた兵隊アリが宙を飛んで、弾幕の射線を横切った。

りぶたんのガトリング銃が味方を誤射した。

弾き飛ばされ、撃ち落とされて、守備隊が床に転がった。
「ちぃ！」
失態に気づいてりぶたんが連射を止めた。銃口を天井に向けた。
それを待っていたかのように、弾幕の切れた中央右の出入り口からスズメバチが雪崩(なだ)れ込んだ。
配置に戻りかけていた中央右出入り口の守備隊は、侵入してきた敵を追い払おうとした。けれども一対一では、スズメバチには歯が立たなかった。出入り口に集結してハサミのような大顎(おおあご)で槍衾(やりぶすま)を作るのなら、なんとか互角に渡り合えたものの、差しの勝負では勝てるはずもなかった。
スズメバチは兵隊アリを人質に取った。咬み殺さずに、口にくわえて盾とした。銃撃されないよう、白い盾をりぶたんに向けて一列に並んだ。
「保安官！」
ルビーローズがりぶたんを呼んだ。左端出入り口の外を見ている。
りぶたんが目をやると、外にも白い盾を構えたスズ

メバチがいた。ホバリングしつつ、まわりから何匹も寄ってくる。どうやら、引きずり出した兵隊アリを盾にしているようだ。

りぶたんはそちらの弾幕も打ち止めにした。弾丸の回転が止まって、両腕のガトリング銃が沈黙した。

静まりかえったクイーン・ローズに、スズメバチの羽ばたく音だけが響いた。

地底ホールはすでに制圧されている。ブラックホーク率いる女王軍狩猟部隊が、ホールを埋め尽くしている。

マハラとチャパティは離れたところにいた。

ルビーローズは霊力が尽きた。

りぶたんは攻撃をやめた。

后土の城はいま、落城しようとしていた。

3

中央出入り口からブラックホークが顔をのぞかせた。

外壁に止まっているらしく、床に前脚を伸ばして、のそりと動いた。

兵隊アリを盾にしたスズメバチが、ホバリングしながらブラックホークの前に出た。シロアリの真白い腹をりぶたんに向けている。くわえられて吊るされた兵隊アリがあらがうと、スズメバチは大顎に力を込めた。あらがった兵隊アリは身をよじらせて苦しみ、抵抗をあきらめた。

白い盾が展開するのを待って、ブラックホークは胸まで入ってきた。しかし、用心深いのか、それ以上は中に入ろうとしなかった。中にも外にも、自在に動ける絶妙の位置で脚を止めた。

クイーン・ローズの守備隊は壊滅状態だった。

左端出入り口の守備隊は、絶壁まで飛ばされて激突し、気絶したままだ。

中央左出入り口の守備隊は、持ち場についているものの、敗北必至の情勢に右往左往している。

中央出入り口の守備隊は、飛ばされて撃たれたダメージにまだ動けないでいる。

中央右出入り口の守備隊は、捕まって盾にされた。

単独で右端出入り口を守っている兵隊アリだけは、重傷の身で健気にも奮闘していた。捕縛ネットにかじ

りつくスズメバチを片顎(かたあご)で追い払っている。
しかしながら、出入り口はもはや守る意味がなかった。外側の敵をいくら防いだところで、すでに内側に敵が入り込んでいるのだから、守ったところで背後から襲撃されるだけ。ひとつでも突破を許せば、おしまいだった。
右往左往していた中央左出入り口の守備隊が持ち場を放棄した。といっても、逃げ出したわけではない。前を向いて警戒しながら下がり、脱出路の前で踏みとどまった。そこを死に場所と定めたのか、シロアリの兵隊たちにはもう、動揺は見えなかった。
中央出入り口の守備隊も、誤射されたダメージから回復すると脱出路まで後退して、そこの守りについた。
幼虫をくわえた働きアリが脱出路へ逃げ込んでゆく。そうかと思えば、脱出路から戻ってきた働きアリが、危険を承知の上で幼虫を救いに階下へと急ぐ。
兵隊アリたちが命を懸けて守るだけの価値が、脱出路にはあった。
「保安官」
ルビーローズが落ち着いた声でささやいた。

「テーブルの下に抜け道があります。わたくしが囮になりますから、あなたはそこから脱出しなさい」
「寝ぼけるな。まだ負けてはいない」
りぶたんの声は大きかった。
「でも――」
「だまれ。あたしを誰だと思っている。おまえはあたしの後ろに隠れていろ。無理はしなくていい」
りぶたんはルビーローズを叱りつけると、ブラックホークに指を突きつけた。
「そんなところでこそこそしないで、前に出てこい！」
ブラックホークは巨大な顎（あご）をガチリと鳴らした。
兵隊アリを盾にして外を飛んでいるスズメバチが、左端出入り口に近づいた。その隣にある中央左出入り口にも、白い盾を構えたスズメバチが近づいてきた。
中央出入り口にいるブラックホークは動かない。
「敵ながら見事な作戦行動だと初めは感心したが、人質を取るとはこの卑怯者が！」
ブラックホークは巨大な顎（あご）をガチリガチリと二回鳴らした。

白い盾を構えたスズメバチが少しずつ距離を詰め始めた。前からも横からも、りぶたんに近づいてくる。
「言葉は通じなくてよ、保安官」
わかりきっていることをルビーローズは諭(さと)した。
モンスターと会話はできない。ほめようと罵(ののし)ろうと、なにも変わりはしない。
「あたしはＬＩＳＤの保安官だ」
りぶたんはルビーローズを無視した。
ブラックホークは巨大な顎(あご)をガチガチと鳴らした。そのまま止めずに、鳴らし続けた。
蟻塚の外にいる群れが騒がしくなった。興奮しているようだ。白い盾を構えたスズメバチがわずかに前のめりになった。
りぶたんは心持ち、うつむいた。両腕をだらりと下げた。
ブラックホークの立てる音がテンポアップした。ガチガチガチガチとすばやく咬み鳴らしている。蟻塚の外から聞こえてくるスズメバチの羽音が一気にあわただしくなった。
「おまえたち……」

まっすぐにそろえて下げたりぶたんの両腕に電気が走った。
放電した。
火花が散った。
腕の間に大きな石が出現した。
「許せよっ！」
りぶたんは両腕を上げた。
レールガン・スリングだった。
砲弾が電磁誘導で発射された。爆発したかのように一瞬で加速した。稲妻の尾を引いて、ブラックホークに命中した。
盾にされたシロアリごと、盾を持ったスズメバチごと、りぶたんはブラックホークを撃ったのだった。
さすがの悪魔も近すぎてかわせなかった。
女王軍の狩猟部隊を率いる大物スズメバチは、蟻塚の外へとぶっ飛ばされた。
りぶたんの両腕がガトリング銃に変わった。弾は散弾。ガトリング・ショットガン・スリングだ。
おまえたち許せよと叫んだミミマキムクネは、人質ごとスズメバチを攻撃した。

散弾がばらまかれた。両腕で連射された。スズメバチは兵隊アリを人質に取り、くわえて吊(つ)るして盾としている。

弾は白い盾に当たった。腹を撃たれてシロアリが暴れた。痛がった。

けれども、りぶたんは撃ち続けた。弾がシロアリにだけ当たろうともお構いなしに、あたり一面に散弾をぶちまけた。

ガトリング銃はうなり続けた。

あまりの痛さに、シロアリが体をはねあげるようにして折り曲げた。

盾の下半分がなくなって、スズメバチの腹に弾が命中した。激痛をこらえきれずに、スズメバチは大顎(おおあご)を開いた。くわえていた盾が落ちた。盾を落として、スズメバチは無防備となった。散弾がぶち込まれた。

蟻塚の中でも、外でも、すべてのスズメバチが盾を落とした。

盾をなくしたスズメバチを、りぶたんは攻撃し続けた。

ガトリング銃のうなりがやむ気配はなかった。

「……鬼だわ」
ルビーローズが思わずつぶやいた。
いくらリヴリーの技でモンスターが死ぬことはないといっても、痛いものは痛い。その証拠に、ふだんは無表情なモンスターもリヴリーに攻撃されたときだけは苦悶の表情を浮かべる。
それなのに、モンスター愛護派で知られるＬＩＳＤの保安官が、人質に取られた哀れなシロアリを情け容赦なく撃ちまくるとは。
これを鬼と呼ばずに、なんと呼ぼうか。
脱出路を死守していた兵隊アリが、好機と見てスズメバチに突進した。
りぶたんはあとの始末を兵隊アリに任せた。侵入したスズメバチにはたっぷりとダメージを与えてある。どれもふらふらになっている。すでに気を失ったのもいる。
「逃がすかっ」
蟻塚の外にぶっ飛ばした大物に逃げられまいと、りぶたんは出入り口に走った。
突進してきた兵隊アリは、仲間を人質にとって苦し

めた憎い敵を、よってたかって小突き回した。
形勢不利のスズメバチはすでに弱っていることもあり、飛ぶことも忘れて出入り口から転げ落ちるように逃げていった。
気絶したスズメバチは兵隊アリによって、外に掃(は)き捨てられた。
侵入した敵の排除が終わるのを見届けてから、ルビーローズは出入り口に駆け寄った。
「食らえ！」
レールガン・スリングのおかげで遠距離精密砲撃に自信を持ったりぶたんが、地面すれすれを飛び去ってゆくブラックホークを狙い撃った。
だが、当たらなかった。相手は動いており、的のようにじっとしてはいない。技で補ったところで、苦手なものはやっぱり苦手なようだ。
「もう一発！」
今度は榴弾で狙った。
でも、当たらなかった。
兵たちが指揮官をかばった。ブラックホークの前に体を投げ出して、自分自身を盾とした。

地面すれすれを飛んでいたブラックホークが急上昇した。それにあわせて、うろたえていた群れに規律が戻った。てんでんばらばらに飛んでいたスズメバチが、流れるように飛び回り始めた。

地底ホールにスズメバチの海流が生まれた。前よりも大きく、力強いうねりだった。雪辱（せつじょく）に燃えているのが見て取れる。

女王軍狩猟部隊は敗走しなかった。ただ、クイーン・ローズから追い払われただけだ。一度は混乱に陥（おちい）ったものの、陣形を整え直した。

戦闘は振り出しに戻った。

ブラックホークが登場したところから仕切り直しだ。

攻城軍の損害は軽微だった。戦意も高まっている。戦いをやり直すことに不都合はあるまい。

しかしながら、籠城軍の損害は甚大だった。守備隊はぼろぼろだ。ルビーローズの霊力は尽きている。もう一度攻撃されれば、今度こそ落城するだろう。

「城を放棄します」

后土の城の主が宣言した。

「みんなで脱出しましょう」

「あいにくと、そんな暇はなさそうだ」
りぶたんはレールガンを撃った。榴弾を連射した。対空砲火だった。
ブラックホーク率いる女王軍狩猟部隊が、二度目の全面攻撃を仕掛けてきた。
一度目とちがって、今度はブラックホークも慎重だった。群れの後方に控えて、自分では攻撃せずに兵を指揮した。
りぶたんは攻め寄せてくるスズメバチの群れに対空砲火を浴びせつつ、大将首を狙った。狩猟部隊を撤退に追い込む最善の策は、ブラックホークを仕留めることだ。
上下左右に斜めから、中央を避けて群れが迫ってくる。真ん中をあけているのは、薔薇の竜巻やサンダー・シャワーを警戒してのことだろうか。敵が用心深いおかげで、りぶたんとブラックホークを結ぶ直線上に障害はなかった。
とはいえ、じっくりと狙い澄ます余裕もなかった。狩猟部隊が急接近してくる。
「シュート！」

りぶたんは渾身の一撃を放った。
不敵にも真っ正面でホバリングしているブラックホークを狙った。
だが、しかし。暗い灰色の悪魔は飛んでくる砲弾をひらりとかわした。
ところが、レールガンをかわしたブラックホークを別の場所から狙い撃った者がいた。
左後方、やや下のほうから、火を吹く棒状の物体が飛んだ。ミサイルだった。先端部分が少し大きく、丸みを帯びている。ハートの形をしている。尾翼もやわらかな曲線を描いている。
死角から発射されたミサイルに、悪魔は気づかなかった。ハートのミサイルがブラックホークに命中した。爆発が起こった。ピンク色の爆煙が一瞬で広がり、ブラックホークを包み込んだ。まるで血煙(ちけむり)のようだった。直撃を食らったブラックホークが煙の中から出てきた。ピンクの煙を体にまといつかせて、落ちていった。
「あれは！」
「恋のミサイルだ！」
ルビーローズとりぶたんが同時に叫んだ。

落ちてゆくブラックホークに恋のミサイルがまた命中した。衝撃で、ブラックホークの墜落する角度が変わった。そこへさらにもう一発、恋のミサイルが飛んできた。ダメージで羽ばたくこともできないブラックホークはこれも食らった。真横に吹き飛ばされた。ピンクの煙を糸のように引きながら、放物線を描いて悪魔は落ちていった。

「来たか！」

りぶたんがうれしそうに叫んだ。感激のあまり、ミミマキムクネの垂れ下がった耳の毛がちょっぴり持ち上がっている。

ミサイルの発射地点にはピキがいた。遠くの相棒に合図でも送っているのか、ぴょこぴょこ飛び跳ねている。大きく丸くふくらんだ耳の毛が弾んでいる。

ヒナタだった。

ＬＩＳＤの副保安官ヒナタの専用攻撃技は「恋のミサイル」といった。呪文はキューピッド・ミサイルだ。ピンクの爆煙は濃縮香水ガスだった。体にまとわりついて呼吸困難にさせたり、甘ったるい匂いで気分を悪くさせる、恐ろしい毒ガスだった。

ブラックホークが墜落した。女王軍狩猟部隊に動揺が走った。りぶたんめがけて飛ぶ勢いが弱まった。それでも、血気に逸(はや)ったスズメバチが突っ込んでくる。

りぶたんは余裕 綽々(しゃくしゃく) でこれを撃ち落とした。

親友で戦友の、幼なじみの相棒が助けに来てくれた。さっそうと登場して、あっという間にブラックホークを撃墜してしまった。もう心配はいらなかった。

女王軍狩猟部隊が反転した。そのままクイーン・ローズを目指せば戦果も得られただろうに、指揮官の危機に勝てる戦いを捨ててしまった。

りぶたんに襲いかかろうとしていた敵は、一転して今度はヒナタに向かった。

恋のミサイルはヒナタの腕の上に、浮かぶように出現する。ヒナタは腕をカタパルトとして扱い、ミサイルを発射する。

その腕の上に、いままでの三倍はありそうなミサイルが現れた。さすがに少し重いのか、ヒナタはカタパルトと化している腕に手を添えて、下から支えた。

突撃してくる敵に向けて、三倍のミサイルが発射された。飛んでいったミサイルは命中する前に、三枚の

サイドパネルを大きく開いた。開いたサイドパネルの下から、数え切れないほどの弾頭が射出された。
　コンマ数秒の時間差で、弾頭は連鎖するように爆発した。ひとつひとつの爆発は大きくなくても、射出されて広い範囲に散らばった分だけ、全体として大きな爆発となった。
　たった一発で、女王軍狩猟部隊の四分の一ほどが爆煙に呑まれた。
　ヒナタは三倍ミサイルを続けて発射した。さらに四分の一が餌食となった。
「見ろ。あれが、恋の多弾頭ミサイルだ」
　りぶたんは我が事のように、ルビーローズに自慢した。
「これはもう、ミサイル空爆ですわね」
　ルビーローズは溜息をついた。
　恋の多弾頭ミサイルをヒナタが撃ちまくっている。地底ホールのそこら中で爆発が起きて、ピンクの爆煙が視界を覆い隠してゆく。
　近くで起きた爆発はないのに、爆風に乗って甘ったるい匂いが運ばれてくる。あまり吸い込むと、悪酔い

しそうだ。
「終わったな。ここはもう、あたしひとりで充分だ。ルビーローズ、すまんが迎えに出てくれ」
爆発音が消えた。どうやらミサイル空爆が終了したようだ。地底ホールにはピンクの煙が充満しているから、敵を見つけるのが困難になったのかもしれない。それに、スズメバチが飛んでいる気配もない。
「そうですわね。どうやら決着もついたようですし、そうしましょう」
「ああ、それから。引きずり出された兵隊アリの中には無事なのもいるようだ。盾に使われたところを撃ち落としてしまったが、なんとか救助できないか」
「言われるまでもありませんわ。一階出入り口の守備隊を動員するつもりでしてよ」
ルビーローズは階段に向かった。
「すまなかったな、おまえたち」
「？」
りぶたんの声にルビーローズは振り返った。
鬼の保安官はもうしわけなさそうに、自分よりも大きなシロアリをなでていた。

視界が晴れてきた。
恋のミサイルの濃縮香水ガスは煙幕ではないから、拡散するのも早い。
地面はスズメバチの絨毯になっていた。一匹残らずミサイル空爆にやられたようだ。飛んでいるのはいない。
もっとも、地面で羽を動かして再び飛び立とうとしていた。ダメージは深くないようだ。
恋のミサイルには、ダメージは深くないが長引くという特徴があった。濃縮香水ガスが体にまとわりついて息ができなくなり、行動不能に陥(おちい)る。動けない時間はほかの攻撃技を食らったときよりも長くなるのだが、ガスが拡散してしまえばすぐに元気になる。
だから、ヒナタは合流を急いでいた。
ミサイル空爆で女王軍狩猟部隊の動きを封じたヒナタは、断崖通路を駆けて后土の城に向かっていた。後ろには団丸が続いている。フレイムの姿は見えない。どうやら別行動を取っているようだ。
今度はりぶたんが援護をする番だった。相棒たちが

無事に城までたどり着けるように、クイーン・ローズの大きすぎる窓から、眼下を見張った。
スズメバチは一匹、また一匹と飛び立ち始めた。しかし、襲いかかってはこない。撃墜された指揮官の身を案じているのだろうか。
しばらくして、ブラックホークがよろけながらも飛び立った。ブラックホークが飛ぶと、群れの残りが一斉に続いた。気絶してひっくり返っているのをのぞいて、女王軍狩猟部隊が離陸した。
りぶたんはレールガンの発射態勢に入った。
断崖通路のヒナタも足を止めて、敵部隊にミサイル・カタパルトを向けた。
ブラックホークは顔を見せなかった。後ろ向きのままゆっくりと上昇して、天井近くの侵入口へと引き揚げていった。部隊はおとなしく指揮官に従っている。
侵入口にたどり着いたところで、ブラックホークは向きを変えた。口惜(くちお)しそうな顔で城をにらんだ。指揮官が振り返ると群れも振り返った。黄色い顔に、吊(つ)り上がった黒い目がずらりと並んで、恨めしげに城を見つめた。

最後にひとにらみをくれて、女王軍狩猟部隊は退却していった。暗い灰色の悪魔が侵入口に消えた。部隊も続いた。

りぶたんは構えた腕を下ろした。ヒナタと団丸は走り出した。

気絶したスズメバチは地底ホールに取り残されたが、正気に返るとすごすごと逃げていった。

地底ホールからすべてのスズメバチがいなくなった頃、ヒナタがクイーン・ローズに到着した。

「りぶたん、だいじょうぶ？」

階段を駆け上がってくるなり、ヒナタは相棒の身を案じた。

「ああっ！　ケガしてるじゃない！　羽根飾りも折れてる！」

ヒナタはりぶたんに駆け寄った。

「なに。たいしたことはない。かすり傷だ」

りぶたんはおでこの絆創膏をぽんと叩いて見せた。

断崖通路でスズメバチにつけられた傷だが、前脚の鉤爪がかすめて、薄皮をほんのちょっぴり削られただけだ。ケガのうちに入らない。

「話はまるたんとルビーローズさんに聞いたけど、ひとりで無茶しすぎだぞっ」
ヒナタはりぶたんの前に立ちはだかると、腰に両手を当てて説教を始めた。
ぺこぺこ頭を下げるように相槌を打つりぶたんは、叱られているのになんだかうれしそうだ。公式には保安官と、その部下である副保安官なのだが、ふたりの間に上下関係はなかった。
「まあ。仲のよろしいこと」
少し離れたところで、ルビーローズがからかった。
「あのふたり、親友なんだってさ。あたいにもそんな友達いたらなぁ」
団丸は心底うらやましそうだ。ルビーローズの横に突っ立って、りぶたんとヒナタのやりとりを眺めている。
「あら。あなたにもすてきなお友達がいるのではなくって？」
「なんの話さ？　あたいに友達なんかいないよ」
団丸が真顔になった。
「そうかしら？　なら、がんばってお友達を作りなさ

い。わたくしには、あなたにもすてきなお友達がいるように見えますけれど」
ルビーローズは団丸の背中を強く押した。
不意に押されてバランスを崩(くず)した団丸は、足が前に出た。
その動きにりぶたんが気づいた。
「よくやったな、団丸」
りぶたんは新入りの保安官助手をねぎらった。こっちに来いと手招きをした。
「まるたん、わたしたちのところまで、すっごい走ってきたんだから」
ヒナタは団丸のそばに寄ると、腕を取って引っ張った。話の輪に引きずり込んだ。
「べっ、別に、あたい、ふつうに走っただけじゃん」
「そうそう。わたしたちと合流しても、ゼエゼエ言ってて口もきけないくらいに、ふつうに走っただけよね」
ヒナタがおちょくる。
「なんだ。ふつうに走って、そんなに息が上がったのか。おまえはもうちょっとダイエットしないとな。あ

たしみたいにスリムになれ」
りぶたんは腕を組むと、胸を張っていばった。
「どれどれ」
ヒナタがミミマキムクネの脇腹のお肉をむぎゅっとつまんだ。
「！」
乙女の秘密をつかまれて、りぶたんの耳の毛が跳ね上がった。
「くすくす」
ヒナタが笑った。
つられて団丸も笑った。
友達といっしょに楽しそうに笑う団丸を、ルビーローズが目を細めて見ていた。
「そう言えば、フレイムはどうした？」
ひとり欠けていることを、りぶたんはようやく思い出した。
「あのね、フーちんには防衛隊を呼びに行ってもらったの」
「あいつに？　ひとりでだいじょうぶか？」
「それがね、ぼくは絵本ジャーナリストだって言って

ね。もしも防衛隊が相手にしてくれなかったら、そのことを絵本に書いて報道するぞって、脅してやるんだって自信たっぷりだったのね」
「なるほど。ジャーナリストなら、そういう手もあるな」
「まるたんと合流したのは地ノ塔のスタート地点じゃなくて、もっとこっち寄りだったの。地ノ塔と分岐点の真ん中くらい……かな？」
ヒナタは団丸を見た。
団丸はうんうんとうなずいた。
「防衛隊を呼びに行くのに、なにもみんなで戻る必要はないよね。それにまるたんの話だと、早く援護に行かないといけないし。呼びに行くのはわたしが一番いいんだけど、だからって、危険な場所に助手のふたりだけで行かせられないでしょ？　それで困ってたら、フーちんが……」
「ぼくが行くってか」
「うん、そう」
「あとでフレイムをほめてやろう。ヒナたんが来てくれなかったら、危ないところだったからな」

「おうおう。別嬪(べっぴん)さんがいるじゃねえか」
マハラがクイーン・ローズに戻ってきた。
「……」
「……」
りぶたんと団丸の目があった。
一味の首領ルビーローズは別にして、場にはりぶたんとヒナタと団丸の、三人の乙女がいる。それなのに、別嬪さんがいると言ったマハラは、ヒナタしか見ていなかった。
マハラに続いて、チャパティも階段を上がってきた。ふと気づくと、いつの間にやら働きアリの姿が消えている。絶壁にあけられた脱出路にはもう出入りしていない。
「シロアリの避難は終わったのか？」
りぶたんはチャパティに聞いた。マハラとは口をきかないことにした。
「終わったです」
チャパティの返事はシンプルだった。シロアリの避難だけでなく、会話まで、そこで終わってしまった。
「女王アリは見なかったぞ？」

しかたがないので、りぶたんはルビーローズに話を振った。マハラとは口をきかないことになっている。
「白姫(しらひめ)なら真っ先に避難させましたわ」
どうやら白姫というのが女王アリの名前のようだ。死んだモグラコオロギは左平次だった。ルビーローズは和風のネーミングが好みらしい。
チャパティに続いて兵隊アリが階段を上がってきた。どれも満身創痍(まんしんそうい)の負傷兵だった。誘導されて、兵隊アリは脱出路へ向かった。
「外に引きずり出された連中でえ」
兵隊アリを見つめるルビーローズにマハラが説明した。
「全部助かりましたの？」
「それは、ちぃと……」
マハラは視線をそらした。
「そう……」
沈んだ表情を見せるルビーローズの横を、りぶたんが通り過ぎた。
りぶたんはお役ご免となって避難する負傷兵に近寄ると、白い体をいたわるようにそっとなでた。傷つい

たシロアリの歩みは遅い。引きずり出されて生還した兵隊アリが避難を終えるまで、りぶたんはその場から離れようとしなかった。

「……」

相棒の背中を、ヒナタがつらそうに見ていた。

負傷兵の列が途切れ、今度は元気な兵隊アリが上がってきた。防衛線を下げて捻出した予備兵力だ。数は少なかったが、チャパティは予備兵力をクイーン・ローズ守備隊に振り分けた。

「ああ、そうだ」

りぶたんは独り言をいうと、右端出入り口に向かった。

出入り口に張っておいた捕縛ネットは効力が切れて消滅していた。網がなくなっても、一匹の兵隊アリがしっかり守備についている。

「もういいぞ。おまえも避難して、体を休めろ」

りぶたんは兵隊アリに声をかけた。

大顎（おおあご）を片方折られた兵隊アリだった。頭に穴まであけられている。重傷なのに、捕縛ネットの守りに志願してきた兵（つわもの）だ。

片顎(かたあご)の兵隊アリはりぶたんをそっと押しのけて、避難を拒んだ。
「安心しろ。戦いはもう終わったのだ」
やさしく声をかけるりぶたんの胸を、兵隊アリの触角がつついた。ここは任せろ。そう言っているとしか思えなかった。
「……」
りぶたんは困った。
頼もしい兵隊アリだったが、状況を把握できていない。それに頑固だ。
さて、どうしたものか。思案するりぶたんの背後で、シロアリたちがざわついた。いやな雰囲気だった。
「また来たです！」
声を上げたのはチャパティだった。
リヴリーは全員、チャパティを見た。それからチャパティが指さす先を見た。
「しつこいですわね！」
ルビーローズの声がいらついていた。
地底ホールの奥にある侵入口から、暗い灰色の悪魔がのぞいていた。どうやら恨みを晴らしに来たようだ。

前よりも暗く、陰鬱な顔をしている。
ブラックホークはゆっくりと脚を運んだ。逆さまになって天井に止まり、暗い目で城を見つめている。
侵入口から、わらわらと兵どもが湧いて出てきた。一時撤退して戦術を練り直してきたのか、女王軍狩猟部隊は飛ばずに壁を走った。スズメバチの足には鉤爪がついているから、垂直の壁も、天井も、自在に移動できる。
「飛んでも飛ばなくても、おんなじなのにね」
ヒナタが右腕を高く掲げた。爪先立ちで腕を真上に挙げ、もう片方の腕を横に広げてバランスを取るさまは、舞のように優雅だった。
伸ばした腕を勢いよく水平に引き下ろしながら、ヒナタは爪先立ちをやめた。なにかが装填(そうてん)されるような金属音がして、ヒナタの腕の上に恋の多弾頭ミサイルが出現した。横に広げていた腕を戻し、下からカタパルトを支える。
ピキの太いしっぽがぷるんとふるえた。発射態勢が整った。いつでもミサイルで空爆できる。
女王軍狩猟部隊も展開を終えた。后土の城の反対側

の壁に張り付いた。左右の側面にも、地面にも、天井にもいる。
「なんでえ、ありゃあ？」
マハラが全員の思いを代弁した。
スズメバチは尻を向けていた。後ろ向きだ。正面の壁に止まっているのは頭を上にして背中を見せているものの、左右の側面では横を向いて尻を向けている。地面のも、天井のも、お尻が正面だ。前を向いているのはブラックホークだけ。
わざわざ再戦を挑んできて敵に背中を見せ、尻を向けるのだから、なんとも不気味だった。
展開を終えたスズメバチが一斉に羽ばたき始めた。低く重い羽音が聞こえてくる。羽ばたいても、飛び立とうとはしなかった。壁や地面に張り付いたまま、ただひたすらに羽を動かした。
羽が動いて風が起こった。風を起こすために、女王軍狩猟部隊のスズメバチが総動員されたのだとわかった。
羽風が地底ホールを吹き抜けて、クイーン・ローズまで届いた。

そよ風だった。
「なんでえ、こりゃあ？」
マハラが大声で笑った。
異様な光景に驚かされてみれば、届いたものは微々たる風。食らったところで痛くもかゆくもない。笑わずにはいられなかった。
「まさか、こんな屁みたいな風で攻撃できないなんてこたぁ、ねえよな？　別嬪さんよ？」
「もちろんできるけど、なんだろ？　いやな感じがする。どうする、りぶたん？」
「戦う必要はもうないからな。あとは脱出するだけだ」
「うかつに仕掛けないほうがいいよね？」
敵の意図が読めないので、ヒナタはミサイル空爆をためらっていた。
「そりゃそうだ。別嬪さんがミサイル撃っちまったら、甘い風がこっちまで吹いてきて悪酔いしちまわぁ」
マハラはまた笑った。
「撃つです！　敵の狙いがわかったです！」
チャパティが急にあわてだした。

「マッハが答えを言ったです！　恋のミサイルの濃縮香水ガスを吹き流すのが、敵の狙いだと思うです！」
「なに言ってやがんでえ。その前に敵は全滅するじゃねえか」
「おいらなら、もう一枚用意するです！」
「もう一枚だあ？」
「風を起こすのと、突撃するのと、二枚で仕掛けるです！」
「！」
チャパティの言葉に、ルビーローズとりぶたんが反応した。
「お撃ちなさい！」
「撃て！　ヒナたん！」
「らっ、ラジャー！」
だが、ヒナタがミサイルを発射するよりも早く、侵入口から別部隊が突入してきた。
先頭を切って飛び出してきた巨大なスズメバチに、その場にいた全員が目を奪われた。緑色のスズメバチだった。
「コブラか！」

りぶたんがうめいた。
女王蜂クインの麾下には四匹の大物スズメバチがいる。コブラはその中の一匹だった。女王軍の偵察部隊を率いて弱ったリヴリーを捜し、発見すると即座に襲いかかってくる。偵察部隊というよりは、偵察強襲部隊ともいうべき、荒くれ集団だった。
最強の軍団の、最悪の部隊である。
コブラといっしょに突入してきた兵どもは、狩猟部隊のスズメバチよりも体が大きく、色も暗いオレンジ色をしていた。
「女王軍狩猟部隊と女王軍偵察部隊の、連合部隊ですわね」
ルビーローズの声が沈んでいる。
最強の軍団の、最大の部隊と最悪の部隊が、連合部隊を編制したのだ。クインの女王軍は全部で四部隊だと見られているから、そのうちの二部隊が連合したということは、女王軍全兵力の半分が地底ホールに集結したことになる。
「撃つのはやめるです！」
チャパティが前言を撤回した。

「やい、お茶っ葉！　撃てとぬかしやがったのは、おめえじゃねえか！」
「状況が変わったです」
「ああん？」
「偵察部隊を撃つと、ガスが吹き流されてこっちに来るです。おいらたち、息が苦しくなるです。ガスに紛れて敵も襲ってくるです」
「だったら、先に後ろを撃ちゃあいいじゃねえか」
「後ろの狩猟部隊を撃つと、前にいる偵察部隊が襲ってくるです。後ろに一発撃っただけで、あとは前を撃つしかないです。それだとやっぱり、残った後ろの部隊がガスを吹き流してくるです」
「そんなら、おめえ。どっち撃ってもやべえじゃねえかよ」
「だから撃つのはやめるです」
「おい、別嬪さん！　撃つんじゃねえ！」
ずいぶんと遅れて、マハラは止めに入った。
「……」
もちろん、ヒナタはもう攻撃をやめている。
「チャッパの言うとおりですわね。でも、どうして襲

ってこないのかしら？」
ルビーローズは遠くを見つめた。
コブラ率いる偵察部隊は小集団で固まって、ホールの奥のほうに散らばっている。ホバリングで空中待機している。
いや、よく見ると待機はしていなかった。じりじりと少しずつ近づいてくる。
「先に仕掛ける気はないようだな」
りぶたんは右端出入り口に捕縛ネットを張った。片顎（かたあご）の兵隊アリをポンと叩いて激励すると、中央出入り口に移動した。
「近くまで寄れるだけ寄って、そこから一気に襲いかかるつもりね」
ヒナタはミサイルを消して左端出入り口に移動した。そして、そこで捕縛ネットを張った。
クイーン・ローズに五ヶ所ある出入り口のうち、両端のふたつがネットで封鎖された。
「あたいも？」
団丸は自分を指さした。
捕縛ネットなら団丸も使える。出入り口はもう一ヶ

所封鎖できる。
「いや。おまえのネットは取っておけ。ほかに使い道がある」
「ラジャー」
団丸がおとなしく従うその横で、チャパティが守備隊を再編制した。すでに四つに減らされていた守備隊が、さらに三つになった。
しかも、編制のしかたに特徴があった。より体格に優れる者をひとつの守備隊に集めている。兵隊アリの精鋭部隊だ。
再編制されたクイーン・ローズ守備隊を横目で見ながら、りぶたんが質問した。
「連中の牛歩戦術のおかげで、少しは時間も稼げるな。それでだ。ほかの出入り口の守備隊はどのくらいで撤退できる？」
「防衛線を下げたといっても、それなりに時間がかかりますわ。ましてや仕掛けられたが最後、撤退は難しくなりますわね。通路では防ぎながら後退できても、通路と通路が交差するところは広くなっていて、手が回りませんもの」

「どうせ奴らぁ、トロトロしてやがんだからよ。一気にパパッと下げちまえばいいじゃねえか」
マハラが話に割り込んだ。
「バカね。そこを襲撃されたらどうするの。保安官とわたくしは、万全の策を考えていますのよ」
「万全の策なんざぁ、ありゃしねえって。ここは一発、男らしく勝負でえっ」
「わたくし、女ですから」
「あたしも女だからな」
「わたしは美女だから」
ヒナタはちゃっかり一文字付け加えた。
「あたい、美少女だから」
団丸はさらに一文字付け加えたが、さすがにちょっと無理があった。
「……」
「……」
「……」
自称美少女に向ける女たちの視線が冷ややかだった。
「おいらに考えがあるです」
ルビーローズ一味の知恵袋が話を切り出した。

「でも、下策（げさく）になるです」
「下手な策でもかまいませんわ。なにかしら？」
「床の枯れ木を出入り口に積んで、火をつけるです」
「それは……」
ルビーローズは一瞬、言葉に詰まった。
「確かにそうすれば、スズメバチを防いで守備隊を下げられますわ。その代わり、わたくしたち自身が煙攻めになりますわよ。燃え広がったら火攻めですわね」
「おいら、それしか考えつかないです。下策でごめんなさいです」
「謝らなくてもよろしくってよ。ほかに妙案もありませんものね。……どうかしら？」
ルビーローズはりぶたんを見た。
ＬＩＳＤの保安官は、ゆっくりと近づいてくる敵を見張っている。腕を組んで仁王立ちだ。
「保安官？」
ルビーローズはもう一度声をかけた。
全員の目がりぶたんに注がれた。
「ほかに打つ手はあるまい」
りぶたんが重い口を開いた。

「すぐに取りかかるとしよう。だが、どうあがいても女王軍連合部隊との一戦は、避けられんな」
断を下したりぶたんは、くるりと振り返ると、声を張り上げた。
「チャパティ！　茶を配れ！　マハラ！　腕自慢のおまえは倍働け！　ルビーローズ！　一味を指揮して全守備隊を撤退させろ！　団丸は階段を死守するのだ！　下から上がってくるのが味方だとは限らんぞ！　ヒナたんはあたしとここで、連合部隊を迎え撃つ！　一同、覚悟はいいなっ！」
「おおう！」
マハラが誰よりも大きな声で吼(ほ)えた。
チャパティはフードボックスを開くと、さっそく配給を始めた。ソーサーを差し出して、ティーカップを受け取らせた。
霊力の尽きたルビーローズが真っ先にお茶を手にした。
「お茶？」
ヒナタが小声でりぶたんに聞いた。
「霊力が少しだけ回復するらしい」

りぶたんとヒナタもお茶を受け取った。
ルビーローズは意外に男らしく、お茶を一気にあおった。
その横でマハラが小指を立てて、ちびりちびりと飲んでいる。
ルビーローズはお茶を飲み終わると、ティーカップを広間の端に向けて放り投げた。聖母らしからぬマナーだが、気合いのほどが見て取れる。投げ捨てられたカップは石英の結晶に当たって割れた。派手な音は格好の景気付けとなった。
「さあ、ついてらっしゃい！」
聖母が走った。
マハラは器用にお茶を飲みながら駆けていった。
チャパティは配ったカップを回収してから、追いかけた。
ルビーローズ一味が降りていった階段の前に、団丸が陣取った。
「おまえたちは脱出路を守れ」
りぶたんはクイーン・ローズ守備隊に命令した。
兵隊アリに出入り口を守らせると、蟻塚の外に引き

ずり出される恐れがある。今回は出入り口に薪(まき)を積んで火をつけるから、引きずり出された兵隊アリはたとえ生きていても見殺しにするしかなくなる。

もちろん、場合によっては犠牲を覚悟の上で出入り口の守りに参加してもらうが、いまはとりあえず、後ろを守らせることにした。

兵隊アリはすんなりと従った。女王軍狩猟部隊との交戦で、すでに脱出路まで下がって守備をしているから、理解もしやすかったようだ。

「出入り口はいくつあるんだろう？」

ヒナタは中央左出入り口を受け持った。

「さあな」

りぶたんは中央右出入り口の担当だ。

間にある中央出入口はりぶたんとヒナタで見る。親友で戦友のふたりだ。打ち合わせなどはいらなかった。

「知らないの？」

「うむ。ルビーローズに任せたからな」

「信用したのね？」

「そうだ。あいつならやってくれる」

「でも逮捕しなくちゃいけないのよ？　ルビーローズ

さんたちはドゥードゥー強奪犯なんだから」
「……もちろんだ」
「……」
すぐに答えなかった相棒の横顔を、ヒナタはちらりと盗み見た。
「結局さぁ」
団丸が空気を読んで、話題を変えた。
「ブラックホークの部隊は狩猟が任務なんだからさ、獲物を狩りにここに来たってことじゃん？」
「そうなるな」
「んでさぁ。リヴリーに追い払われたもんだから、リヴリーの排除が任務のコブラの部隊を呼んだってことっしょ？」
「だろうな」
「じゃあさ。初めから連合部隊を組んでたんじゃないじゃん。成り行きでそうなっただけじゃん」
「それがどうかしたのか？」
りぶたんは振り向いて団丸を見た。
どうやら、団丸の話はただの雑談ではなさそうだ。
「ブラックホークを追い払ってさ。戻ってくるまでの

短い時間で、コブラに話をつけたってことはさ。コブラは近くにいたんじゃん？」
「……」
りぶたんはヒナタと目を合わせた。
ヒナタも団丸の話になにかを感じ取っているようで、不安そうな顔をしている。
「なんかそれってさぁ。ずいぶんと都合のいい偶然じゃんか。やられて逃げたら、ちょうど仲間がいたので、仲間といっしょにすぐに仕返しに戻りましたなんてさ、話ができすぎだよねえ？　あたい、思うんだけどさ。コブラが近くにいたのは偶然じゃないのさ」
「すぐに合流できても当然だというのか？　とすると……」
りぶたんは地底ホールの奥にある天井をにらんだ。すぐ下には侵入口がある。
「あの先にクインの巣があるのか！」
「そんな……！」
ヒナタが両手を口に当てた。
「ちっ。そういうことなら、コブラが仕掛けてこない理由も説明できる。もともと牛歩戦術は時間稼ぎのた

めにやるものだ。つまり、奴らは時間を稼いで待っているのだ。……ハインド率いる女王軍哨戒部隊の到着をな！」

ブラックホークの部隊はミサイル空爆されないように風を起こしている。

コブラの部隊はホバリングしながら少しずつ近づいてくる。一気に襲いかかろうとはしない。可能な限り接近してから一斉に攻撃する肚（はら）だと思っていれば、そうではなかったのだ。

「こうなったらもう、時間との戦いね。ルビーローズさんたちが戻ってくるのが先か、それとも――」

「――ハインドの到着が先か」

りぶたんとヒナタは前を向いた。

「もしかしたら、その先もあるかも。アパッチも近衛部隊をつれてやってくるかも。ううん。そこまでいったらもう、クインだけが巣に残る理由なんてないよね」

「敵は女王軍全軍……か」

それっきり、りぶたんは沈黙した。

ヒナタも押しだまっている。団丸も口をつぐんでい

る。
もう誰も、無駄口を叩かなかった。
敵は女王軍全軍。
クイーン・ローズの空気が重かった。

4

焦げ臭いにおいがした。
うっすらと煙も漂い始めた。
出入り口に枯れ木を積み上げて火をつけ、守備につく兵隊アリを撤退させる作戦が始まった。焚き火でスズメバチの侵入を防ぐ代わりに、自分で自分を煙攻めにするという下策だった。
煙は、中と外の両方からクイーン・ローズを襲った。
出入り口から中に向かった煙は、通路を伝って昇ってゆく。自然と最上階に集まる。一方、外に向かった煙はブラックホークの部隊が起こした風に吹かれながら上昇し、蟻塚の最上階に吸い込まれた。
「まずいな」
外の煙が吸い込まれてくるのは、貫通した脱出路に

空気の流れがあるからだった。つまり、煙はクイーン・ローズを通過して脱出路に流れ込んでゆくのだ。脱出路は煙突と化して、中にいるシロアリやモグラコオロギまで煙攻めにされる。

「兵隊アリで栓はできない？」

ヒナタが振り返った。

「やってみるさ」

団丸は身振り手振りで兵隊アリを動かそうとした。カウボーイハットを脱いで大きく振ってみる。しかし、目のないシロアリにボディランゲージは伝わらない。結局、団丸はシロアリの体に手をかけ、押し出すようにして動かした。

三つある守備隊のうち、一隊が脱出路の中に入った。言葉が通じないので、守備隊はお役ご免になったと勘違いし、そのまま脱出路の奥に向かってしまった。

団丸はあわてて止めようしたが、うまくはいかなかった。

「ごめん、あたい……」

「ううん。ごめんね。わたしが余計なこと言ったから」

団丸とヒナタはふたりで謝りあった。
「なに、かまわん。そこの守備隊も、どうせ避難させるのだからな」
ちょうどそこへ、階下から撤退してきた兵隊アリが上がってきた。
「ほら見ろ。栓をしても結果は同じだったぞ。団丸。逃げてきた兵隊アリを全部、脱出路に誘導しろ。穴の大きさはぎりぎりだから、脱出させるだけで少しは煙も入らなくなるだろう」
「ラジャー」
兵隊アリは団丸の誘導に従った。
巣から仲間が消えたのは理解しているらしい。脱出することに抵抗はなさそうだ。
「この調子なら、ハインドが来る前になんとかなりそうだな」
「そうね。連合部隊ともやり合わずにすんだら、言うことないよね」
兵隊アリの世話は団丸に任せて、りぶたんとヒナタはあくまでも女王軍連合部隊に備えた。ハインドの部隊が到着するまで待ってくれるという保証はどこにも

ない。
ブラックホークの狩猟部隊は、相変わらず地底ホール後方で風を起こしていた。
コブラの偵察部隊はホバリングでじりじりと迫ってくる。
戦況に変化はない。
兵隊アリは堰(せき)を切ったように続々と撤退してくる。
「けほっ」
ヒナタが咳き込んだ。
スズメバチが襲ってこなくても、煙は容赦なく襲いかかってくる。出入り口からの撤退が進めば進むほど、煙は濃くなる。
いまや、最大の脅威は煙だと言えた。
「けほけほっ」
ヒナタが守る中央左出入り口は、外から吸い込まれてくる煙の量が多かった。
片手で喉を押さえながら、ヒナタはにじんだ涙を指先でぬぐった。青い目に煙がしみた。
「代わろうか、ヒナたん」
「いい。だいじょぶ。でも、ちょっと、息、苦しい」

喉に煙が刺さって、声がかすれている。
ヒナタは煙を追い出そうとウインドを使った。
冷たい北風が吹いて、ヒナタのまわりから煙を吹き飛ばした。
吹き飛ばされた煙は外に出て行った。
蟻塚の中から放たれた煙の固まり。それがスズメバチを刺激した。
「来たぞっ！」
りぶたんはガトリング・ショットガン・スリングを構えた。
敵を撃ち落とす必要はなかった。なによりも、霊力の節約に努めなければならない。攻め寄せてきたスズメバチは、足止めするだけでよかった。
「けほっ」
咳は止まらなかったが、ヒナタもガトリング・ショットガン・スリングを敵に向けた。
「……！」
団丸がじれていた。
あいている中央出入り口の守りに参加したくてたまらないのだろう。その目はまっすぐ、出入り口を見つ

めている。
その出入り口に、暗いオレンジ色をしたスズメバチが押し寄せた。
ガトリング・ショットガン・スリングがうなりを上げた。右に二丁、左に二丁、あわせて四丁のガトリング銃が散弾を連射した。
散弾の一粒でも命中すれば、スズメバチの動きは一瞬止まる。わずかなその瞬間に、スズメバチの巨体は防壁となって、ほかのスズメバチをさえぎってくれる。弾を当て続ければ、羽ばたくことができなくなって落ちてゆく。
中央出入り口とその両横の出入り口に弾幕が張られた。両端の出入り口には捕縛ネットが張ってある。右端出入り口には頑固な兵隊アリもいて、片顎(かたあご)でスズメバチをつついてくれる。
戦端は開かれた。女王軍連合部隊を相手にした籠城戦だった。
攻城軍は強大で兵力も圧倒的だ。対する籠城軍は寡(か)兵(へい)でも、拠点に籠(こ)もるという利点があった。しかし、その利点を自ら煙攻めで差し引いている。

ところが意外な効果が現れて、りぶたんたちは煙攻めから解放された。スズメバチが大挙して押し寄せたことによる副次的な効果だった。

外から吸い込まれていた煙は、群がるスズメバチがシャットアウトしてくれた。クイーン・ローズに滞留(たいりゅう)していた煙は、スズメバチの巻き起こす羽風が吹き飛ばしてくれた。煙の一部は脱出路に流れ込んだものの、そのほとんどはものすごい勢いで階段から下に抜けていった。強い羽風が吹くおかげで、煙は下から上がってこなくなった。

ヒナタがうっかりウインドを使ったことで戦いの火蓋は切られてしまったが、逆に煙攻めからは逃れることができたという、皮肉な結果だった。

もっとも、これで息は苦しくないと喜ぶ暇はなかった。最前線のふたりは煙が消えた事実にすら気づいていなかった。ふたりで三つの出入り口を守り続けた。ただひたすらに、ガトリング銃を撃ちまくった。

「ルビーローズが帰ってきたっ」

団丸が大声で報告した。

最初に戻ってきたのはルビーローズだった。

「始まってしまったのですね！」
「ルビーローズ！　敵は女王軍全軍となる恐れがあるぞ！」
　前を向いたまま、りぶたんが叫んだ。
「なんですって！」
「侵入口の先にクインの巣があったのではないのか！」
「いいえ！　出口の外はきちんと探索しましたわ！」
「ならば移動してきたか！」
　外敵を避けるためか、クインの巣はときおり移動すると見られていた。
「それで今日になって、こんなことになりましたのね！」
「チャパティが追われてるっ」
　報告する団丸の声は悲鳴に近かった。
「後ろからスズメバチが！　あっ！　チャパティが！　鼻でなんか攻撃したっ」
「心配するな！　奴はお茶会の暗殺者だ！　滅多なことでは引けを取らん！　チャパティが戻ったら、そこをネットでふさげ！」

「そんなことしたらマハラが帰ってこれないじゃんか！」
「だいじょうぶ！　マッハなら、鼻歌交じりで帰ってきますわ！　ここからっ」
ルビーローズはテーブルをひっくり返すと、抜け道の扉を開放した。穴に板をかぶせただけの扉だったが、枯れ木で埋めて隠してあった。
「ですから、あなたは保安官に言われたとおり、しっかり自分の務めを果たしなさい」
「ラジャー！」
ルビーローズが団丸を諭してくれたので、りぶたんは銃撃に専念した。
チャパティが階段を駆け上がるのを待って、団丸は床に捕縛ネットを張った。
ネットを張るとすぐに、チャパティを追ってきたスズメバチが網に体当たりをしてきた。城の中に入り込んだスズメバチは一匹だけではなかった。ほかにも何匹か階段を上がってきた。
「姐さん、ごめんなさいです」
チャパティはルビーローズの前にひざまずくように

して、くずおれた。両手と両膝を床について、顔を伏せている。
「おいら、読みちがえたです。スズメバチは焚き火に突っ込んできたです。火が燃え移ったです。城は炎上するです。おいら、読みちがえた……」
「気にしなくていいのよ」
ルビーローズはかがむと、チャパティの手を取って立たせようとした。
「すでに放棄した城ですもの。あとはみんなで脱出するだけですわ」
「でもマッハが……」
チャパティは膝をついたままだ。立ち上がろうとしない。
「おうおう。俺様がどうしたってえ？」
抜け穴からひょっこりとマハラが顔を出した。
巨漢のマハラにはせますぎる抜け穴なので、リトルで小さくなっている。
「やい、お茶っ葉。なにをメソメソ泣いてやがんでえ」
「おいら、泣いてないです」

チャパティはすっくと立ち上がった。
確かに泣いてはいない。落ち込んでいただけだ。
「男はめったやたらに泣くもんじゃねえ。ちったあ、俺様を見習えってんだ」
マハラは体を元の大きさに戻した。
巨漢でも下半身はスリムなので、腰から下なら抜け穴にも収まる。穴から出ようと、マハラはふちに足を乗せた。そのままぐっと体重をかける。ふちにあるのは石英の結晶だ。
マハラの足がつるりとすべった。
ちょうど体重を乗せたところだったので、向こう脛(ずね)から落ちた。
全体重を乗せて、マハラは弁慶の泣き所を打ったのだった。
「んがっ」
どんな豪傑でも、向こう脛を打つと痛くて泣くという。
マハラは床に両手をついてうつむいた。激痛に顔をしかめると、目から涙がこぼれ落ちた。
「やい、マッハ。なにをメソメソ泣いてやがるです」

「だって痛いんだもんっ」
いつもの威勢はどこへやら。
「遊びはそこまでだ！」
りぶたんが怒鳴った。
「チャパティはここの守備隊を撤退させろ！　マハラはあたしと代われ！　さあ、脱出するぞ！」
「合点でい……です」
チャパティはマハラの口ぶりを見習ってみた。
マハラはまだ痛みに耐えている。
「いつまで泣いている！」
りぶたんが叱咤（しった）した。
「俺様、泣いてないです……でい」
マハラは口まねをやり返すと、痛めた足をかばいながら、りぶたんの元に向かった。
「そんなに痛いなら、我慢しないで怒りを敵にぶつけろ」
「おう！　俺様はマッハのマハラだからな！　そうさせてもらわぁ！」
ひと呼んで、マッハのマハラ。
もっとも、そう呼ぶのは本人だけで、マハラが自分

で自分につけたあだ名だった。
「マッハ・ハンマー！」
マハラは胸の前で×印を作った。クロスさせた両腕を勢いよく振り下ろした。ロケット噴射するハンマーが出現して、敵を叩き飛ばした。
マハラの専用攻撃技は「マッハ・ハンマー」といった。呪文もそのままマッハ・ハンマーだ。
両腕を胸の前でクロスさせて×印を作り、振り下ろして技を放つ。手指（しゅし）を使った方向指定などはないのだが、実はこのとき、わずかに上体が傾く。マハラの方向指定は額から鼻筋にかけた顔を中心に、上半身全体で行われているのだった。
指先とちがって大雑把な方向指定となるが、体を大きく使うという豪快さがマハラの性に合っていた。
「よし、もういいぞ。おまえ」
守備をマハラに代わってもらったりぶたんは、片顎（かたあご）の兵隊アリに声をかけた。
ハサミのように突き出した大顎（おおあご）を片方折られた兵隊アリだった。片方しかない顎（あご）をスズメバチの首に引っかけて、器用に押さえ込んでいる。スズメバチは顔を

網に押しつけられて、思うように動けなくてもがいている。
重傷の身で敵を一匹食い止めているのだから、見事な働きだ。
「でかしたぞ。だが、そこまでだ。いまから全員で脱出する。おまえは先に……」
りぶたんの言葉が途切れた。
大顎(おおあご)を咬み折られたばかりか、頭に穴まであけられた兵隊アリだった。
我が身も顧みずに、出入り口の守りに志願してきた兵(つわもの)だった。
触角でりぶたんの胸をつついて、ここは任せろと言い張った。
頼りになる兵隊アリだった。
いまも、片顎(かたあご)でスズメバチを押さえ込んでいる。しっかりと押さえ込んだまま、放さないでいる。
けれども、もう。兵隊アリは動かなかった。
「……おまえ」
りぶたんは見た。
何度もつつかれた触角が、だらりと垂れ下がってい

る。
ぴくりとも動かない触角がなにを意味するか、考えるまでもなかった。
片顎（かたあご）の兵隊アリは息絶えていた。死んでなお、敵を押さえつけて放さなかった。
新しい傷がないところを見ると、頭にあけられた穴が致命傷となったのだろう。
それだけ深い傷だったのだ。にもかかわらず、兵隊アリは戦った。巣を守って死んでいった。
誰よりも誇り高いソルジャーだった。
「……」
戦友の大きな体にりぶたんはそっと手を置いた。
そして、最後の言葉を伝えた。
「ここは……おまえに任せたぞ」
りぶたんは片顎（かたあご）の兵隊アリに背中を向けた。
右端出入り口の守りは万全だった。
「さあ！　脱出だ！」
りぶたんは叫んだ。
片顎（かたあご）の兵隊アリが戦死して、クイーン・ローズに漂う重い空気を大声で吹き飛ばした。

「チャッパ！」
ルビーローズがチャパティに声をかけた。
チャパティはクイーン・ローズ守備隊を脱出路へと誘導している。
「おいら、働きアリを連れてくるです！」
チャパティは守備隊といっしょに脱出路の奥へと向かった。
「すぐ先の脇道に働きアリを伏せてありますわ」
ルビーローズがりぶたんに説明した。
「掘り起こした岩を運ばせて、それで追撃を防ぎますの」
「よし。あと少しの辛抱だな。全員、ぬかるなよ！」
「ラジャー！」
ヒナタと団丸が声をそろえて返事した。
「俺様もラジャー！」
勢いでマハラもまねをした。
「わたくしもラジャー！」
つきあいでルビーローズまでまねた。
みんなで爆笑した。
笑いながら戦うリヴリーたちは強かった。

左からヒナタ、りぶたん、マハラと並んで、女王軍連合部隊の突破を許さなかった。
団丸は網を張った階段の入り口で番をし、チャパティは働きアリを巧みに操った。
ルビーローズは女王様らしくひとりなにもしなかったが、すでに霊力が尽きているのでしかたのないことだった。
「入り口の封鎖、終わったです！」
待望の声がかかった。
脱出路の内部に岩が積み上げてあった。モンスターはもう通れない。岩と壁の間には隙間があった。リヴリーは通れる。
「最後に土をかけて煙も通さないようにするです！」
チャパティが胸を張った。
「よし！　ゆっくりと下がるぞ！」
りぶたんは両隣に声をかけた。弾幕を張りつつ、少しずつ後退する。
ところが、リヴリーたちが下がるよりも先に、スズメバチが下がった。
出入り口にたかっていた群れが飛び去ってゆく。片(かた)

顎(あご)の兵隊アリに押さえ込まれていたスズメバチも、仲間に手伝ってもらってようやく自由になると去っていった。城の中に侵入して、階段を上がってきたスズメバチも姿が見えない。

脱出の用意が整うと同時に、突然、戦いが終わってしまったのだった。

「なんですの？　いまになって撤退かしら？」

ルビーローズがりぶたんのそばまで来た。

「うんにゃ、ちがうな。あれを見ろ」

りぶたんが指をさした先には、並んで飛ぶ三匹の巨大なスズメバチがいた。

真ん中にいるのは緑色をしている。コブラだ。

その両脇にいるスズメバチはどちらも暗い色だった。一見すると判別しづらいが、よく見ればちがいはわかった。向かって右にいるのは暗い灰色をしている。ブラックホークだ。そして、左にいるのは暗い紫色だった。

「ハインドですわ」

「そういうことだ。ついにお出ましだな」

「三匹のあの様子ですと、次の攻撃は三匹で仕掛ける

みたいですわね。アパッチもクインも、来ないのではなくって？」
「さあ、どうだろうな。ハインドの哨戒部隊は女王軍最速だ。それがこれだけ遅かったということは、クインの巣は思ったよりも遠くにあるのかもしれん。だとしたら、アパッチの部隊もクインも、もっと遅れてやってくるのかもな」
ハインドの部隊は空中警戒を主な任務としている。敵の接近を上空から監視し、巣に近づく者があれば急降下して一気に襲いかかる。そのため、長時間飛行できる持久力に、急降下に耐えうる強靱（きょうじん）な肉体、速力や旋回能力といった飛行に関するあらゆる能力が、高い水準で要求される。
つまり、女王軍で最も飛行能力に優れた者で編制される部隊がハインドの哨戒部隊だった。だから兵どもの、体の大きさも色もバラバラだった。
ブラックホーク率いる狩猟部隊のように標準的な兵で数だけを増やしたわけでもなく、コブラ率いる偵察部隊のように図体のでかい荒くれ者を集めたわけでもない。

ハインド率いる哨戒部隊は、選抜したトップガンによる精鋭部隊なのだ。
最強の軍団の、最速の部隊である。
「でも、わたしたちもう脱出するんだから関係ないよね？」
ヒナタは隣のふたりに声をかけた。
すでに脱出は目前だというのに、りぶたんとルビーローズは今後の戦いも視野に入れた話をしている。敵が下がったこの隙にみんなで脱出路に駆け込んでしまえばそれでおしまいなのに、アパッチ率いる近衛部隊や女王クインまでが参戦する事態を想定している。
おかしな話だった。
「あたしは……残る」
りぶたんはヒナタを見ずに答えた。いいにくそうだった。
「え……？」
ヒナタの声が小さい。きっと自分の耳を疑ったのだろう。
「わたくしも残りますわ」
「あたしひとりでいい。おまえは脱出しろ」

「いいえ、保安官。わたくし抜きで、この后土の城を抜けられるとお思い？」
「……なにを言ってるの？」
　ヒナタは丸い目をさらに丸くした。女王軍を相手に脱出せずに残るだなどと、隣のふたりは信じられないことを言っている。
「横穴が心配なのだ。地底トンネルはショップゲートまで延びているからな」
「これだけのスズメバチがＧＬＬに侵入したら大惨事になりますわ。わたくしには、それを阻止する責任がありましてよ。いまここで脱出するわけには参りませんの」
「でも、トンネルからは防衛隊がやってくるんだから、フーちんが呼びに行ったから、すぐにやってくるんだから――」
「いいえ」
　ルビーローズは静かに、しかしはっきりと、否定した。
「防衛隊は動きませんわ」
「プーケがそうさせないと、ルビーローズは言ってい

る。まあ、あの女が防衛隊を動かさないというのは、わからない話ではないな」
「じゃあ、わたしも残るっ」
ヒナタはその場に座り込んだ。自分も仲間に入れないなら逆らうぞ、と態度で抗議した。
「それなら、あたいも――」
「おまえはいい！」
「あなたはいいの！」
口をはさんだ団丸を、りぶたんとルビーローズが激しく拒絶した。
「……」
りぶたんはちらりとルビーローズを見た。元怪盗の団丸を相手に、ルビーローズが真剣になる理由がわからなかった。
「居残り組もたいへんだが、脱出組もたいへんだ」
りぶたんはヒナタの説得を始めた。
「外に出ても怪物密林だからな。しかも大所帯ときた。脱出組は数が多いほうがいいし、ヒナたんには脱出組を仕切ってもらわないと困る。残るのはあたしとルビーローズで充分だ」

「あら？　わたくしひとりでよろしくってよ。あなたも脱出なさい」
「バカをいうな。おまえはドゥードゥー強奪犯だぞ。逃がすものか」
「姐御、そろそろ時間切れでい。奴らぁ、陣形を整えやがった」
早く話し合いを終わらせろと、マハラがうながした。
女王軍の三部隊が配置についた。
ブラックホークの部隊はこれまで同様に、地底ホールの後方で風を起こしている。ヒナタのミサイル空爆で発生するガスを吹き流そうとしている。
コブラの部隊は地底ホールの下のほうでホバリングしている。おそらくこれは、出入り口の焚き火を突破して蟻塚内部に殴り込もうという肚（はら）にちがいない。
ハインドの部隊は地底ホールの上のほうを飛んでいる。ホバリングもせずにめまぐるしく飛び回っているのは、密集状態で飛行しても衝突などしないという自信の表れだろうか。そして、狙いはずばり、クイーン・ローズだろう。ほかの部隊のように出入り口に群がるのではなく、隙をついて突入する気なのかもしれな

い。なにしろトップガンの部隊だ。飛行能力は図抜けている。
「早くするです。煙が流れてきたです」
チャパティも急がせた。
羽風がなくなったので、煙がどんどんクイーン・ローズに入ってくる。
「うおっ！　もう間に合わねえ！　早く逃げな！　しんがりは俺様が引き受けらぁ！」
マハラが両腕を胸の前でクロスさせた。
スズメバチが動いた。上からも、下からも、一斉に向かってきた。
「ヒナたん！」
りぶたんがヒナタに手を差し出した。
「うん！」
ヒナタはりぶたんの手をつかんで立ち上がった。
しかし、ふたりは逃げようとはしなかった。中央出入り口の前に並んで立って、突撃してくる敵と向き合った。
りぶたんが左手を高く掲げた。ヒナタは右手を高く掲げた。ふたりの腕が絡んだ。がっしりと組まれた。

りぶたんは右手を横に広げた。ヒナタは左手を横に広げた。

「これは！　お下がり！　マッハ！」

ルビーローズはふたりのそばから離れながら、マハラに怒鳴りつけた。

「う！　お？」

マハラはルビーローズに気圧（けお）されて、あわてて後ろに下がった。

目の前の地底ホールはもう、スズメバチの巣窟になっている。壁も地面も天井も、なにも見えやしない。見えるのはただ、羽ばたくスズメバチのみ。

そのスズメバチが怒濤（どとう）の勢いで襲いかかってくる。

りぶたんとヒナタがふたりで掲げた手の先に、緑に輝く玉が生まれた。りぶたんが横に広げた手の先には、青く輝く玉ができた。ヒナタが横に広げた手の先には、赤く輝く玉が出現した。

「姐御、まさかこいつぁ……」

ルビーローズのそばに寄りながら、マハラがぎょろ目をしばたたかせた。

「激甚雷撃砲（げきじんらいげきほう）ですわ……！」

ぱっちりとした目に輝く玉がまぶしすぎて、ルビーローズは手をかざした。

りぶたんとヒナタは掲げた手を振り下ろした。互いの右手と左手を、扇ぐように振って前に差し出す。

三つの輝く玉がひとつになった。緑の玉と、青い玉と、赤い玉が融合して、大きな虹色の玉となった。まるで太陽のように光り輝く玉だった。

りぶたんとヒナタは声をそろえて、ふたりで呪文を唱えた。

「ジゴリヴ！」

虹色の玉が弾けた。

するどく尖(とが)った七本の稲妻が、敵に向かってジグザグに走った。稲妻は一本一本がちがう色で光っている。七色の稲妻だ。

稲妻は空中を少し走ると、一本が七本に分裂した。少し走って、また七本に分かれた。数え切れないほどに分裂した稲妻がほかの稲妻と接触すると、融合してスパークした。新しく虹色の玉が生まれて、そこからさらに七色の稲妻が飛び出した。

分裂に分裂を重ねて、稲妻は無数になった。

融合に融合を重ねて、地底ホールは地上よりも明るくなった。
無数の稲妻が明るい地底ホールを貫いた。
トップガンといえども、ハインドの哨戒部隊に避ける術はなかった。荒くれ者の集団でも、コブラの偵察部隊に耐えられる攻撃ではなかった。どれほど数が多くても、ブラックホークの狩猟部隊は稲妻よりも少なかった。
地底ホールをスズメバチの巣窟と化した女王軍の三部隊は、無数の雷に打たれた。
ハインドも。コブラも。ブラックホークも。例外ではなかった。
激甚雷撃砲「ジゴリヴ」は一・二一ジゴワットの雷をぶちまける荒技だった。
たった一発ですべての霊力を吸い取られる代わりに、どんなモンスターにもフルダメージを与えることができた。
ハインドが墜落した。コブラも墜落した。ブラックホークも落ちた。
哨戒部隊も、偵察部隊も、狩猟部隊も、すべてが地

面に転がった。
狩猟部隊のスズメバチが一匹だけ、後脚の鉤爪が天井に引っかかって落ちてはこなかった。後ろの脚一本で、天井からぶら下がった。だがそれも、引っかかりが取れて落ちていった。
「……いまの、なにさ？」
団丸はルビーローズの背中に声をかけた。
後ろ向きに下がったルビーローズは団丸のそばまで来ていた。
「リヴリー最強呪文のひとつ、ジゴリヴですわ」
ルビーローズは前を向いたまま、後ろの団丸に話して聞かせた。
「ＬＩＳＤの初代保安官に伝授して謀叛（むほん）を起こされ、長らく封印されていた呪文ですの。あなたは知らないかもしれないけれど、あのふたりは防衛隊で武勲（ぶくん）を立ててますわ。そのことが管理リヴ委員会に評価されて、ふたりがＬＩＳＤの正副（せいふく）保安官となったときに、封印を解いて特別に伝授しましたのよ。……ただし、決してひとりでは使えないようにして、ね」
ルビーローズが見ている前で、りぶたんとヒナタは

組んでいた腕を離した。
ふたりは向かい合った。
「あたしのゆく道は、ヒナたんの道」
りぶたんが右の拳を突き出した。
「わたしのゆく道は、りぶたんの道」
ヒナタも右の拳を突き出した。
ふたりの拳がガチリと噛み合った。
「そっちは任せたぞ、ヒナたん」
「そっちは頼んだぞ、りぶたん」
たとえ進む道がちがっても、自分の道は相棒の道。
相棒の道は自分の道。
ならば、どちらがどちらに進もうとも、かまいはしない。
后土の城に残るというりぶたんの決断を、ヒナタは受け入れた。
「さあ、みんな！　脱出するぞ！」
吹っ切れたヒナタは仲間たちに向かって、元気いっぱいに叫んだ。
自ら脱出路を目指して駆けてゆく。
「あなたもお行きなさい」

ルビーローズは振り向かないまま、団丸に声をかけた。
「う……うん」
団丸はルビーローズの背中を見つめて、なにやら不思議そうな顔をした。
「まるたん！　ぐずぐずしてると、置いてっちゃうぞ！」
新入りの助手をヒナタが引っ張った。
「ラジャー！」
ヒナタに引っ張られて、団丸も走り出した。
「姐御、こっちは俺様が引き受けらぁ」
「姐さん、おいらがちゃんと面倒見るです」
マハラとチャパティはそう言い残して、脱出路の中へと消えた。
ヒナタと団丸があとに続いた。
「やい、お茶っ葉。俺様が面倒見ないような言い方するんじゃねえ」
「そこ、すべるです」
「ずるっ」
脱出路の中から声が漏れてくる。

「ねえ、オーロラライトはないの？」
ヒナタの不満そうな声。
「俺様が置いといたランプはどこでえ」
「奥に忘れてきたです」
「暗くて見えねえじゃねえか」
「おいら、暗くても見えるです」
「俺様は見えねえっての」
「そこ、岩があるです」
「がんっ」
なにやら楽しそうだ。
「ハンドライトじゃあんまり明るくないから困るでしょ？　ねえ、まるたん」
「あたい、暗くても見えるです」
団丸にチャパティの口癖がうつっている。
「別嬪さんは俺様の手ぇ握ってな」
「え？　やだ。まるたんと腕組んで歩く」
「じゃあ、俺様はお茶っ葉と腕組むか」
「おいら、やだです」
「んだとぉ」
「そこ、穴があるです」

「どてっ」
声は徐々に遠のいて、やがて聞こえなくなった。
「マハラはなぜ、いちいち効果音を口にするのだ？」
居残り組のりぶたんが脱出路の暗闇に目をやりながら、ルビーローズに聞いた。
「さあ、なぜかしらね」
ルビーローズはほほえみながら抜け穴へと降りた。
「参りましょうか。保安官」
「よし、行こう」
りぶたんも抜け穴に降りた。
クイーン・ローズを去る前に、りぶたんは出入り口の端を見た。
戦士は巣を守って、そこにいた。

抜け穴の空気は澄んでいた。
煙は流れ込んでいない。けれども、息苦しさは変わらなかった。
せまい上に空気が熱い。蒸している。
城の出入り口で焚き火をたいて、スズメバチの侵入を防いだ。しかし、強行突破されてしまい、火は燃え

移った。床に敷き詰めた枯れ木や枯れ枝が延焼した。火事の熱は抜け穴にも伝わって、煙は入ってこなくても空気が熱くなっているのだった。

「オーロラライトのあるところが出入り口になっているわ。覚えておきなさい」

ルビーローズが説明した。

后土の城は石英の結晶で作られている。結晶には穴をあけられたものがあって、そこにオーロラライトが設置されている。ライトが石英を照らして、光は結晶を透過し、城全体が明るくなる仕組みだ。

抜け穴は床の下や壁の中を通っていた。床の下は天井の上でもある。結晶の透明なところからのぞくと、階下に煙が充満しているところがあった。横を見れば、隣の通路に火の手が上がっているところもあった。

抜け穴に煙が入ってきたら、巻かれて死ぬ。もたもたしていると焼け死ぬ。急いで城の外に出る必要がある。蟻塚は燃えているのだ。巣材は燃えない鉱物でも、床には可燃物を敷き詰めてある。

ふたりは先を急いだ。

「待て。止まれ」

急ぐ足を、りぶたんは止めた。
「どうかしまして？」
ふたりの横を大きな影が通り過ぎていった。白く濁った石英の結晶に影が映った。大きさと色から察するに、スズメバチだ。通路を徘徊している。
「スズメバチにも居残り組がいるみたいですわね」
「いまのだけとは限らん。いずれにせよ、見つからないようにしないとな」
「あなたはもう霊力がありませんものね」
「それはおまえも同じだろう」
「あら。わたくし、多少は回復しておりますわ。サンダーの一発くらいなら使えましてよ」
「そうか。ならば、それは最後の最後まで大事に取っておけ」
「奥の手ですわね」
ふたりは再び進み始めた。
ルビーローズは后土の城の主だ。抜け穴も熟知している。それでも、思うようには進めなかった。
「ここはだめですわ。焼けた石が熱くて通れなくってよ」

「さっきの分岐点まで引き返すか」
「そうしてくださる？」
進む方向が反転し、りぶたんが先頭になった。
分岐点まで戻るとルビーローズを先頭にして、別のルートを進んだ。
「困りましたわね」
「どうした？」
りぶたんはルビーローズの肩越しにのぞいた。少し先で抜け穴がふさがっている。どうやら通路の壁が倒れてきたようだ。漆喰代わりに石英の結晶を接合しているシロアリの分泌物が、火事の熱でだめになったものと思われた。
「壁が崩(くず)れているな」
「ええ。これで城が崩壊(ほうかい)する危険も出てきましたわ」
熱で壁が崩(くず)れたということは、床も崩(くず)れる可能性が高い。城は崩(くず)れ落ちる恐れがあるわけだ。
「どうする？　また戻るか？　さっきの分岐点の、さらに前まで戻ることになるが」
「いいえ。それでは遠回りになってしまいますわ。ここは一旦、抜け穴から出ましょう」

「なるほど。通路に出て先に進み、また抜け穴に戻るのだな」
「それが一番ですわ」
「では、さっきのランプから出るとするか」
りぶたんは後退した。少し手前にあった抜け穴の出入り口まで後戻りをした。
抜け穴の出入り口は、はねあげ式の潜(くぐ)り戸になっていた。ランプが設置されている結晶の下のほうを押すと、通路に向かって飛び出す感じで、下から上に結晶が持ち上がる。
「そんなに熱くはないな」
りぶたんはまず、潜り戸となっている結晶に触ってみた。
「帽子でマスクをしましょう」
ルビーローズは制帽を脱いで口に当てた。
りぶたんもそれに倣(なら)った。
「少しずつ開けるぞ」
りぶたんは徐々に力を込めた。
ルビーローズも手を貸した。マスク代わりの帽子を口に当てているから、ふたりとも片手だ。

潜り戸の下のほうが開いた。特に熱風が吹き込むようなことはなかった。

様子を見ながら少しずつ戸を上げていった。全開にしても問題はなかった。焦げ臭いにおいがするだけで煙はない。

りぶたんとルビーローズは抜け穴を出て、通路に立った。マスクはいらなかった。ふたりそろって、帽子をかぶりなおした。

通路は焼け跡になっていた。床に敷き詰めた枯れ木のたぐいが灰になっている。早いうちに焼けたと見えて、もう冷め始めているようだ。床の結晶もそれほど熱くはない。歩ける。

枯れ木は、床の結晶と結晶の境目にある凹凸（おうとつ）を均（なら）すために敷き詰めてあった。それが燃えてしまって床はでこぼこになったものの、結晶の平面を飛び石にように踏んで歩くことができた。

ただし、踏み抜かないように気をつけねばならない。結晶の接合は熱でもろくなっている。そのせいで壁が倒れ、抜け穴はふさがれた。床を踏み抜くと階下に転落する。下が火の海なら一巻の終わりだ。

「急ぐぞ。足元に気をつけろよ」
ふたりは細心の注意を払って、結晶の平面を飛び飛びに歩いた。
注意は足元に集中してしまい、まわりの警戒がおろそかになっていた。
風が吹いた。
熱を持った空気の中ではぬるい風だったが、なにも吹かないよりは心地よい。
とはいえ、風といっしょに低く重い音まで聞こえてきたのだから、とても涼(すず)んではいられなかった。
「ちぃ！」
振り返るとそこに、暗いオレンジ色のスズメバチがいた。
羽を動かして羽ばたいてはいるが、スズメバチは歩いていた。見れば羽が焦げている。体色が暗いオレンジ色だから、コブラが率いる女王軍偵察部隊の兵かもしれない。それなら、焚き火を強行突破したときに羽を焼損(しょうそん)したのだろう。そのせいで飛べなくなって、仲間といっしょに撤退もできずに、城の中を徘徊していたのだ。

スズメバチはじわりと迫ってきた。足取りがにぶい。よろけるような感じもある。熱と煙にやられて弱っているのだろうか。
しかし、目の前の獲物を見逃す気はないようだ。
「ここはわたくしが引き受けますわ」
「なにを言うか！　あたしが引き受ける！」
「いいから、あなたはお逃げなさい」
「あたしは保安官だ！　おまえが逃げろ！」
「わからない子ね」
ルビーローズは自分からスズメバチに近づいた。
「よせ！」
りぶたんはルビーローズの前に出ようとした。
だが、ルビーローズに耳の毛を引っ張られて、阻止された。乱暴な聖母だった。
「聞き分けよくしないと、わたくし、怒りますわよ」
ルビーローズは耳の毛をつかんだまま放さない。
「放せ！　サンダー一発でどうなるというのだ！」
りぶたんはルビーローズの手を払いのけようとしたが、逆に、いいように引っ張り回された。まるで大人に叱られる子供のようだった。

「技は使いませんわ。回復したのはわずかな霊力ですもの。もしものときに備えて、残しておきますわ」
いまのこの状況は、ルビーローズにとって、もしものときではないらしい。
「どうやって戦うつもりだ！」
「クイーン・ローズで言いましたでしょう。素手で戦いますのよ」
「ふざけるな！　いいからその手を放――」
「ごちゃごちゃ、うるせえんだよ！　小娘っ！」
ルビーローズがぶち切れた。
「……」
突然、人が変わった聖母に、りぶたんはたじろいだ。
そこにいるのはもう、聖母ルビーローズではなかった。
「こちとら、てめえがおむつの頃から修羅場ぁくぐってんだ！」
つかんだままのりぶたんの耳の毛を引っ張って、ルビーローズは自分の顔の前にりぶたんの顔を持ってきた。
「！」

りぶたんは見た。
アカゲパキケの瞳の中に、棘(とげ)が生えていた。
「技も使えないくせに、いきがってんじゃないよ！」
ルビーローズはようやくりぶたんの耳の毛を放すと、押し戻すように胸を軽く突いた。
「わかったら、さっさと行きな」
「……」
りぶたんはルビーローズの迫力に呑まれてしまって、なにも言い返せない。
かばい合うふたりにはお構いなしに、スズメバチは接近してくる。
「この虫けらがっ！　あたいを誰だと思ってやがる！」
ルビーローズはスズメバチと向かい合った。
「……」
りぶたんは、ルビーローズの背中に団丸を見た。
アカゲパキケとショウジョウダルマでは見た目がまったくちがう。自分のことを「あたい」と呼んだくらいで、イメージが重なるとは思えなかった。
「紅(あか)い薔薇(ばら)の女たぁ、あたいのこった！　舐めてると

ぶっつぶすぜ！」
ルビーローズが啖呵を切った。
しかし、モンスターに言葉は通じなかった。
スズメバチが襲いかかってきた。大顎で、リヴリーのやわらかな肉に咬みつこうとした。
「きやがれ！」
ルビーローズは制帽を投げ捨てると、スズメバチの大顎を角で受け流した。
アカゲパキケには角が生えている。角は後頭部から伸びてきて、こめかみのあたりでくるりとカールしている。
カールの部分は太く、大きい。ルビーローズはそこを使って、下からアッパー気味にスズメバチの大顎を受け流したのだった。体を斜めにして首を傾け、下を向いたカールを打ち上げた。
スズメバチは大顎の裏側を殴られて、顎が上がった。顎の上がったスズメバチは、当然、顎を下げようとする。下げればそこにはリヴリーの肉がある。咬みつくことができる。
ルビーローズはモンスターの怪力に逆らうことはし

なかった。スズメバチが顎(あご)を下げるのに合わせて、角を下げた。傾けた首を振るだけで角は下がる。そして、反対側の角が打ち下ろされる。

カールされた角が、今度はスズメバチの顔面に打ち込まれた。

顔面を角で打ち下ろされて、スズメバチの顎(あご)が下がった。スズメバチは顎(あご)を上げてもう一度咬みつこうとした。

ルビーローズは流れに合わせるだけだった。首を振る。打ち下ろした角を引き上げる。そうすると、反対側の角が下から突き上げられる。

スズメバチはまた大顎(おおあご)の裏を殴られた。

体を傾け、頭を横にしたルビーローズは、角を使ってワンツーパンチのように連打した。下から突き上げ、上から打ち下ろす。それを何度も繰り返した。

スズメバチが体の向きを変えると、ルビーローズも軽やかなステップで応じた。体を傾ける向きを変え、上下の攻撃を入れ替えたりもした。

驚いたことに、ルビーローズは本当に素手でモンスターと渡り合っているのだった。スズメバチが咬みつ

く動きに合わせて、角を上下から打ち分けている。
けれどもそれは、簡単にできることではなかった。下から突き上げる動きでスズメバチの大顎を受け流すと、モンスターのするどく尖った大顎は、顔の前を、目の前を、かすめるように通過する。
並の神経では恐ろしくてとても耐えられない。咬まれて死ぬかもしれないのに、獰猛なスズメバチの大顎に顔を近づけることなど、誰にもできはしない。それをルビーローズは何度となく繰り返して、その都度、紙一重でかわしている。スズメバチの大顎の裏を間近で眺めて、かすり傷ひとつ負うことがない。
しかも、ルビーローズはこの戦法に熟達している。ぶっつけ本番でできる芸当ではない。これまでにも数え切れないほど、同じ方法で戦ってきたはず。
ルビーローズはただ者ではなかった。
素手でモンスターと戦う女だった。
瞳の中に棘を生やした女だった。
ルビーローズは……紅い薔薇の女だった。
「！」
攻めあぐねたスズメバチが強く羽ばたいた。

焼け焦げた羽で飛ぼうとした。羽風が激しくなって、焼け跡の灰が舞い上がった。

モンスターの巨体が浮いた。

スズメバチが飛んだ。天井まで上昇してホバリングした。空中で体を起こし、腹部を折り曲げた。尻の先から毒針が出た。

「やれるもんなら、やってみな！」

紅い薔薇の女は強気だった。とことんやり合うつもりのようだ。

だが、スズメバチのほうが音をあげた。焼け焦げた羽で飛び続けるのは無理だった。

スズメバチが垂直に落下した。尻から落ちた。

床が悲鳴を上げた。

シロアリの分泌物で石英の結晶を接合して作られた床は、火事で焼かれてもろくなっている。落ちてきたモンスターの巨体を受け止める力は、もう床にはなかった。

床が抜けた。

スズメバチの落ちた場所が最初に抜けて、波紋が広がるように周囲の床が次々と崩（くず）れていった。

床は崩落(ほうらく)した。スズメバチが落ちた。ルビーローズも落ちた。

りぶたんも落ちていった。

あらがう術(すべ)はなかった。霊力は尽きている。使える技はない。

りぶたんは石英の結晶といっしょに、下の階に落ちた。下の階でも床が抜けた。まわりを結晶や枯れ木に囲まれて、さらに下の階まで落ちた。そこでもまた床が抜けた。

床が抜けるまでのほんの一瞬の間に、落ちてきた枯れ木がりぶたんの後頭部に当たった。丸太のような枯れ木だった。床が抜けたときには、りぶたんは気を失っていた。気を失ったまま、落ちていった。

数階に渡って床が崩落(ほうらく)し、ぽっかりとあいた大穴に焼け跡の灰が舞い降りていった。

それはまるで、白雪のようだった。

暖炉の火が燃え盛っていた。

暑すぎるので火を消そうとして、りぶたんは暖炉に水をかけた。火は消えたが、暑さは変わらなかった。

煙が立ち上って、焦げ臭いにおいがした。
後ろで笑い声が聞こえた。
振り返ると、フレイムがヒナタに絵を見せびらかしていた。ヒナタはケーキを焼いている。
ヒナタの家にみんなで集まっていたことを、りぶたんは思い出した。
「どうしたの？　ケガしてるじゃない」
ヒナタが笑いながら聞いてきた。
りぶたんはおでこに手を当てた。確かに絆創膏が貼ってある。いつケガをしたのか、まるで覚えがない。
「ほら、見て。誕生日のプレゼントに絵を描いてきたんだ」
フレイムが絵を見せてくれた。
真っ白な絵だった。白紙だ。線一本、引かれていない。
「うまく描けてるよね。……の感じがよく出てる」
ヒナタが絵をほめた。
誰かの感じがよく出ていると言ったようだが、名前は聞き取れなかった。
「さあ、バースデーケーキのできあがりっと」

「誰の誕生日？」
りぶたんにはわからなかった。
「なに言ってるの。……のお誕生日でしょ？」
「そうだよ。今日は……の誕生日だよ」
ヒナタとフレイムが教えてくれたが、どうしても名前が聞き取れない。
「え？　誰だって？」
りぶたんは問い返した。
名前だけが聞こえない。気になってしかたがない。いったい誰の誕生日だというのだろう。りぶたんではない。ヒナタでもない。フレイムもちがう。あとひとり、誰か足りないような気がするが、それが誰だか思い出せない。
りぶたんと、ヒナタと、フレイムと、あともうひとり。とても大切な、もうひとり。
「ああ、わかった。団丸だな。あいつのことをすっかり忘れていたぞ」
りぶたんはようやく思い出した。
もうひとりは団丸だ。たぶんそうだ。きっとそうだ。ほかには誰もいないはず。

「なに言ってるの。……のお誕生日でしょ？」
「そうだよ。今日は……の誕生日だよ」
ヒナタとフレイムが同じ説明を繰り返した。しかし、やはり名前が聞き取れない。
「どうしたの？　ケガしてるじゃない」
ヒナタがまたケガの話をした。
「ほら、見て。誕生日のプレゼントに絵を描いてきたんだ」
フレイムが真っ白な絵を見せた。
――りぶねえ。
声が聞こえた。
よく知っている声だった。
でも、思い出せない声だった。
「いま、声が聞こえたぞ？」
りぶたんは窓を見た。
誰もいなかった。
外は雪が降っていた。真っ白な雪だ。窓の桟（さん）にも積もっている。
「ほんとだ。……が帰ってきたね」
窓の外には誰もいないのに、ヒナタには見えている

ようだ。
「ほんとだ。窓の向こうに……がいるよ」
フレイムにも見えているらしい。
なにも見えないのはりぶたんだけ。
りぶたんは窓のそばまで行って外を見た。外は真っ暗だった。なにも見えない。ただ雪が降っているだけだ。人影もない。
窓を開けた。あたりを見回そうと、りぶたんは体を乗り出した。そうしたら、なにかで頭を殴られた。
りぶたんは窓から転落した。窓から落ちると、地面が遠くなった。りぶたんは落ちていった。
どこまでも。どこまでも。
落ちていった。
「ぐふっ」
遠い地面に激突した。
空から雪が降ってくる。体に降り積もってゆくのがわかる。
でも寒くはない。むしろ暑いくらいだ。体は妙に重いし、このまま寝てしまおう。
そう思った。

――りぶねえ。

声が聞こえた。知っているけれども、思い出せない声だった。

だが、忘れるわけにはいかない声だった。思い出さなくてはならない声だった。

「……う……」

りぶたんは目を開けた。

熱い空気が瞳の水分を奪っていった。うっすらと開けただけでも、目がしょぼつく。

木の上に寝ているのがわかった。へこんだところに横たわっているのだと知った。上から降ってくるのは雪ではないと気がついた。雪のように見えても、それは灰だった。

どこにいるのか、わからなかった。なにをしているのか、わからなかった。

頭がくらくらする。

「げっほ」

りぶたんは咳き込んだ。息をしづらかった。

呼吸がきついのは、降ってくる灰のせいだろうか。熱すぎる空気のせいだろうか。それとも、痛む体のせ

いだろうか。もしかすると、その全部なのかもしれない。

――りぶねえ。

声が聞こえた。

よく知っている声だった。

でも、ひさしぶりに聞いた声だった。

「ノーラ！」

りぶたんは跳ね起きた。

頭にずきんと痛みが走った。しかし、そんなことにかまってはいられなかった。

「どこだ！　ノーラ！　いままでどこに行っていた！　ずっと捜していたんだぞ！　おまえを捜していたんだぞ！」

りぶたんはくぼみから這い出した。

あたり一面、真っ白だった。煙が充満している。

なぜ、煙が充満しているのか。その理由に気づくだけの思考力は、りぶたんにはなかった。大事な制帽が脱げていることさえ気づかなかった。頭を打ち、体も打ち、煙を吸い込んで、意識が朦朧としていた。

思い出したのは、自分を姉のように慕ってくれたユ

キワラベのことだけ。
りぶねえと呼んで、なついてくれた真っ白なユキワラベのことだけ。
ユキワラベのノーラレーラがいるはずもないことは、思い出さなかった。なぜならそれは、思い出したくはない記憶だったから。
「ノーラ！　どこだ！　こっちに来い！　あたしが守ってやる！　おまえを守ってやるぞ！」
りぶたんは這(は)い回り始めた。自分がどこにいるかもわからないのだから、適当に進んだ。
――りぶねえ。
後ろから呼ばれた。どうやら方向がちがっていたようだ。りぶたんは向きを変えた。
「そっちか、ノーラ！　どこだ！　出てこい！　おまえを助けてやる！　あたしが！　おまえを！　げっほげっほ！」
りぶたんは激しく咳き込んだ。
動き回れば酸素を消費する。息をたくさん吸うようになる。
新鮮な空気があるのなら、別にかまいはしない。吸

いたいだけ吸えばいい。ところが、りぶたんのまわりにあるのは煙ばかりだ。
りぶたんは煙を吸った。大量に吸い込んだ。
「ノーラ……」
意識が遠のいていった。
少しでも前に進もうと伸ばした手が、積もった灰をつかんで、動きを止めた。
「……」
りぶたんは気を失った。
――りぶねえ。
どこからか聞こえてくるか細い声も、もはやりぶたんを起こすことはかなわなかった。
煙が動いた。
白い煙が固まって動いた。手のように伸びて、りぶたんをつかもうとした。りぶたんの手をつかんで、引っ張ろうとした。
でも、煙は煙だった。りぶたんをつかむことなど、できるはずもない。
「保安官！　どこですの！　声が聞こえましたわ！保安官！」

ルビーローズがりぶたんを捜していた。
充満する煙のせいで、どこで捜しているのか、まったく見えない。それはおそらく、ルビーローズも同じだろう。りぶたんが返事をしない限り、見つけることはできまい。
「声をお出し！　りぶたん！」
りぶたんは完全に無反応だった。ルビーローズの声は聞こえていない。
煙の手が動いた。
床に転がる石英の結晶に、大きな枯れ木が乗っている。ちょっと押せば、結晶の平面をすべりそうだ。ちょっとすべれば、下に落ちそうだ。下には木がある。落ちてくれさえすれば、床の木に当たって音がするかもしれない。
煙の手は枯れ木を押そうとした。押せるはずなどないのに、煙の手は懸命に押そうとした。
枯れ木がすべった。ほんのわずかにすべった。すべって落ちた。床の木に当たって、コンと乾いた音がした。
「保安官っ！」

充満する煙を突き破って、ルビーローズが現れた。竜巻に乗って現れた。

激しい風が渦を巻いて、煙を吹き飛ばしている。渦の中央にはルビーローズがいて、空中に浮かんでいる。

少しだけ回復していた霊力で、ルビーローズは奥の手を使ったのだった。技の名前は竜巻防壁といった。呪文はバリア・ストームだ。自分のまわりに竜巻のバリアを張るという防御的な攻撃技だったが、中央で浮かんで竜巻といっしょに空を飛ぶことが可能だった。

ルビーローズはりぶたんに覆い被さるように、真上から接近した。床の上に降り立つと、すぐさまりぶたんを抱え上げた。そしてそのまま、一目散に飛び去った。

一刻も早く脱出する必要があった。少しでも早く、りぶたんに新鮮な空気を吸わせる必要があった。

ＬＩＳＤの制帽が脱げ落ちていることにルビーローズは気づいたが、そんなものは捨て置いた。ルビーローズ自身、制帽は投げ捨てて失っている。

白い闇の世界から、りぶたんは救い出されていった。死の世界から、りぶたんは生還していった。

煙の手は、救い出されなかった。
死の世界が住み処だった。
煙の固まりが動いた。
床にはＬＩＳＤの制帽が落ちている。すっかりぼろぼろになって、灰も積もっているけれど、りぶたん愛用の制帽だ。
煙の手が制帽をなでた。
なつかしそうに。
大切そうに。
もう二度と触れることのできない制帽を、そっとなでた。
――りぶねえ。
半分に折れた白い羽根飾りが、なでられて灰を落とした。

第九章　リヴリーたちの陰謀

「ノーラ！」

りぶたんは跳ね起きた。

自分の声で目が覚めた。

目覚めると洞窟の中だった。涼しい風が吹き抜けてゆく。

隅にオーロラライトが転がっていた。カンテラ型のランプがひとつ。懐中電灯型のライトがふたつ。団丸のランプに、ヒナタと自分のライトだと理解できた。

「気がつきまして？」

後ろでルビーローズの声がした。

「つっ……！」

振り返ろうとして、りぶたんは頭を抱えた。するどい痛みが走った。

「あなたは煙を吸い込んで倒れていましたのよ」

「煙……？」

りぶたんはゆっくりと横になった。頭は痛いし、体も痛い。喉がヒリヒリする上に、目もしょぼしょぼす

る。横になって休みたかった。
横になると、少し楽になった。洞窟の奥から吹いてくる風が心地よい。空気も冷たくて、おいしい。
りぶたんは目をつぶった。ゆっくりと思い返した。
ヒナタたちと別れて、ルビーローズと抜け穴に入った。抜け穴がふさがっていたので通路に出た。そこでスズメバチと戦う羽目になった。戦ったのはルビーローズだった。スズメバチが飛んで、落ちて、床が抜けた。
そのあと、夢を見ていた。あの日の夢だった。ヒナタの家に集まって、誕生パーティをすることになっていた。ヒナタがケーキを焼いて。フレイムが絵を描いて。りぶたんもとびっきりのプレゼントを用意していた。
楽しい誕生パーティになるはずだった。
でも、ノーラレーラは姿を見せなかった。
「ノーラの声が聞こえた」
横になったまま、りぶたんはつぶやくように言った。
「……そう」
「あたしを迎えに来てくれたのだな」

「……」
「おまえが助けなければ、あたしは死んでいたのだろう。だから、ノーラが迎えに来てくれたのだ」
「それはちがうのではなくて？」
ルビーローズはりぶたんの前に回り込んだ。
「あなたには出口がわからなかったでしょう？　わかるはずがありませんわ。あれだけ煙が充満していたのですから、わたくしでも迷いましたもの」
ルビーローズは地面に正座をすると、横たわるりぶたんの顔をのぞき込んだ。
「でも、あなた。ちゃんと出口に向かっていましたのよ。気絶しておりましたけれども、伸ばした手のまっすぐ先に、出口がありましたわ」
「出口に？　向かっていた？　あたしが？」
りぶたんは両手をついて上体を起こした。不思議そうな顔でルビーローズを見上げた。
「殉職した保安官助手の声が聞こえたというのなら、彼女はあなたを助けに来たのですわ」
「あたしを助けに？　ノーラが？」
りぶたんは視線を落とした。

「……」
ルビーローズは立ち上がると、りぶたんの横を通り過ぎた。
「……ノーラが、あたしを、助けに……」
りぶたんが腕で目をこすった。
「いつまで引きずるおつもり？」
ルビーローズはりぶたんを見なかった。
「査問会（さもんかい）でも、あなたに責任はないと結論が出ましたでしょう。彼女は……保安官助手のノーラレーラは、自分の力量を過信して事故に遭ったのです。亡くなったのは決してあなたのせいではありません。それなのに、あなたが責任を感じて自分を責めるから、彼女もあの世でさぞかし苦しんでいるでしょうね」
「え……？」
「自分の過失で、姉と慕う保安官がいつまでも悲しんでいる。もしも、わたくしがノーラレーラなら、つらくて胸が張り裂けますわ」
ルビーローズは視線をりぶたんに戻した。
どすこい娘の異名を持つＬＩＳＤの保安官は、まだ横になったままだ。弱々しい背中を見せている。

「さあ、お立ちなさい」
ルビーローズは横からりぶたんに手を差し伸べた。
「立って、前に進みましょう。あなたには、あなたの進むべき道があるはずです。そしてノーラレーラにも、あの世で進むべき道がありますわ。心配しなくても、永久(とわ)に生きるリヴリーはおりません。いずれあの世で再会できる日が来ますわ。それはまだまだずっと先のことでしょうけれども、でもあなた。この世でしっかり前に進まないと、あの世で妹に叱られますわよ。ユキワラベのノーラレーラは、あなたの妹なのでしょう？」
「……そうだな」
りぶたんはルビーローズの手を取らなかった。自分ひとりの力で立ち上がった。
「あいつはあたしの妹だ。苦しませるわけにはいかない。叱られるわけにもいかない。そうとも！　姉のあたしがしっかりしなくては！」
どすこい娘が復活した。
「ところで、おまえ……」
「なにかしら？」

感謝の言葉でもかけられると思ったのか、ルビーローズがにっこりとほほえんだ。
「歳はいくつだ？」
「……」
ルビーローズの笑顔が引きつった。
「あたしがおむつの頃から修羅場をくぐっているそうだな」
「まあ、なんのお話かしら？」
「しゃべり方ももっと――」
「あら！　わたくし、いつも上品でしてよ」
「紅い薔薇の女――」
「いいえ！　わたくし、ただのルビーローズですわ。みんなは聖母と呼んで慕ってくれますの。おほほっ……！」
ルビーローズのこめかみに青筋が立ったので、りぶたんはからかうのをやめた。
あなたには、あなたの進むべき道があるとルビーローズはいった。
同じことはルビーローズにもいえる。リヴリーとモンスターを共存共栄させるアンダー・ザ・ローズ計画

なら、聞かせてもらった。それが、この世はしょせん生き地獄だと達観したルビーローズの、進むべき道なのだろう。

管理リヴとなったのも、自分の道を進むためにちがいない。

だが、ルビーローズが管理リヴであるためには、紅い薔薇の女は封印せねばならなかった。だからルビーローズは、無理をして上品ぶっているのだ。

そうはいっても、聖母と慕われるルビーローズのやさしさは本物だった。

ルビーローズは間違いなく聖母だった。おまけに姐御だった。ついでに姐さんだった。そして……紅い薔薇の女だった。

「きっと悪い夢でも見たのですわね」

ルビーローズは引きつったままほほえんでいるが、その目は笑っていなかった。深い緑色の瞳は「忘れちまいな、小娘」と脅していた。

「悪い夢、か」

「そうですわ」

「言われてみれば、夢だったのかもしれんな」

「ほら、ご覧なさい」
「ただし」
「？」
「いい夢だったがな」
「……」
ルビーローズはうつむいた。なにやら、はにかんでいるような表情だった。
「それはそうと、妙にすうすうすると思ったら、制帽をなくしたのだな」
りぶたんは頭をなでた。
ＬＩＳＤの制帽がない。おでこに絆創膏が貼ってあるだけだ。
「わたくしもなくしてしまいましたわ」
ルビーローズもりぶたんをまねて頭をなでた。
「ん？　いや、おまえは自分で投げ捨てただろう。きやがれ、とか言って」
スズメバチと素手で戦うのに邪魔になるからか、ルビーローズは制帽を投げ捨てている。
「ですからっ！　それは夢ですわ！　さっ、帰りましょう」

ルビーローズは右手で洞窟の奥を指して、りぶたんを誘った。
りぶたんがついて行きやすいように、自分から奥に向かって足を踏み出した。
しかし、りぶたんは動かなかった。
「確かにおまえは聖母だな。このあたしまで、かばおうとしてくれる。だが、あたしはＬＩＳＤの保安官だ。覚悟はある」
りぶたんはルビーローズに背中を向けた。
聖母が勧める方向の反対に向かって歩き出した。
洞窟は岩の廊下だった。オーロラランプが置いてあるから、すぐにわかった。振り返れば、案の定、静電機雷が浮かんでいる。
捕縛ネットとちがって静電機雷は兵器だから、技の効果も長く続く。すぐに効力が切れて消えてしまったのでは機雷として役に立たない。
りぶたんは機雷を避けて、突き当たりを右に曲がった。右に曲がると、そこにも機雷があった。機雷の向こうに地底ホールが見えた。上のほうが煙で霞(かす)んでいる。

横穴の出入り口に仕掛けた静電機雷は見当たらなかった。ルビーローズの薔薇の竜巻に吸い出されたあと、激甚雷撃砲で消し飛んだのだろう。

死闘の結末を確認するべく、りぶたんは横穴の出入り口に立った。

「うっ……」

地獄だった。

りぶたんに見せまいと、ルビーローズが隠そうとした気持ちも理解できる。地底ホールには凄惨な光景が広がっていた。

真っ先に目に入ったのは、侵入口に群がるスズメバチだった。我先に逃げだそうとして鈴なりになっている。譲り合わないものだから、誰も中には入れない。中に入れても、前がつかえていて先には進めないのかもしれない。

スズメバチは煙から逃れようとしていた。地底ホールには濃い煙が漂っている。熱せられた煙が天井を覆い隠している。

侵入口は天井付近にあった。最も高い場所にある穴だった。スズメバチにとって都合の悪いことに、熱い

煙が抜けてゆくのにちょうどよかった。
侵入ルートは煙突と化していた。来た道を戻ろうと必死になって、スズメバチは煙突を目指している。中に入って前に進めても、外に出るまでずっと煙攻めだ。途中で倒れれば、道はせばまり、仲間は通れなくなる。
煙突の中には、煙に巻かれて命を落としたスズメバチがたくさんいることだろう。それを思うと、りぶたんは身震(みぶる)いせずにはいられなかった。
鈴が落ちた。
侵入口に鈴なりになっていたスズメバチが、力尽きて固まりのまま落ちた。
地面には鈴の山ができていた。侵入口から落ちてきたスズメバチが、山と積み上がっている。弱って動けないのだろう。山のそこここで、羽がふるえて、脚が蠢(うごめ)く。しかし、山から飛び立つ者はいない。山を下りる者もいない。山が崩(くず)れて転がり落ちても、スズメバチはただ地面でもがくばかり。もう動かない者も多い。気絶しているのではない。煙は、リヴリーの技ではない。熱と煙にやられたスズメバチは、死んでゆくのだ。

侵入口の真下にある山は、死の山だった。死骸の山だった。まだ生きていても、それはすでに屍(しかばね)だった。

穴をふさいでいたスズメバチがいなくなったので、煙が侵入口の中に勢いよく流れ込んだ。それでも煙は減ることがなかった。

りぶたんは地底ホールの右奥に視線を移した。

后土の城はすでに焼け落ちていた。蟻塚はもはや跡形もない。巣材である石英の結晶は燃えていないが、床に敷き詰めてあった枯れ木はまだくすぶっていた。煙が上がって、地底ホールの天井を覆い、煙突から抜けてゆく。

城跡の絶壁にはいくつかの穴が見えた。掘りかけの脱出路だ。一番上にあるのがクイーン・ローズの脱出路だろう。そこに吸い込まれる煙はなかった。チャパティは、貫通した脱出路を土でふさいで煙を防ぐといっていたから、うまくやったにちがいない。

少なくとも脱出組が煙攻めに遭うことはあるまい。そして、地底ホールの悲惨な状況を目の当たりにすることもないだろう。それだけは救いといえた。

「しかたがありませんわ」

だまりこむりぶたんに、ルビーローズが声をかけた。
「防ぐつもりで火を使いましたのに、それがこんなことになるなんて」
スズメバチが侵入口でまた鈴なりになっている。動ける者が周囲から寄ってきて、煙突に逃げ込もうと先を争っている。
「でもね、保安官。この世のすべては、苦しみですのよ。生まれるのも苦しければ、生きてゆくのも苦しい。死ぬのはもっと苦しいですわね。生きるということは、苦しむということですの。スズメバチも、シロアリも、モグラコオロギも、そしてわたくしたちも。みんな、苦しみましたわ。生きるためにしかたなく、戦いましたのよ。食べるための戦い。食べられないための戦い。戦いが終わることはありませんわ。だって、わたくしたちはみんな、命を貪り喰らう生き物ですもの」
鈴が落ちていった。
「朝は元気に生きていても、夕方には骨と化す。いずれ必ず終わる命だからこそ、昼間のいまは、しっかり生きましょうよ。前を向いて、自分の信じる道を……まっすぐに！」

目の前に地獄が広がっていても、ルビーローズの瞳に迷いはなかった。
「さっ、帰りましょう」
「……」
肩に手をかけてきたルビーローズをりぶたんは見つめた。
何度も帰ろうと勧めてくる聖母を訝(いぶか)しんだ。さっきは地底ホールの惨状を見せまいとした。今度はなにを隠そうとしているのか。スズメバチの死骸の山ならもう見た。この期に及んで、隠したくなるものがほかにもあるとは思えなかった。
りぶたんは地底ホールを見回した。
それらしいものはなにも見当たらない。ルビーローズが隠したくなるようなものは、なにも……。
あった。
横穴の出入り口は目の前が崖になっている。その崖下に、不審なものがあった。
よく見れば、それは凍り付いたスズメバチだった。真下にスズメバチが倒れているということは、横穴の出入り口で攻防戦が繰り広げられたことになる。

「なんだ？　氷の息吹か？」
りぶたんは崖の下をのぞき込んだ。仕留められたスズメバチは一匹や二匹ではなかった。その数、数十。
何者かがスズメバチを攻撃している。集団で氷の息吹を使っている。単独で戦ったのではない。氷の息吹では、数十もの敵をひとりで倒すことなどできはしない。一匹凍らせる間にやられてしまう。
「いや、ちがう……！」
りぶたんははっとした。とんでもない勘違いに気づいた。
スズメバチを倒した技は氷の息吹ではなかった。氷の息吹なら、いつまでも凍り付いているはずがない。氷はすぐに溶けて、スズメバチが襲いかかってくる。
「これは……猛吹雪の息吹！」
スズメバチをまとめて仕留めた技は、猛吹雪の息吹だった。呪文はブリザード・ブレスという。そして、その使い手は……。
「ジュリエットが来たのか！」
「そういうことになりますわね」
「しかし、なぜ？」

「絵本ジャーナリストのぼくが通報して、ここでのことは防衛隊の知るところとなりましたわ。でも、プーケは防衛隊を動かしませんの」
「前もそう言ったな」
「あの人たちは、なにも変えたくはないのですわ。今日は昨日と同じでいい、明日は今日と同じでいい。それが、あの人たちミューミュー派の考えですの。ミュラー博士がお戻りになられるまで、なにも変えずにいたいのですわ」
「博士はいないのか？」
「ええ、もうずっと。もちろん、あなたは研究室にいるのが人形だってことはご存じですわよね？」
「当然だ。見ればわかる」
「あの人たちはなにも変えたくはないから、一切合切なかったことにしてしまいますの。地底にトンネルはなかった。ホールも城もなかった。スズメバチとの戦いなんて起こらなかった……というわけですわ」
「あたしたちは見殺しか……」
「助かるのなら、助かればいい。だめなら、だめでいい。どちらにせよ、関わらないでおく。そういうこと

でしょうね」
「それでなぜ、ジュリエットがやってきたのだ？」
「やはり確認はしておきたかったのでしょう。でも、プーケは防衛隊を抑えなければなりませんから、自分では見に来られませんわ。そこで、双子の姉妹であるジュリエットに依頼したのではないかしら」
「それで防衛隊は来ずに、ジュリエットが……」
「ジュリエットの配下には事務屋と技術屋しかおりません。実戦部隊は持っていませんから、おそらくひとりで動いたのでしょう。あるいは、こんなときのための汚れ役を帯同（たいどう）したかもしれませんね」
「ダークヤグラだな」
「あなたに余計なものを見せたくなかったのは事実ですわ。でも、急いでいるのも事実でしてよ。早く、外に出ましょう。……出口があるうちに」
「出口をふさぐというのか……！」
「考えられない話ではないでしょう？　地底トンネルはなかったことにするのですから、当然、封鎖しますわ。そうすれば、モンスターのＧＬＬ侵入も防げますものね」

「あたしたちを平気で閉じ込めると？」
「可能性はありますわ。ジュリエットは氷のリヴリー。冷たい女ですもの。ダークヤグラは闇のリヴリー。手を汚すことを厭いませんもの」
「く……」
　りぶたんは拳を握りしめた。
「ここでのことは忘れておしまいなさい。ＬＩＳＤの保安官となって、あなたも少しはわかってきたでしょう。リヴリーアイランドには、リヴリーを支配する者たちがいます。力を持った者たちです。あなたとヒナタの激甚雷撃砲も、その者たちに与えられた技ですのよ。あなたの憤りは理解できますけれども、逆らいようがありませんわ。なぜならば、その者たちに力を与えたのはミュラー博士ですもの。そして、忘れてはならないのは、その者たちが決して悪ではないこと……ですわね」
「仲間を見殺しにする奴らが、悪ではないだと？」
　りぶたんはルビーローズをにらみつけた。
「では、あなたは、ここのスズメバチを見殺しにせずに、救ってやれるのですか？」

「それとこれとはちがう！」
「いいえ、ちがいません。どちらも同じ命ですから。ミューミューたちは、あなたよりもずっと重い責任を負って、リヴリーアイランドを守っているのです。たとえ、そのやり方が気に入らなくても、あの人たちが重責を果たしているという事実だけは、尊重しなければなりません。だって、あなたもわたくしも、ずっと守られてきたのですもの」
「……」
りぶたんは視線を下げた。にらむ相手が見つからずに、地面を凝視した。
「リヴリーアイランドをどう守るか、あなたは考えたことがあって？　モンスターから守るのではなくってよ。モンスターも含めた、わたくしたちのこの世界を、いかに守り、維持してゆくか。……どう？　あなたはそこまで踏み込んで、考えたことがあるのかしら？　りぶたん？」
ルビーローズは保安官と呼ばずに、名前で呼んだ。
「……いや……」
りぶたんは小さな声で答えた。

世界を守ることなど、考えたことはなかった。
「あの人たちはそれを考え、実践していますわ。もしもあなたが、そしてわたくしが、なにかを変えようというのなら、あの人たちに取って代わる覚悟が必要ですわね。……新しい世界を望むのであれば」
ルビーローズはりぶたんを残して、歩き始めた。
ひとりで地底ホールから去ってゆく。
ついてくるなら、ついてこい。いやなら、ひとりで好きにしろ。背中がそう語っていた。
「……」
りぶたんはもう一度、地底ホールを見回した。
女王軍の大物三匹の姿はない。無事に逃げていったのだろうか。
それにしても、長い一日だった。事の起こりは、ドゥードゥー強奪事件だ。それが女王軍との戦争に発展した。戦争は終わったが、りぶたんの気持ちは暗く沈んだままだった。
敵は、どこにもいなかった。
ルビーローズは金目当てではなかった。リヴリーとモンスターの共存共栄を望んでいた。

スズメバチは生きるために獲物を狩ろうとしただけだった。
シロアリとモグラコオロギは自分たちの命を守ろうとした。
リヴリーたちは、それぞれの信念と友情に従って、戦いに身を投じた。
手を出さずに傍観した者にも、世界を守るという大義があった。
憎むべき悪は存在しなかった。
侵入口から煙が抜けてゆく。
減った空気を埋めようと、横穴から涼しい風が吹いてくる。
風が地底ホールに吹き込んで、煙が渦を巻いた。
冷たく澄んだ空気と、熱く濁った空気が混ざり合った。

岩の門をくぐろうとしたら、かすかに音が聞こえた。
カン、カン、と断続的に聞こえてくる。なにか工事でもしているようだ。
ルビーローズも足を止めたから、音には気づいたは

ずだ。しかし、なにも言わなかった。地底ホールからここまでずっと、ふたりは無言で歩いてきた。
門をくぐって岩の回廊を進む間も、音は聞こえ続けた。だんだんと大きくなる。
ふたりがつづら折りを抜けようとしたら、音がパタリとやんだ。
岩場を抜けて、地底トンネルに出た。モグラコオロギが四方を押し固めた土のトンネルだ。
ルビーローズはオーロラランプをかざした。りぶたんはオーロラライトの光を飛ばした。
トンネルに人影はなかった。
ただ、地面になにかがあった。ちょうど、分岐点のところだ。まっすぐ進めば、ダークヤグラ要塞の近くに出る。右に曲がれば、地ノ塔経由でショップゲートに出る。分岐点は地底トンネルの要所に当たる。
その要所に柵が構築されていた。丸太が地面に打ち込んである。有刺鉄線を巻いてある。壁にも杭が打ち込んであって、有刺鉄線を張り巡らせる途中だった。
モンスターを通さないための柵だと、ひと目でわかった。リヴリーは柵の間を余裕で通れる。

柵は作りかけで放置されていた。未使用の丸太が地面に転がっている。有刺鉄線の束も隅に置いてある。丸太を打ち込むのに使用したハンマーも、放り捨ててある。なにより、未完成なのでモンスターを防げるほどに大きくはない。

りぶたんはもう一本のオーロラライトをつけた。

ルビーローズが持っているのは団丸のランプで、りぶたんは自分のライトとヒナタのライトの両方を手にしている。

一本目をまっすぐ向けた。誰もいなかった。

二本目で右を照らした。やはり誰もいない。

トンネルの両方を同時に照らしてみても、誰の姿も見えない。

後ろは、たったいま通ってきた道だ。念のため振り返ってみたが、当然ながら人影は見当たらない。

確かに杭を打つ音が聞こえていた。その証拠に柵は作りかけだ。しかし、トンネルの中にひとの気配はまったくない。走っても、飛んでも、隠れることは不可能だ。地底トンネルはどちらも先まで見渡せる。

ということは、この世に存在しない者が柵を作って

いたことになる。さっきまでここに、幽霊がいたことになる。
「？」
りぶたんの手に、ルビーローズが手を重ねて、押し下げた。
明かりで照らすなという合図だ。りぶたんはオーロラライトを二本とも下に向けた。
「お役目、ごくろうさまですわ」
誰もいないのに、ルビーローズは柵作りの労をねぎらった。
「たいしたお礼はできませんけれど、どうぞ、みなさんで召し上がれ」
ルビーローズはフードボックスから見たこともない食べ物を取り出した。白い膜が薄くふくらんでいる。中が透けて見え、底に桜色の固まりが入っている。それが風船のように空中に浮かんでいる。風船のようだといっても大きくはない。ひとロサイズだ。
あるだけ全部取り出したのか、数はちょうど十個だった。
「わたくしが作りました和菓子ですのよ。ケセランパ

サランの粉を薄く焼いてふくらませて、中にフウセンコガネのあんこを入れましたの。お疲れのときは甘いものがよろしいでしょう？　このたびは、わたくしの不手際でほんとうにご迷惑をおかけしましたわ。ごめんなさいね」

ルビーローズは深々と頭を垂れた。

「どれどれ」

りぶたんは空中に浮かぶ和菓子をつまむと、口の中に放り込んだ。右手のライトは左脇にはさんでいる。ルビーローズが止める間もないほどの、早業のつまみ食いだった。

「これ！　はしたないっ」

「……」

ガツガツと、ほかのことには目もくれずにミミマキムクネががっついている。

残りを食べられないように、ルビーローズは宙に浮かぶ和菓子を指先で押して遠ざけた。

「うむ。これはうまい」

「なんですか、あなたは。柵作りのみなさんにお出ししたのですよ」

「毒味だ、毒味」
「毒など入っておりません」
「フウセンコガネのあんこが実にいい味だな。もっちりしていて口の中でも崩(くず)れにくく、噛みごたえがある。ほんのり塩味もきいていて、甘さが引き立つぞ。ケセはちょっぴり甘いから、皮に使うと甘味がくどくなるかと思ったが、これだけ薄く焼くと邪魔な味もしないな。結果、中のあんこをたっぷり楽しむことができる。うむ、絶品だ。そんなわけで、もうひとつ……」
「いけません！」
ルビーローズはりぶたんが伸ばした手をはたいた。
「ほんとうにもう。噂どおりの食いしん坊さんですわね」
「今日はいろいろあって、おやつ抜きだったからな。飢え死にするかと思ったぞ」
「おやつを抜いたくらいで死にません」
「あたしはミミマキムクネだからな」
「ミミマキムクネでもっ」
ルビーローズは腰に手を当てて、食い意地の張った保安官をにらんだ。

「……」
雑談に興じながらも、りぶたんは周囲を見回した。
絶対に誰もいない。しかし、誰かがいるはずなのだ。
幽霊が柵を作るわけがない。
「さあ、行きましょう。それではみなさん、ごきげんよう」
ルビーローズはトンネルを右へと進んだ。
りぶたんもついて行った。
ふと、視線を感じて振り返ると、地面に打ち込まれた丸太の影が不自然に動いた。影の外にはみ出していた黒いものが三つ、すばやく影の中に隠れたところをりぶたんは目撃した。
「黒霞囚(くろかすみしゅう)か？」
りぶたんは小声でルビーローズに聞いた。
「それは都市伝説でしょう？」
「キャリア官僚だけが噂する都市伝説か。とぼけるな」
「ちなみに、どのようなお話かしら？」
「いいだろう。聞かせてやろう。……地下牢獄の獄長ダークヤグラには、絶対服従を誓う隠密囚人(おんみつしゅうじん)の配下

がいる。終身刑の受刑者で編制されており、これを黒霞囚と呼ぶ。専用技のシャドー・プリズナーを用いて体を黒い霞に変化させ、暗闇や影に潜む……という話だ」
「まあ。おもしろそう」
ルビーローズの声が白々しい。
「あたしとヒナたんは、ダークヤグラを要塞から落ち延びさせた」
「そうでしたわね」
「あのとき、要塞で見たぞ」
「なにをですの？」
「動く影をな」
「……」
「そしていまも、影は動いた。白状しろ。プーケは防衛隊を動かさない。ジュリエットは実戦部隊を持たない。ならば、どこの誰がこんな危険な場所で作業をするというのだ。理由は知らんが、損な役回りを押しつけられるのは、いつだってダークヤグラなのだろう？
たったいま、あたしの目の前で誰もいないトンネルに話しかけておきながら、いまさらとぼけてどうする。

……それに、あたしはもっと別の話を聞きたいものだ」
「なにかしら」
ルビーローズの声から、上品さが失われていた。冷たく、脅すような声だった。
しかし、りぶたんはかまわずに話を続けた。
「ダークヤグラには黒霞囚がいる。プーケには防衛隊がある。ジュリエットは技術者集団を持っている。では、ミューミューにはなにがあるのだ？　派閥の領袖でありながら、あいつだけは配下を持たないというのは解せない話だ。それでは、背かれたら終わりではないか。管理リヴ委員会の委員長というだけで、ほかの要職にも就いていないしな。……そこで、おまえに聞こう。ミューミューは、いったいどんな手駒を隠し持っているのだ？」
「……」
ルビーローズは足を止めると、りぶたんを見つめた。
「あたいもそいつを知りたいのさ」
それは、紅い薔薇の女としての、回答だった。
「わかったかい、小娘」

「……うむ」
りぶたんはうなずいて、引き下がった。
話はそのとおりだから、それ以上追及するな。ルビーローズはそう言っていた。
ふたりは歩き出した。また無言に戻った。
しばらくすると、後ろから音が聞こえてきた。カン、カン、と杭を打つ音だった。

無言のまま地底トンネルを歩き続けて、地ノ塔まで帰ってきた。
死んだモグラコオロギはそのままになっている。ルビーローズは左平次に別れを告げた。
破られた地ノ塔の壁はすでに修繕されていた。塔の中には入れない。
入れないのではしかたがない。ふたりはそのまま地ノ塔を通り過ぎた。ショップゲートに向かった。
りぶたんには未知のコースだったが、地の底の景色はなにも変わらなかった。途中から上り坂になったくらいで、代わり映えのしないルートだった。
上り坂の手前には柵が構築されていた。丸太と有刺

鉄線の柵だ。地面と壁面に杭が打ってある。杭は有刺鉄線で結ばれて、トンネルの空間をふさいでいる。それが三ヶ所もあって、真ん中の柵には前後の柵からも棘(とげ)のある鉄線が延びていた。

モンスターの侵入を防止するための柵だった。すでに完成している。モンスターが無理に押し通ろうとすれば、有刺鉄線に身を裂かれることになる。

柵はあっても、リヴリーの通行には支障がなかった。ふたりは隙間を難なく通り抜けた。

そのままだまって坂を登り続けると、地底トンネルは突然終わった。壁に突き当たった。壁といっても、ただの土壁だ。トンネルの掘削をやめただけのようだ。

壁にははしごがかかっていた。りぶたんはオーロラライトを天井に向けた。はしごは天井の穴へと続いている。穴の中は漆喰で塗り固めてあるのか、白くなっていた。

天井の穴が出入り口なのは、見ればわかった。リヴリーだけが外に出られるようになっている。あれほど心配したのに、モンスターがすんなりとＧＬＬに侵入できるような構造にはなっていない。配慮があって当

然といえば当然なのだが、りぶたんはいささか拍子抜けした。

「あら？　スズメバチがここまでやってきたら、行き止まりに困って天井を掘り崩しますわ。ふたの隙間から外のにおいが漏れてきますものね。物資を搬入しますから、ここはあまり深くありませんの。ですから、万一に備えてわたくしたちが苦労したことは、無駄ではなくってよ。……結果はともあれ」

ルビーローズは事情を説明して、りぶたんをなぐさめた。

ショップゲートそばの出入り口は、ルビーローズが言ったように物資の搬入口だった。地ノ塔の壁を破り、そのあと補修するのに必要な道具類一式を、ここから運び入れている。トンネルがあまりに深いと搬入するのも大仕事だ。また、ルビーローズ一味が頻繁に使用する出入り口でもあるから、浅いほうが利便性はいい。

浅いと掘り崩すのも容易になる。確かに、スズメバチは侵入しなかった。黒霞囚と思しき者どもがモンスター侵入防止用の柵を構築してもいる。だが、それは結果論だ。事前にわかることではない。死にかけてま

で地底ホールの横穴を目指したことは、決して無駄ではなかった。

ルビーローズがはしごを登り、りぶたんが続いた。

両手に懐中電灯型のオーロラライトを持っているから、りぶたんには登りにくかった。それでもなんとか、登り切った。

穴を出ると、小屋の中だった。資材置き場かなにかのようで、めぼしい物はなにもない。ショベルだのレーキだのが置いてある。ショベルで穴を掘って、レーキで落ち葉をかき集め、堆肥にでもするのだろうか。除雪用にスノーカートまで置いてある。

そんな小屋の隅に、地下への出入り口はあった。なんでもない床板がそのまま扉になっている。出入りするところを見られないようにと、すぐ横に備品を陳列したラックを配置してある。

ルビーローズは床の扉にマットをかぶせようとして、手を止めた。おそらく、ルーチンワークでいつものように体が動いたのだろう。トンネルも出入り口も、すでに露見している。いまさら隠す理由はなかった。

照れ隠しなのか、ルビーローズは思い出したように

オーロラランプをりぶたんに押しつけて、返却した。ランプとライトでりぶたんの両手が埋まった。

ふたりは小屋の外に出た。小屋はショップゲートそばのプロテクションゾーンにあった。灌木(かんぼく)に囲まれていてもだいたいの位置はつかめる。火ノ塔の赤い屋根が遠くに見えている。

あたりは人気(ひとけ)もなくて静かだった。プロテクションゾーンに一般のリヴリーはやってこない。

地底に長時間いたので、地上はまぶしかった。まだ真昼のように思えた。

しかし、そろそろ日が暮れようとしている。西の空が赤くなっている。真上には雲が広がっていた。どうやら、ひと雨来そうな気配だ。北西から真っ黒な雨雲が近づいてくる。

ルビーローズはひとりでさっさと歩き出した。目指す方向には、巨大なチューリップが見える。灌木の上から青い花が何本ものぞいている。リヴリーアイランド原産の固有種、モンスターチューリップだ。ふつうのチューリップとはちがって大木のように育つ。

青いモンスターチューリップがまとめて植えられて

いるのは、パキケフーズの裏だけだ。ルビーローズがどこに向かうのかはすぐにわかった。りぶたんはルビーローズを呼び止めずに、後ろからついて行った。

灌木を縫うようにして歩くと、五本も並んで咲き誇るモンスターチューリップの根元に出た。茂みの間からパキケフーズの裏側が見える。スタッフオンリーとペイントされたドアがある。

店には替え玉のダミーローズがいる。本名は不明だ。りぶたんとヒナタが便宜上、そう呼んでいるにすぎない。

裏からは見えないが、ダミーローズは表で接客しているようだ。パキケフーズはいつもどおり、買い物客で賑(にぎ)わっている。楽しげな会話が聞こえてくる。ルビーローズさん、と呼びかける声がする。

客の誰もが、目の前にいる替え玉を本物だと思い込んでいる。いや、もしかすると替え玉自身も、自分が本物だと信じ込んでいるのかもしれない。

黒い雨雲が頭上を覆って、見る見る日が陰った。

ダミーローズが店の裏に姿を見せた。スタッフオンリーのドアを開けて、店の中に手を伸ばし、明かりを

つけた。
パキケフーズがライトアップされた。風でも入れようと思ったのか、そのままドアを閉めずに、ダミーローズは店の表に戻っていった。
店の裏口から、表がよく見えた。
明るい光の中に、偽者のルビーローズがいた。注目されて、楽しそうに働いている。みんなに話しかけられている。
暗い藪の中に、本物のルビーローズがいた。人目を避けて、自分の店を見つめている。誰からも話しかけられずにいる。
ふたりの立場は逆転していた。
そして、そのまま元に戻らない恐れがあった。
本物のルビーローズはドゥードゥー強奪犯だ。逮捕されて裁かれ、刑に服することになる。しかし、それはあまりにショッキングな出来事だから、管理リヴ委員会によって真実は隠蔽(いんぺい)されるかもしれない。つまり、偽者のルビーローズは事件に無関係の本物として扱われ、本物のルビーローズはよく似た偽者として地下牢獄に送られるのだ。ありえない話ではない。

「なぜだ……」
思わず、りぶたんの口をついて声が出た。
自分の店なのに、暗がりに隠れてのぞき見することしかできないルビーローズが不憫だった。りぶたんを守って素手でスズメバチと戦った大きな背中が、いまはとても小さく見える。
「なぜ、人気者の地位を捨ててまで、犯罪者となる道を選んだのだ？　おまえの計画が管理リヴ委員会に承認される可能性はあるのか？　いや。ないからこそ、強奪事件なんぞを起こしたのだろう。ならば、アンダー・ザ・ローズ計画は妄想にすぎん」
「……」
ルビーローズはなにも答えない。ただじっと、自分の店を見つめている。
「おまえは店を手放すことになったのだぞ。妄想を実現しようと夢見て、多くのものを失ったのだ。得たものなど、なにひとつとしてありはすまいに。……それとも、おまえ。ほんとうに世界を変えようとしているのか？」
ぽつりと雨が落ちてきた。大粒の雨だった。夏には

まだ早い。季節外れの夕立だろうか。
雨脚(あまあし)が激しくなって、パキケフーズが大騒ぎとなった。買い物客があわてて帰ってゆく。ダミーローズも走ってきて、裏口から店の中へと消えた。スタッフオンリーのドアが閉じられた。
パキケフーズが静まりかえった。
聞こえてくるのはただ、雨の音だけ。
激しく降りしきる、雨の音だけ。
モンスターチューリップの大きな葉が雨を受け止めてくれるから、りぶたんとルビーローズはあまり濡れなかった。
ルビーローズが頭上を見上げた。葉を打つ雨音が騒々しい。
「あたいは……ほんとうは、世界なんて……どうでもいいのさ」
か細い声がりぶたんの耳に届いた。風が吹けば流されてしまいそうな、弱々しい声だった。
「いまさら世界が変わったって、あの子たちは帰って来やしないよ」
ルビーローズが視線を落とした。

消え入りそうな声で、りぶたんに話して聞かせた。
それは、ルビーローズの家族の話だった。
妹、ガーネットローズの話だった。
姪、ストロベリーローズの話だった。
世界で一番きれいな赤い色をした、母と幼い娘の、悲しい物語だった。
ルビーローズの大切な家族。
いまは、もういない家族。
雨が降っている。空が泣いている。大粒の涙をこぼしている。
うつむくルビーローズの顔から、雨粒が滴り落ちた。
りぶたんは足を前に踏み出した。モンスターチューリップの葉の下を出た。天を仰ぐと、降り注ぐ雨が顔を洗い流してくれた。
冷たい雨だった。
りぶたんの耳の毛が濡れて重くなっている。いつもより、垂れ下がっている。両手でオーロラライトを抱えているから、耳の毛をしぼって水気を切ることもできない。
やがて、雨はあがった。雨雲が通り過ぎていって、

あたりが明るくなった。雨に洗われた空が澄み切っている。西の空は赤く染まり、東の空には虹が架かっている。

ダミーローズが裏口から出てきた。モップとスクイザーを持って、あわただしく表に回った。客が来る前に拭き掃除をするつもりのようだ。雨に濡れた石畳をモップで拭き取り、モップが吸った雨水はスクイザーでしぼり取る。濡れた石畳に足をすべらせて、転倒する客が出ないように。

感心するほどに、まじめに働いている。替え玉だからと、手を抜いていない。替え玉だからこそ、手は抜かない。本物よりも、本物らしく。

もしかしたら、パキケフーズはもう、ダミーローズの店なのかもしれない。いまさら戻ったところで、ルビーローズに居場所はないのかもしれない。

「……」

りぶたんはそのまま足を進めて、茂みを抜けた。

プロテクションゾーンから出て、パキケフーズのある広場に出た。

「ああ、いかん。うっかり出てしまったぞ」

わざとらしく、りぶたんは独り言をいった。
「ＬＩＳＤの制帽がないから、プロテクションゾーンにはもう戻れんな」
前を向いたまま、りぶたんの独り言は続く。
「しまった。保安官事務所にも入れんぞ。……そういえば、フレイムはどうしているのだ？　防衛隊が動かなかったのはしかたがないとして、そのあと戻ってこなかったところを見ると、憲兵にでも取っ捕まったか。どれ。ひとつ、迎えに行ってやるか。世話の焼ける奴だな、まったく」
ずいぶんと説明っぽい独り言だった。
りぶたんは二、三歩あるいてから、いずこともなくムーブした。
うっかり者の保安官が去って、あとにはドゥードゥー強奪犯が残された。
ルビーローズはパキケフーズに背を向けた。日の当たる世界のすぐそばまで戻っておきながら、背中を向けて、来た道を引き返した。
茂みを抜けると、ルビーローズの目の前にＬＩＳＤが立ちはだかった。

強奪犯を抜け目なく待ち構えていたのは、黒いカウボーイハットをかぶった保安官助手だった。
「あら？　あなた、盗み聞きしたのね？」
「うんにゃ。雨が激しくて、話は聞こえなかったさ」
「そう……」
「でもさ。あたいにもあんたの話を聞かせてもらおうじゃん。なんで、保安官はあんたを見逃したのさ？」
どすこい娘と呼ばれる保安官が、職務を放棄して犯人を見逃したのだ。ルビーローズがりぶたんに聞かせた話に、団丸は強い興味を示した。
「あなたには、別の話をしましょう。魔島（まとう）の英雄伝説はいかがかしら？」
「魔島って……まさか、あの？」
「そう、モンスターアイランドですわ。あなたも噂を聞いたことがあるでしょう？　海の向こうに浮かぶ、怪物の島。そして、島流しにされた哀れなリヴリーたち」
「そんなたわいもない噂話に、あたいがだまされるわけないじゃん」
「魔島の英雄は、あなたと同じショウジョウダルマで

すのよ」
「え……？」
「不思議な力を持った、ショウジョウダルマの英雄。島流しにされたみんなから、親分と呼ばれて尊敬された老人。どうかしら？　聞きたくはありませんこと？」
「……聞かせてもらおうじゃんか。でもさ、うそだったら承知しないからね」
「わたくし、うそは申しません。それにしても、おかしな話ですわ。管理リヴ委員会の裁決は、最高刑が地下牢獄での終身刑ですのに。ＬＩＳＤの即決裁判権は、軽犯罪にしか認められていませんのに。いったい、どこの誰が、島流しなんてむごい罰を与えるのかしらね？」
「……それで？　いいから、続けなよ」
「では、お話ししましょう」
ルビーローズは団丸に話して聞かせた。
魔島は海の向こうにあった。怪物密林を抜け、ミュラー山脈に登ると、遠くに浮かんでいるのが見える。
リヴリーアイランドの隣の島ではあるが、間にはジ

ュリエット海溝と呼ばれる深い海が横たわっていた。リヴリーアイランドとモンスターアイランドを行き来するには、外洋を航海する技術が必要だった。いかだでは到底渡れない。

飛行リヴが空を飛んでも渡るのは難しい。近いように見えても遠く離れているし、海の上では休憩もできない。そもそも、一般のリヴリーにはリヴリーアイランドを抜け出すことすら困難だ。アウターゾーンには一歩も踏み込めない。

うまいこと抜け出したとしても、風の強い日には海を渡ってくるモンスターと遭遇する危険がある。長い糸を風に乗せて飛ぶジョロウグモなら避けられるだろうが、オニヤンマに出くわせば命はない。

そんな海の向こうにも、リヴリーはいる。島流しにされたのだ。

島流しは死刑も同然の刑罰だった。リヴリーはリヴリーを殺せない。そこで、魔島に送り込んでモンスターに殺させる罰ができた。それが島流しの刑だ。

どんな罪を犯せば島流しにされるのか。それはわからない。誰が裁くのか。それもわからない。どうやっ

て魔島に送り込むのか。まったくわからない。
魔島に流されたリヴリーでさえ、なにも知らないのだという。毎日をふつうに暮らしていて、ある日、気がつくと島流しにされていたのだという。
島流しは罰ではなくて、人身御供（ひとみごくう）だとする意見もある。モンスターの神に捧げられたのだと。魔島のモンスターがリヴリーアイランドに襲来することのないようにとの願いを込めて、生きたまま捧げられたのだと。
いや、そうではなくて、秘密を知ってしまった者を消すのが目的だという者もいる。その証拠に、キャリア官僚も流されてくるのだとか。なにも知らずに流された者は、本人が気づいていないだけで、なにかを見たり聞いたりしたために始末されたのだという。
真実はなにもわからない。話し合っても埒（らち）が明かない。それどころか、落ち着いて話をする暇さえない。
魔島は怪物の島だ。そこら中にモンスターがいる。
流されたリヴリーたちは逃げ惑い、ちりぢりになり、人知れず散っていった。
そんな地獄に、ある日、ひとりの老人が流されてきた。ショウジョウダルマの老人だった。

老人は自分が流された理由を知っていた。島流しにした張本人の存在も知っていた。しかし、意味がないとして、誰にも語らなかった。代わりに老人は、流されたリヴリーたちに夢を与えた。

砦（とりで）のような村を作って、生き長らえていたリヴリーたちを集めた。怪物の島に、安全に暮らせるリヴリーの村が誕生した。食料も栽培した。リヴリーたちは果物を食べるようになった。

モンスターの撃退にも慣れ、自給自足できるようにもなって、流されたリヴリーたちに笑顔が戻ったとき、老人は次の行動に出た。

モンスターを飼い慣らして、軍団としてまとめ上げた。

老人には不思議な能力があった。いや、能力ではなくて、魅力なのかもしれない。老人が幼虫から育てたモンスターは、成虫になっても老人によくなつき、言うことを聞いた。

もちろん、モンスターの飼育には反対するリヴリーも多かった。しかし、なぜモンスターを飼い慣らすのか、その理由を老人が明かしたとき、反対する者はい

なくなった。
老人は言った。敵は天にあり――と。
それまで、リヴリーたちを島流しにした者について語ることを拒んでいた老人だが、ついに、その敵が空にいることを明かしたのだった。
空に浮かぶ城に敵はいる。城の名は「皇天（こうてん）の城」という。
皇天后土という言葉がある。
天の神と地の神を意味する。
皇天の城ならば、天の神の居城ということになる。
敵が空にいる以上、攻め込むには天翔（あまかけ）る翼が必要だ。手勢もなしに挑めば返り討ちにあう。ゆえに、モンスターの軍団が必要となる。翼として。兵として。
老人は天に攻め上り、支配者を打ち倒して、島流しにされたリヴリーたちを救うつもりだった。そればかりか、リヴリーとモンスターが争わない社会まで目指していた。
最初は協力しなかったリヴリーたちも、老人が実際にモンスターを飼い慣らすのを見て、手を貸すようになった。自分たちが元いた世界に戻れるかどうかは、

老人と、モンスターの軍団にかかっている。
もしも、モンスターの軍団が敵を打ち倒してくれたなら、命の恩人である。今度はリヴリーたちがモンスターを守る番となる。恩返しをするのだ。
怪物の島で、恐ろしい怪物と、か弱いリヴリーとに、友情が芽生えた。
束の間の友情だった。
老人はモンスターの軍団を率いて天に攻め上った。
しかし、二度と再び、戻っては来なかった。
流されたリヴリーたちは、いまも島にいる。
「なにさ、それ。ただの作り話じゃん！」
団丸が憤慨している。
「あんたさ、あたいが地下牢獄で人捜ししてたの知ってて、そんな嘘話（うそばなし）でだまくらかそうとするんだ？最低じゃん！」
「あら？　うそみたいな話だったかしら？」
「あたいを誰だと思ってるのさ！　舐めてるとぶっつぶすよ！」
「まあ。どこかで聞いたような言い種（ぐさ）ね」
ルビーローズは心底うれしそうに笑った。

それが逆に、団丸の癇(かん)に障(さわ)った。
「あんたねっ！」
「ショウジョウダルマはふたりいるのよ」
「……」
ルビーローズのひと言で、団丸が沈黙した。
「作り話なら、英雄はひとりでよろしいのではなくって？　わざわざ二人組にする必要はありませんわ。でも、このお話に登場するショウジョウダルマは二人組ですの。島のみんなはなぜ、老人を親分と呼んだのでしょうね？　答えは簡単ですわ。もうひとりのショウジョウダルマが、老人を叔父貴(おじき)と呼んでいましたのよ」
「叔父貴……」
「ええ。そうですわ。ふつうはそんな呼び方しませんもの。それで老人は自然に、みんなから親分と呼ばれるようになったのですわ」
「二人組……」
「どうかしら？　親分と呼ばれるショウジョウダルマ。その親分を、叔父貴と呼ぶショウジョウダルマ。そんな二人組に、心当たりはなくって？」

「心当たりなんか、あるもんかっ」
団丸はなぜかカウボーイハットを脱いだ。
そして、脱いだ帽子をすぐまたかぶった。
「残念ね」
「だいたい、なんであんたはそんな話を知ってるのさ」
「魔島を脱出する者は少なくないそうよ。そのほとんどは深い海に呑まれてしまうそうだけど、中には、命からがらリヴリーアイランドにたどり着く者もいるのですって」
「じゃあさ、会わせてもらおうじゃんか」
「無理ですわ。だって、このお話は伝説ですもの。魔島の伝説。英雄の伝説。……生還者の伝説」
「なんだ、誰も生きて帰ってきてないんじゃん」
「証拠はありませんわね」
「……」
団丸はまた帽子を脱いだ。
視線を落として、カウボーイハットのシェイプをしきりにいじっている。考え事をしているようで、上の空だ。

「わたくし、行ってもよろしいかしら？」
「え？　あ、ああ。いいよ、勝手にどこでも行っちまいなよ」
団丸は足を引いて体を横に開いた。
ルビーローズの前をさえぎる者はいなくなった。
そのまま歩み去ろうとして、ルビーローズは足を止めた。団丸に背中を向けた状態で、話しかけた。
「あなた、魔島に渡るおつもり？」
「あんたに関係ないじゃん……」
ルビーローズの背中を見つめながら、団丸はなにやら釈然としない顔をした。それはクイーン・ローズでも見せた表情だった。なにかが心に引っかかるような、そんな顔だ。
「あきらめずに捜し続けるの？」
「だから、あんたに関係ない――」
「どうなの！」
ルビーローズが怒鳴った。
聖母らしからぬ振る舞いだった。
「もちろんさ！　誰があきらめるもんか！　あたいはおじいちゃんを捜すんだ！」

団丸も怒鳴り返した。
別に怒鳴られたからといって、正直に答える必要はない。捜す相手が祖父であることは、りぶたんたちにも明かしていない。
それなのに、ルビーローズには正直に答えてしまった。なぜ、そうなるのか。口を開けたまま、呆然と相手を見つめるピンクのショウジョウダルマには、自分でもよくわからないようだった。
「魔島を受け持っているのはダークヤグラさ」
ルビーローズの話し方が変わった。
「あいつには気をつけな」
「え……？」
団丸はようやく気づいた。
聖母はもう、いつものように上品に話してはいない。背中を見せているので表情まではわからないが、雰囲気が明らかにちがう。
「ダークヤグラだよ。あいつだけは、いやなにおいがしやがる」
「……」
ルビーローズの変化に、団丸は戸惑っている。

「奴には気をつけるんだよ。たぶらかされて、のこのこついてくんじゃないよ。いいね」
最後のひと言は命令だった。
「う……うん」
団丸は素直にうなずいた。ひとの変わったルビーローズには、なぜだか逆らえなかった。
「親分、どこにいるんだろうねえ……」
遠い昔をなつかしむような、ルビーローズの声だった。
「……じゃあな。あとは任せたぜ、お嬢(じょう)」
そう言い残して、アカゲパキケは去っていった。
「！」
団丸に衝撃が走った。背中を電気が駆け抜けた。手にしていたカウボーイハットが地面に転がった。
お嬢と呼ばれたのはひさしぶりだった。何年ぶりだろうか。そう呼ばれた過去があったことすら、すっかり忘れていた。
そして、思い出した。ルビーローズの背中を見るたびに、心に引っかかっていた記憶を取り戻した。
去りゆく後ろ姿に見覚えがあった。

行かないでと、置いてかないでと、泣いて頼んだ幼いあの日のことを、団丸は思い出した。
ルビーローズに去られるのは、これが二度目のことだった。
「……紅い薔薇のおねえちゃん……」
団丸の口から、ふるえた声が漏れた。
ルビーローズは振り返らなかった。
あの日も。いまも。
心を鬼にして、歩み去っていった。
幼くて、あの日は理解できなかった団丸も、いまはわかった。
ルビーローズの背中が泣いていた。

――その昔、ショウジョウダルマの親分が博徒(ばくと)の一家を構えていたという。なにかと面倒見のいい親分を慕って、賭場(とば)では気っぷのいい乙女が壺(つぼ)を振っていたそうな。

ダークヤグラは星空神殿(せいくう)にいた。
薄暗い神殿だった。

壁も床も、黒い石でできている。黒曜石だろうか。光沢のある石だ。
天井にはドゥードゥーが埋め込まれていた。自然発光でもしているのか、光源もないのに色取り取りの宝石が輝いている。黒曜石に宝石をちりばめた天井は星空のように見えた。その星空が、明かりのない神殿をかすかに照らしている。
ダークヤグラの正面には祭壇があった。ミュラー博士を摸(も)した神像が祀(まつ)ってある。
祭壇の手前には雛壇(ひなだん)もあった。雛壇のほうが祭壇よりも低くなっている。床はさらに低い。一番低いその床に、ダークヤグラはいた。
人形の頭部に体を押し込めた、いつものスタイルだ。触手のような手足も引っ込めて、人形の中から赤い目をのぞかせている。
ダークヤグラは神像を拝(おが)んでいるのではなかった。なにかを待っているようだった。
雛壇の両脇にある壁が開いた。重い音を響かせながら、石の扉が上へと引きあげられた。
扉の中からモンスターが出てきた。左からはジョロ

ウグモが五匹。右からはオオカマキリが五匹。合わせて十匹が姿を現した。
モンスターは整然と並んで歩いた。左右の壁際に等間隔に並んだ。ダークヤグラに襲いかかるようなそぶりはまったく見せなかった。完全に統制の取れた動きだ。並のモンスターとは思えない。
そして、見た目は並のモンスターと異なっていた。
ジョロウグモもオオカマキリも、頭に金属製のプレートをつけていた。電子部品が埋め込んであるらしく、発光ダイオードが点灯している。
また、甲冑のようなものも装着していた。
クモには、頭と胸がくっついた頭胸部（とうきょうぶ）と呼ばれる部位がある。ジョロウグモはそこに胸当てがあった。なめした革の上に鋼板を貼り付けたような防具だ。大きくふくらんだ腹部にも防具があって、こちらは棘（とげ）がつけられていた。
オオカマキリは胸と背中に一体型の防具を着けていた。脇から背中にかけて棘（とげ）がついている。前脚の鎌にも防具があったが、これは防具ではなくて武器と呼ぶべきかもしれない。鎌の内側に防具状のものを装着し

ているのだが、なめし革に貼り付けられた鋼板は研ぎ澄まされて、刃となっていた。
武装したモンスターが左右に展開すると、薄暗い神殿の様相が一変した。
床の黒曜石に炎が走った。真っ赤な炎が祭壇から飛んだ。
いや、炎ではなかった。床の上にいるダークヤグラは避けようとしない。
ダークヤグラの真下を炎が駆け抜けた。
床を走った赤いものは炎ではなくて、石に浮かんだ紋様だった。黒く光沢のある石に、炎を思わせる真っ赤な紋様が出現したのだ。
よく見ると、石には継ぎ目がなかった。複数の石を並べているのではない。床と壁に継ぎ目はなく、壁と壁に継ぎ目はなく、壁と天井にも継ぎ目はなかった。
巨石をくりぬいた中に星空神殿はあった。
祭壇から走ってきた赤い紋様は、四方の壁で燃え上がった。黒く光る石の壁に、炎が描き出された。天井にも炎は燃え広がって、真っ赤なオーロラとなった。
燃えない炎が冷たく光っている。

炎に照らされて、星空神殿は明るくなった。
ダークヤグラは触手と顔を外に出した。人形の頭部ごと、ふわりと浮かんだ。ただし、高くは浮かばなかった。床を舐めるように飛んだ。
祭壇の正面が音を立てて割れた。石でできた隠し扉が左右に開いた。内部には階段があるようで、神像を祀った祭壇の下から三人のリヴリーが現れた。
最初に階段を上ってきたのはプーケだった。スカーレットの体に包帯を巻いている。プーケは雛壇に立つと、じろりとダークヤグラをにらんでから、向かって左に移動した。
次に姿を見せたのはジュリエットだった。ワインレッドの体に包帯を巻いている。ジュリエットは雛壇に立ってもダークヤグラをにらむようなことはせず、向かって右に移動した。
最後に登場したのはミューミューだった。オレンジの頭の毛がピンとはねている。ミューミューは堂々と雛壇の中央に立った。右にも左にも、一歩も動かなかった。
三人はミュラー博士の神像を背にする形で、雛壇に

並んだ。左右の位置関係はあっても、横一線に等しく並んでいる。高低差もない。そして三人とも、床の上のダークヤグラを見下ろしている。

ダークヤグラは壇上の三人に対して、うやうやしく頭を垂れた。明らかに格下の振る舞いだった。

ミューミュー、ジュリエット、プーケ、ダークヤグラの四人は、管理リヴの最大派閥を構成している。第二派閥のルビーローズ、マハラ、チャパティとは別格の権力を誇っており、モンスター防衛線に築かれた四つの要塞も、ミューミュー派の名前だけを冠している。

しかしながら、派閥内部では明確な上下関係があるらしく、ダークヤグラだけが下に置かれていた。

「ダークよ」

ジュリエットの透きとおった声が神殿に流れた。

「先ほど、ＬＩＳＤから例の件の報告書が上がってきました。そこで、あなたの意見を聞きましょう」

「はは」

ダークヤグラの赤い目が瞬きをした。

「ＬＩＳＤの報告書には、こうあります」

ジュリエットは手にしていた報告書を広げた。

「事件は未解決。犯人は依然逃走中。もしくは、地底の蟻塚において死亡の模様。なお、ルビーローズ以下の管理リヴに嫌疑なし。犯人一味は管理リヴになりすました偽者と断定。強奪されたドゥードゥーは地底ホールにあるも、未回収――」

広げた報告書を閉じて、ジュリエットは質問した。

「この報告書をどう思いますか？」

「大うそもいいところですな。あの保安官めは、委細承知の上でルビーローズたちをかばっております。やはり、あなた様が心配なされたとおりになったようで」

ダークヤグラはわずかに身を乗り出して答えた。

「なぜ、そう思うのですか？」

「手の者が地底トンネルでルビーローズを確認しております。なんでも、手作りの菓子を馳走になったとか。フードボックスにそんなものをしまえる者は、偽者などではありますまい。また、ボンドからの報告にも、ルビーローズたちが真犯人だとありますな。ジャーナリスト気取りのトビネの小僧から、おもしろいように情報が取れるそうで」

「ほう。あの坊やはなかなか口が堅かったぞ？　うちの連中が脅しても怯(ひる)まなかったくらいだ」
　プーケが口をはさんだ。ハスキーな声だった。
「おっしゃるとおりでございます。小僧めは確かに口は堅いのですが、なにも言わなければ情報は漏れないと思い込んでいる由(よし)。青臭いことですな。ボンドなら、目の動きや体の動き、声の調子などから、いかようにも情報を引き出せますぞ。ましてや、あの小僧。ボンドを大先輩として慕っておりますゆえ、それはもう、赤子の手をひねるようにたやすく」
「スパイめが」
　プーケは不快そうに吐き捨てた。
　そしてそのままダークヤグラをなじった。
「だいたいが、きさまのせいだぞ！　壺振りの女ヤクザなど、本来は管理リヴになれるはずもなかったのだ！　きさまが推薦しなければな！」
「お言葉を返すようですが、ヤクザと博徒は似て非なるものでして――」
「口答えは許しません」
　ジュリエットが冷たく言い放った。

「……失礼いたしました」
ダークヤグラは目を伏せて、即座に謝罪した。
「ルビーローズを管理リヴに推薦したあなたに免じて、いまはまだ、あの者は放っておきましょう。始末するのであれば、地底から出しはしません。それに、あの者の素性を鑑(かんが)みれば、いずれ問題を起こすであろうことは初めからわかっていました。あの者がなにをしようとも、しょせんはわたしたちの手のひらの上。この皇天の城に対抗して、たかが蟻塚を后土の城などと名付けるとは、かわいいものですね」
「では、問題は団丸でございましょうか？　前科者がよもやＬＩＳＤに採用されるとは、あの保安官もなにを考えているのやら……」
今度はダークヤグラが質問した。
「あの娘もあなたに免じて捨て置きましょう。友人を手にかけたばかりか、その孫娘までもとなると、あなたもつらいでしょうから。また、逆徒(ぎゃくと)の孫娘といっても、なにができるわけでもありません。自首をして、自分から地下牢獄に入ったときには、もしやと驚きましたが、結局はなにも気づかなかったでしょう？　義

賊だなどと誉めそやされたところで、あの娘は元相棒のK(ケイ)がいなければなにもできはしません」
「Kの探索はどうなっているか？」
プーケが話に割って入った。
雛壇で口をきくのは双子の姉妹だけで、ミューミューはなにも言わない。
「団丸の自首以降、足取りはぷっつりと途切れたままですな。しかし、本当でしょうか？　正体もろくにわかりませんのに、Kがプレリヴリーなどと……」
「Kは闇と一体化し、影に潜んだのだぞ。ならば、シャドー・プリズナーを使ったのだろうが。Kが黒霞囚でないのなら、きさまと同じ、中世のリヴリーということだ。それにしても、きさま。まだ記憶は戻らんのか？　きさまのせいでミュラー博士は調べものが忙しく、お戻りになられないのだぞ！」
「もうしわけございません」
ダークヤグラはまた謝った。
「我々はみな、ミュラー博士に生み出された現代のリヴリー、ポストリヴリーだ。しかし、きさまはちがう。博士に生み出されたのではない。博士も知らない謎の

リヴリー。どこでどうやって生き延びてきたのか、我々の世界に突然迷い込んできた中世のリヴリー、プレリヴリー。それがきさまだ、ダークヤグラ。記憶喪失のきさまをジュリが拾ってきたから仲間に加えてやったが、図に乗るなよ。骨董品が」

「そのくらいに。ところで、魔島の調査はどうなっていますか？」

プーケをたしなめたついでに、ジュリエットは話題を変えた。

「はは。リヴリー村はいまだ健在で、モンスターの襲撃にも持ちこたえております。手の者を一名、潜入させて情報収集に当たらせております」

「そんな話はどうでもいい！」

プーケが怒鳴りつけた。

「知りたいのはモンスターリヴリーについてだ！　魔島に流され、飢えてモンスターを喰らい、突然変異を起こしたリヴリーがいるだと？　まだ確認できんのか！」

「その件でわたしから報告が」

プーケの質問をジュリエットが引き取った。

「呪文科学局プロジェクトチームの調べでは、モンスターを食べたリヴリーがパワーアップすることは、ありうるそうです。ただし後遺症として、肉体も精神もモンスター化する恐れがあるとのこと。わたしはこれを、モンスタードーピングと名付けました」
「モンスタードーピング……か」
プーケはジュリエットを見つめた。
ふたりの間にはさまれたミューミューは、なにを思うのか、じっと瞑目(めいもく)している。
「モンスタードーピングをして、モンスターリヴリーとなる。魔島で噂になるくらいですから、実在すると見て間違いないでしょう」
「しかもそいつはオリジナルの技を使うと？」
「噂では、ね」
「ちっ、厄介な……！」
プーケはダークヤグラをにらんだ。目で八つ当たりをした。
「それで調査の進捗(しんちょく)状況はどうなのかな？　ダークヤグラ君」
ミューミューがようやく口を開いた。話の内容は重

いのに、朗(ほが)らかな声だった。
「芳(かんば)しくありませんな。手の者も、戻ってこないのがちらほらと」
「なるほど。君の配下は囚人だから、魔島の潜入調査は荷が重いだろうね」
「そこで、実は提案がありまして……」
「ほう。どんな？　言ってごらんよ」
ミューミューが話し始めると、ジュリエットもプーケも口をつぐんでしまった。
「ご存じのとおり、LISDにいる正副保安官は、元一つ目狙撃団のヒナタ・もにょりぶ組ですな。恥ずかしながら、モンスター津波の折に要塞から落ち延びる際、護衛に当たらせましたので、その人柄もよく知っております。ふたりは一流のスナイパーユニットですので、これを魔島の調査に充(あ)てればと――」
「ああ、そういうことなら却下だよ」
ミューミューは話の途中で即答した。
「……しかし」
「却下だよ。聞こえなかったのかい？」
声は明るくても凄みがある。

「……」
ダークヤグラはなにも言えなくなった。
「あのふたりはなかなか評判がいいんだ。ＬＩＳＤなんてどうでもいい組織だけど、よくも悪くも庶民の憂さ晴らしになるからね。前の保安官がひどかった分、いまの保安官には期待が集まっているだろう？　徴税しない赤貧路線もユニークだよ。あのふたりはこのまま、ＬＩＳＤに置いておくことにする。いいね」
「承知いたしました」
「でも、君の言うこともわからなくはないなあ。魔島の調査には鍛え抜かれたコマンドが適任ということだね。どうだい、プーケ君？　防衛隊から誰か出せないかな？　ダークヤグラ君の黒霞囚では調査も限界だってさ。しかたないよ。ただの囚人の集まりだからね」
「では、うちから誰か出すとしよう」
プーケが応じた。
「じゃあ、決まりだね。あとはふたりで話し合ってくれるかな。それから、ふたりとも仲よくしなよ」
「……」
「はは」

仲よくしろとの注意に、プーケは沈黙を返し、ダークヤグラは頭を下げた。
「それでは今日はここまでにしよう。僕は忙しいから、お先に失敬するよ」
ミューミューは祭壇の中へと消えていった。
ジュリエットとプーケは居残った。
「話し合いなど必要ない」
プーケはのっけから関係修復を拒否した。
「わたしはわたしの好きにやる。ささまはいままでどおり勤労に励み、入手した情報は細大漏らさず、ジュリに報告しろ」
ダークヤグラに対し、一方的に命令を下したプーケは、ジュリエットを見た。
ジュリエットはこくりとうなずいた。
「以上だ」
プーケも祭壇の中へと消えた。
壇上にはジュリエットだけが残った。
「このたびは、私めのせいでとんだご迷惑を……」
「記憶喪失のあなたを見つけたときから、問題が降りかかることは覚悟しております。もっとも、あなたの

友人がこの皇天の城に攻め入ったり、その子分が管理リヴに潜り込んだり、孫娘が怪盗として世間を騒がせるとまでは、考えも及びませんでしたが」
「あいすみませぬ」
「この城の存在を漏らすなど、本来は許されないことです。それでも、あなたが特別扱いされているのは、わたしが面倒を見ているからではありませんよ。ただひとり、中世のリヴリーであるあなたが、博士のお気に入りだからです。でも、それがプーケにはおもしろくないのでしょう。モンスターリヴリーはプーケが捕獲できるように、あなたも骨を折りなさい。そうすれば、博士がお戻りになられた暁には、きっとプーケをおほめになるはず」
「このダーク、ジュリエット様のために粉骨砕身する所存にございます」
「尽くす相手を間違えないように。わたしではなく、わたしたちミュラー親衛隊のために」
「ははー」
ダークヤグラはいままで以上に頭を下げた。
ジュリエットは祭壇の中へと消えた。

祭壇の隠し扉が閉じられた。
黒い石の表面で燃え盛っていた炎の紋様が消滅した。
左右に控える武装モンスターも神殿から出て行った。
再び薄暗くなった神殿にダークヤグラがひとり取り残された。
「……」
ダークヤグラは動かなかった。その場にじっとたたずんでいる。
星空神殿を沈黙が支配した。
天井で輝く宝石をしばらく見つめていたダークヤグラは、誰もいないのに口を開いた。
「いまのが、リヴリーアイランドを支配する者どもだ」
独り言だろうか。ダークヤグラは話し続ける。
「両脇に控えていたのは、ミューミューの配下であるアーマード・モンスターといってな。この皇天の城を警備しておる。武装したモンスターを自在に操るミューミューこそ、リヴリー界最強といえよう。だからこそ、きゃつらはモンスター津波のときもあわてなかったのだよ。いざとなれば、アーマード・モンスターで

蹴散らせるからな」
　ダークヤグラの言葉にうなずく者はいない。返事は聞こえてこない。
「この事実をあの保安官に伝えたところで、どうにもなりはせん。ＬＩＳＤなんぞはおもちゃの組織でな。当の本人たちはまじめに取り組んでいるのだろうが、存続するもしないも、きゃつらミュラー親衛隊のさじ加減ひとつで決まること。保安官とその相棒が、リヴリー最強呪文のひとつ、ジゴリヴを持っておっても意味などない。逆らうときは、取り上げてしまえばよいのだ」
　ダークヤグラがまた天井を見上げた。
　黒い石と宝石でできた星空を、赤い目が見つめている。
「どすこい娘か……。あの保安官は私の友に似ておる。見た目はちがうが、性格がな。直情径行（ちょくじょうけいこう）というやつだ。すぐに行動しおる。だから、この城のことを知ったが最後、あの娘は破滅するだろうよ。私はうっかり、この城のことを友に漏らしてしまった。知ったところでなにもできぬと高（たか）をくくっておった。友が憤慨して

立ち上がるとは思わなんだ。よもや気球などというものをこしらえて、空に浮かぶこの城にまでやってこようとは……な」

ダークヤグラは視線を落とした。

黒い石でできた暗い床を、赤い目が見つめている。

「皇天の城を知られたからには、生かしておけぬ。それが、きゃつらの考えでな。むろん、一番悪いのはこの私だが、友は魔島に追放されてしまった。あの島は、都合の悪いことを見聞きした者を流すのにうってつけでな。リヴリーはリヴリーを殺せなくとも、モンスターが代わりに始末してくれる」

ダークヤグラは目を閉じた。血塗られた赤い目で、もうなにも見たくはないのかもしれない。

「流されても、島におれば生き抜く機会はあった。事実、友は魔島に村を築いてほかのリヴリーまで救った。だが、それでもまだ私は友を見くびっておった。友は、魔島の怪物を飼い慣らすと、それを引き連れてこの皇天の城に攻め入ってきたのだ」

四本の触手が小さく丸くなった。ダークヤグラが萎縮している。

「モンスターの群れを率いたところで、アーマード・モンスターにかなうはずもない。あれは、調練(ちょうれん)された軍隊だからな。友は敗れた。逆徒の始末にはきゃつらも困った。魔島に追放しても戻ってくるは必定(ひつじょう)。同じリヴリー同士、殺すに殺せぬ。そこで、むごい罰が下された。……いまではもう、友は自分が誰かもわからぬよ」

ダークヤグラはヤドカリのように、人形の頭部の中に姿を隠した。

「プーケが露骨につらく当たるようになったのはそれからだ。無理もない。なぜなら、この私は秘密を暴露して友を危険にさらし、そしてその友を社会から抹殺した下種(げす)なのだからな」

人形の中に隠れたダークヤグラは、しかし、目を開けた。

「もちろん、このままにはしておかぬ。だが、頼みのミュラー博士はいつまでたってもお戻りになられぬ。博士はいまも私のことを調べておいでなのだろうか。……実は私はな、ミュラー博士が生み出したリヴリーではないそうな。博士もご存じない、中世のリヴリー

だそうな。知らんのだよ、私は。記憶がないのだ。本当に覚えておらぬ。だからして、私がジュリエット様に発見されたとき、博士は小躍りしてお喜びになられた。学者冥利(みょうり)に尽きるのだそうな、私という存在はな」

ダークヤグラの顔と触手が、人形の首の穴から外に出た。

「だが、なぜ博士は戻ってこられぬのか。もう何年もだ。何年も……。私はある日、恐ろしい考えに囚(とら)われた。もしや博士は、戻りたくても戻れないのではあるまいか。何者かが、博士のいる人間界と、この世界との扉を閉ざしてしまったのではあるまいか。内側から鍵をかけて……!」

ダークヤグラは人形の頭を脱ぎ捨てて、外に出た。全身を露出させた。

それは、近似種であるゲッコウヤグラとは似ても似つかない姿形だった。顔から下は瓜二つでも、頭の形がまったく異なる。ゲッコウヤグラの頭部は円盤状になっているが、ダークヤグラの頭部は表現のしようもないほどにおぞましい形をしている。

頭をかじられでもしたのか、硬膜(こうまく)が剥き出しになっており、その下の脳髄(のうずい)が透けて見えている。どうりで、普段は人形の中に頭を隠しているわけだ。別に奇をてらったのではなく、剥き出しの脳を保護していたのだ。

その剥き出しの脳からは、さらに、触手とも触角ともつかないなにかが伸びている。ぶよぶよした感じで気味が悪い。半透明で、粘着質のように見える。もしかすると、この不気味な器官で人形の内部に張り付いているのかもしれない。

「誰もおらぬ。出てきてもよいぞ」

ダークヤグラの独り言には、相手がいたようだ。

脱ぎ捨てた人形の頭の中から、霞が吹き出してきた。真っ黒な霞だった。黒霞囚だ。シャドー・プリズナーを使って、人形内に潜んでいたのだ。

黒い霞は固まりとなった。どうやら、元の姿に戻るつもりのようだ。

「悔いても始まらぬ。償っても償い切れぬ。だが、やらねばならぬ。なにがなんでも、博士にお会いするのだ。我が友を自由にするために、元に戻すためにな。だから、私は密かに探し始めた。この城のどこかに、

扉があるはずなのだ。ミュラー博士のおられる人間界へとつながる扉だ。そうでなければ、アーマード・モンスターに城を守らせたりはするまい。この皇天の城こそが、博士の作り出した世界の要（かなめ）に相違ないのだ」

ダークヤグラは雛壇に上り、祭壇に触手をかけた。垂れ下がる四本の触手を伸ばして、ミュラー博士の神像にすがりついた。

その後ろで、黒い霞の実体化が進んでいる。

「しかし、私ひとりではもう限界だ。まだ怪しまれてはいないが、バレたらすべてが終わる。友は還ってこれなくなる。手助けしてくれる者が必要だ。こんな私であろうとも、手を貸してくれる者が必要なのだ。私のためでなくともかまわぬ。世界を変えるためだろうとなんだろうと、協力してくれるのであれば、理由は問わぬ。ただし、相手は誰でもよくはないぞ。秘事を託されても口をつぐみ、援護もなくただひとりで行動し、目的を果たして生還するだけの器量と才覚を兼ね備えた者でなければならぬ！　……だから私は、おまえさんに声をかけたのだ」

ダークヤグラは神像から離れた。
「囚人ではないおまえさんが、ただの一度も地下牢獄に収監されたことのないおまえさんが、黒霞囚でもないのにシャドー・プリズナーを使えるとは、誰も思わんよ」
振り返ったダークヤグラは、床の上に立つ協力者を壇上から見下ろした。
「どうかね？　それでも、おまえさんは私についてこれるかね？　……ヒナタや」
黒い霞は実体化を終えて、ピキの姿になっていた。
星空神殿は薄暗くて、体の色まではわからない。
しかし、ピキの頭の上には、ちょっぴり斜めに傾けておしゃれにかぶる制帽があった。
暗い神殿をかすかに照らす光に、ＬＩＳＤの紋章が妖しく輝いていた。

おしまい

２００８年７月１１日

あとがき　その一（第四章まで公開時）

資料集めを開始した日から、なんと一年が経過した。最近は二ヶ月近くさぼるなど、「もにょもにょ計画」はすっかり停滞している。そこで自分なりにプレッシャーを与えるべく、第四章までを「シーズンー」と銘打って公開することにした。

これではなにやら洋画ドラマのようだが、実はこの作品。最初につけたタイトルは「ＬＩＰＤりぶたんもにょもにょ捜査官の陰謀」というものだった。

洋画を見れば、たとえばロス市警なら（エルエーピーディー）ＬＡＰＤの略称で登場する。リヴリー警察だと（エルアイピーディー）ＬＩＰＤだ。そこで洋画ドラマのノリで、「警察だ」ではなく、「ＬＩＰＤだ」とりぶたんに言わせたかった。

そしてタイトルには「もにょもにょ」というお気に入りの言葉を入れて。警官よりもかっこいいから捜査官にして。リヴリーには似つかわしくない「陰謀」も、ミスマッチでいい感じだからくっつけて。さらに、りぶたんはリヴリーアイランドの征服を企んでいる憎め

ない悪党という設定で、悪漢物にするつもりだった。
ところが、タイトルはすんなり決まったのに、りぶたんのキャラを練り上げてゆくと、どうしても陰謀とは無縁になるので困った。ほかのリヴリーたちは陰謀もうまくいくのに。そう思った瞬間、もっとしっくりくるタイトルが頭に浮かんだ。
「ＬＩＰＤりぶたん　リヴリーたちの陰謀」を書き始めたのは、去年の三月だった。タイトルから「もにょもにょ」が消えてしまったが、幸か不幸か、第二章が「ＬＩＰＤ出動」という、だっせえタイトルだったので「もにょもにょ団」とすてきに改めた。
しかし、すぐに壁にぶち当たった。捜査官はよくても、副捜査官や捜査官助手はやはり変だ。警察というよりは保安官事務所のような組織だった、ってな感じの文章でごまかしてはみたものの、変なものはやっぱり変。それにごまかすのも気に入らない。
そうはいっても、捜査官をやめて保安官にすると、ＬＩＰＤではなくＬＩＳＤになってしまう。ＬＩＰＤという名称は洋ドラ風でかなり気に入っていたので、これを捨てるのはどうにも抵抗があった。

この問題を解決したのは中の人だった。保安官のほうが絶対にいい、でもLIPDは捨てたくない、と悶々とする誰かさんに中の人がささやいた。でもさ、りぶたんって捜査官なの？　捜査をするから捜査官だよね。治安を維持したり、国防を担(にな)ったりはしないよね。でも、りぶたんはするでしょ？　〇〇の話とか、××の話とか、続編書くときどうするの？　りぶたんが警察にいたら変だよ。保安官なら、ちっともおかしくないけどさ。

中の人の言うとおり。かくして、タイトルは「LISDりぶたん　リヴリーたちの陰謀」に定まった。すでに書き始めていたので、捜査官が保安官に、途中でがらりと変わって混乱したけれど。

混乱といえば、地ノ塔もそうだった。

もともと地ノ塔というアイデアはなかった。舞台は監視塔だった。ところが、書き始めてまるまる二ヶ月もたってから気づいてしまった。監視塔はそびえ立つ「塔」ではなくて、実は「煙突」デザインの建築物だったということに。

監視塔を地階のある塔として扱ったのでは、リヴリ

ーアイランドと整合しなくなる。かといって代わりになる塔など、ＧＬＬ城には存在しない。あるのは地水火風の四大元素のうち、地を除く塔だけ。ああ、だったら地ノ塔にすりゃいいじゃん。そんで地面に埋まってることにするのさ。それなら見えなくて当たり前だから、辻褄も合うじゃん。

この問題も中の人が解決してくれた。

ほかにもいろいろあった。りぶたんをかわいくしたいという親バカのせいでヒナタとキャラがかぶり、ヒナタの魅力の前にりぶたんがかすんでしまう、なんてこともあった。泣く泣く書き直したけれども、りぶたんをかわいく描くと「どすこい娘」にならないのだから、いまの路線でまちがっていない。親バカやステージママの弊害を意外なところで実感した出来事だった。

呪文のポカは大きかった。呪文は口で唱えるものと思い込んでいた。リヴリーアイランドでもコントローラーを開いてコマンドを打ち込むから、呪文を唱えたつもりになっていた。でも、よくよく考えてみれば「おなら」の呪文を打ち込んだからといって、リヴリーが「ガス」と叫ぶわけではない。だまってプーとや

らかすだけ。
リヴリーは決して呪文を唱えない。ただ念じるだけなのだ。
そう気づいたときには頭を抱えた。なぜなら、LSDは呪文を唱えなくてもいい。念じるだけで技を使うことができる特別な存在だ。ってな設定で書き進めてきたから。
特別もなにも、そもそもリヴリーは呪文を唱えない。それなのに、呪文を唱えないことが特別だという設定はおかしかった。ここでもまた、書き直す羽目になった。
まあ、手直しばかりなのは誰かさんの能力が拙(つたな)いからしかたのないことだけど。
そんなある日のこと。第五章で驚くべき展開に出くわした。事前にまったく考えていなかったストーリーが突然生まれたのだ。これがまたおもしろくてすっかり気に入り、自分で書いておきながら何度も読み返していたら、なんとまあ。第六章で再び顔を出したそのストーリーが、そのまま一章分を乗っ取る大暴走を始めてしまった。

大地を埋め尽くし、大空を覆い隠し、羽風(はかぜ)が嵐のように吹き荒れる。

世に言う「モンスター津波」である。

２００８年１月１２日

謝辞　その一（第四章まで公開時）

この作品は、貴重な時間を割いてくれた友人たちに支えられて公開することができました。

一年も前に、資料集めを手伝ってくれた友人たち。

大切なリヴリーをモデルに貸してくれた友人たち。

進まない週報にツッコミを入れてくれた友人たち。

公開が始まってコメントを寄せてくれた友人たち。

そして。

ひとが来ないとヘコんでいる誰かさんのために、宣伝役を買って出てくれた友人。

ありがとう。みんな。

ありがとう。ゆうたん。

でも、これ。シーズンーだから。

まだ終わってないから。

だから、シーズン2もよろしくね。

２００８年１月27日

あとがき　その二

いやあ、長かった。

一〇週くらいで完成させますとソネットブログでぶち上げておきながら、終わってみれば六三週もかかってしまった。サボった日を差っ引いても、稼働日数は二九一日。一年の八〇％も費やしてしまった。

できあがったものを四〇〇字詰め原稿用紙に換算してみれば、ざっと九〇〇枚。好きで書いた自分はともかく、こんなに長い素人小説につきあってくれたそこのあなたには、感謝のキッスを贈りたい。リアルで。

え？　やだって？　じゃあ、感謝のハンマーを贈ろう。リヴリーで。

冗談はさておき、誤字脱字に誤用がありましたならば、ぜひともお知らせくださいな。ソネブロの「もにょもにょ日記」で待ってるぜ。

そんなこんなで、ようやく書き終えたこの小説。

とりあえず終わりはしたけれども、わからないことはてんこ盛りだ。

いったいどんな人生を送れば、瞳の中に棘を生やすような女が誕生するのか。
マハラとチャパティは、どうしてルビーローズについて行くのか。
殉職した保安官助手のノーラレーラがこの世に干渉できたのはなぜなのか。
団丸は祖父と再会できるのか。紅い薔薇のおねえちゃんとは。Kとは。
中世のリヴリーはどこからやってきたのか。
モンスタードーピングをしたモンスターリヴリーは魔島に存在するのか。
そしてヒナタはなぜ、ダークヤグラと行動を共にしているのか。りぶたんはそのことを知っているのか。
ケセランパサランの粉を焼いて、フウセンコガネのあんこを入れた、ルビーローズの創作和菓子を食べたいんですけど、どこで買えますか？
などなど。
ってなわけで、物語は続きます。たぶん。
お楽しみに。

２００８年７月１１日

謝辞　その二

この作品は、貴重な時間を割いてくれた友人たちに支えられて公開することができました。
一年半も前に資料集めを手伝ってくれた友人たち。
大切なリヴリーをモデルに貸してくれた友人たち。
進まない週報にツッコミを入れてくれた友人たち。
公開が始まってコメントを寄せてくれた友人たち。
そして。
応募ゼロを覚悟していたイラストコンテストに、すてきな絵を描いて参加してくれた友人たち。
これから絵を描いてくれる友人たち。
ありがとう。みんな。

でも、これ。第一作だから。
まだ終わってないから。
だから、続編もよろしくね。

２００８年８月28日

備考

このファイルは「一太郎2010」と「JUST PDF」で作成しました。
フォントは「モトヤ教科書3」を使用しました。

『Livly Island』『リヴリーアイランド』は、ソネットエンタテインメント株式会社の商標です。リヴリーアイランドに関わる著作権その他一切の知的財産権は、ソネットエンタテインメント株式会社に属します。この作品は『リヴリーアイランド』およびソネットエンタテインメント株式会社とは一切関係がありません。

「もにょりぶ」は「siamneko」のリヴリーをモデルにしました。
「ヒナタ」は「ゆうはな」のリヴリーをモデルにしました。
「フレイム」は「こんこん」のリヴリーをモデルにしました。
「団丸」と「K」は「マスタ」のリヴリーをモデルにしました。
「団丸」と「K」の関係はマスタのイラストより着想を得ました。

激甚雷撃砲「ジゴリヴ」の「ジゴ」につきましては、「一・二一ジゴワット」のフレーズからもおわかりいただけますように、映画「バック・トゥ・ザ・フューチャー」より拝借しました。

イラストの著作権は、ソネットエンタテインメント株式会社が保有するものを除き、イラストレーターに帰属します。

この作品の著作権は、前述の著作権者が保有するものを除き、「siamneko」に帰属します。

修正項目ー

「翅」を「羽」に統一。
「羽飾り」の誤字を「羽根飾り」に修正。　09/04/08
「とてものことに」を誤用していたため修正。　09/10/30
「ある日が気がつくと」を「ある日、気がつくと」に修正。　09/12/12
「破れた」の誤字を「敗れた」に修正。　09/12/14
「触覚」の誤字を「触角」に修正。　10/02/16
「防衛局も気を抜くまい」を「連中も気は抜くまい」に修正。　10/05/08
「現在位置」を「現在地」に修正。　10/05/29
「守備的な攻撃技」を「防御的な攻撃技」に修正。　10/07/18
「片寄る」を「偏る」に統一。　10/10/31
ＰＤＦの作成に伴い、各所修正および統一。
「済む」を「すむ」に。　「ため息」を「溜息」に。
「尻尾」を「しっぽ」に。　「過ぎない」を「すぎない」に。
「根本」を「根元」に。　一ヶ所を残し「嘘」を「うそ」に。　10/11/06-07

修正項目2

一ヶ所を残し、「吠える」を「吼える」に修正。
「マイショップで成功した豪商など」を「豪商など」に修正。
「敷居が高い」を誤用していたため修正。
ひとりで「爆笑」していた誤用を修正。

11/01/15

「盲打ち」を「盲撃ち」に修正。

11/02/21

~~「吊す」を「つるす」に修正。~~
~~「吊り上がる」を「つりあがる」に修正。~~
「塊」を「固まり」に統一。
「縁」を「ふち」に修正。
「くずす」を「崩す」に統一。
「留める」を「とどめる」に修正。
「避ける」を「よける」に修正。
「ずみ」を「済み」に修正。
手などを「離す」を「放す」に修正。
「うごめく」を「蠢く」に統一。
「括る」を「くくる」に統一。
「震える・震わせる」を「ふるえる・ふるわせる」に統一。

11/03/19-11/04/02

赤い薔薇の女